夏目鏡子述
松岡讓筆録

漱石の思ひ出

改造社版

2

3

6

8

II

15

17

23

27

則天去私　漱石

31

33

寫眞說明

——寫眞說明の左右は向つて左右——

1　大正元年九月撮影（四十六歲）

2　中圖　夏目家累代の墓……………東京市小石川區小日向臺町本法寺内にあり

左上圖　父、夏目小兵衞直克…………明治三十年八十四歲にて歿す

左下圖　母、夏目ちゑ…………明治二十四年五十三歲にて歿す

右上圖　五歲頃の漱石。右は養父鹽原昌之助

右下圖　十歲頃の漱石。右は養父鹽原昌之助

3　上圖　右端、十二三歲頃の漱石。左端、次兄夏目榮之助（明治二十年歿）中央、義兄高田庄吉

左圖　長兄夏目大一、後に大助と改名…………明治二十年三十一歲にて歿す

右圖　兄夏目直矩（前名和三郎）…………現存

4　左圖　左、豫備門時代の漱石。右、中非龜太郎氏

右圖　左、大學時代の漱石（二十六歲）。右、米山保三郎氏（天然居士）。明治二十五年二月撮影

5 右圖 富士登山紀念寫眞。中央、漱石。右、中村是公氏。左、山川信次郎氏…………明治二十四五年頃撮影

左圖 右二人目、漱石。三人目、中川小十郎氏。左端、太田達人氏。右端、佐藤友熊氏

6 右圖 明治二十五年十二月撮影

左圖 正岡子規居士

7 右圖 明治二十五年六月撮影

中圖 同上裏面

左圖 明治二十七年撮影

8 明治二十七年、上野公園不忍池畔に於ける帝大英文學會紀念寫眞。後列左二人目漱石

9 上圖 松山市二番町の下宿。…………明治二十八年五月頃から上野といふ老夫婦の宅に寄寓す。表八疊。

下圖 同上裏二階。…………同年夏子規居士松山に歸着して同宿す。それより裏二階に移り居士は病身の故をもつて階下に起臥し、漱石は二階に居つたといふ。（昭和三年五月撮影）

10 松山中學校卒業紀念寫眞。………第三列左から二人目漱石。臨終の主治醫員鍋嘉一郎氏は當時の生徒として前列右から三人目にあり。明治二十九年四月撮影(三十歳)

11 右圖 明治二十七年撮影(二十八歳)………見合ひ寫眞

左圖 中根鏡子………見合ひ寫眞、明治二十八年撮影(十九歳)

下圖 貴族院書記官長官舍…………見合ひの場所(昭和三年十月撮影)

圖內 岳父中根重一

12 上圖 熊本市光琳寺町の家。…………結婚式を擧げた離れ座敷(昭和三年五月針山豐氏撮影)

下圖 熊本市外大江村(現大江町)の家にて…………左から土屋忠治氏、漱石、鏡子・女中。明治三十一年撮影(三十一歳)

13 上圖 熊本市外小天字湯ノ浦、俗稱漱石館庭園。…………こゝは『草枕』の地と稱せられ、今に當時の建物を殘す。左の棟は明治三十年暮から正月にかけて逗留した部屋(昭和三年五月針山氏撮影)

下圖 上圖右方の棟の內部。…………前田案山子の居室にして、逗留中しばしば茶に招かれ

たといふ部屋。この寫眞は明治三十年頃の寫眞であつて、右端に端坐せる白髯の人が前田案山子である。

14 右圖　明治三十一年撮影（三十二歲）

左圖　明治三十三年撮影（三十四歲）…………左端、漱石。右端、湯淺廉孫氏。右二人目、行德俊則氏。左二人目、加藤氏

15 熊本第五高等學校教授時代…………第二列右二人目、漱石

16 上圖　明治三十九年三月撮影（四十才）千駄木の家の書齋にて

下圖　東京市本郷區駒込千駄木町五十七番地の家玄關

17 明治三十九年帝大英文科卒業生紀念撮影…………前列左二人目、漱石。同列右端、上田敏氏。左端、中川芳太郎氏。後列左二人目、一宮行雄氏。三人目。野村傳四氏

18 右圖　明治四十年二月撮影…………一高玄關前にて

左圖　明治四十一年五月撮影（四十一才）

19 上圖　本郷西片町の家

下圖　早稻田南町の家の玄關

20 左上圖　明治四十一年十二月撮影（四十二才）

右上圖　明治四十三年四月撮影（四十四才）

下　圖　早稻田南町の家の書齋外觀

21 森成氏送別會紀念寫眞。明治四十四年四月撮影（四十五歲）前列左から、次女恒子、鏡子、長男純一、四女愛子、長女筆子、三女榮子、小宮豐隆氏。後列左から、松根東洋城氏、森成麟造氏、東新氏、漱石、野上豐一郎氏、安倍能成氏、坂元雪鳥氏、野村傳四氏。左圓内、森田草平氏、右圓内、鈴木三重吉氏。早稻田南町庭前にて。

22 右　圖　猫の墓………最初猫の墓はさゝやかな墓標で『此の下に稻妻おこる宵あらん』といふ句が題され居たのであるが、いつの間にか朽ちて捨てられ、たゞ目印に澤庵石程の自然石が据ゑられてあつた。其うちに文鳥の墓が出來、犬の墓が出來た。猫の十三回忌にそれらを合祀して供養塔を建てた。

中　圖　犬の墓…………家犬の爲めに　『秋風の聞こえぬ土に埋めてやりぬ』と書かれてあるが、下の部分は白蟻に喰はれてぼろ〳〵になつて居る。

左　圖　森成氏に贈つた銀のシガレット・ケース

23 右圖 明治四十三年撮影……………左、漱石。中央、行德俊則氏。左、長女筆子
左圖 五女雛子（明治四十三年生、四十四年歿）

24 右圖 大正元年九月撮影…………右、漱石。中央、犬塚信太郎氏。左、中村是公氏
左圖 大正元年九月撮影（四十六才）

25 上圖 大正三年十二月撮影（四十八才）早稻田南町の書齋にて
下圖 大正二年撮影。左、漱石夫妻。右、森卷吉氏夫妻

26 上圖 大正三年十二月撮影、早稻田南町庭前にて。右、長男純一。左、次男伸六
下圖 大正四年七月鳥居素川氏撮影（四十九才）早稻田南町書齋南緣にて

27 大正五年十二月撮影（五十才）臨終直前

28 死面…………大正五年十二月九日逝去當夜、新海竹太郎氏の手によつて原型をとる。後これをブロンズに鑄て、一面を漱石山房に保存し、一面を朝日新聞社に贈る。

29 上圖 書齋…………現在も在世當時のまゝ保存さる。
下圖 靈前…………書齋に遺骨を安置して居つた時の寫眞。正面の位牌は宗演禪師の筆になり、「文獻院古道漱石居士位」とあり。

30 右圖　晩年の筆蹟

中圖　最初の墓…………最初遺骨を埋めた舊墓地の墓。一周忌に新墓地へ移す。市外雜司ヶ谷墓地にあり。墓標の字は菅虎雄氏の筆になる。

31 左圖　遺骨を納めて埋めた石の唐櫃銘拓本。字は同じく菅虎雄氏の筆になる。

32 墓…………雜司ヶ谷墓地にあり。鈴木禎次氏の設計、菅虎雄氏の筆

33 遺兒…………大正四年撮影。左から、長男純一、四女愛子、長女筆子、次女恒子、三女榮子、次男伸六

第一囘九日會…………左から、安倍能成、野上豐一郎、鏡子、内田百閒、津田青楓、書棚の前の正面の顏、左から芥川龍之介、森田草平、和辻哲郎、角火鉢に手をかざしてるもの、左から小宮豐隆、岩波茂雄、阿部次郎、阿部氏の後方、速水滉、右端、瀧田樗蔭の諸氏

本文目次

漱石の思ひ出

一　松山行

話の順序として結婚前のことからお話いたしませう。申すまでもなく結婚前のことが私にわからう筈はないのですが、結婚後本人の口かち聞いたことや、外の方々から伺つたことなど照らし合はせて、記憶に殘つてゐることをかいつまんでお話し致しませう。

當時夏目の家は牛込の喜久井町にありましたが、家がうるさいとかで、小石川の傳通院附近の法藏院といふ寺に間借りをしてゐたさうです。多分大學を出た年だつたでせう。其寺から、トラホームを病んでゐて、毎日のやうに駿河臺の井上眼科に通つてゐたさうです。すると始終そこの待合で落ち合ふ美しい若い女の方がありました。背のすらつとした細面の美しい女で――さういふ風の女が好きだとはいつも口癖に申して居りました――その女が見るからに氣立が優しくて、さうしてしんから親切でして、見ず知らずの不案内なお婆さんなんかが入つて來ますと、手を引いて診察室へ連れて行つたり、いろんな面倒を見て上げるといふ風で、傍で見てゐてもほんとに氣持がよかつた

と後でも申してゐた位でした。いづれ大學を出て、當時は珍らしい學士のことですから、縁談なんぞもちらほらあつたことでせう。そんなことからあの女なら貰つてもいゝと、かう思ひつめて獨り極めをしてゐたものと見えます。

ところがその女の母といふのが藝者上がりの性惡の見榮坊で、――どうしてそれがわかつたのか、そこのところは私にはわかりませんが――始終お寺の尼さんなどを廻者に使つて一擧一動をさぐらせた上で、娘をやるのはいゝが、そんなに欲しいんなら、頭を下げて貰ひに來るがいいといふ風に言はせます。そこで夏目も、俺も男だ、さうのしかかつて來るのなら、此方も意地づくで頭を下げて迄呉れとは言はぬといつた按配で、それで一ト思ひに東京がいやになつて松山へ行く氣になつたのだとも言はれて居ります。當時にして見ればパリ〳〵の學士で、大學でも評判のよかつたといふ人が、何も苦しんで松山くんだり迄中學教師として都落ちをしなければならないわけはなかつたらしいのです。いづれ何か理由があつたか、深い考があつたことと想像されないことはありますまい。ともかく松山へ行つてもまだその母親が執念深く廻者をやつて、あとを追つかけさしたと自分では信じてゐたやうです。

丁度其事件の最中で頭の變になつてゐた時でありませう、突然或る日喜久井町の實家へかへつて

來て、兄さんに
「私のところへ緣談の申込みがあつたでせう。」
と尋ねます。そんなものの申込みに心當りはなし、第一目の色がただならぬので、
「そんなものはなかつたやうだつたよ。」
と簡單に片付けますと、
「私にだまつて斷るなんて、親でもない、兄でもない。」
つてえらい見幕です。兄さんも辟易して、
「一體どこから申込んで來たのだい。」
となだめながら尋ねましても、それには一言も答へないで、たゞ無闇と血相かへて怒つたまゝ、ぷいと出て行つて了つた。兄さんも心配でなりません。何であゝぷりぷり怒つてゐるのか、何であいふたゞならぬ樣子をしてゐるのか。ともかく法藏院へ行つてゆつくり尋ねて見たら仔細もわかることだらう。かう思つてお寺へ行かれた。が、てんで寄りつけもしない見幕で、そんな不人情者は親でもない兄でもないを繰りかへして、親爺は沒義道のことをしても、それは親だから子として何ともいふことは出來ないが、兄は怪しからんと喰つてかゝる始末に、その申込みの當の相手のこ

とを尋ねても、それは不相變一言も洩らさないので、手がつけられないのでそれなりに歸へられたさうです。法藏院の尼さんに變はつた樣子でもないかとそれとなく歸へりぎわに尋ねて見ると、夏目さんの部屋の方でも見てゐるのが見付からうものなら、近頃はひどく怖い目附で睨まれたりしますといふ話だつたとか申します。

其後洋行からかへつて來て千駄木にゐた頃、――この事はいづれ後で詳しくお話しますが――全くお話にならない亂暴を家のもの、殊に私にしますので、私もほと〳〵困つて、或る日兄さんに話しますと、兄さんもいろ〳〵私の話を聞いて、法藏院時代のことを思ひ出して、

「それでやつとわかつた。何故あの時金ちやんがあんなにぷり〳〵してゐたんか、わたしには長いことまるで合點が行かなかつたんだが、するとさういふ精神病があの人のうちに隱くれてゐて、それが幾年おきかにあばれ出すんだね。」

と言はれたので、私も前にもそんなことのあつたのを聞いて、初めてそれが病氣だつたといふことをさとりました。其後精神病學の呉さんから診て貰ひましたところ、それは追跡狂といふ精神病の一種だらうと申して居られました。

尼さんについて面白い話があります。これは後で當人の口から聞いたのですが、其處には尼さん

が幾人も居たものと見えまして、其中の一人に眼科で會ふその婦人に誠によく似た尼さんがありました。背丈の工合と言ひ、顔かたちと言ひ、瓜二つとは行かない迄も、何となく俤を彷彿とさせる尼さんでした。尼さんの名を祐本（多分かう書くのだらうと思ひまして字を宛てました）さんと申しました。

或る日祐本さんが風邪を引いて熱を出しました。尼さん同士のことで手當も行屆かなかつたのでせう。それを見て氣の毒に思つたと見えて、一服解熱劑を盛つてやつたさうです。すると外の尼さんたちがよりくに夏目の方を指して、

「まだあの人のことを思つてるんだよ。」

と口さがなく、祐本さんがその婦人に似てるるから親切にするのだとばかりにほのめかしました。それを小耳に挾んで、一層尼さんたちが女の母親に頼まれて、探偵の役をしてるるのだと思ひ込んだものだとかいふことです。さうして家はいや、法藏院もいや、結局東京全體がいやになつたのではないかと思はれるのです。

たしか亡くなる四五年前のこと、高濱虚子さんに誘はれて九段にお能を觀にまゐりますと、その

昔の女が來てるたさうです。二十年振りに偶然顏を見たわけですが、歸へつてまゐりましてから、
「今日會つて來たよ。」
と其事を私に話しますので、
「どんなでした。」
と尋ねますと、
「餘り變はつてゐなかつた。」
と申しまして、それから、
「こんなことを俺が言つてるのを亭主が聞いたら、いやな氣がするだらうな。」
と穩かに笑つて居りました。私にはこの話は、實在のやうでもあり架空のやうでもあつて、誠につかまひどころのない妙な話に響くのですが、兄さんはその女の方の名前を御存知の筈です。私も伺つたのですが忘れて了ひました。とにかく得體の知れない變な話でございます。
そんなわけからか急に東京を捨てゝ松山へ行くことにしたらしいのですが、さうした出しぬけの話を持ち出されて、嘉納治五郎さんあたりが引き止め役で、東京に口がないおやなし、現に其時は高等師範で月給四十圓とか貰らつて教師をしながら大學院で勉強してゐたことではあり、何も物好

きに松山くんだり迄落ちのびなくとも骨折つて下すつたさうですが、全く滅茶苦茶な駄々つ兒振りで、手がつけられなかつたとか申すことです。松山へ行つても、先程申しましたとほり、宿の神さんや何かゞ廻者に見えてゐて、餘り愉快ではなかつたやうです。

この發作は其後數年たつてからひどく起こつてまゐりましたが、一體に隨分と病氣の昂じてゐる時でも、遠い人には案外よくつて、近い人程いけないのですから、始末に了へません。だもんでそれで私が困り話なんかをしましても、知らない方は、あの謹嚴な夏目がと本氣になさいませんのです。が、これは追々お話致しませう。

又一說に、

「あの女なら大變な美人で、君なんかとは月と鼈ほどの違ひで、不つりあひも甚しいぢやないか。」

とか何とか誰かゞ申しましたので、

「そんなことをいふんなら絕對に貰はない。」

とそれ切り縁談をお流れにさしたとも傳へられて居ります。尤も子規さんに宛てた手紙（註、全集第十二卷六六頁參照）には一切そんなことは否定して、自分が失戀したとか、その爲めにやけをおこしてゐるなどと家族のものが信じてゐるが、そんなことはすべてお取り上げなきやうといふやうなことが書いてあるさうです。けれども私も傍についてゐて見たわけではないのですから、はつきりかうとは申上げ兼ねますが、後からいろ／＼とあつたことなどから推して見ますと、以上の話が全部でない迄も、ある點迄は充分事實だつただらうといふ氣がしてなりません。又その手紙で見ましても、當時さういふ取り沙汰が實家のものの間などに行はれてゐたのは事實でありませう。が、とにかく想像の上に想像を重ねて行つて、終ひには一つの立派な事實――それは自分だけにわかつて、人にはわからない――を作り上げて了ふかうした病的な頭を、私はそれからもしば／＼實地に見て來て居りますので、此の事についても無責任ながらにある疑をもつて居ります。

松山でも色々縁談が持ち込まれたさうです。中にも縣の參事官の或る方などは、其土地に夏目をとめておきたいとでも思はれたものか、大層乘り氣で候補者をさがしては、あれかれと膽煎りをされたものださうです。中で一人見合ひをして見ないかといふ口があつて、その參事官のお宅へ行つ

て待つてゐると、カラ〳〵と玄關のあたりで足駄の音がして、ごめんなさいつて入つて來た若い女があります。やがて女が茶を汲んで狎れ狎れしく入つて來て、じやあ〳〵として御相手をします。さうして他愛もないことに手離しでげら〳〵笑ふ。それが當の見合ひの相手だつたので、愼しみのないのに閉口したといふ話をしてゐたことがあります。

松山には行つた當座其土地一流の旅館の城戸屋といふのに泊まつて居たさうですが、それから間もなく城山の中腹にあつたある骨董屋の二階に下宿したさうです。この道具屋の家は、最近久松家で買ひ取つて取り壞はされたのですが、城戸屋には、此春松山に參りました時に『坊ちやんの間』と名づけられた堂々たるお座敷のあるのを見て驚きました。これが『坊ちやん』に出て來る山城屋だといふので、そんな名をつけたのでありませう。松山では此外夏目と『坊ちやん』の主人公とをごつちやにして、いろ〳〵な名物や名所をこさへて居るやうです。

城山の骨董屋に二三ヶ月居たのでせう。それから二番町の其當時上野といふ老夫婦の住でゐられたところへとまつたさうで、初め表通りに近い八疊の間に居、夏頃子規さんがいらつしやるといふので、奥の二階家に移り、自分は二階に、子規さんは御病人だから下に陣取つてゐられたさうです。

これは二ケ月にも足らぬ間だつたらしいのですが、其間に子規さんは一人で鰻飯を食つて、寄つて來る俳人たちと大聲で俳論をしたり、やたらに運座をやつたり、當の主人夏目の勉強の妨げにならうと一向平氣なもので、それに宿の人達が肺病と聞いて、いやな顏をしてゐても、これまた平氣なものだつたさうです。夏目が月給をとつて來ると、時々小遣をやらうなどと言つて子規さんに金をやつてゐたものださうです。そこで散々食ひ散らして、いざ東京へかへるといふ時になつて、旅費がないからくれろといふので渡しますと、東京へかへる前に奈良見物をしてお費ひになつたといふことです。

熊本へ行きましてからも、お金を貸してくれといふ手紙が時たま來たやうです。

松山での夏目は、一般に當時田舍では珍らしい俸給を取つてゐたのと、(中學校長より高給で八十圓だつたさうです)田舍には珍らしい英文學出身の文學士だといふので、よく出來る先生だ位の印象を殘こしたのみで、あとは默々として勉強して居たものらしうございます。で子規さんの部屋で毎晩のやうに運座が始まつても滅多に下りてくるでなし、たまさか呼ばれて座に連つても、殆んど一緒になつて句を作るといふやうなことがなかつたさうです。子規さんと一寸何か言葉を交はして、それなりに又二階へ上つて了ふといふ風だつたらしく、當時子規さんのもとへお集りになつた俳人

方でさへ、夏目が子規さんの送別の句會の席上で、（中ノ川の蓮福寺に於ける）

おたちやるかおたちやれ新酒菊の花

といふ送別の句をよんだ位の記憶しかないらしうございます。それに引きかへ、尤も土地の方では あつたにしても、子規さんの印象は非常にはつきり殘つて居る樣子でございまして、久保より枝さ んが（現福岡大學教授久保猪之吉氏夫人、『ほとゝぎす』派の女流俳人、『嫁ぬすみ』の著あり）そ の頃十二三の少女時代で、其の上野さんの家と御親類でよく遊びにいらしつたさうですが、子規さ んの記憶ははつきりしてゐる癖に、夏目の方ははつきりしないと言つてをられます。大方心服して ゐた一二の生徒さんや、同僚の極く少數の方をのぞいては、どなたにもそんな印象しか與へなかつ たものでございませう。

とにかく夏目と松山との關係は、前には子規さんで結ばれ、後では（今に至る迄）『坊ちやん』で 結ばれたといつていゝでありませうが、こゝに居た一年間は夏目に取つては大變不愉快のものであ つたらしうございます。

この老夫婦の家は今では二軒になつただけで其儘殘こつて居ります。

二　見合ひ

さて次には私たちの結婚のことに移るのですが、その前に一寸私の里のことをかいつまんでお話して置きませう。

私の里の中根家といふのは、代々福山藩の侍分だつたさうで、祖父は同藩の簗田家（現中外商業新報社長簗田欽次郎さんの家）から入婿したのです。元々貧乏士であつたところへ御維新で益々微禄したものでありませう、私が五つ六つの頃、祖父が内職に脊下をあみ、洋傘の骨などを磨いてゐたことを朧におぼえて居ります。さういつた苦しい中で、父が自力で大學教育をうけることの出來よう筈はなかつたのですが、運よく藩中の秀才として選抜されて、大學へ入つたのださうです。其頃の大學のことは私には一向わかりませんが、何でも父は經濟學を修めたいといふので、その爲めに獨逸語をやらなければならない。ところが獨逸語をやる爲めには醫科でなければ修められないといふので醫科に入つたさうです。私も子供の頃は父が新潟の病院に赴任したので、一緒に連れられて參つたことがあります。といふのは、丁度其頃新潟の病院長に獨逸人が招聘され、初めはそ

の通譯として招かれ、後で副院長かになつたさうです。赴任した前後に私が生まれましたので、私が母に連れられて新潟に參つたのはそれから大分後のことになりませうが、たしか五つの時迄あちらに居りました。其の後東京へかへつて官吏になりまして、この縁談の持ち上がつた頃には貴族院の書記官長をして居りました。父の名を中根重一と申します。私はその長女として生れました。

其頃の中根の家は牛込矢來の、丁度今の新潮社のところで、あすこは私たち思ひ出の深い土地なのです。もう其頃には父が相當にやつてゝくれるので、祖父も内職をよして（祖母は私の十五才の時亡くなりました。）謂はゞ樂隱居の身分になつて、朝のうちは大きな眼鏡をかけて丁寧に新聞をよみ、午後になると近所の碁會所へ出かけて碁を打つて、さうして夕食にはきまつて二本づゝの晩酌を平らげて機嫌よく床に入るといつた、至極おとなしい隱居さん然とした隱居さんでした。私たちが時々話相手になつたり、お酌でもして上げたりすると大層喜んで居ました。

祖父の碁敵に小宮山といふ方があつて、その方が時々石を圍みに祖父のところに見えるのでした。小宮山さんは郵便局に勤めてゐられて、その同僚に夏目の兄さんが居られた。ところが小宮山さんの奥さんといふのが、御近所で簗田の伯母さんとお友達だといふ工合で、妙なところからつながりが出來てゐるところへ、小宮山さんが祖父の部屋へいらつしやると、丁度それと小庭を隔てゝ向ひ

合つてる私たちの子供部屋に、年頃の娘が見える。夏目の弟さんの話も聞いてるので、どんなものだらうといつた工合で、先づ小宮山の奧さんから簗田の伯母に話がある、伯母さんから父や母に橋渡をするといつた筋道で、先方のことも此方のことも案外お互に手取早くわかりました。そこで父が各方面へ夏目のことを問ひ合はせると、大層評判がよろしい。
或る日父に連れられて鎌倉かへ行かうといふので汽車にのりますと、以前その人にやらうかなどと緣談さへあつて、好酒家だからといふので沙汰やみになつた高田源二郎といふ方にひよつこりお逢ひしました。まだお若い法學士で、其頃鐵道の方へ出てゐられて、前々から父と識つた仲です。私はだまつて聞いてゐます、と父が高田さんに尋ねて居ります。
「君、文科出の夏目金之助といふ男を識つてゐるかね。どんな男だらう。」
「よくは知りませんが、何でも學校でも大變評判のいゝ男でした。」
「實は緣談が持ち上つてゐるんだがね。」
「えゝ、それぢやよくしらべて上げませう。お安い御用ですから。」
いろ〳〵調べて貰らつたところが、大層評判がいゝ。父も乘り氣になつて、先づ寫眞の交換をしようといふことになりました。そこで此方は新らし橋のところの丸木利陽で寫眞を撮つて送り、先

方からも日ならずして寫眞が屆きました。

其頃私も十九歳になつて居りました。もう年頃だといふので方々から緣談の口がかゝつて來てゐました。別に降る程あつたわけではありませんが、それでも寫眞を見た數も少くありませんでした。勿論其頃の、殊に舊式に育てられた方の娘のことですから、親が是が非でも嫁けと言へば、少し位虫が好かなくともどこへでも片付いたではありませうが、これまで來た寫眞では、この人になら自分の一生を托しようといふ氣を起させる程の人物らしいものもなかつたし、父の方でもそれ程進んでゐたものもなかつたやうでした。ところがこん度の寫眞を見ると、上品でゆつたりしてゐて、如何にもおだやかなしつかりした顏立で、外ののをどつさり見て來た目には、殊の外好もしく思はれました。

そこで此分ならといふことで、お互が別に御異存もなかつたのでせう。何はともあれ松山に居たのではどうも仕樣がない。とにかく暮れの休みにでも出て來て、一度親しく顏を見たり見せたりした上で、其方でいやなら遠慮なくお斷りなさい、此方もいやなら遠慮なく斷らう、しかしさういふことになつても此方でも出來るだけの御世話はしようし、其方でも又骨折つて貰ひたい、こんな打ち割つたところを父から申してやつたやうです。すると先方でも上京するといふことになつたの

で、今日明日訪ねて來るといふあたりに、父が母に向つて、

「きまつた積りで話をするな。」

と言つてゐるのを聞きました。するうちにその日が來たと見えて、ひよつこり一人で訪ねて參りました。フロックを着込んでゐたやうに覺えてゐます。明治二十八年十二月二十八日のことでございます。

其頃私たちは虎ノ門の官舍に移つて居りまして、矢來の方には祖父さんが住んで居りました。家族は父母、私、時子、倫、梅子、豐子、壯任の六人兄弟姉妹、雇人は書生三人、女中三人、抱車夫一人の相當の大人數で、官舍は西洋館日本館兩方あつて、それでも電燈がついたり、當時には珍らしい電話があつたりしてゐました。電話などでも兩耳に受話器をあてゝ、眞中にベルの釦があるといふ、今から思へば骨董品でした。見合ひの部屋は父が書齋に使つてゐる洋館二階の二十疊の疊の敷いてある部屋で、ともかくもそこにはストオヴも取りつけてありました。

私の父は書生流ですから、むづかしいしかつめらしいことは一切ぬきのやうでしたが、私はたゞだまつてきちんと坐はつて聞いてゐた筈なのが、今から考へると何をお話ししてゐたものか、とんと記憶にありませんが、ともかくいゝ印象をうけたことだけはたしかのやうでした。今記憶に殘つ

てゐる見合ひの挿話は二つきりありません。

一つは夏目の鼻の頭のあばたです。といふのには曰くがあるのです。見合ひの寫眞を仲人のところへもつて來た夏目の兄さんが言はれるには、

「これは大變きれいに寫つてゐるが、あばたはありませんよ。」

とわざ〳〵斷つて行かれたといふ其言葉がそのまゝ仲人の口から傳はつて來たので、私も妹の時子も、その妙な言葉つきから其事が頭にこびりついてゐたものと見えます。いづれ少しあばたがあるが位にいつたのを、仲人が聞き違へたのか、仲人口でわざともぢつたのかいづれかなのでせう。ともかく何の氣なしにひよいと本人の顏を見ると、鼻の頭にあばたがあるではありませんか。おやおや、さう思ひましたが、初めての羞しいばかりの見合に、鼻の頭ばかり見てゐるわけにも行かず、あゝ仲人が斷はつてゐた位だから、今ののは自分の目の違ひかしら、こんな風に思つてゐますと、當時華族女學校に通つてゐたおきやんな時子も、其時お給仕をしてゐたのですが、それに氣がついたと見えて、玄關に送つて出て歸つて了ふと申します。

「ねえ、ちよいと、お姉さん、夏目さんの鼻のあたま横から見ても縱から見てもでこぼこしてるのね。あれたしかにあばたぢやない。」

「えゝ、わたしもさう思つたわ。」

さういつて母と三人でやつと解放された氣で陽氣に笑ひますと、

「そんなこといふもんぢやない。」

と父に苦もなく叱られて了ひました。私などより活潑な妹はお給仕をしながら、本當に横からも縦からも、ためつすがめつ眺めたらしいのです。

それからもう一つ、引物に大きな鯛の鹽燒が出ると、夏目はいきなり鯛の横腹にぼくりと一箸立てゝ穴をあけました。一箸食べた丈でどう思つたか、それ切り箸をつけません。それがどういふものか鮮に目に殘つてゐましたので、結婚後そのことを申しますと、

「あれを折詰めにして貰らつてかへつたところが、蓋をあけて見た兄貴が、これはどうしたんだといふから、一口たべたんだがあんまり大きいんでやめにしたんだといふと、引物に箸をつける奴があるもんか、お嫁さんに嫌はれるぞと叱られたつけ。」

と、自分でもよく覺えてゐて、餘程可笑しかつたと見えて笑つて居ました。がそれはいゝとして何よりも好奇心も手傳つて兄さん達の氣になつてゐるのは見合ひの一件です。そこでどうだつた、氣に入つたかとか何とか兄さんたちがよつてたかつて尋ねますと、齒並みが惡くてさうしてきたない

のに、それを強ひて隱くさうともせず平氣で居るところが大變氣に入つたと申しましたので、みんなで妙なところが氣に入る人だ、だから金ちやんは變人だよと笑つはれたさうです。

明けて元日のことでした。私は妹二人と三臺の俥を連ねて、矢來のお祖父樣のところへ年始に參ります途中、神樂坂の寄席の前迄來ると、反對の方から俥にのつて莨を吹かして來る紳士があります。すれ違ひに見るとたしかに二三日前に見合ひをした夏目です。御時宜をしたものかしないものか、たつた一度會つてまだ碌々顏も覺えないのに、たしかにさうとは思ふけれども若し間違つてゐたらどうしよう、そんなこんなの娘心で思ひ迷つてるうちに、俥と俥とは平氣ですれ違つて向ふの俥の人はすまし込んでゐて徼動だもしません。はてやはり他人の空似かしらと思ひなほして居りますと、妹の時子が明るい聲をかけます。

「ちよいと〳〵、お姉さん、さつきの人たしかに夏目さんね、見た？」

「えゝ、たしかにさうよ、ずゐぶんすましてゐたわね。」

「さうよ、ずゐぶんのおすましね。」

これも後で聞いたのですが、勿論先方でも氣がついてゐたのださうですが、此方から先きに女に

るのだと申して居りました。

禮をするのは不見識だ、いづれ女の方からするだらうから、さうしたらしてやらうと待ち構へてゐ

三日に家つこばかりの新年會をやるといふので、夏目も遊びに來ました。私たちの顏を見たつて

一昨日神樂坂で逢ひましたねとも何とも言はず、それでも機嫌よくみんなと一緒に歌留多を取つた

り、福引を引いたりして興じて居りました。歌留多も下手なのでみんなに喜ばれて居ましたが、父

は殊の外滿足で、今頃の若い者は遊ぶことばかり上手で何にも役に立たないが、あゝいふ風に不器

用な方が學者としては望ましいと、しきりと歸つた後でほめてゐました。

其時みんなで福引を引くと、夏目には絹のみすぼらしい帶〆が當りました。私は男持のハンケチ

を一打抽き當てました。尤もその手巾といふのが、何かの廣告でゝもあるのか、藍で大きく『國の

光』と染め出してあるのです。母がそれを見て、

「夏目さんに絹の細紐を上げても惡いから、その手巾と取りかへて上げたら。」

と申しますので、別室で一人でくつろいでゐるところへ參りまして、

「母がそんな紐ではお氣の毒だと申しますから、これとお取りかへ致しませう。」

と手巾を差し出しますと、

「さうですか。」

とすまして交換して行きました。後で申すのには、あの時は紐の方がよつぽどよかつた。あの手巾ぢや仕方がない。大方兄貴の子供のおしめにでもしたゞらうつて惡口を言つてゐましたが、あの人の文運がひらけて、今では一つの國の光になつたことの運命を、潛越ながら何だか其時に私の手で暗示したやうに感じられもするのであります。

これは後で聞いた話ですが、愈々新年會も終つて歸るといふ時に、書生が大きな聲で、夏目さんのおともと呼びますと、年とつたよほ〲の俥夫が、それは〲きたない俥を引いて現はれたさうです。私も送つて出たのですが、そんなことには氣がつきませんでした。あたりがわりにきれいなのに、俥があんまりきたな過ぎるので、來る時にはそれ程にも思はなかつたのでせうが、それが大層氣がかりになつて、歸へつて來てからその話を兄さんたちにして、本統にきまりが惡くて冷汗をかいたと申してゐたさうです。

七日に松山にかへるといふので、母と一緒に新橋へ送りに行きました。兄さんと高田の姉さんの旦那さん、お友達が三人。珍らしいいいお天氣でした。朝八時頃の汽車なので、朝寢坊の子規さん

は來られず、後から言ひ譯のはがきにこんな句を書いたのが屆いたのを見ました。

寒けれど富士見る旅はうらやまし　　子規

この間松山へ參りました時に、中學校で當時の教務日誌を見せて頂きましたら、缺勤なんぞしたことのない夏目が、この一月十日に缺勤して居ます。これはどうも見合に歸京してのかへりがおくれたらしいのでございます。

出立前に父はなるべく東京で職を得て、かへつて來てから結婚するやうに望んでゐました。夏目もお誂通り行くかどうかわからないが、現在よりは少しどうにかなつた上で結婚するやうにしようといふので、婚約は出來上つたまゝ、結婚の時はきまりませんでした。

とにかく父は直接會つてなほ更人物が好もしくなつたのでせう。將來必ずえらくなるといつて大變囑望して居りました。さうして酒呑みではなし、暮らしも役人よりは危氣はなし、第一人間も固く、派出でないので、若い娘にはよからうといふやうなことも言つて居りました。さうして其後も結婚のことについて夏目から兄さん宛に手紙が來りすると、それを兄さんから父にまはしてよこすことがありました。そんなのを見乍ら、一層父はほめて感心してゐたやうです。官吏全盛の世の中に、出入りするものと言へばこれ又官吏ばかりなうちに、とにかく餘りぱつとしない中學教師風

情に娘をやらうといふからには、父にも餘程見るところがあつたのでありませう。

それから父の方でも東京に適當な口をと心掛けてゐたけれども、中々ありません。さうかうしてゐるうちに菅虎雄さんあたりの口入れで、熊本の高等學校へ行くことにきまりました。行けば少くも一年はゐなければならない。さういつた知らない遠い土地に來るのが、氣が進まないやうだつたら、やむを得ないから破談にしてくれないかといふ手紙が來ましたが、そんなことも出來ることでなし、こゝ一年二年歸京の見込みがないとすれば、何も東京でなければならぬといふのではなし、又一生熊本で暮らすわけでもあるまいから、口はゆつくり結婚してからでもさがすとして、ともかく熊本へやらうといふことになりました。

四月熊本に轉任しました。松山中學の教務日誌には。四月九日講堂に於いて、夏目教官告別式執行と書いてございます。

三　結婚式

さていよ／＼婚約も出來、近々熊本へ嫁入りするといふことにきまりましたので、父の友人で其頃内閣の恩給局長をしてゐられた井上廉といふ風流人を、ともかく名義上の媒酌人に賴むことになりました。ところが此の方が故實に通じてゐられて、古式に則つて目錄儀式などをずつと書いて、先づ座敷飾の事、着座の次第及び式三獻などゝ書いてありまして、それから色直し、三つ目の事、最後には岩田帶は足利將軍がどうしたとかかうしたとか、一々婿殿御緣女てな言葉づかひで、出典其他の故事來歷が認めてあるのを屆けて下すつたので、それを夏目へ其儘送つてやると、驚いたの何のつて早速返事が參りました。女中と二人暮らしの世帶へ、かういふ大がゝりな儀式を持ち込んで來られちやどうにもなりやうがない。どうか勘辨して一番手數のかゝらない略式に願ひたいと言つて參りました。元々目錄どほりやる氣はないのですから、父は笑つて居りました。

それから又父があんまりきたない家では、若い女がいやがるかも知れないなどゝ言つてやつたので、光琳寺町へ八圓の家賃の家を借りて移りまして言つて來ることには、

「亭主の私でさへそれで辛棒するのだから、細君でもそれで我慢してくれなければ困る。」

とあるので、母が心配して、

「あんまり我儘を言つて鏡子が怒られるやうでは困る。」

と申しますと、父はすましたもので、
「ナーニ、これ位に話をして置いて丁度いゝんだ。」
とばかり心得たものです。
此時の結納目錄で私の方からやつたものが殘つて居りますが、井上さんの御婚禮式次第では大層なおどかしやうで、其實目錄では、

一　袴　代　貳拾五圓
一　まな　五種
一　柳　五荷
以上

といつた手輕なものでした。たしか夏目の方から來た結納が帶代として三十五圓と覺えて居ります。
愈ゝ熊本へたつといふ前に、喜久井町の夏目の實家に挨拶に參りました。馬場下の今の交番の向ひの角地面で、丁度今質屋と下宿屋のある邊に、中々廣い家がありました。夏目の家といふのは昔からそこに住んでゐた名主で、喜久井町は菊井町で、夏目の家紋が井桁の中の菊菱であるところか

ら出たものだといふことです。この頃は大分左前になつてゐた時でせうが、それでも中々立派な庭があつて、家はその庭から押しつけられさうな感じがして、大分低いところに建つてありました。聞けば火事に見舞はれた時に、燒けた土を三尺取りのけてそこへ建てたからだといふことです。

お父さんや、今でも居られる兄さん夫婦や、もう亡くなられた高田の姉さん夫婦に、其時正式に引き合はされました。

六月の四日であつたと思ひます。母や妹たちや夏目の方の人々に送られて、父と一緒に一人の年取つた女中を連れて東京をたちました。途中福岡に叔父が居りまして、それが門司迄迎へに來てくれました。ところが聯絡船の中へ私どもが忘れものをしてゐたのに氣がついて、叔父が艀にのつて取りに行つてくれたのです。丁度海の荒れてゐる日で、小舟は顚覆しさうに搖れます。それをまあどうやら下ノ關の岸迄乘りつけて、忘れ物を取つて來てくれましたが、其時の叔父の言ひ草が振るつてゐたので今でも覺えてゐます。

「艀が搖れて今にも引つくりかへりさうだつたが、私は生命保險にかかつてるんで安心してゐたし

こんなことを言つたんで、父が自分で死ねば保險は誰のものになるんだつて、みんなで大笑ひ致

しました。
かうして八日の晩に無事に熊本に着きました。ところが停車場のプラットフォムには宿屋のとぎやの番頭だけが迎へに來てゐるばかりで、夏目の姿は改札口にも見えません。來てゐる筈に違ひないんだがと、あちこち見廻はして居りますと、二等待合室から新聞を片手にもつてのこ〳〵出て來ます。見ればそれでもフロック・コートを着込んでゐました。私たちの姿を見ると帽子を取つて挨拶をしながら、
「今汽車がついたやうですから。」
と頗る超然たるものです。それから又申しますには、
「これから家へいらつしやいませんか。」
と、こんな風な調子です。
「いやあ、いろ〳〵仕事もあるし、今日は又疲れてもゐるから、いづれ改めて……」
父はそんな風に言つて、一ト先づとぎやに落ちつきました。翌る日は旅疲れを休め旁々買ひ物に出ました。東京からこの遠路を運んでくるのは大變なので、初めから手廻のものや何かは一切熊本に來て買ひ調へることにして來たのです。其上結婚は寒い時の積りで、晴着なども一切冬物で整へ

てあつたのが、急に夏場にきまつたので、持つて來たものは夏の振袖一枚位で、これといつた夏仕度もない始末、いくら簡單で質素にといつても、それでも女一人を片付けるのですから、相當買ひ物にも手がかゝります。それでもどうやら間に合せものを整へて、翌る十日となりました。この結婚が誠に裏長屋式の珍な結婚なのです。

この光琳寺町の家といふのは、何でも藩の家老か誰れかのお妾さんの居た家とかで、一寸風變りな家でした。此間熊本へ參りましてさがして見ますと、入口が反對の下通りに面してゐて、熊本簡易保險健康相談所といふものになつて、新らしい部屋のつけたしなどがありましたが、大體に元どほりでした。元は玄關のとつつきが十疊、次が六疊、茶の間が長四疊、湯殿、板藏があつてそれから離れが六疊と二疊と、かういふ間取りです。式は離れの六疊で行はれました。

新郎はフロック・コート、私は東京からてもつて行つた一張羅の夏の振袖、これだけはまあどうやらいゝですが、父はと見ればこれは普段の脊廣服、雄蝶も雌蝶もあつたものではなく、一切合財仲人やらお酌やらを一人でするのが東京から連れて行つた年とつた女中、此の外に婆やと車夫とが臺所元で働いたり客になつたりといふわけですから、どうも嫁に行くといふ風な御大層な氣持にもなれなければ、晴れの結婚式だといふ情も移りません。

さうかうしてるうちに女中が新郎新婦の間に盃を廻します。三三九度の盃なのですか、どうしたものか三ツ組の盃の上か下かが一つ足りません。しかし新郎は一向平氣なもので眞面目くさつて盃を受けて居ます。

盃事が終つても、不粹な父には謠一つうなることも出來ず、甚だ呆氣ない結びの式の幕は閉ぢられたわけですが、それを待ち兼ねて、父は起ち上つて、

「おゝ暑い、おゝ暑くて堪らない。」

と、自分でありたけの障子を外づしました。それから上着をぬいでもまだ暑いといつて、今度は夏目の飛白の浴衣を借りて着て、たうとうどつかりくつろいで了ひました。新郎も冬のフロック・コオトを着て坐はつてるのですから、これ又一倍暑いに違ひありません。父が丸裸になつて着かへをするので、此方も晴れての無禮講とあつて、私服に着かへて、それでも新調と見える羽織を引つかけて出てまゐりました。ともかく其時の熊本の暑さには全く父も私も驚いて了ひました。

酒といつては男二人とも不調法なので、何かと四方山の雜談をして、父はいゝ加減に宿に引き取りました、後で仕出し屋の勘定書きの來たのを見ますと、車夫や女中に迄振舞つて總經費しめて七圓五十錢。これが私どもの結婚式の費用でありました。

ずつと後の話ですが、或る時私たち夫婦の媒酌で知人の妹を片付けたことがあります。其時私は自分たちの結婚の時を思ひ出していろいろ話をして居りますと、傍に聞いて居た夏目が、

「その三ツ組の盃が二つしかなかつたつて話は一體誰の話だい。」

と申します。あんまり呆けてゐるので少しきつく、

「私たちの話ですよ。」

と答へますと、

「さうかい、怪しからん話だと思つて聞いてゐたら、俺達のことかい。道理で喧嘩ばかりしてゐて、とかく夫婦仲が圓満に行かないわけがわかつた。」

つて面白がつてゐました。

結婚のお祝ひの手紙が狩野亨吉、松本文三郎、米山天然居士、山川信次郎、たしかこの四人さんの連名で参りました。見ると大變堂々たる御手紙で、祝辭が滔々と述べてあつて、お祝の品別紙目錄通りとあつて、其目錄が鯛昆布から始まつて、目出度い品の限りを盡くして居ります。こんなに

澤山の品を送つて下すつたのか、お友達といふものはえらく有難いものだと讀んで行きますと、一番終ひに小さい文字で、お祝の品々は遠路のところ後より送り申さず候と、たうどう新婚早々一本かつがれて了ひました。

子規さんか短冊を書いて送つて下さいました。熊本から東京へ引き移る時、大方そんなものはみんな破いて捨てたものでせう、今思うと惜しいと思ひますが、どうも見當りません。たしかこんな句であつたと覺えて居ります。

蓁々たる桃の若葉や君娶る

赤と白との團扇參らせんとぞ思ふ

後の方の句は少し間違つてゐるかも知れません。

新婚早々一つの宣告を下されました。

「俺は學者で勉强しなければならないのだから、お前なんかにかまつては居られない。それは承知してゐて貰ひたい。」

といふのです。私の父も役人ではありましたけれども、相當に本は讀む方でしたから、學者の勉

強するの位にはびくともしやしませんでしたが、何しろ里にゐた時とは樣子のがらりと違ふのには參つて了ひました。先づ官舍に居りますれば、出入りの人も自然多くて、何となく生活も華かでしたが、急に田舍の小人數のところへ來たのだから、勝手の違ふことゝつたらありません。それに里にゐた時にいくらか家事のこともやるにはやつたのですが、さて主婦となつて見ると、どこからどう手をつけていゝかまるで見當がつきません。殊に里では父は氣のつく方で、買ひ物なんぞは大方父の手でされて、母は始終家に引き籠つてゐて、三度三度の食事の指圖や子供のこと位しかしない方なので、さて買ひ物はどうしていゝものやら、違つた土地に來てはなほ更のことわかりません。と言つて家の事は一向お構ひなしの主人に援けを求めて、彼れ此れ言はれるのも癪に障るので、ともかく婆やを連れては一生懸命で見樣見眞似で買ひ物をして歩るきました。しかし右を見ても左を見ても不案內のことですから、たゞもうぼんやりとして、全く馬鹿見たいになつて居りました。隨分へまばかりをやつたことでありませう。

二三日とまつて父が歸へるといふので、東京への土產物を買つて來いと言はれた時なぞ、全くどうしていゝものやら、家を出はしたもの、途方にくれたものでございました。

ところがこゝにもう一つ困つたことがありました。といふのは私は昔から朝寢坊で、夜はいくら

遲くてもいゝのですが、朝早く起こされると、どうも頭が痛くて一日中ぼおつとしてゐるといふ困つた質でした。新婚早々ではあるし、夫は早く起きてきまつた時刻に學校へ行くのですから、何とか努力して早起きをしようとつとめるのですか、何しろ小さい時からの習慣か體質かで、それが並外れてつらいのです。それでも老よりの女中がゐたうちは、目ざとく起きてくれるので間違ひもありませんでしたが、さてそれを歸へしてからといふものは、時々朝の御飯もたべさせないで學校へ出したやうな例も少くありませんでした。

そこでこれではならないといふので、枕元の柱に八角時計をもつて來てねてゐますと、チンと半時間打つ度に驚いて起き上がつたりする滑稽を演じなどして、結局眠不足と氣疲れとで、ほんとにしばらくの間ぼんやりしてゐました。自然やることなすことにへまが多いのでせう。

「お前はオタンチンノパレオラガスだよ。」

そんな風に揶揄ふやうに申します。オタンチンノパレオラガス。どうもむづかしい英語だ。どうせお前はとんまだよといつた意味なんだらうとは察しましたが、はつきりしたわけがわからない。いづれ向うでは面白がつて、何かといふとしきりにオタンチンノパレオラガスを浴せかけます。いづれむつかしい横文字に違ひないと思つて、訪ねておいでになるお友達でいくらか心安くなつた方を捉ま

へては尋ねます。しかし誰あつて笑つてばかり居てわけを教へて下さる方がありませんでした。オタンチンノパレオラガスといふ言葉は、そんなことを言はれなくなつた後々までも、妙に思ひ出の深い言葉となつて頭に殘つて居りました、

其頃から一緒に連れ立つて出ると、生徒に見られていやだと申しまして、一緒に散歩や買ひ物に出たことはまづありませんでした。

かうして私たちの生活が始まりました。夏目が三十才、私が二十才でありました。

四　新家庭

松山での月給は八十圓だつたさうですが、熊本では百圓でした。それでも其當時は製艦費か何かさういふ軍事費を官吏が出さなければならない時で、月給の十分の一はその爲めに政府で差し引いて渡したものです。それから大學に居た頃貸費生だつたので、それを正直に毎月七圓五十錢づゝ返へして居りました。後で小山溫さんに伺へば、當時の大學はそれ程規則づくめでなく、家計困難につきと願書を一本差し出しておけば、貸費は愚か授業料迄免除されたものださうで、誰も彼も皆其

の手をやつて、しかも卒業してから返へすどころぢやなかつたさうです。夏目さんは馬鹿正直でしたなといつぞや笑つて居られたことがありましたが、これは隨分長いこと克明に續きました。此の二口が毎月差引かれる上に、月々父へ十圓、姉へ三圓づつ送つて居りました。父へ送る金もたしか貸費生の返金と同じやうな意味をもつてゐたらしく覺えて居ります。

これだけの金が毎月いるのですから、謂はゞ七十圓の月給取りです。其中から大概の月に二十圓位づつ本を買つて居りましたから、一家の暮しはざつと五十圓ですが、それでも子供はなし、どうにかやつては行けました。とはいふものゝ元々お孃さん育ちで新婚早々と來てゐるのですから、どう家計を切り盛りしていゝかてんでわからず、どうかかうかやつてゐるとだけで、月々いくらかでも殘るどころでありません。が二月三月と過ぎるうち、これではならぬと心細くもなつて、せいぜい切りつめて少しづつでも貯金をしようといふ氣になつて、毎月五圓づつそつと手文庫の中にしのばせておきました。手文庫といふのは私の手習の御手本やら紙やらを入れておいたものです。

或る日、外出して夕食近くなつて歸つて來ましたので、大急ぎでばつと着物を脫ぐなり不斷着に着かへて、其儘臺所へ入つて煮物ごしらへなどしてから居間へ戻つて見ますと、どうしたものか脫ぎ捨てゝ行つた着物の位置から、第一障子の開け方からが違つてゐます。直覺的に變な氣持が致し

ましたので、夏目を呼んで見てまはると、縁側の上に泥足がついてゐて、たしか先刻迄机のわきにあつた筈の手文庫が見えません。うまく／＼こそ泥にかつぱらはれたのです。何が入つてゐたんだと夏目が尋ねますから、手習のもの一式ですと答へますと、泥棒がまづい字にあきれてゐるだらうと笑つて居りましたが、私は漸くの思ひでへそくりを貯め込んだところですから、口惜しくてなりません。たうとう言ふまいと思つてゐたのですけれど其事を打ちあけますと、案の定亭主にかくして貯金なんぞするからさと一笑に附されて了ひました。これが私どもの數多い盜難の皮切りでした。が、何しろ新婚當座御茶碗が四つ切りなく、差し向ひで二つを御飯茶碗に、二つを御汁碗代りに使つてゐたのですから、その二十圓ばかりの盜難はかなりの大問題だつたのです。

新婚の眞夏も過ぎて、九月に入ると早々一週間ばかりの豫定で、一緒に九州旅行を致しました。福岡に居る叔父を訪ねて、筥崎八幡や香椎宮や太宰府の天神やにお參りして、それから日奈久溫泉などに行きました。今ではそんなこともありますまいが、其頃の九州の宿屋溫泉宿の汚さ、夜具の襟なども垢だらけで、浴槽はぬる／＼すべつて、氣持の悪いつたらありません。ひどく不愉快なので、私は懲り懲りしまして、それ以來九州旅行は誘はれても行く氣になれませんでした。

歸へつて來てから旅行中の俳句を澤山作つて子規さんの處へ送りました。其頃はよく俳句を作つて居りまして、それを又丹念に卷紙や半紙に書いて、子規さんのところへ送るのでした。今でもその頃の句稿が澤山殘つて居りまして、それには子規さんが朱筆で點を打つたり、丸をつけたり、評を書いたり、添削したりして居ります。自分でも餘程興が乘つてゐたものと見えて、句を作るのは勿論のこと、よく金を送つては、子規さんあたりから活字本の七部集だとかいつた俳書を買つて貰らつて、食事をする時にも傍に離さずおいて熟讀してゐたこともあります。

或る日俳書をひらいてしきりと感心して居りましたが、ふと私を顧みて、

「足弱の渡つて濁る春の水てのがあるが、足弱つて知つてゐるか。」

と申しますから、

「女のことでせう。」

と答へますと、此奴生意氣に知つてゐたとか何とか申しまして、それから俳句をやつて見ないかといふことになつて、十七字をならべてみました。が、どうならべてみても句らしい句になつた例がありません。よく笑はれたりしていまいましく思つて居りますと、或る時、やはり俳句の本を讀み乍ら轉げかけて笑つて居ります。何が可笑しいのかと尋ねますと、この句が可笑しいのだと申し

て示した句が、

　兩方にひげのあるなり猫の戀

といふのです。此方も一つけちをつけるつもりで、どうせ相手が猫なんですもの、兩方にひげのあるのは當り前ぢやありませんか。ちつとも可笑しいことなんかないぢやないのといつた工合で抗議をしますと、だからお前には俳句がわからないんだつて、たうとう愛憎をつかされて了ひました。ところが其頃私と同じ無能の俳句の生徒が居りました。それは同じ五高の教授で、昔からお友達の菅虎雄さんです。菅さんも俳句の氣運にそゝられて入門か何か、ともかく人眞似でしきりと句を作つて見せられたらしいのですが、其中に、

　桐の葉のドブンと川に落ちにけり

といふ句がありました。夏目が笑つて申しますには、蛙ぢやあるまいし、ドブンと落ちる木の葉があるものかてんで、この方もたうとう物にならず了ひらしうございました。

　そんなわけで俳句には隨分と熱心で、松山時代から熊本に居る間の五年間ばかりが、一番俳句の出來た時で、生涯の句の殆んど三分の二はこの五年間に出來たもの〻やうです。それには中央を離れて熊本のやうな田舍に居りまして、自然文學の話などする友達もなかつたので、たゞ子規さんあ

たりに動かされて、一生懸命で句作したといふことがあづかつて力がございませう。後には漢詩も作りましたが、とても俳句程の熱心は見られませんでした。

俳句のことで思ひ出しましたが、これより多分後のことだと思ひますが、熊本の新俳壇には何かと盡力もした模様で、殊に紫溟吟社といふ俳句の團體にはいろ〳〵肩も入れてゐたらしうございます。

そんなことから自然子規の話なんぞも折にふれて出て參りまして、子規て奴は橫着で穢い奴だ。下宿に居る頃、眞冬になると火鉢をかゝへ込んで厠へ逆に入つて、あたり乍ら用を足して出て來て、その火鉢ですき燒をして食ふんだなんて申してゐたことを覺えて居ります。何しろ自分では、毎日缺さず下駄の齒を洗ひ、さうして三四度も廊下に雜巾をかけるといふ潔癖な姉さんを見てゐるのですから、中々きれいずきでした。

九月の半頃、旅行からかへつて間もなく光琳寺町から合羽町に移りました。といふのはこの光琳寺町の家といふのが、元妾宅だといふ位ですから小粹に出來てるのはいゝのですか、すぐ前が墓場である上に、こゝで妾が不義をして御手打ちになつたとやらどうだとやらで、何となく住んでると

不氣味な家でしたので、家が見付り次第越さうといふわけだつたのです。ところが今度引越した合羽町の家といふのは、まだ建つて間もない家でしたが、がさつ普請でした。がそれでもこの方がまだいゝといふので移りましたものの、何しろ二人切りに女中といふ世帶なりに、間數が澤山あるのです。そこで同じ五高の歴史の先生の長谷川貞一郎さんが同居されることになりました。後で山川信次郎さんもしばらくこゝへ同居されたことがありました。この家賃が十三圓でした。

此春長谷川さんに久々でお目にかゝつてお伺ひした話に、此の時長谷川さんが月々五圓、山川さんが月々七圓のいはゞ下宿料をお出しになつたさうです。大變安いのに大變御馳走があつてなどゝ、三十年もたつてからおほめにあづかりましたが、一體何をして差上げて居たものですか知れたものでありません。でも自分では精一ぱいのことをやつて居たのでございませう。がこの下宿料も、皆さんの方は、たゞ厄介になつて食ふと云ふいはれはないと仰しやるし、夏目の方では友人から下宿料をとる奴があるものかといふわけで、兩方で頑張つて言ひあひをして居るのを、それでは果しがつかないので、たしか私が中に入つて、では五圓も頂いて置きませうといふ事にけりをつけたのでした。山川さんの七圓は氣の毒だといふので二圓だけ後でお上げになつたのださうですが、そんなことは私もとつくに忘れておりました。

私はそんなことすつかり忘れて了つて居りますが、これも長谷川さんに伺つたところによりますと、何でも晩御飯の時に、お猪口にいつぱいづゝ酒が出たさうです。それがどういふつもりかたつた一ぱいで、呑める口の長谷川さんの方では、手もなく呑んで了はれて、飲ませてくれるならいつそ堪能する位飲ましてくれゝばいゝに、胸糞の悪い位に思つて、けろりとしてらつしやるのに、夏目はそれ一ぱいをのむのに小鳥が水をのむやうにチビ〳〵やつてるので中々無くならず、さうしてそれだけで赤い顔をしたりして居たさうです。それから私が主人だと思つてわざと肴の尻尾をつけやうものなら「尻尾は長谷川につけろ」てんで、いつも頭の方を主張したさうです。さういへばこの肴のことはうろ覺えに覺えて居ります。

さて食事がすむとお湯へ入るのですが、山川さんと話し出して了ふと、いくらお湯の案内をしてもなかなか入りません。私がたまり兼ねて「ではお先へ御免を蒙りますよ」と申しますと、

「いや、一寸待て。いま直ぐに入る。」

といつて、その一寸が又一時間もその餘もたつて了ふのでございました。

長谷川さんは私達と違つて中々の交際家でして、お客が隨分とおいでになります。翌年新家庭初めての正月を迎へました時に私もさつぱり、勝手はわからぬ乍ら、大に奮發していろ〳〵御馳走を

調へたつもりでしたところ、何しろ思ひがけなくお客が四五人、生徒が五六人もつめかけて來る始末で、早速金團がなくなつたのを始めとして、後から來た方々にはお膳も出せない始末。そこへ女中は一人と來てゐるし、出入りの商人が又どうしたものか、自分の方も正月だとあつて少しも仕出しをしてくれないので、たうとう不體裁だとあつて、夏目が怒り出します。長谷川さんが氣の毒がつて仲を取りなして下さいますけれども、私も口惜しいので、晴衣の上に前掛をかけたまゝで、元日の夜から十二時頃迄かゝつて、金團を作りました。何しろお客の口數の多いところへもつて行つて、生徒さんたちが無闇とたべるのだからやり切れたものではありません。私も泣きたくなつたのですが、夏目もこれに懲りたと見えて、正月には家に居ないに限るとあつて、次の年から正月へかけて、大抵大晦日あたりに旅行に出ることに致しました。

しかし機嫌の惡いのもその時限りで、次の日か其の次の日かには、私の年始の紋付を着て步るいて巫山戲て居りました。一體自分でもきちんとしたなりをしてゐることの好きな人でしたが、又女のきれいな着物を着ることが好きで、私が脫いでおくとよくそれを羽織つて、褄を取つて見たりなんかして、家中步るき廻はつたものでした。

私があべ川餅が好きでして、よくこさへては長谷川さんをお呼びします。長谷川さんもおいしさ

うに召上るのですが、やはり自分達だけでたべてもとお思ひになつてゞせう。

「おい、夏目、あべ川をたべないか。うまいよ。」

と大きな聲でお呼びになります。と夏目は、

「おれはそんな幼稚なものはたべないよ。」

てんで大に見下げたやうな挨拶をするのでした。何でも自分の嫌なものはその調子でくさすのが癖で、例へば自分が青魚が嫌なもんで、人がそんなものをたべると、昔は青魚なんてものは仲間下郎の食つたもんだなどとやつつけるのでした。

食べ物の話で思ひ出しましたが、後に長く胃をわづらつて、たうとう胃で命を取られた夏目も、其頃はまだ中々の大食べで、(夏になると少し胃が弱る樣子ではありましたが)どちらかと言へばこつてりした脂つこい肉類のやうなものが好きで、魚は臭いといつてあまり好みませんでした。年も漸く三十を越したばかりで物の味もわかり、又相當美味しいものも食べたかつたのでせうが、此方は年は行かないし、人間お腹さへ空いてゐれば何でも美味しい筈だなどと禪坊主じみた頑固なことを言ひ張つて、多くは美味いも不味いもお構ひなしだつたのですから、今から考へると吾乍ら亂暴だつたと氣の毒でなりません。其年の夏に東京へかへつて來てゐた時にいつもこの手を繰りかへし

てゐるのを母に聞かれて、主人にそんなことをいふものがあるもんですかと、いたいお小言を食つたことがありました。

こんなことの外にも、一體に夏目の好みが江戸つ兒式の、どつか下町風のところがあるのに反し、私が謂はゞ山ノ手式に育てられて來てゐるので、趣味の上などでも何かとちよい〳〵した小衝突があつたものですが、一年位たつ迄はさうした氣質が呑み込めませんでした。それでも私の父といふのが家庭の暴君で隨分短氣で母など度々弱らされてゐたものでしたが、それに比べると夏目はゆつたりしてゐて、すべてのことについて公平だし、父のやうに自分勝手な向つ腹を立てるでなし、成程先生などといふものは修養の出來たものだと、それ位の感心が關の山でした。

でも、女中が出外したりすると、色男に會ひに行つたんだらうなどと疑りますので、此方はあけすけとした質で、そんなことをいふ氣持がわからないで、どうも變なことをいふ人だ位に思つたことも時々ありました。

こんな風に同居人が多かつたせいかもしれませんが、何でもこの家は移つた當座から下宿見たいな家だと思つて居りましたところ、三十年振りで熊本へ行つて見ますと、其家が本當に下宿屋になつてるのに奇異な思ひがいたしました。

其の前後のことだつたと覺えてゐます。別に文學趣味があつたわけでもありませんが、お友達の頭本元貞さん（當時伊藤總理大臣の祕書をして居られました）の奧さんなんかゞ、佐々木信綱さんの門に入つて和歌をやつてゐられたりしたので、自然私もいくらか感化されて、文藝雜誌なんぞも手にするやうになつてゐたのでありませう。

或る日、夏目が私のもつてゐた、文藝俱樂部を取り上げて、つくづく卷頭の短冊を眺めて居りました。それは文藝俱樂部の舊い臨時增刊で、閨秀小說號ともいふべきものでして、そこには三宅花圃、大塚楠緒子、藤島雪子（佐々木信綱氏夫人）御三人の石判刷りの短冊がならべてあるのです。

三宅さんの歌が、

朧々かすめる夜半の月かげに
　　匂ひそひたる山櫻かな

大塚さんの歌が、

花まさずなりにし頃とながむれば
　　若葉がくれに櫻ちるなり

藤島さんのゝが、

雲雀なく聲もたのしく聞ゆなり
　さかきが岡の春の夕暮

といふのです。皆美しい假名書きでしたが、わけても三宅さんの出來榮えがいゝので、夏目もしきりと感心してほめて居りました。それから大塚さんの歌を、

「お安くない歌だ。大方大塚が留守なんでこんな歌が出來たのだらうが、大塚も仕合せな男だ」となどと申します。段々聞いて見ると、楠緒子さんのお婿さんになられた大塚保治といふ方は夏目のお友達で、今獨逸へ留學してゐられるといふことでした。大塚楠緒子さんの噂は度々頭本さんの奥さんあたりからも聞き、又結婚なさる時に美しいローマンスのあつたことなども、其當時の私共若いものには知らないものがなかつたのですが、そのお婿さんが夏目のお友達だとは其時始めて知りました。それから興津の松濤園に避暑して、楠緒子さんが繪を描いてゐられた時見初めて、當時大學で媒酌人の名人と言はれた清水舍監に頼み込んで、案外話が早く纏まつたこと、星ヶ岡茶寮で結婚披露式があつて招待された時、夏目が兄さんの仙臺平の袴を借りて行つたこと、それからあれは俺の理想の美人だよなどといふいらぬこと迄付け加へて話してくれました。

丁度其頃、同じ大學時代の友達の米山天然居士が亡くなられました。米山さんの話は前からちよいちよい聞かされて、あれは文科大學始まつて以來の怪物だなんて申して居りましたが、非常な我儘者で、友達で喧嘩をしないものがなかつたといふ位の人だつたさうです。大學の歴史の試驗の時、たしか箕作さんの時間だつたと聞いてゐますが、時間が切れても一向平氣の平三で答案を書いてゐて、いつ提出するとも果てしがつかないので、箕作さんもじれを切らして、米山さん一人を殘してかへられたさうです。翌朝小使が教室の掃除に行きますと、ランプをつけたまゝ天然居士一人泰然と答案を書いてゐたとかいふのですから、其當時としても大變な豪傑だつたのでございませう。豫備門から本科へ移る時のことと存じますが、その天然居士が夏目に向つて、

「將來何になつて社會に立つ積りだ。」

と申しますから、

「工科へ入つて建築をやつて、大に金をとらうと思ふ。」

と答へますと、

「馬鹿な、この貧乏國で、どれだけ立派な建築が出來ると思ふか。知れたものぢやないか。それよりか文學をやつて、傑作を後々迄のこせ。」

と忠告したといふことです。それだけで文學に代はつたのでもありますまいが、ともかく最初は建築をやる積りでゐたことは、確かに當人の口から聞いたことがあります。

大學時代二人制服でならんで寫した寫眞であります。其後其寫眞の米山さんの半身だけを、四つ切位に引きのばさせまして、其上に追悼の句を題しました。

　空間を研究せる天然居士の肖像に題す

　　空に消ゆる鐸のひゞきや春の塔　　漱石

五　父の死

此の夏休みには耶馬溪の探勝がやりたいなどと申して居りましたが、六月二十九日に夏目の父が八十四才で亡くなりましたので、試驗もそこ〳〵に切り上げて、七月早々二人で上京致しました。さうして虎の門の官舍に落ちつきました。

一體夏目は生家のものに對しては、まづ情愛がないと申してもよかつたでせう。有るものは輕蔑と反感位のもので、勿論義理堅い人ですから、義理を缺くやうなことはなかつたやうですが、とに

かく金ちやん金ちやんと御機嫌をとられたりちやほやされたりすればする程反感を募らせる方で、中へ入つて隨分私は困りもし又氣まづい思ひを致しました。さうして兄さんなどに氣の毒でなりませんでした。それでも黑白のけじめが甚だはつきりして、きらひならきらひ、好きなら好きで、人が何といつたつて得心が行けば格別、でない以上頑として動かないのですからどうにも仕方がありません。たゞ其中で一番上の兄さんの大助さん（初め大一と言ひ後で太助と改める）此の人はとうに亡くなられたのですが、この兄さんとお母さん（これもすでに亡くなられてゐましたが）の二人だけは、後々までほめもし又なつかしがつても居りました。

お母さんのことは自分でも『硝子戸の中』に書いてなつかしがつて居りますが、長いこと御殿奉公を勤めてゐて、夏目へは二十七かの時後妻に來られたので、先妻には娘が二人あつたのださうです。大變いゝ方なので奉公先の明石樣の御部屋でも、其歲になる迄手離さず、それで婚期がおくれたとか申します。いろ／＼昔の衣裳やら髮道具なども凝つた美しいものをもつて來られたのださうです。さうした話が出る度に、

「よくもあんな親父のところへ來たものだ。」

などと口癖に申して居りましたが、反對に父にはどうもいい感じはもつてゐなかつたや

うです。噂に聞けば父も中々えらい人だつたといふことですけれど、夏目の目にうつつた父はどうもさうではなかつたやうでした。

「お前學問をするつて一體何をやるんだ。」

「文學をやります」

「何に、軍學をやる。」

夏目は父の五十三四の時の年寄り子だと申しますから、父の所謂グンガクをやらうといふ頃には、お父さんもやがて八十に手の屆かうと云ふ、文學か軍學かわけのわからなかつたお年だつたのでせうが、それでも容捨なく、

「このとほりわからず屋だからいやになつちまう。」

などと申して居りました。それから親父はけちんぼの癖に、妙に金のたまらぬ男だつたなどと笑つてゐたこともあります。其頃聞いた話で、うそか眞か知りませんけれど、父が三度三度の食事の獻立をするのださうですが、時分時になつて女中が、

「御隱居樣、今晩は何に致しませう。」

と伺ひに參りますと、

「茄子でも煮ておけ。」

が定まり文句で、また今晩もお茄子でせうよつてな工合に、臺所で女中が皮肉りながら伺ひに行つたもんださうです。其頃のことですから、一錢買へば五十もある茄子です。それでゐて自分一人は二疊の部屋に茶簞笥を背負つて坐はつて、いつでもそこから菓子をつまみ出しては、ひとりでぼり〳〵食べてゐられたなどゝ申して居りました。

しかしさういふ風に夏目に不評判だつた父も、若い時には中々のやり手で、祖父が大酒呑みで家產を傾けたのをたてなほした、ぱり〳〵の名主だつたといふことです。話は少し大袈裟過ぎて唾眉物ですが、見附を出て一步牛込の方へ入ると、それ馬場下の名主樣がおいでになつたつて、泣く子をおどした位のものだつたなどと申しますが、それはともかくとして、一時は中々羽振りもよかつたのださうです。さうして名主交際で廓へなんか遊びに行つても、外の名主は當時の金で三百圓も積み夜具にかけて、大盡風を吹かしてそれを誇つたりするのを、いゝ頃加減にこそ〳〵座を外して來て、遊びに使つた金だと思つてこれを買はふといつた案配に、書畫などを集めてゐたさうです。自分の屋敷の前の坂に夏目坂と名をつけたり、家紋をとつて喜久井町といふ町名をつけたりしたのは、大方このお父さんだらうといふことです。

『硝子戸の中』にある御維新のすぐ前頃に、拔身の夜盜の一團が夏目の家に押入つた話は、私が兄さんから聞いて話したのを書いたのですが、兄さんは其時母の蒲團の中で一緒に母とねてゐたさうです。餘程怖かつたものと見えて、姉の悲鳴と哀訴とを今でもはつきり覺えてゐると申して居られます。何でも浪人が軍用金をとりに入つたのだといふことですが、父が土藏に浪人の一隊を案内しましたけれども、千兩箱は澤山あつたが、中味はからであつたとかいふことです。けれどもそれ以來夜盜避けとあつて、柱の中に穴をほつて其中に金を隱くすやうにし、自分は押入れから屋根裏に梯子をかけて、天井裏に蚊帳を吊つてねたとか申すことです。

さうして苦勞して守つてゐたお金も、今で言へば會社ゴロなのでせうが、何でも陸軍かへ納める糧秣の會社見たいなものを作るとうまくそゝのかされて、大變儲かりさうだと乘氣になつて出資をし、父判をついてやつたのがもとで、當の責任者はドロンを極め込み、出資金は本も子もなくした上で、判をついた金を拂はなければならない破目になつて、たうとう青山あたりや新宿あたりに持つてゐた土地も人手に渡し、折角の身代を片なしにしたといふことです。夏目が物心がついてからは、始終惡い時ばかりにめぐり合はせたわけで、名主の全盛時代なんかは話丈で、實際の恩惠には殆んど浴さなかつたのでございませう。

一番上の大一といふ兄さんは、大學にも入り、學問もあり、又男前も立派な方だつたさうですが、惜しいことに肺が悪くて病身だつたので、大學も中途でやめたやうな按配です。其頃父は府廳から警視廳にまはつてそこで勤めて居たのださうですが、その下役に樋口一葉女史のお父さんが勤めて居られまして、父は年も年でしたし、それに名主のいゝ顔で腕利だといつても學問はなし、小五月蠅く働くのも臆劫だつたのでせうが、樋口さんの方は學問もあり、それに誠に小まめに立ち働くので、父は大層調法がつて使つて居りまして、時々は金を貸してやつたものだと申します。一葉女史の貧乏は有名な話ですが、お父さんが生きてゐられる時から樂ではなかつたらしいのです。しかし何にしろよく働いてくれるし、謂はゞ大事な片腕といつた工合で、言ひなりに金を用立てゝゐたものゝ、中々返してくれるといふことがありません。

樋口さんは其頃山下町の官舎に居られ、大一兄さんもやはり父の引きで、そこの飜譯をやる役についてゐて、同じ山下町の官舎に住んでゐました。父だけは牛込から通つてゐたものと見えます。大一兄さんも勤めてゐる位だからまだ丈夫でしたでせうし、年頃ではあり、男前はよし、それに名主の長男ではあり、まづ／＼申分のないところから、樋口の娘に字も立派だし歌も作るし、第一大層な才媛がある、あれを貰つちやどうかといふ話が持ち上がりました。ところが考へたのはお父さ

ん。たゞの下役でさへこれ位金を借りられるのに、娘を貰つたりなどしたら、それこそどうなることかとかう算盤を彈いたものと見えまして、この話はそれなりきりで、あたら一葉女史を夏目の家に貰ひそこねたといふ話がございます。

やがて大一兄さんが亡くなります。續いて次の榮之助兄さんもなくなりました。この兄さんは中中の道樂もので、一時家から勘當されたりしてゐたと申しますから豪の者だつたのでせう。お二人とも若いひとり者のうちになくなられたさうです。其下にたしか姉さんが一人あつたのださうですが、先妻に二人の娘があつて、男の子ならいゝけれど、若し自分の娘が可愛いやうでは先妻に申譯がないといふので、母の意志で生まれるとすぐよそへ養女にやつたとのことです。それ程氣を使つてゐられたものと見えます。

三番目の兄さんは直矩と申しまして今矢來にゐられますが、其頃は和三郎と呼んでゐられました。この兄さんがお腹に出來た頃、あんまり子供が生まれるといふので、其頃の産兒制限をやつて、黑燒をたべるといゝとか、するめをたべるとおりるとかいつて、しきりにそんなこんなの見境なく流産しようとしたのださうですが、たうとう流れず了ひに生まれた子供は、そんな敵と戰ひやつれたものか、眞黑なそれは〱小いひな〱した子が生まれました。母もこれは自分の罪だといふので、

外一倍溺れるやうに愛したものださうです。父も亦この子がおとなしいといふので、金之助なんかのあばれん坊と違つて、大層可愛がつたといふことです。それに兄が次々に亡くなるなどといふことがあつて、なほのことこの兄さんを大事にしてゐたものでありませう。この兄さんは今でも芝居好きですが、子供の頃猿若三座の芝居見物になんぞ連れられて參りましても、初めから終迄キチンとしておとなしく見てゐるといつた工合で、父や母の受けは大變よかつたといふことです。

この兄さんが結婚されてからのことでせう。お父さんは日が暮れるとすぐに寢床に入つて、十二時頃にきまつて目をさまします。其時、大きな聲で、

「和三はかへつたか。」

と尋ねるのですが、兄さんがよく又夜遊びに出たものと見えて、嫂さんがハイとか何とかいゝ加減にあしらつてつくろつておきますと、今度は、

「今何時だ。」

と來るのださうです。すると嫂さんも心得たもので、

「九時ですよ。」

とあつさり片付けておきますと、それで安心されると見えて、朝まで眠られるのださうです。

先妻に二人の娘があり、一人は新宿の女郎屋伊豆橋に嫁に行き、一人は高田の姉さんでとほつて、後まで殘つてゐる姉さんです。いづれ後で詳しく申し上げる機會があらうと思ひます。

これが私の傳へ聞いてる父や兄さんたちの大體の輪廓でありますが、父が亡くなる頃は、夏目の家も大分傾いて居りました。父の名を直克と申します。

六　上京

さて一年振りで二人で上京いたしましたが、私の里では毎年夏になると、一家揃つて鎌倉材木座の大木伯の別莊をお借りして行くのが其頃の例でして、此の夏も妹たちは皆出かけてゐて、いゝ按配に家はがらあきなので、これ幸ひと二人でそこで留守番をして居ました。ところが二人切りですから淋しいのに、別に遊ぶ事もないので、そこで唱歌を敎へてくれろといふことになり、私が先生で、當時兵隊さんがよく唱つてゐました『敵は幾萬ありとても、すべて烏合の勢なるぞ』といふ軍的な唱歌を敎へるのです。しかしいくら敎へても敎へても調子はづれでどうしても物にならず、唱ふ度に可笑しくなつて笑ひこけて了つたことがずゐぶんございました。

さうかうしてゐるうちに、丁度其時私は身重だつたのですが、長途の旅行がいけなかつたのか流産して了ひました。そこで、ずつと留守番をして夏中東京で暮らすつもりなのが、私の健康がこんな工合になりましたので、妹たちの間にまじつて私も鎌倉へ行つて保養することになりました。夏目も東京と鎌倉との間を幾度も往復して居りました。

ある時、圓覺寺に宗演禪師を訪ねたとかで、漢文のむづかしさうな御本を拜借して來て、しきりと讀んでゐたことがありましたが、次の年の夏頃には、よく一人で座敷の眞中で座禪を組んで居りました。何でも大學時代か、卒業した當時の話でせう。菅虎雄さんに連れられて、一寸宗演さんの元に參禪したことがあるとのことです。さうしてそこの坊さんから、禪坊主になつちやどうかとすゝめられたことなどがあるとかいふことでした。

丁度夏目が鎌倉から虎ノ門の官舍へ歸へつた時のことです。陛下がお通りになるといふので、家中のものが二階あたりの戸を閉めて（それがあの邊の官舍の規則だつたのです）みんな門のところにならんで、御送迎申上げました。夏目も一緒にならんで居りましたが、其うちにいつの間にやら姿が見えなくなりました。一番上の妹が氣付いて、

「おや、夏目のお兄さんは。」

と尋ねると、母が

「儀式張つたことが五月蠅いので隱くれたのかも知れないよ。」

と申して居りますうちに、白茶けた仙台平の袴を浴衣の上につけて、大層改まつて出て參りました。

「あら、お兄さん、どうなすつたの、袴なんかつけて。」

妹が目を丸くして尋ねますと、夏目はすましたもので、

「熊本のやうな片田舍に居ると、陛下の行幸を拜するといふやうな機會がありませんからね。」

と申しまして、大層几帳面に御送迎申上げたさうです。後で妹が、

「お兄さんて隨分面白い方ね。」

と其話をして居りました。

上京中は度々病氣の子規さんをお訪ねしてるたやうでしたが、愈々九月にもなり、學校も始まりますので歸へらなければならない、出來ることなら二人一緒にかへりたいといふので私は醫者に診て貰ひますと、今暫らく靜養した上でといふことで、夏目一人先にかへることになりました。歸

へり際に、其頃紅葉山人の『金色夜叉』が讀賣新聞に連載されてゐた最中で、上京してそれをずつと讀んでゐたのですが、熊本のやうな田舍には讀賣新聞が行かないので、それを毎日東京から送れと申付けて參りました。ところが毎日となると些細なことなのでかへつて怠り勝ちになつて、三回分も四回分も纏めて送つたりして、ひどく手紙で怒られたことがあります、當時の紅葉山人の人氣は大したものでしたが、『金色夜叉』には一向感心してゐなかつたやうでした。

感心してゐたのは一葉女史の作物でした。一葉女史の全集を買つて參りまして、官舍の二階にねころびまして『たけくらべ』などには殊に感嘆して、男でも中々これだけ書けるものはないと申して、しきりに全集を讀んでゐたさうです。これは私の弟から聞いた話です。それから私の覺えてゐるものでは、廣津柳浪の『今戸心中』に感心してゐたことでした。

私がまだ熊本にかへらない前に、九月早々大江村（今では市内になつて大江町）の落合東郭さん（漢詩人現侍從）のお宅へ移りました。落合さんが東京に勤めてゐられて、自然家があいてゐるのでおかりしたのでした。十月、健康も恢復したので、歸りたいと思つて居りますと、折よく落合さんの御母堂と、落合さんの奧さんの御里の元田永孚先生（明治天皇の侍講）の令息御夫婦のお二人

が熊本へおかへりになり、しかも元田さんのお宅といふのが、今度お借りした落合さんのお宅のすぐお隣りといふわけで、一緒に連れて行つて頂いて、十月二十五日頃熊本につきました。

來て見ますとこゝは大層景色のいゝところで、家の前は一面に畑、その先が見渡す限り桑畑が續いて、森の都と言はれる熊本郊外の秋の景色は又格別でした。其代り冬になると隨分と寒く、見たこともないやうな大きな氷柱が、水車のあたりにのべつたらに下がつて居りました。

畑に百姓のお爺さんがよく姿を見せました。夏目はそれと懇意になつて、挨拶を交はしたりしんみり話をしたりしてゐましたが、ある時午飯をたべながら、

「あのお爺さんは俺よりよつほど金持だ。あれで六十圓の貯金があるんださうだ。」

と眞顏で申しますので、女中が旦那さん妙なこと言ひなさるつてわけで大笑ひに笑つたことがありました。其女中はテルといふ名で、色の淺黑い二十七八の女でしたが、よく忠實に働いてくれるのはいゝが、これが私にまけない大層な朝寢坊です。で私の留守中朝飯もたべさせずに學校へ出したことがしば〳〵あつたさうですが、さうすると旦那さんに申譯がないとあつて、歸つて來て夏目が御飯をたべて了ふ迄決して自分でも箸をとらないのです。

庭に小い祠がありましたが、テルがその神樣に線香を上げ蠟燭を上げてしきりに拜んで居ります。

一心に願がけでもしてゐる樣子ですから、いゝ旦那でも欲しいのかと夏目が冗談に尋ねて見ますと、どうぞ朝起きになれますやうにと殊勝なお祈りしてゐるのでした。

夏目はずつと冷水浴をして居りましたが、寒くなると水をかぶる騷ぎつたらありません。フウフウ言ひ乍ら、冷いので躍り上がり飛び上つて、あたりかまはず水をはねとばします。テルが側で見て笑ひ乍ら、

「旦那さん、はねまはつて、小鯛のごとある。」

と評したものです。夏目もこの朴直さが氣に入つたと見えて、時々冗談口をきいては私たちを笑はせて居りました。或る時、甘いものが欲しかつたと見えて、いきなり臺所へ入つて來て、羊羹を一片切つてたべながらテルの方を向いて、

「お前にもやらうか。」

と揶揄ひ氣味に申しますと、もうちやんと御毒味をしてゐますよとすまして答へたものです。夏目も降參して、

「料理人手元すかさずといふが、本當だね。」

と笑つて居りました。

私が東京からこの新居へ歸へつて參りますと、今迄居なかつた書生さんが一人居ります。これが『吾輩は猫である』中の愛嬌者多々羅三平だと噂されてゐる股野義郎さんです。書生さんは間もなく土屋忠治さんが加はつて都合二人になりました。二人とも五高の學生で、大方三年生だつたでせう。土屋さんは謹嚴な人でしたが、股野さんと來たら腹も立つた代りには、隨分と笑の種を蒔いたものです。

この三平君飯を食ふの食はないのつて非常な大食ひでしたが、たゞ御飯だけではなく、お汁を御飯と同じ數だけ平らげるのですから驚く外はありません。さうして食べながら、まるで子供のやうに、ぼろ〳〵御飯粒をこぼすのですから參つて了ひます。

學校へ御辨當箱を持たせてやると、持つて歸へつて來たことなしで、いくら女中が小言をいつても、次の日はやはり手ぶらで歸へつて來ます。そこで仕方なしに大きな子供の頭程もあるおむすびの中に梅干を入れて持たせてやるやうにして、これで漸く辨當箱の難に免れました。それからよく酒を呑んでは十二時頃にかへつて來ます。冬の寒い頃には、それ迄私か女中か誰か一人起きてゐて門を閉めなければならないのがつらいのですが、一向そんなことはお構ひなしで、歸へつて來るな

りいつの間にやら鐵瓶の湯を一つぱい呑み盡くして、からのまゝ火鉢にかけておくといふ先生です。母屋と離れて別棟の小い離れがあります。それが書生さんの部屋でしたが、鼠が出て仕方がないから猫を貸してくれといつて、三平先生猫を連れて參ります。部屋へ行つて障子をぴしやり〳〵閉める音がすると、やがて「玉々」と猫を呼ぶ聲がします。其頃にはたしかに抱いて行つて部屋の中に監禁した筈の猫は、いつの間にやら臺所でテルの足に背をなすりつけながら、にやんと鳴いて居るといふ徹底した間の拔け方です。

この家賃は七圓五十錢でした。父が亡くなつて十圓の金も送らずにすむやうになり、大學への返金も完納して、その頃からいくらかづつ經濟上の余裕が出來るやうになりましたが、少し樂になると餘分に本を買つたり、困つた學生の面倒を見てやるといふ風でありました。

この年の正月のことでしたかと思ひますが、安藤眞人といふ自分の小學時代あたりからのお友達で、隨分仲のいゝ間柄だつたらしいのですが、其方が庭家の事情で學校も中途で退學されて、其頃熊本の郡部の島崎といふところに住んでられて、濟々黌あたりの先生をしてゐられたのを漸くつきとめて訪ねまして、その訪問記を書き綴りました。何枚位のものか忘れましたが、その文章を長谷川貞一郎さんに讀んで聞かせてゐたのを覺えて居ります。それはどこの雜誌に出たこともないやう

ですし、家に草稿もありませんし、全集にものつてゐないやうですが、どうなつたものでかしすら。或ひは自分で破つて捨てたものかもわかりません。俳句以外の此頃の文章といへば、私の記憶にあるものはまづそれ位のものです。この安藤さんとは大變仲よしだつたことといふとで、いつも日本新聞を送つて居たさうですが、この父の死で上京なるについて、當分新聞は送れないなど、いふ手紙を上げたりして居たといふとです。これは安藤さんの甥御の五高の教授野々口勝太郎さんから伺つた話ですが、その野々口さんの漢詩を日本新聞に紹介して上げたりもして居たさうです。

七　養子に行つた話

其頃のことでしたでせう。鹽原のおやすさんから長い手紙が參りました。鹽原とのいきさつは自叙傳小說『道草』の中で自分で書いてゐることですから、詳しいことをこゝで申す迄もありませんが、其の手紙からいろ〳〵聞いたことを、順序ですから少しばかり話しておきませう。鹽原は『道草』の中では島田となつて居ります。

一體、夏目は慶應三年正月五日に生まれたのですが、それが申の日の申の時に當つてゐました。

その申の日の申の刻に生まれたものは、昔から大泥棒になるものだが、それを防ぐには金扁のついた字を名につければよいといふ言ひ傳へがあつて、其れで金之助といふ名をつけたといふことです。其代りえらくなれば大層出世するものだとかういふのです。

　ところが生まれはしたもの丶父の五十四才かの時の年寄り子で、はたへ對しても見ともよくない上に、第一お乳がない。そこで家へ女中に來てゐたもの丶姉が、四谷で古道具屋をやつてゐる。そこへ乳があるといふので里子にやることになりました。ところがその古道具屋といふのが、別にれつきとした店をもつてる程のものではなく、毎夜お天氣がい丶と四谷の大通りへ夜店を張る大道商人だつたのです。

　或る晩高田の姉さんが四谷の通を歩るいてゐますと、大道の古道具店の傍に、おはちいれに入れられた赤ん坊が、暗いランプに顏を照らし出されて、可愛らしく眠むつて居ります。近よつて見ると紛ふ方なくそれが先頃里子にやつた弟の『金ちやん』なのです。何が何でもおはちいれに入れられて大道の野天の下で寢せられてゐるのはひどい。姉さんは無性に可哀さうになつて、いきなり抱きかゝへて家へかへつて參るりました。が一時の氣の毒さで連れ歸へつて來ては見たものの、元々家には乳がありません。そこでお乳欲しさに一晩中泣きとほしに泣き明かす始末に、連れて來た姉

さんは父から散々叱られて、仕方なしに又その古道具屋へかへして了ひました。かうして乳離れのする迄古道具屋に預けておかれました。

けれども元々家へは置いときたくない父の肚なのですから、機會があれば他へ養子にでもやらうとしてゐたものでせう。そこへ折よく養子の話が持ち上りました。貰ひたいといふのは子供のない鹽原夫婦です。

鹽原昌之助といふのは元夏目の家に書生をしてゐたものですが、この男見所があるといふわけで、名主の株を買つて貰らつて段々に取り立てられ、其頃では淺草の戸長となつて居りました。妻女のおやすさんといふのも、たしか夏目の家に奉公してゐて、一緒にして貰らつたのださうですが、夫婦の間に子供がありません。養子を物色してゐたところへ、第一候補に上つたのが、いらないもの扱ひにされてゐる夏目の末子です。恩人の子ではあり、男の子で願つたりかなつたりで、此方ちやる位なら氣心の知れたところがいゝといふので、たうとう鹽原へ養子に行くことになりました。それが夏目の三歳の時です。

最初のうちは夫婦二人とも大層な可愛がりやうで、殊に妻女のおやすさんなんかは、何でも欲しいといふものは買つてくれるし、それはく吾が子のやうにちやほやしたさうですが、そのうちに

は子供はそつちのけにして、夜晝夫婦喧嘩ばかりするやうになりました。一體おやすさんといふ人は根が非常なやきもちやきだつたのですが、やきもち喧嘩をするにはする原因があつたのです。といふのは戸長をして居りましたもので、淺草のどこかの後家さんで淋しく暮らしてゐる女があり、それがいくらか地所や何かの財産をもつてゐるところから、いろ〳〵その面倒を見てやつてゐるうち、女の方ではひどくそれを力にして頼つて來たのが始まりで、終ひには色にからんで仕舞つたものらしいのです。やきもちが募れば男も意地づくになりませうし、後家さんの方でも笠にかゝつて來て、たうとうその女が家へ入り込んで、あべこべにおやすさんを追ひ出さうといふ始末。さうさう喧嘩ばかりしてゐる家では、子供の上にどんな災厄が振りかゝらないものでもない。かういふので殊に一番上の大一兄さんが大層同情して、自分は病身ではあり、到底妻帶も出來さうにないので、『金ちやん』を養子にして後を取らせようと、引きとることになつたさうです。それが夏目の七歳の時の話です。

さて七つの時實家にかへつてをりましたまゝ、やはり元のまゝの鹽原金之助で、籍はいつかな渡してくれません。鹽原の方ではもう少し大きくなつたら、其頃流行つた役所の給仕にでも出す積りでゐるらしく、其上手離すとなれば幾分の愛情もあつて、澁つてゐたものでせう。隨分大きくなる

迄鹽原姓を名乘つてゐたものださうです。何でも明治二十一年になつて、大一兄さんが亡くなられたのをきつかけに、準養子の話からいよ〳〵夏目へ復籍させることになつて、養育料筆墨料など合せて二百四十圓を支拂ふといふので漸く契約が成立つたさうです。そこで取り敢へず内金百七十圓を入れ、後は月々三圓づゝ、月賦で入れて、明治二十三年になつて皆濟したといふ約定金請取證なるものが今でも殘つて居ります。さうして其時緣は切れるものゝ、今後ともに一切不實不人情は致すまじく候といふ一札を夏目の方から鹽原へ入れて居ります。これが夏目が有名になつてから祟つて來るのでございます。この證書の寫しがありますからこゝにのせます。

今般私儀貴家御離緣に相成因て養育料として金貳百四拾圓實父より御受取の上私本姓に復し申候就ては互に不實不人情に相成らざる樣致度存候也

明治廿一年一月　金之助

鹽原昌之助殿

序ながら申上げて置きますが、この後四五年たつて、夏目が北海道後志國岩内郡岩内村淺岡仁三郎方へ送籍いたしまして、一時北海道平民といふことになつて居たことがあるさうです。これは徵兵免除の爲めだつたのだといふことです。

さてそんなこんなで養家では結局養子ですから親身の愛情もなかつたのでせうし、實家では實家で父が養子にやつた奴だとあつて、これ又つつかけものにするといつた工合で、家庭的には謂はゞ孤兒同然の身の上で、隨分苦勞に苦勞をしたものらしいのです。

そのうちに一番上の兄さんも死んで相續者をきめなければならなかつた時、今の矢來の兄さんが、この準養子の話を思ひ出して、後をとるかと夏目に尋ねましたところ、こんな家の後をとるのはいやだと一言のもとにはねつけたさうです。

おやすさんは間もなく件の後家さんに放り出されました。

そのおやすさんが遙々熊本へ手紙をよこしたのです。鹽原を出てからのことから、夏目の幼時のことなどが、いつぱい書いてありました――

鹽原を出てからおやすさんはある酒屋の後家さんに行きました。間もなく夫は亡くなりましたが、先妻の娘が一人、それが年頃なので婿を取りまして、相當商賣をやつて居りました。娘も婿も親切にしてくれて、おやすさんの上に幸福な日が輝きましたが、それも一時、やがて戰爭が始まつて、婿は出征して戰死をして了ました。大切な男手が無くなつては商賣も出來ず、店は他人に讓り、戰死者の遺族に下りる年金で、小い家に入つて暮らしを立てゝゐました。自分が苦勞して育て上げた

娘ではないけれども、苦しい中にも隨分と大事にしてくれてゐる。おやすさんはかう書いて居ました。それだのに何かと自分に苦勞をかけて大きくなつた夏目は、今は大學を出て、月給の百圓も取る立派な男になつてゐながら、一向振り向いてもくれない。子供の頃疱瘡を病んだ時、どんなに寢ずに看護して上げたと思ふ。五才の時小便をしようとして緣側から轉がり落ちて腰の骨の脫けた時、どんなに自分が面倒を見てやつたことか。あの時はどうだつた、この時はかうだつたと、昔々養育に骨折つたことをいろ〳〵とならべ立てたそれはそれはくどい手紙でした。結局困つても居るからいくらか金が欲しいといふやうな意味合がほのめかしてありました。が此方も、それは非常に困るといふのならやらないこともないけれども、引き取られる時にきれいに金迄拂つてわかれたものを、今更そんなことを言はれたのでは際限がないといふので、體のいゝ返事を書いてやつてたやうでした。

其後幾年か過ぎて、夏目が修善寺で大患にかゝつた頃、おやすさんが訪ねて參りまして、それからは一年に一度位は見えたでせうか。來る度に少しづつお小使を上げたので、後ではかへつて金を貰ふので行きにくいとあつて見えなかつやうです。尤も晩年にはリユーマチスで手足もよくきかなかつたといふことでした。

おやすさんは後で秋田雨雀さんの養母といつた形になつて、六七年前亡くなりました。生前雜司ヶ谷に墓參に行つたかへり道に、鬼子母神の境内へ出ますと、そこでふと杖に縋つたおやすさんにお會ひしたのが最後でした。

鹽原の方は其後慾にかゝつて、洋行からかへつてから、尤も困つても居たのでせうが、さきの契約を無視して、不實不人情の一札を楯にとつて、昔の養父がこんなに困つてるのに、養子の方では大學の先生にもなり大變金が入るさうだ、不人情のことをいはずと、何とかしてくれといふ風に、三百代言みたいな人をよこしては、態のいゝゆすりにかゝりました。結局出す義理合はないのだけれど、では百圓で今後は文句は言はないといふことに親類のものなどが中に入つてけりをつけました。此事は『道草』に詳しく書かれてゐますが、あのとほりです。子供の時は夏目も隨分數奇な運命を辿つたものです。當時の養育料二百四十圓は相當の大金で、傾きかけてゐた夏目の家にはそれだけ餘分の貯がなく、其時は他から借りて返へしたといふことです。何しろ舊家で相當門戶を張つてゐた時のこととて、困つてゐる癖に何かと物入りのある上に、兄さんが死ぬやらその又次の兄さんが死ぬやら、さうして一人一人が死ぬとそれは又御大層な金がかゝるといふわけで、弱り目に祟り目の、出る一方で、大分弱つてゐたものださうです。

かうして私たちの明治三十一年も暮れて了ひました。

八　『草枕』の素材

前年のお正月に懲り懲りして居りましたので、夏目もこのお正月には、たしか大晦日になつて小天へまゐりました。山川信次郎さんと御一緒でしたが、私は同行致しません。家で多々羅三平こと股野義郎さんが、學校のお友達を幾人となく連れて來る、其のお仲間に入つて、歌留多を取つたりして暮らしました。この方が叱られる憂もなくて、まづ〳〵呑氣なお正月でありました。

小天といふところは『草枕』以來有名になつたものと見えまして、漱石の居た部屋だなんていふのが殘つてゐて、五高の學生さんたちなどが今でもたづねて行かれるとかいふことを伺つて居りますが、其頃も小旅行に手頃な爲めだつたのでせう、五高の先生方や學生さんたちが行かれたものゝやうでした。熊本から西北三里半ばかりのところで、山があり海があつて、大變暖い土地で、蜜柑の名所だと伺つて居ります。高いところに立つと、有明嶽温泉嶽などが見え、時には不知火が見えたりもするさうです。泊まつた家は前田さんといふ鄕士の方の別莊で、俗に湯の浦と言はれたと

ころだとのことです。こゝは『草枕』の所謂那古井溫泉だといふことで、女主人公の暗示を前田さんのお宅のお姉さん（前田さんの一番季の異母弟で、現に東京高等工業學校の先生をして居られる前田利鎌さんをよく識つてますので、かう呼びなれてゐます）に得たのだといふ話なので、其方からいろいろ當時の話を伺つたことがあります。私は嫁いだ夏の最初の九州旅行で懲りましたので一緒に參ることもなく、一向當時の樣子も存じませんが、御參考迄に前田さんの姉さんのお話をお傳へしませう。前田さんは今府下の池袋に居られまして、もう六十だとか六十一だとか申して居られますが、それも其筈でせう。何でも最初か二度目に夏目が參りました時、丁度生まれたばかりの季の利鎌さんを見て、顏の赤いのに驚いたとか何とか云ふのですが、其方がもう三十にもおなりなのですから。

前田さんのお父さんは案山子といつて、明治の初年から熱心に政治運動をおやりになり、後では帝國議會にも出て、河野廣中鈴木充美など、いふ方と一緒に、議會の三美髯と歌はれたといふ髯の美しい方だつたさうで、鄕の爲には隨分と盡くされた方だといふことです。槍をとつては九州一という評判のあつた劍士で、これについても隨分面白い逸話があるやうです。明治十年の熊本籠城當時のこと、玉名鄕の區長をして居られて、鄕の鄕備金といふものを全部預かつて、小天の本宅に守

護して居られた。といふのは、官軍もその莫大な金錢に目をつけて居れば、西郷方も目をつけて居るといつた工合で、危くて仕方がありません。すると西郷方の池邊吉十郎、(池邊三山居士の父)、この方とは以前から親しくしてゐて、此時も池邊さん御家族の老人子供さん方(三山さんは從軍してをられたさうです)全部を引き取つて避難させて居られたのださうですが、それとは知らず、池邊さんから使者がめつて、すぐに出頭せよ、でなくば軍兵を差し向けるといふ脅かしです。用件は軍備金に決つてゐる。渡せといつても渡すわけには行かず、渡さなければ殺されるに決つてゐる。前田さんも死を覺悟して、一人で陣中に行かれました。案の定金です。しかし死ぬのを覺悟の前で來てゐるのですから、きつぱり斷はりますと、それでは一晩とくと思案をせいとあつて、牢屋にぶち込まれました。

保護をうけてる池邊さんの老人子供の方々が、陣中に恩人が呼び出されたと聞いたのはすぐ其の後のことです。これでは恩を仇で返へすわけ、べん〳〵としては居られないとあつて、其夜のうちに陣にかへつて、逐一今迄前田さんに恩になつたことを吉十郎氏に訴へたので、三山居士のお父さんも前田さんの手を取つてわびられたといふことです。

中江兆民さんなんかとも交りがあつて、さうした政界の名士方も續々來泊されるので、明治十一

年頃に、村の共有溫泉のところに、一町歩ばかりの持地があつたのを、そこの竹籔を切り開いて別莊を造つて、かうした名士を迎へることにされたのださうです。出來て見ると普段に遊ばせておくので、それも第一勿體ないし、段々にそこに泊めてくれといふ人も出來て、それでは折角だからといふので、後から後からと棟をつぎ足して、たうとう溫泉宿の形式を整へるやうになつたのださうですが、始めは茶代なぞを貰ふと處置に困つて了つて、客の後を何町も追つかけて返へしに行つたといふ話もあるさうです。

五高の人達が始めて湯の浦の宿に來たのは、明治三十年の十一月頃で、久我さん山川さんの二人が一泊してかへられたが、やがて其年の大晦日に山川さんに誘はれて夏目が一緒に參りました。其時姉さんは不緣で一年ばかり前から溫泉にかへつて居られたのださうです。年は三十一才だつたといふことです。

山川さんは前に一度來られて、もう前田さんの家の方とも心安くなつてゐられる上に、輕口の諧謔家で、よく落語の眞似をしたりして、家の者を笑はせたものださうです。それに引きかへ夏目の方は一體に口の重い方で、滅多には喋舌らない。大體が山川さんに萬事口をきかして、自分ではたまに一言二言言葉を挾むといつた工合。どう見ても山川さんが女房役で、その上やさ男ですし、夏

目の方は姉さんが、夏目さんはじぐやくばり（アバタの配置の意）がいゝから男らしいと評したやうに、謂はゞ旦那さんといふ格式だつたさうです。そこで一番上等とされてゐる三番といふ部屋に案内したさうですが、萬事が此の調子なので、家のものは皆三番の御夫婦さんと呼んでゐたとのことです。

この三番の部屋といふは、つまり政界の名士などの來た時にとめる爲めに本宅から移して建てたところで、部屋の飾り附けなども中々立派で、其時は『草枕』にあるやうに、若冲の鶴を床にかけておき、部屋の眞中に紫檀の角卓をおいて、帆の形をした竹の茶棚がおいてあつたりしたさうです。その茶棚が大層夏目の氣に入つて、しきりにそれをほめるので、そんなに欲しいんなら僕が談判して來てやらうといふので山川さんの話があり、それでは上げても差支ないといふ前田さん側の承諾もあつたとのことですが、それはそれきりになつたといふことです。それが緣になつて、

「こゝの家には中々變はつたものがあるな」

と夏目が申したのがきつかけになり、

「それでは骨董がお好きですか」

と姉さんが尋ねると、頗る好きだといふことで、そんならといふ段取で、お父さんの離れで一日

一回位づゝお茶によんで、掛物をかけかへたりして見せたものださうです。其頃女中の手が不足だつたので、姉さんがよく三番に顏を出し、着いた日に茶を運んで『草枕』に書いてあるやうに青磁の鉢に羊羹を入れてもつて行つたのも事實ださうです。

ある日夜おそくなつてから姉さんは、其日のことを終つていざ湯に入つて寢みませうと思つて、女湯の方へ行つて見ますと、ぬるくてとても入れません。男湯の方はとのぞいて見ますと、もうもうと湯氣の立つてる工合と言ひ、誰も居ないらしい氣勢なので、安心して着物をぬいで、浴槽へ石段を踏んで下りかけますと、湯の中でボチヤリといふ音がします。オヤ、誰も居ない筈だつたのにと立ちどまつて、怪しみながら、中をじつと覗つて見ますと、くすりとたしかに人の笑ふ聲がします。びつくりして瞳をこらして見ると、驚いたことに夏目と山川さんとが、しきりに可笑しさをこらへて、茶目さんらしく灯影の當らない浴槽の一隅に首だけ出してゐたといふではありませんか。姉さんは眞赤になつて戸の外へ逃げ出したさうです。すると女中がこれ又裸になりかけてゐましたが、どうなすつたのかとひどい周章て方にびつくりして尋ねますが、姉さんは堪らなくなつて何も言はず着物をひつかけて逃げ出して了つたといふことです。これが『草枕』の女がお湯に入つて來

る場面の元の形だといふことです。

この家は山のところに建てゝあるので、

「三階だと思つたら、一階だね。」

と夏目が面白がつてゐたさうですが、もう明日は熊本へかへるといふ日になつて、お土産にもと姉さんが玄關前の澁柿の木の上に、誰も居ないのを見すましてのぼつて居りましたところが、いつの間にやら散歩からかへつて來た二人がそれを見つけて、夏目は、まるでお猿の親類見たいだといつて、笑つたり揶揄つたりしたさうです。

或る時なんかは何か用があつて一寸來てくれといふことなので、三番の部屋に入つて夏目の話を聞いて居ますが、それが又何の話か忘れたさうですが、丁度蜜柑をむいて食べかけてゐた時なので、ほんのすぐの用と思ひ込んで片手に皮を握つたまゝ行つたのが、大變長い話で、終つて放免になつた時には、蜜柑の皮がバリ／＼する迄に乾いてゐたなどゝいふこともあつたと申します。

その歸へる時のこと、二人の茶代が五圓、女中の氣付が一圓、姉さんには袖口代にとあつて三圓

包んであつたさうですが、姉さんはまだそんなものを客から貰つたことがないので、顔を赤らめてかへしますと、折角やつたものをかへすものもないだらうといふ見幕だつたといふことです。其時馬に荷をつまして送つたさうですが、其後も時々蜜柑なんぞを届けたことがあるとのことです。

四月頃に山川さんが一人だけ見えて、奥さんがやかましくて夏目さんは来られませんよなどゝ言つてられたさうです。それから間もなく蠶の頃になつて、狩野亨吉さん、山川さん、奥太一郎さん、木村さん、それに夏目の五人連れで、朝早く小天にいつて、湯の浦の別荘で中食を認め、本宅が見たいからといふので、姉さんが案内されたさうです。本宅といふのは湯の浦の別荘から少し離れた山の中腹にあつて、白く塗つてあつて、遠見は丁度城のやうな家ださうで、二三里も先から見えたといふから大したものだつたせう。が、惜しいことに私どもが東京に引き上げてから間もなく焼けて了つたさうです。其時すぐ下の畑に夏蜜柑がなつてゐたので、姉さんが一人に一枝づつ折つて上げ、狩野さんは教頭で皆が奉てゐたので、狩野さんの分を姉さんがかついで、河内まで一里半ばかりの道を一緒に送られたことがあるさうです。

それから一行は宮本武藏が籠もつて、兵法五輪之書を書いたと言はれる岩戸觀音の方に行かれたか、鼓ヶ瀧の方に行かれたか、とにかくその邊の名所をめぐつて、日歸へりで熊本へ歸つたといふことです。

前田さんの姉さんは當時としては隨分新らしかつたもので、其後もいろ〳〵數奇な運命を辿られたものと伺つて居ります。それが緣になつてか、熊本で山川さんの宿などへも遊びに見えたこともあるとか聞いて居ります。

小天には今年の春初めて參つて見ました。去年の潮害で荒れて居るとのことでしたが、大變いいところだと思ひました。昔のこの溫泉の家も其儘殘つて居りましたが、成程玄關から見ると二階のやうでもあり、後ろの庭へまはつて見ますと、二階だと思つたあたりがかへつて平屋だつたりして、本當に趣のある面白い家でございます。今では持主が代り、一時は漱石館といふ名で溫泉宿をしてられたさうですが、それもおやめになつてゐられるさうです。庭と言ひ家と言ひ立派なもので、もつと都會に近かつたらと思はずには居られませんでした。

この昔二番と言はれた部屋、夏目が每日茶をよばれたといふ前田さんのお父さんの御部屋などで、

土地の古老からいろ〳〵當時のお話も聞き、峠の茶屋の位置が今では變つてゐるとか、あの時花嫁の馬を引いた馬士がまだ生きてるとかいふこと迄伺ひました。松山の『坊ちやん』と同じやうに、參つてみてこの土地の『草枕』熱の大したことに驚いたことでした。

家のうしろの小高いところに前田案山子の碑があります。それのお參りに行きますと、滿山の蜜柑の花盛りで、何とも云へない香がいたしました。

歸京しました後で、小天ではこの遺跡を長く保存するといふことにきまつたとか聞きましたが、何にしても結構なことでございます。

ところが世間では、相も變らずこんな通り一ぺんの事實では承知が出來ないとあつてか、事實と小說とをごつちやにまぜくりかへして、それでも足らずに、それに尾に鰭をつけて誇張した物語を創作します。今年の春あたりも『婦人俱樂部』といふ雜誌に、えらい樂隊入りで、漱石の初戀とか何とか題して、この前田さんの姉さんが夏目を手玉に取つたやうな記事を、麗々しく揭げて居りました。姉さんにして見ても本當に御迷惑千萬な、お氣の毒のお話ですし、夏目にして見ても、これ又亡くなつたとは云へ困つた噂です。これも少しでも種があるなりその氣があるなりするならまだしも、勝手にこんな他愛もないことをいゝ加減に作つて、第一に讀者をたぶらかし、いろ〳〵な方

面に迷惑をかけて顧みないなどゝいふことは、いくら何でもひど過ぎることかと思ひます。前田さんの姉さんも大變怒つて居られますが、御無理の無いことゝ存じます。

山川さんとはよく御一緒に其後も旅行に行つたやうです。すると山川さんが歸へつておいでになつてから、

「夏目の奴旅行をしてゐると、いつも苦虫を嚙みつぶしたやうな顏をしてゐる。家をもつてゐるとそんなにいゝものなのかなあ。」

などゝ、よく仰言り仰言りしたものです。山川さんは又どうしたわけか家庭をお持ちにならず、下宿住居で、自分附きの女中をおいたりして、私どもにおいでになつては、下宿の香の物など喰へたものぢやない、香の物といふものは元來かういふ風に漬けるものだなどゝ講釋たら〳〵で敎へておいて、これなら食へるなどゝいつてはお持ちかへりになりました。或る日もそれを樂しんでたべてゐられると、後に一切れ殘つたのを、その女中さんが頂いて了つたといふので、怒つてゐられた滑稽などがありました。

山川さんが赴任して來られて、家にとまつて居られて其の就任の挨拶があるといふ朝、まだ背廣

といふものを着たことがないといふのですが、ともかく東京から一式一揃何から何迄持つておいでになつたはいいが、ネクタイが獨りで結べない。其上ワイシャツのボタンもつけてなけりや何の準備もしてありません。餘り早起きでない御連中のことですから、大急ぎで仕度をしてそれ出掛けようといふ時になつても、大切なお客さんの方が一向出來てゐません。丁度長谷川貞一郎さんが一緒に居られた頃で、夏目と私と三人でボタンをつけてやるやら、ズボンをはかせてやるやら、それカラーだ、それネクタイだと、えらい騒ぎをやりました。

「こんなことは宵のうちにしておくもんだ。」

夏目はプリ〳〵怒つて御機嫌斜でした。

「やれ〳〵、今日は厄介におやぢに叱られづくめだ。」

山川さんはこんなことを言つて其日は何事もなく歸へつて來られました。翌日出掛けは三人で一緒に參るりましたが、歸へりには別れ別れだつたと見えて、夏目も長谷川さんも歸へつて來てますのに、早引けの山川さんがいつまでたつてもお歸へりになりません。其日は大抵大丈夫だらうと一人呑込みで歸へつて來るうちに、道に迷つて了つて、町の大半を歩るき廻はられたのださうです。

九　書生さん

落合村では鼠が出て仕方がないので其話をしてますと、丁度そこへ女中の姉さんが來合せてゐて、それなら家の三毛猫で非常に鼠捕りのうまいのが居りますからそれを上げませう。其代りはしつこい猫ですから、いらなくなつたらかへして下さいといふ話でした。早速連れて來て見ますと、話のとほりよく鼠をとるのですが、鼠だけにしておいてくれゝば何の事はないのに、お膳のもの迄取つてくれるのにはほと〳〵困つて了ゐました。全く目が離せません。お客に出さうとしてゐる小鰯なんかをさらつてゆかれて、まごつかされたことも二度や三度でありません。たうとういま〳〵しくなつて、みんなが腹を立てて捨てて了へといふことに衆議一決しまして、その捨て役が書生の土屋さんに當りました。よろしいてなわけで、どつか學校の行きがけなどに捨てゝ來るのですが、すぐに歸つて來ては、又人間の食べるものを攫つてくれます。聞いて見ると目隠しをしないで捨てて來るとのことですから、それではいけない筈だと申しますと、或る日のこと、丁度猫の舊主人が臺所口へ來て話をしてゐるところへ、土屋さんが猫はどうしたとうろ〳〵捜しながら入つて來て、お

おく、そこに居たのかと言つてたまゝ、前の主人の膝の上で丸まつてるのを捉まへるが早いか、いきなり懐から古沓下を出すや、くるくと猫の頭にかぶせて了ひまして、これで上等上等と、大得意で連れて行つて了ひました。見てゐた私たちはひやひやしてゐるのですけれども、まさか後で棄てゝ下さいとも言へず、ひどくばつの悪い思ひをしたことがあります。此間ふと古い其頃の寫眞を取り出して見ましたところ、夏目と私とが縁側に火鉢をもち出して坐つてゐますと、夏目の左に土屋さん、私の右に女中のテルといふ風に縁に腰かけてゐます。夏目の座蒲團をわけて小い犬の仔は坐り、只今の話の猫は女中の膝の上で、耳を三角にしてぬけ目のない顔をして居ります。これが土屋さんの古沓下を冠せられた猫かと思つたら可笑しくなりました。

三月、家主の落合東郭さんが東京からお歸へりになつて、熊本でおつとめになるといふことで、お家をお渡ししなければならなくなりました。そこで井川淵といふところに小い家を見つけまして、一時凌ぎにそこへ移りました。そこは川べりでして、すぐ近くに明午橋が見えます。何でも部屋数の少い家でして、間に合せの轉居ではありましたが、不便たらありません。部屋がないので、夜になると土屋股野の二人の書生さんを座敷にねかせるのです。ところが土屋さんはきちやうめんな方

ですからいゝのですが、股野さんと來たら朝寢はするし、それに横着者なので、自分の寢床迄土屋さんに上げさせます。掃除は遲くれるしいまくしいたらありません。が又どこからどこ迄よく出來てゐて、此方のいふことなんかてんで通じないのです。

ところが或る朝、いつまでも例のとほり朝寢坊をきめ込んでゐるところを、運惡く夏目に見つかりました。

「股野、起きろ、いつまで寢坊してるんだ。」

と、夏目も私たちが常日頃いまくしがつてゐるのを知つてるものですから、いきなり大きな聲でどやしつけました。圖々しい股野さんでもこの一喝には恐れ入つたと見えて、「ハイ」と云ひ樣バネ仕掛のやうにはね起きたのはいゝが、この三平君、夏冬ともに眞裸で床の中にもぐり込む習慣なので、びつくり夜着をはねのけて起きるには起きたが、どうとも始末がつきません。夏目も可笑しさをこらへて、

「早く自分で寢床を上げろ。」

と更に呶鳴りました。

三平君弱りに弱つて、

「オイ、土屋――」

とうらめしさうに土屋さんに援けを求めます。その様子が又可笑しいとあつて、たうとうみんなで失笑して了ひましたが、そこへ土屋さんが着物を持つて來てやつて、漸く床を上げたなどゝいふ滑稽がありました。何しろ股野さんと來たら全くの物ぐさ太郎でして、人の氣も知らないでと、若い私などは時々腹も立てましたが、終ひにはたうとう根まけがして、隨分笑はせられました。それでも七月にはお二人とも卒業されて、間もなく上京。土屋さんは私たちが紹介して、東京で私の里の中根の家に書生になることになりました。土屋さんは本當に貧乏で隨分と苦學されたものでした。お二人ともに法科で、大學を出られてから、土屋さんは裁判官になり、股野さんは大連に渡つて實業家になられました。

此の春狩野亨吉さんが五高の教頭に來られまして、狩野さん、菅さん、山川さんなんぞ、昔からのお友達が澤山集まられました。秋狩野さんの居られた家があいたので、早速内坪井町の家に引き移りました。この家は熊本に居た間、私共が住んだ家の中で一番いゝ家で、今見ても中々立派なものです。何でも五六百坪も屋敷の地面があつたかと思ひますが、桑畑があつたり、庭も相當に廣か

つたりしました。尤も家は左程に廣くはありませんでしたが、其代り別棟の物置があつて、それが中中廣うございました。といふのは前の持主が軍人さんかなんかで、厩と馬丁の居るところだつたのを物置きにしたものでしたでせう。大變がつちりした堂々たるものでした。

其頃、五高の學生さんでした寺田寅彦さんがおいでになつて、是非書生においてくれろといふことだつたのですが、夏目は自分のところになんぞ書生に居たつて仕方がない。第一座敷も少いしといふやうなことを申しますと、それでは物置でもいゝといふ御執心振りで、その物置きに案内したことがありました。隨分變はつた人もあればあるものだと思つて居りましたが、話はそれ切り立ち消えになつたやうでした。

其當時寺田さんはちよい〳〵宅へ見えたやうでしたが、私は殆んどお會ひしたことがないので、其頃の印象といつては、或る時東唐人町の勸工場に行つて居りますと、五高の制帽を冠つた寺田さんをお見うけしたことを覺えて居る位のものです。坊ちやん〳〵して、何だかほおつとしたやうな方だと其時思ひました。只今東大工學部の部長さんになつて居られる内丸最一郎さんなんぞも、其頃の學生さんだつたやうに存じます。

此間寺田さんにお會ひしました時、この物置きの話が出て、家の間取りや物置の位置なんぞ覺え

てゐますかといふことで、大體覺えて居る積りですがとお答へしたことでした。

一〇　長女誕生

此秋私は姙娠して居りまして、猛烈な惡阻になやまされ續げました。それは九月から始まつて十一月迄續き、一番ひどかつた時などには、食ひ物や藥は愚か、水さへ咽喉に通らなかつた位で、衰弱は日ましに加はりますし、かといつて今更手術も出來ず、運を天にまかせてといつた工合に、漸く滋養浣腸位で命をつないでゐたわけでした。

病妻の閨に灯ともし暮るゝ秋　漱石

などゝ、此頃私の病氣をみとつてくれてよんだ句が少しあるやうでありました。

かうして殆んど私の病氣でこの年も暮れて了ひましたが、やがてその方も落ちつきましたので、例のとほり元日から同じ學校の奧太一郎さんと御一緒に、年來の希望であつた耶馬溪へと旅立ちました。旅の模樣は知りませんでしたが、家へかへる前日か前々日のことでありませう。豐後の日田あたりの峠で馬に蹴られて雪の中に倒れたといつて、いやなしかめつ面をして歸へつて參るりまし

た。それから無闇と歩るいたものと見えて、足にまめをこしらへて居りました。山の中の旅行のことゝて、鳥だといつては兎らしいものを食はせたなど、大分不機嫌でしたが、歸へつてから又例のとほり澤山句を作つて、子規さんの元へ送つて居りました。

奥太一郎さんともよく行き來をして居ましたが、夏目も其頃謠を始め、奥さんも同じく謠をやつて居られたので、謠の會などでも落ち合つてたやうです。夏目の謠の先生といふのは、同じ五高で工學部長をして居られた櫻井房記さんが金澤の方の方で、そこで加賀寶生が御上手とあつて、どういふ拍子で唸り出したものか『紅葉狩』かを教へて頂くことになつたのですが、大層質がいゝとのお賞にあづかつて、自分ではしきりに得意で大きな聲を出して唸つて居りました。けれども根からいゝ聲らしくも思へないので、櫻井さんにほめられたつて、そりやおだてで、なつて居ないぢやありませんかなどゝ、いつもの惡口の讐でも取る氣で浴せかけたものです。すると俺ののもそんなにいゝと思つてるわけではないが、まあ、奥ののを聽いて見ろ。御湯の中で屁が浮いたやうなひよろひよろ聲を出すんだから、あれから見ればといつた工合に中々敗けません。そこで奥さんは奥さん、貴夫は貴夫。人がどうあらうとその聲は自慢になりませんよなどゝ憎まれ口を叩いて居りますと、或る日奥さんがいらして謠が始まりました。私は丁度お湯に入つてゐたのですが、さあ、始ま

ると困つて了ひました。全く珍妙な謠ひ聲なのですが、それよりもすぐとさきの尾籠な批評を思ひ出したから堪まりません。堪りかねて御湯の中で手拭を口に當てゝ聞えないやうに笑つて居りますと、台所でも女中たちが笑ひを堪へてゐるのですが、これも笑ひがとまらず、えらい苦しみをしたことがあります。

長女が生まれましたのは、五月の末のことでありました。私が字が下手だから、せめて此子は少し字を上手にしてやりたいといふので、夏目の意見に從ひまして、『筆』と命名致しました。ところが皮肉なことに私以上の惡筆になつて了つたのはお笑草です。で、今ではそんな慾張つた名はつけるものでない、そんな名をつけるからこんなに字が下手になつたのだなどゝ、當人の筆子はこの話が出る度にかへつて私たちを恨んで居るのです。親の心子知らずか、子の心親知らずか、ともかくお笑草には違ひありません。

最初の子供ではあり、結婚してから滿三年の後に出來た子ではあり、隨分と可愛がりまして、自分でよく抱いたり致しました。さうして女中のテルの色が眞黒なので、子供は抱くものに似るといふから、そんな黑いのが傳染されちや困るなどゝ申しまして、やかましく女中に抱かせるのを排斥しました。しかし私が居るうちはそれで納まつてるのですが、私が買ひ物に出たりして子供を殘し

ておきますと、そのうちにおとなしく眠つてゐた赤ん坊が目をさまして泣き出します。さうしていくらすかしたりあやしたりしても、益々火のついたやうに泣きますので、困つて了つて、テルテルと呼んで世話を頼むと、女中の方は大威張りで、いくら顏が黒くても、私でなけりやどうにもならんぢやありませんかと、一本參つて抱き上げる。抱き上げればすぐにだまるといつた工合に、この女中が又大層赤ん坊を可愛がつてくれました。遊びにいらつしやる山川さんが、よくこんなことを言つてはからかつて居られました。

「君の娘のことだから、いづれ大きくなつたら色男でもこさへるだらう。さうしたら俺が中へ入つてやるよ。」

其後間もなく山川さんは東京へ歸られ、私たちも亦東京へ參りましたのですが、筆子などはよく遊びに參つて居りました。

夏目はよくこの赤ん坊を膝の上にのせて、つくづく顏を見ながら、

「もう十七年たつと、これが十八になつて、俺が五十になるんだ。」

などゝ獨り語ともつかず申して居りましたが、偶然の一致とは言へ、本當に筆子が十八の時五十で亡くなりました。そんなことを考へると一寸妙な氣が致します。

翌年の初雛に子規さんが三人官女を送つて下さいました。もとより餘り上等の雛ではございませんが、今でも長女は紀念にそれを祕藏して居ります。

たしかこの夏のことであつたと思ひますが、暑中休暇に毎日位に英語を習ひに來る五高の學生がありました。座敷で稽古をつけてやつてゐるのですが、二時間ばかりの間、殆んど頭ごなしに叱られ通しなのです。それが夏のことで、戸を開け放しにしてゐるので、どの部屋にも聞こえるのです。私ならあんなに叱り飛ばされたら次の日から恐らく來まいと思はれる位ですのに、これは又實に根氣のいゝ學生さんがあつたもので、毎日毎日根氣よく叱られに來るのです。私も女中も大層同情致しまして、或日私が夏目に尋ねました。

「教場でも貴夫あんなにがみ／＼お叱りになるの。」

「いゝや、學校ぢやあんなに口やかましく叱りやしないさ。しかしかうやつて家でたゞで教へるといふものはいゝもんだよ。」

すましたもので、不相變呑氣な挨拶です。そこで私は學生さんが氣の毒でならないと申して居りましたところが、次の日學生さんが又やつて參りました。すると夏目が學生さんに尋ねてゐるの

が聞こえます。

「あんま、僕が君を叱るといふので、家内が君に同情してゐるがね。」

「さうですか、僕はそれ程にも思つて居りませんが。」

學生さんは一向叱られてゐるのが苦にならない樣子で、少々此方で同情して上げたのがバカらしくなりました。其後もう一人學生さんが增えましたが、此の方にはあんまり小言もなかつたやうです。其うちに叱り方が日に增し少くなつて參るりますので、これはてつきり私の同情が效を奏したのかと尋ねて見ますと、此頃は大分英語も上達して、そんなに叱らなくともすむやうになつたんだよと笑つて居りました。其の中の御一人は長曾我部さんと仰言つたやうに覺えて居りますが、もう一人の方の名は忘れて了ひました。

一一　姉さん

八月末から九月初めにかけて、山川信次郞さんと御一緒に阿蘇山へ登りました。丁度二百十日前後のことでした。『二百十日』といふ短篇の種はその邊にあるのでありませう。此頃高田の姉さんの

ことについて、兄弟間に少しいざこざがあつたやうです。
高田の姉さんと申しますのは、夏目の腹違ひの姉で、一番上の新宿の揚屋へ嫁いだといふ姉さんの妹なのです。此頃兄さんに聞くところによりますと、一番上の姉さんのことも少しわかつて來ましたから、序にお話いたしておきませう。
一番上の姉さんはおさわと申しました。大變な器量よしだつたさうで、尾張さんの御殿女中に行つてゐて、仲間を連れてかへつて來る時など、近所のものがお輕のやうだと袖引きあつたものだといふことで、その上大變な利口者だつたと申します。或る下町の大きな名主が、喜久井町の夏目の家へ來て姉さんを見、是非息子の嫁にくれろと懇望するので、父もたうとう斷はり兼ねて返事をして了つたさうです。すると姉さんの方では、外に好きな人があるので、どうあつても嫁かぬといふし、父は父で今更嫁つてくれなくては自分の顏が立たない、すつたもんだの末、では三日でもいゝからともかく嫁つて來て、若しそれでどうしてもいやだつたら歸へつて來いといふわけで、隨分亂暴な話ですが、いや〳〵輿入れをしたわけです。ところが先方のお婿さんといふのが、家は成程大層なお金持で巾利きなのですが、いかんせん今も昔も同じ御大家のお坊ちやまで、ぼんやりした薄のろなので、なほ更のこと氣に入る道理もなく、嫁きは嫁つたものゝ、たうとう我を張りとほして、

婿さんなんぞ近よせもせず、附いて行つた女中なんぞを散々手古摺らせた揚句、何でも三日目とか四日目とかに、御約束通り歸へつて來たといふのだから、えら物に違ひありません。御維新後その名主の家も落ちぶれて、どつか人形町あたりで、鹽せんべいなんか賣る一文見世を出してゐたと言ひます。姉さんは丙午の生まれださうです。さうして好きな男の方に行つたものです。そこが新宿の伊豆橋といふ揚屋だつたのです。

そこは母の親類で、母の方では初め話のあつた頃には、父の方の話もあつて、遠慮も手傳ひ二の足を踏んでゐたのですが、かうなつて見れば誰に遠慮もないので、そこへ嫁ぐことになりました。そのお婿さんといふのは、中々の好男子で、親たちの意見では堅氣の商賣をといふので、本町のいはしや（藥屋）に見習ひにやつておいたのですが、やはり親のあとをついで、伊豆橋に落ちつくことになつたのだと申すことです。一つはこのお婿さんも丙午生れで、同じ干支なら丙午でも性が會ふとかいふのも、一緒になる原因だつたらうといふことです。

女郎屋といふと今では實にいやな響をもつた言葉になつて了ひましたが、當時は奥の者は全くの大名暮らし、店は一切番頭委せで、贅澤三昧の日を送つて、やれ義太夫だ、やれ生花だ、やれ茶の湯だと、そんな藝事に身を寠す位が關の山で、手廻りのこと一切は何一つ自分の手を煩はすことも

なくすんだものだといふから、姉さんの性分には持つて來いだつたのでありませう。お婿さんはよく馬を乘り廻はしてゐたさうです。それでも御維新後の開放に一切店を切りほどいて、娼妓なんぞも自由にしてやり、いつまで時勢の違つた世の中にこんな商賣をしてゐるでもないとあつて、それから子のない二人は、父の世話で喜久井町の長屋の一角に手を入れて、そこへ移つて來てゐたさうです。さうして姉さんは三十三かで一生贅澤を仕盡くして死んだと言はれて居ります。

この姉さんが、お代といつて父の妾づとめをしてゐたお針の婆さんに連れられては、寄席や芝居の樂屋に出入りして、たんまり祝儀を張り込んだりしてゐるのを見てゐた次の姉さんも、お房さんといふ名ですが、自然金費ひが荒くて、其時分お誂ひで三圓の下駄でなければ穿かなかつたなどと言はれて居りますが、ともかく派出な暮らしをしてゐたやうです。

この姉さんは馬鹿ではないのですが、何をやらせても出來た例がない。手習ひも喧しくやらされて、漸く假名位が曲りなりに書ける位だし、お針は家にお代婆さんが居て仕込むけれども、これ又浴衣一枚縫へるぢやない。當時常盤津が大流行で、根來の小浦さんといふ有名な御師匠さんについても、三味線がまるで彈けず、それでゐて人の髮を結つたり掃除をしたりすることが非常に好きで、御世辭のうまいたらないのです。掃除では私がづぼらな方なもんで、よくこの高田の姉さんを引き合ひ

いそれは〳〵すさまじい氣狂じみた勢だつたといふことです。雨降りの後の掃除なんかと來たら、母なんぞはお房お房と可愛がつたものださうですが、いかんせん何も出來ないので、父は殊の外心配し、外では貰つてくれるところもなからうといふので、考へぬいた揚句、築土の名主で高田といふ自分の弟が居る、其の長男の庄吉といふのなら、自分にはいろ〳〵恩もうけてることだから、こゝなら間違ひはなからうといふので、從兄弟同士の結婚といふことになつたのです。御世辭がいゝので待合の女將にいゝなどゝ言はれたものださうですが、一寸見は何でも出來さうな利發な顏をしてゐて、其實何にも出來なかつたといふのだから、不思議な人もあつたものです。

さて嫁に行つたところが、益々人づきあひのいゝところは發揮されて、大切な家婦の役目の方はとんとさつぱりです。たゞ客が來たら上げないでもいゝ客まで上げて、やれ蕎麥だ、やれお鮓だと食べさせてかへしたり、近所の子供や赤ん坊を連れて來ては、菓子をやつたり髮を結つたりして遊んだり、それから困るといふ人があれば、自分の着物を質においても工面してやるといふ慈善家振りなのですから、身上持ちはよくないにきまつて居ます。ところがよくしたものでこの庄吉さんは

とてものしまり屋と來てゐるのだから、いるものがあつても細君にくれない位で、ましていらないものを呉れる筈もありません。そこで自然お尻は一切合財父の方に廻はつて行くといふわけです。

父も行けばとられるのはわかつてゐるのですが、そこが又口上手に御世辭の一つもうまくやられたりすると、つい嬉しくなるものと見えて、毎日今日は一圓とられたの二圓とられたのとこぼしこぼしては、毎日位に高田の姉さんのところへ行つてゐたものださうです。

姉さんがこんな風ですから、弟たちもそこへ行けば優待して貰へるといふので、よく行願寺々内の高田の家に遊びに行つたものださうです。するとそこの向ひには東屋といふ藝者屋があつて、小妻、咲松、鶴吉なんぞといふ藝者が居て、高田の家にもよく遊びに來たものださうです。矢來の兄さんの上の榮之助などゝいふ兄さんは、兄弟中での道樂者で、家からこつそり書畫骨董なんぞを持ち出して賣り飛ばして、其金で道樂をしたりして、父の勘氣をうけてゐたものであつたさうですが、芝の電信學校に行くといつては、こゝへ上り込んで藝者相手に遊んでゐたものだといふことです。

ところが又緣といふものは不思議なもので、この東家の姉さん藝者の峰吉といふのが、この主なのですが、そこへ一番上のお澤姉さんのお婿さんが、姉さんが死ぬとこの峰吉の旦那になつて、東

家に納まつてゐたさうですから、何のことはない、神樂坂の行願寺寺内の一角は、一時はまるで夏目一族の會合所見たいなものだつたと言ひます。この峰吉といふ老妓は、この間の大震災で鎌倉で變死したさうです。この東家のことは『硝子戸の中』に自分で書いたものがあります。
此の頃、それは夏目が豫備門頃だらうと思ひますが、義太夫が好きで、兄さんと一緒によく相生太夫、朝太夫、それから落語講釋などをききに寄席へ行つたものださうです。高田の家あたりではみんなしてよるとさわると落語の眞似か駄洒落の言ひくらかをしてゐたとか申すことです。
姉さんの方では段々左前になつて來る。一時は一寸よかつたこともありますが、すぐに又落魄して困つて居ります。そこで父が亡くなつて後からといふものは、藥だ、小遣だといつては夏目のところにおねだりをして來ます。さうして一寸病氣をしたといつては夏目の兄さんところにかへつてゐたり、その間に小遣をねだつたりするが、庄吉さんの方はすましたもので、金もやらなければ、世話になつたからといつて御禮一ついつてよこすでなし、それは〳〵えらい我利我利亡者だつたので、たうとう夏目も怒り出して、離縁になつて歸へつて來たのならまだしも、自分の細君位亭主が面倒見るのは當り前ぢやないかといつた工合で、姉さんの小五月蠅い蟲のいゝ手紙と、庄吉さんの利己主義とにはほと〳〵閉口して居りました。

ところが姉さんといふ人は、自分ばかり勝手にぺら〳〵言ひたい放題のことをしやべつてゐて、人の氣はちつともわからない人でして、夏目もこれには往生して、あのむつかしい顏を一層むづかしくしかめてゐても、一向平氣の平三でまくし立てるのです。これはずつと後の話ですが、夏目が修善寺で大患ひをしまして、それからなほつて東京にかへつて、内幸町の長與さんの胃腸病院に入つてゐた時のことです。面會謝絶といふのに姉さんが見舞に訪ねてくれました。看護婦も識つてるので通ほしますと、中へ入るなりいきなり例の調子で一人でまくし立てます。夏目の方では又始まつたな、うるさい〳〵と思つてるので益々しかめつつらが險惡になります。さうしてうんともすんとも言ずそつ方を向いて相手になりません。すると今松本高校の校長になつてられる森卷吉さんがついてゐて、姉さんとは知らず、いくら何でもこれは又あんまり沒義道なと同情したものでせう、もうだまつてこの場の光景を視るに見兼ねて、助け舟に乘り出したわけです。

「御容態は非常によくなつたのですが、先生しやべることはどうも好かれんで……」

とか何とかしきりに謝まつたが、それでも姉さんは好き放題にしやべつて、さうしてしやべることが一段落つくと、じやあ〳〵としてそれ切り歸へつて行かれました。そのすぐ後に私が參るりますと、夏目が笑つて申しますには、

「今高田の姉が來て、又例の調子で小五月蠅くやるので、だまつてしかめつ面をしてゐてやると、森の奴しきりにあやまつてゐて、その可笑しいたらなかつた。」

といふ話に、森さんも先生は人が悪い、そついは飛んだ笑ひ話だと頭を掻いてゐられたことがあります。

高田の姉さんといふのはこんな人ですが、此姉さんの若い年頃の時の話でせう。よく御殿女中なんかゞ、丑待ちとかいつて、正月の丑の日の丑の刻に、床の間も何もない八疊の眞四角の部屋の四角に百目蠟燭をつけて、鏡臺を前において、前日から身を淸めて、洗ひ髪で一人じつと鏡に向つてゐると、丑の刻になつて行く先きの自分の運命がうつつて來るといふので、その丑待ちといふのが流行つたものださうです。いづれ一番上の姉さんから聞いたものでせう。家の八疊で丑待ちをすると、裏長屋の汚い家がうつつたので、いやだ〳〵と言つてられたさうですが、お氣の毒にもたうとうそれが當つて、死ぬ時は神樂坂の入口の今の川鐵といふ鳥屋の奧の汚い裏長屋で息を引きとりました。

古いことと神樂坂序に思ひ出したことは、今神樂坂の毘沙門前の大きな理髪店、あそこの先代か先々代かのおかみさんといふのが、一時夏目に乳をやつたことのある人で、今の亭主といふのは夏

目の乳兄弟に當るといふことを聞いたことがあります。

一二　犬の話

明治三十三年、私たちは此年の七月に長らく住みなれた土地熊本を去るのですが、それより先き四月、私が嫁いでから六度目の最後の轉居を致しました。北千反畑といふところです。

内坪井町に居た頃、よそから大きな犬を貰つて飼つて居りましたが、其の犬がやたらに人に吠えつく犬でして、人の影さへ見れば吠え立てるといふ始末で、ほとほと困つて了ひました。家では結句その方が用心がいゝなどと言つては居りますものの、通行人の迷惑たらありませんでしたでせう。向ひに荒物屋があるのですが、餘りその犬が吠えるので、客足が薄くなつたなどといふ非難さへあつた位でしたが、夏目はそれを又大變可愛がつて居りますし、女中のテルが又犬には目のない方で、書生に居られた行徳二郎さんなどは、筆子を乳母車にのせては犬の綱を引いて、毎日近所の藤崎八幡に遊びに行くといつたわけで、家の者にはなついて居りましたのですが、附近の憎まれ者であつたのです。

所が或る時のこと、どうしたはづみかたうとう通行人に嚙みついて了つたので、その人が大變怒つて警察に訴へました。家のものも出て詫びたのですが、夜になると巡査が訪ねて來ました。すると夏目が玄關に出て行つて應待するその問答が頗る可笑しいのです。私なんぞは最初から、用心にはよくつても、さう〳〵人に吠えては、通ほる人には氣の毒で、若し自分たちがいゝ氣持で散歩でもしてゐる時に、横合から見知らぬ犬に吠えつかれでもすればいやな氣持に違ひないのだからと、口癖のやうに申して居たのですが、たうとうこんなことになつたのですから、今度ばかりは一言もあるまいから、默つて引つ込むより外はあるまいと思ひの外、中々巡査にまけて居りません。夏目のいふには、犬なんてものは利口なもので、怪しと見るからこそ吠えるのであつて、家のものなどや人相のいゝものには吠える筈のものではない。嚙みつかれたりするのは、よく〳〵人相の惡いものか、犬に特に敵意を挾んでゐるもので、犬ばかりを責めるわけには行かない。人間が惡いのだと言はぬばかりの申分です。そこへ女中のテルも犬贔屓で加勢に出るといふわけで議論の果がつきません。巡査も理窟は何とでもつかうが、要するに犬の分際で人間に嚙みつくとは何事だ、犬より人間が大切にきまつてゐるといふわけで、とにかく狂犬病でもあつては一大事と、テルに犬を連行して來いとあつて、その日は警察に引かれて行つて了ひました。其晩妙に淋しく思つて居りますと、

翌日早々に歸へつて參りました。檢らべたところ狂犬病ぢやないとのことでしたが、こん度嚙みついたら撲殺するとかおどかされて、とにかくいつも結いておくといふ條件で許されてかへつて來たのです。

さて内坪井町から北千反畑に移りましたが、この物騷な犬も一緒に連れて參りました。主人が好きで下女が好きなのですから、犬にとつてこれ程心丈夫なことはありますまい。不相變吠えては人を困らせて居りました。

或る朝のことです。夜用心に繩を放しておいて、朝つなぐのを忘れてテルが門を開けたものと見えます。犬は元氣に吠え立てながら、一目散に門を飛び出しました。失策つたと思つて口笛を吹いたり、犬の名を呼んだりした時にはもう遲い。前の空地のところで、もう其時はよそのおかみさんに嚙みついて了つて居たのでした。ところがこれは普通の通行人でも何でもなく、すぐ近所に棲む巡査の妻君と知つて、今度は唯ですむまいといふ形勢です。さあ、夏目も女中も困つて了ひました。私だけがそれ御覽なさい、言はないことぢやないでせうといつたわけです。

果せるかな巡査がどなり込んで來ました。夏目は相變らず前の時と同じやうな理窟をこねて、いつかな巡査のいふことに屈服しません。といふのには、夏目にも腹に一物あつてのことです。實は

女中のテルが朝早く門を開けると、いつも門前の空地に塵埃を捨てに來る女が巡査の妻女だといふことを知つて、それを夏目の耳に入れてゐたのだから堪りません。人の見てないうちにこそ〳〵と人の門前に塵埃を捨てるなどといふことは、謂はゞ畜生にも劣るやうな所業で、その罰で犬も怪しと睨んで噛みついたのだと、まあかういつた工合です。が今度の巡査は、前の時のお役目で來たのとは違つて、自分の妻女がやられてゐるのだから、それ位のことで見す〳〵退却はしません。又々警察に引つ張られて行きましたが、さりとて狂犬病でもないので又何事もなく歸されて來ました。それ見たことかとテルが喜ぶの喜ばないのつて。

すると或る晩のことです。夜おそくなつて夏目が謠の會に行つて歸へつて參りました。門に音がしたと思ふと、一しきり犬が吠えて、さうして玄關が開きました。出迎へて見ると、夏目は眞青な顔をしてゐます。さうして袂と袴とがひどく破けてゐます。どうなすつたのですと驚いて尋ねますけれども、默つて居ります。段々聞いて見ると、家の犬にやられたのだとわかつて、これこそ飼ひ犬に手をかまれた恰好だといつて笑ひますと、夏目も仕方なしに苦笑ひをして居りました。

この犬は私達が熊本を引き上げる時、よく吠えていゝといふので貰つてつた方がありましたが、世の中にはよく〳〵物好きな方もあつたものです。

一三　洋行

丁度其頃校長の中川元さんが仙臺へ轉任され、工學部長の櫻井房記さんが代はつて校長になられました。さうして夏目は教頭代理のやうなことをしてゐたやうでした。其頃からボツ〳〵洋行話が持ち上がりました。これが高等學校の先生が選ばれて洋行する始めで、藤代禎輔さん芳賀矢一さんなどが御一緒でした。

愈々これらの方々と共に行くのがきまつたところへ、夏の始めかと思ひますが、大塚保治さんが獨逸から歸つて來られました。熊本から歸京する道すがら、それは七月でしたが、丁度大洪水のあつた後で、至るところで汽車が不通になつてゐて、歩いて聯絡したことを覺えて居ります。私は又身重になつて居りました。この歸京します時に、遠いところを道具を持ち運ぶものと存じまして、家の道具を皆さん御懇意の方に置土產として上げてきました。其中に松山時代より持て居た机がありまして、それは熊本の方で淺井さんと仰る方に差上ました。其方は今細川家の家令をして居られるさうです。廻りと足とが竹で出來て居りましたが、今どうなつて居りますかしら。

この四月私の祖父が亡くなり、父も其後間もなく官職をやめて、矢來の宅に引き籠もつて居りました。丁度祖父の居た離れが空いたわけなので、洋行の留守中そこを借りて居ることにして、夏中はともかく皆が大磯へ海水浴に出掛けたので、私どもで留守を預かつてゐたことです。すると八月の中旬になつて、私の妹が大磯で赤痢を病んで亡くなり、續いて母も赤痢をやつて一時は大騒ぎをやりましたが、それでも夏目が出立する時には、いゝ按配に母も辛うじてではありましたが、玄關迄見送れるやうになつてくれました。

私たちは横濱迄見送りました。プロイセン號といふ外國船で、日本人の客といつては、芳賀さん藤代さん、それに夏目の三人でした。それは九月八日のことでした。立つ前短冊に、

秋風の一人を吹くや海の上　　漱石

の一句を認めて殘して行きましたが、洋行から歸へつて來て、私の部屋に入るなり、床の間の横にかけておいた短冊を外づして、どういふ氣かびりびりに裂いて捨てゝ了ひました。

いよ〳〵出立といふ前に子規さん虛子さんあたりから短冊に書いた送別の句がとゞきました。

漱石を送る。

萩すゝき來年あはむさりながら　　規

送別

秋の雨荷物ぬらすな風引くな　　升

二つある花野の道のわかれかな　　虚子

前の二句が子規のものですが、今それを見ますと、歸朝しました時にはもう子規さんは亡くなつて居られてお會ひが出來なかつたのですから、本當に感慨深いものがございますのです。

この洋行を轉機として、私ども一家の上に暗い影がさすやうになつてまゐりました。

一四　筆の日記

さてプロイセン號の客となつて出かけましたが、それから先きのことは、たまさかに貰ふ手紙などで知る外、人からの噂さへも聞くたよりがありませんでしたので、自然航海中や外國での生活の模樣などは私にはわかりません。其頃、私のすぐの下の妹の時子が、建築家の鈴木禎次さんのところへ嫁いで、大阪に新世帶をもつて居りましたので、船が神戸へつくと夫婦が出迎へて、それから餞別に萬年筆を贈つたさうです。今でこそ萬年筆などは珍らしくもなく、酒屋の小僧さん迄が持

つてるのですが、當時は中々珍らしいものでありました。それをポケットに入れて、どつか印度洋あたりでの話ですか、器械體操をしてゐたら折れて了つた。時さんによわしくとわびをいつてくれなどゝいふ手紙が來たことがありました。途々港々でよく手紙を書いてくれましたが、ロンドンについてからも、此の時さんのことでは、ロンドンの繪葉書を二十圓ばかり買つて送つてくれといつて來たが、時さんはいつも不相變の御大名だよなどゝいつて來たことがありました。

手紙のことをいへば、私が元々の筆不精のところへ、小いながらに切りつめた貧乏世帶をもつて、子供はあり、それも翌る年の正月には身二つになつて、次女の恒子が生まれましたので、何かと忙しいこともふえて、書かう書かうと思ひながらも、朝のうちは子供たちのお守りをしたり、午後になると針仕事でも出したり、そんなことをしてゐるうちに夜になつて、夜は夜で疲れて眠くなると云つた工合に、中々いざ手紙を書くといふ時がありません。すると家鄉からの手紙が待たれると見えて、ちよつとも手紙を寄こさないぢやないか、どうしたのか、いくら忙しいといつたつて、たまさか手紙の一本位書く時間のない筈はないと言つて參ります。さうなると此方も、そんな事をいつたつて、これでもあれやこれやで中々手紙が書けない、さういふ貴方だつてあんまり此頃では書いて下さらないぢやありませんかなどと言つてやつたものです。すると夏目の返事が振つて居りま

す。おれは勉强に來て忙しいのだから、さう〳〵は手紙も書けないと、ちやんと最初から斷はつてあるぢやないか。お前は斷はりなしに手紙をよこさない。斷はつて書かないのと、斷はらずに書かないのとは大變な違ひだ。それに「あれやこれや」とは一體何のことだ。一々あれやこれやを列擧して御覽なさいと、かうなんです。そこで私も考へまして、手紙といつてさう〳〵書けるものぢやなしと、そこで思ひついたのが『筆の日記』です。

筆といふのは私どもの長女のことで、毎日床につく前になると、其日其日の日課の積りで、一日起きてから寢る迄の筆の行動を書きますのです。勿論甚だ面白くもないたわいのない記錄で、朝起きてオバサンが何處へ連れて行つてくれたとか、こんなおいたをして遊んでゐたとか、泣いたとか笑つたとか、齒がどうしたとか、風邪を引いたとか、そんな他人が見たら一向つまらないことを根氣よく缺かさず書きました。それが一月もたつと相當にたまるので、ロンドンへ送つてやることに致したのです。するとそれを大層喜びまして、『筆の日記』が非常に面白かつたと、それからは送る度に禮をいつてくれました。

この日記は一年の餘も續いたかと思ひます。どうしてやめたか私もおぼえて居りませんが、いつの間にやら中絶のまゝになつて了ひました。歸朝した時はそれが全部纏まつてカバンの中から出て

參りましたが、其後どうなつたものか今では行方が知れません。

其後手紙では、彼方へ行つて見ると、此方でそれ程とも思はなかつたことが氣になると見えて、よく私の頭のハゲのこと、齒並みの惡いことなどを氣にして、始めのうちは手紙の度にそれをいつてよこしたものです。ハゲが大きくなるといけないから、丸髷を結つてはいけないの、オウ・ド・キニ・ンといふ香油をつけるといゝのなど、申して來ましたが、たうとう終ひには「吾輩は猫である」の中にまで、私のハゲのことを書いて了ひました。餘程氣になつたものと見えます。

それから齒並みの惡いことも始終文句の種で、西洋へ來て見ると、そんな齒並みの惡い者はないから、父から借金をしてでも留守中になほしておくがいゝなどといつて來ました。と申したところで、當時の財政狀態ではうか〳〵齒醫者通ひも出來ず、一寸通つただけでもそれがすぐに借金になるといつた工合でした。其後手紙で毎々小言をくつたものは、前にも一度申上げた私の朝寝坊です。十時頃迄寝てゐる女は、お妾か娼妓位のものだなどゝ大分油をしぼられましたが、どうやつて見ても早く起きるとあたまの工合がよくないので、自然朝寝になつて了ひます。そこで毎々こんな會話が繰りかへされるのです。

「お前の朝寝坊と來たら、誠に不經濟で、第一見ともないこと此上なしだ。」

「しかし一二時間餘計にねかせて下さればそれで一日いゝ氣持で何かやります。だから無理をして早く起きていやな氣持で居るより、よつほど經濟ぢやありませんか。」

するど夏目が申します。

「又理窟をつけて四の五のいふが、お前のやうな細君は旦那一人だからそれでもつとまるやうなものゝ、若し姑があつたらどうするつもりだ。つとまりつこないぢやないか。」

「その時はその時で、外の方でちやんと埋合せをつけて、私でなければ夜も日もあけないといふ風にして見せます。」

私もまけては居りません。と夏目がこんなことを申します。

「お前はそれでいゝかも知れないが、第一お前の寢坊で、おれがどれだけ時間の不經濟をやつてるかわからない、おれは一時間も前から目をさましてるんだが、細君より先に床を離れるのは不見識だから、お前が起きる迄床を離れない。これを長い間に見積ると大變な損害だ。」

しかしかうしたお小言も毎々のことではありましたが、たうとう死ぬ迄この御寢坊ばかりはなほりませんでした。

一五　留守中の生活

留守中私が居りました家は、母屋の離れで、獨立した一軒家になつて居りまして、玄關が二疊、次が四疊半、座敷が八疊で、女中部屋ともで三疊が二間ありまして、子供をかゝへて一人が住むには勿論充分だつたのです。實家とは庭一つを隔てゝ居りながら、入口は裏側に門があつて、至極便利に出來て居りました。第一何よりも有難いことは、父の好意で家賃のいらないことでしたが、ともかく一通りの臺所道具は備はつてゐて、自分だけの世帶を立てゝ居たのです。今の新潮社の裏側に當ります。今でもその家はありまして、少し手が入つて建て増しをして人が住んで居られます。

私達は全くの無一文で、熊本を出て來る時でさへ、旅費や何かで金が足らず、私の父から六十圓か百圓かを借りて上京した位ですから、夏目が洋行するからといつて、文部省から貰つた留學費や旅費の外に、餘分の自分の金といふものは一文も持ちませんし、又後へ殘つた私の手元にも全く半錢の蓄もございません。

其頃の私の生活費といふのは、休職月給として下りる二十五圓が全部でして、その中から例の製

艦費の二圓五十錢を差つ引いて渡されるのだから、いくら物價の安い當時にあつても心細いことといつたらありません。だから一寸した臨時費がかゝりますと、それはもうこの二十二圓五十錢の外へはみ出して了ふのです。これで家賃が出ないからどうやら助かつたやうなものゝ、子供二人を抱へて女中との四人暮らしでどうやらやつて來たのだから、隨分苦しい思ひも致しました。

そんなわけではありましたが、貰つてゐるのは貰つてゐるのですから、稅務署に馬鹿正直に年收三百圓の屆出をすると、何故急にこんなに月給がへつたのだと叱られて笑つたことがありましたが、それでも年三圓の所得稅ををさめてゐたものです。

一體初め洋行のきまつた時に、いかに何でも二十五圓では心細いとあつて、夏目が留守中幾何か補助して貰へまいか、歸朝したら何とかするからといふことを賴んで見たのですが、さうしてそれ位のことは父が引きうけてくれるものと私達二人は賴みにして樂觀してゐたのですが、悪い時には悪いもので、父は書記官長をやめて體がひまになり、そこへどう話が間違つたものか、其頃大方一儲けする積りであつたのでせう、內證で相場に手を出して、あべこべに懷加減が甚だ善くなかつたらしいのです。そんなことを此方は知らう筈もないので賴んだのですが、返事は芳しくありません。そこで仕方がない、夏目も自分は自分の留學費だけでやるより外に方法はないし、私にも休職

給で暫らく辛棒してやつて見てくれないかといふことになつたのでした。

　そこで私もその氣になつて日蔭者のやうな暮らしを致しました。第一着物などはこしらへるどころか、普段着なんぞはいつの間にやら着破つて了ひ、あとでは自分の着物ばかりでは追つかなくなつて、夏目の無けなしの大島なんぞを仕立てなほして、いかな普段着でも新らしいものを買つて、金を出すよりはと思ひまして、一寸見はいゝやうですが、其實大變なやりくりでそれを着ました。着たら最後代りがないのですから、惜しいとは知りながらみすみす着破つたものです。夜具なんぞもそのとほりで、縫ひなほさうにも代りもなければ綿打ちの代も惜しいといふわけで、何もかもそのまゝで大やぶけ。二年半たつて夏目が歸朝した時などは、それはそれはみじめなもので、着物なんぞ今迄あつたものは殆んど着破つて滿足なものはないといつていゝ位でした。それでも私一人のことはどうやらすむのですが、子供二人には元々お古からが何もないのですから、季節季節には何か買つてやらなければならないので本當に弱りました。

　父が官職を辭さなければならなかつたのはどういふ理由からだつたか私にはわかりませんが、何でも前の大隈内閣か何かの時大分盡くしてゐたのを、内閣が代はつても、貴族院の書記官長あたりが政變の度毎に動かされてはとかいふ持論でそのまゝ在職して居りますと、前の内閣に忠義立て

したのだから、追ひ出して了へとか、田舍の知事にさせて了へとかいふので大分迫害があり、そこで當時の議長近衛さんから、一時どいたらよからうといふことになつて辭職したのださうです。さうしてしばらく遊んで居りました。相場などに手を出したのはその時でありましたでせうが、それからしばらくしてから行政裁判所評定官といふものに任命されました。これはたしか終身官で、隱居仕事には丁度いゝといふので、自分でも氣が向いてゐたのですが、次に末松謙澄さんが內務大臣になられた時に、是非地方局長をやれといふことになり、末松さんには前々からお世話になつてゐたので、自分では氣に入りの行政裁判所で餘生を終る積りなのが、又義理で斷はり切れず浮草稼業を引きうけて了ひました。これがどれ位續きましたか、一年か一年半だらうと思ひますが、案の定それから末松さんがおやめになる時、自分もやめて、又もとの無職にかへりました。父なども其頃はつく〴〵官吏の浮草稼業にはこりてゐたやうでした。

それからといふもの運が向いてまゐりません。職はなし、前の相場の穴はあり、それを何とかして埋めなければといふので、手を出せば出す程よくない。さうなれば愈々あせるといつたわけで、其頃の父の懷加減は、最初のうちはわからなかつたのですが、もう私にも大體わかつてゐて、たとへ零細な金でも借りられない程氣の毒な狀態になつて居りました。しかしそこを何とかして彌縫

はして出て居りました。
私がこんな貧乏暮らしをして居りますと、父も父でこんなみじめな工合になつて参るのです。此時夏目はどんな暮らしをして居ましたかといふに、當時の留學費は一年二千八百圓、月割りにして百五十圓、それも英國なればこそそれだけなので、獨逸あたりはずつと安かつたかと覺えて居ります。何でも貧民窟見たいな安下宿を見つけて、學校へ正式に行くには金もかゝるし、又時間も無駄になるといふので、そこに籠城して本を買つて、時々教師のところへ通つたと申します。よく手紙に日本から行つたものが淫賣を買つたりしてるるのを惜しがつて、その金を自分にくれたらなどと申して來て居りましたが、何もかも切りつめて本を買つては勉強したものだそうです。自分も本を買はなければ、いま少しは上等の下宿に居ることも出來るのだがなどゝいつてよこしたことがありますが、隨分切りつめた上にも切りつめて、日本にかへつたら何かと用があつてゆつくり勉強も出來まいといふので、根限り勉強したものゝやうです。自分でも生涯のうちで一番勉強したのは此時だと述懐して居りました位です。さうして感心によく書物を買つたら　ゝやうです。下宿をかへた時かに、あんまり本を澤山持ち込んだので、宿のものが驚いたとかいふことがあつたさうです。
いつだつたか何誰かに伺つたことに、外國生活をしてるると、語學が出來ないか或は女に近づ

かないか、そのいづれかで神經衰弱になるものだが、夏目の語學は行く船の中から彼方の方に賞られたといふ位だから大丈夫でせうが、すると品行も甚だ方正だつたのでせうなど〻いつて居られたことがありました。ともかく切りつめ過ぎた生活の上にあまり勉強が過ぎたのでせう、ひどく頭を惡くした樣子でありました。しかしこれはもう少し後でお話致しませう。

妹の梅子が大に激勵する積りで、ある時ロンドンの夏目のところに手紙を書いて、兄さん、是非博士になつて、えらくなつておかへり下さい、それをお待ちしてゐますとかなんとか書いてやつたものと見えまして、やがて程へてからの手紙に、梅子が博士になつてお歸りなさい、それを待つてゐますといつて來たが、おれは博士なんかには決してならない。博士だからえらいなんて思ふのは大變な間違だ。博士なんていふものは、やつてることはいくらか知つてるでもあらうが、其外のことは一切知りませんといふ甚だ不名譽千萬な肩書だ。だから人はどう言はうと、お前はおれの女房なんだから、そんなくだらない博士の夢なんぞ見てはいけないし、そんなものだからえらいんだなど〻誤解してはいけない。おれは生涯どんなことがあつても、そんな稱號は決して貰ひはない積りだ、とこんな風な口調で言つて來たものです。すると折角好意を示したのに此のお小言なので、

妹もすつかり怒つて了つて、
「私は博士になつておかへりなさいといつただけで、別に兄さんが博士になつたからえらいといつたんぢやない。」
て、大層ふくれたことがあります。

　何しろ手のないところに、私がどつちかといへば構はない方なので、赤ん坊を泣かないやうに放たらかしておいては仕事をしてゐます。とそのうちに赤ん坊が泣き出します。すると夜晝にかゝはらず、すぐ窓が向ひ合はせになつてゐる部屋に居る弟が、氣の毒がつて飛び出して來て、あやしたり抱いて行つたりしてお守りをしてくれました。其頃には弟の家内も居りまして、隨分二人にお守りをして貰らつたものです。

　ところがさうして二人にお守りをして貰ふ時には、私も赤ん坊も大に幸なのですが、時々例外の情ない時が出て來ます。其時はお猿さんのやうに赤ちやんは簞笥の環に紐の先きで結いつけられてゐるのですが、其のうちに御馳走をたんまりして、おとなしくしてゐると思へば、それをこねまはして遊んでゐたとやらなめたとやらで散々の有樣でした。何しろ子供も二人になつて見ると、主

人が居らないのでやることもないやうなもの丶、それこそ何やかやで二年半の月日も殆んど夢中で過ごして了ひました。

一六　白紙の報告書

夏目がロンドンの氣候の惡いせいか、何だか妙にあたまが惡くて、此分だと一生このあたまは使へないやうになるのぢやないかなど丶大變悲觀したことをいつて來たのは、たしか歸へる年の春ではなかつたかと思つて居ります。私は呑氣にそれを別に重大に考へるでもなく、深くも氣にとめてなかつたのですが、本人がさういつてこぼして來る位だから、側に居た人が變に思つたのは無理のないことでしたでせう。夏目が發狂したといふ專らの噂が日本にも傳はつて居たのださうですが、私は一向そんなことを知らずに居りました。事のおこりはかういふのだつたと後から聞かされました。

何でも留學生の義務として、文部省へ毎年一回づ丶か、研究報告をしなければならないのださうですが、夏目は馬鹿正直に、一生懸命で勉强はしてゐるもの丶研究といふものにはまだ目鼻がつか

ない。だから報告しろつたつて報告するものがない。しかも文部省の方からは報告を迫つて來る。そこで益々意地になつたのか、白紙の報告書を送つたとかいふことです。文部省でも變だと思つてるところへ、丁度同じ英文學の研究で彼方へ行つてゐられた或る人が、落ち合つて樣子を見てゐるとたゞ事でない。宿の主婦にきけば毎日毎日幾日でも部屋に閉ぢこもつたなりで、まつ暗の中で、悲觀して泣いてゐるといふ始末。これは大變だ、てつきり發狂したものに違ひない。かういふので、いつ自殺でも仕兼ねまじいものでないとあつて、五日ばかりも其方が側についてゐて下すつたさうですが、經過は依然たるもので、見れば見る程益々怪しい。その事がいつか文部省の方へ電報でいつたのか手紙で行つたのか、夏目がロンドンで發狂したといふことがわかつてゐたさうです。そんなわけで一高あたりに居られたお友達や、それからどうして知つてゐたのか妹の時子や鈴木なども知つてゐたのださうですが、鈴木などはともかく噂であつて見れば、本當かもわからないが、又うそかもわからない。歸へつて來て見ればわかるのだから、其時になつて臨機の所置をとつたらいいのだから、今から話をして家のものを心配させるにも當るまいとあつて、誰も私には聞かせずに置いたものださうです。

　或る時、もうそんな話が充分廣まつてからのことでせう、其頃一高の教授をして居られた菅虎雄

さんにお會ひしましたので、此間ロンドンから手紙が來て、何だか病氣であたまが惡い、一生この頭はなほらないかも知れないなど、書いてありましたと申しますと、菅さんが妙な質問をなさいます。

「さうですか、それ以外どつこも惡いとも書いて來ませんか。」

しかし私は別に深い存念があらうとは知る筈もないので、

「其外別に何とも書いて參りません。」

とお答へしますと、

「その手紙といふのは自分の手で書いたものですか。」

といふお尋ねです。益々變な質問なのですが、私はなほも平氣で、

「え丶、自分の筆蹟でございました。」

と、怪しみもせず申したものです。と菅さんは獨語のやうに、

「手紙が自分で書ける位なら大丈夫ですな。」

とうなづいて、外に體が惡くさへなければよいだの、手紙には變なところがなかつたとかだの、根掘り葉掘りお尋ねになります。後で考へて見れば、菅さんの方ではてつきりキ印にふつたのだか

らといふ頭で、あれこれとだめをおして、遠くに居る友達の身の上を案じてゐられたのですが、私は知らぬが佛で、その珍妙な質問を變だとさへ思はなかつたのです。

夏目も自分のことで、それ程騒ぎがあつたことは後迄知らずに居たやうですが、それでもみんなが氣狂扱ひにするのが心外だつたと申して居りましたから、全然知らなかつたのでもなかつたやうです。が、ともかく人樣がそれ程に言つて下さるのですから、なみ大抵の狀態ではなかつたのでございませう。

下宿の主婦姉妹が大變親切にしてくれる。しかし蔭へまはるとすぐに惡口をいふ。それから何かといふと直きに涙を流す。が、それも空涙だ。そんなことを申して居たことがあります。それからまるで探偵のやうに、人のことを斷えず監視して附けねらつてゐる。いやな奴つたらない。當時のことを追懷してこんなことを申して居たことがありました。それでも宿の主婦にして見れば、毎日も部屋に閉ぢこもつた切りで、めそ〳〵泣いたりしてゐるのを知つては、自然どうなることかと氣も配つたことでありましたでせう。その又氣を配るのが夏目の神經に障はるといふわけだつたのだらうと思ひます。つまり好意がかへつて仇となるので、だからかうなつたが最後、一番近しいものがいつも一番ひどく恨まれる勘定になりますのです。大方此の時もそれだつたでせうと思はれます。

其後當人から聞いたのですが、あたまの調子が少しづゝ變になつて來ると、これではいけない、こんなになつちやいけないと、妙にあせり氣味になつて、自分が怖くなるといふのか、警戒し氣味になつて、だん／＼自信を失つて行く。それでなるべく小さくなつて、人に接しないやうにと心掛けて、部屋に閉ぢこもつた切り自分を守つて行くのださうです。それが病氣の第一歩で、さてそれから自分が小さくなつておとなしくしてゐるのに、一向人がそれを察せず、いぢめよういぢめようとかゝつて來る。さうなると此方も意地づくになつて、これ程おとなしくしてゐるのにそんなにするんならといふ氣になつて、無性にむかついて癇癪を爆發させる。かういふ段取りになるのださうです。で後で考へて見ると、其時にはつまらないことが氣になつて、其間絶えず誰かゞ監視してゐるやうな、追跡してゐるやうな、惡口をいつてゐるやうな氣がするのださうです。此時にも英國人全體が自分を馬鹿にしてゐる。さうして何かと自分一人をいぢめる。これ程自分はおとなしくしてゐるのに、これでもまだ足りないでいぢめるのか。そんなら此方にも考がある。もう此上はおとなしくなんかしてないぞといつた氣持だつたらしいのです。かうしたことは其後も度々ありました。だから此の病氣がおこると、一番近くに居るものが一番迷惑するのです。が私はこれを最初のうち病氣だとは知らずに居ました。いづれこれは後でお話しすることにいたしませう。

下宿の主婦姉妹はそんなわけで大變嫌はれて居りましたが、ひとりお醫者さんだけは大層親切にしてくれて、いつも訪ねて來ては馬車にのせて病院迄連れて行つて、さうして何かと心を盡くして世話してくれたと當人はいつて居りました。

こんなことをしてゐては自分でも苦しくて堪らなかつたのでせう。あたまを外へ向けたらと思つてる矢先き、醫者や宿の主婦がしきりに戸外の運動をすゝめるので、自分でもその氣になつて、勉強の方は一時そつちのけにして、宿の主婦のすゝめで自轉車乘りを始めたさうです。よくおつこちて手の皮をすりむいたり、坂道で乳母車に衝突して、以後氣をつけるとどなられたりして、それでもどうやら上達して、人通りの少い郊外なんぞを悠々と乘りまはしてゐるうちに、餘程氣分も晴やかになつたと見えて、大分あたまもなほりかけて來たさうです。夏目が自轉車を乘りまはしてる圖は一寸想像出來ませんが、日本へ歸つて來て其話をしますから、此方でもおやりになつたらいいぢやありませんかと申しますと、どうも東京はロンドンと違つて、道が惡くて、其上せゝこましくていかんと申しまして、たうとう乘りませんでした。其頃のことを書いて「ホトトギス」に送つた『自轉車日記』といふ文章がございます。

其頃犬塚武夫さんが、小笠原伯爵について ロンドンに行かれて、一時夏目と同じ下宿に居られたことがあるさうです。滿二年の留學期も終りに近づいて、いよ〳〵日本にかへるといふことになつて旅費を受取ると、撫闇矢鱈と書物を買ひ込む。その無鐵砲さ加減、傍で見てゐてはらはらするので、今にあの分では旅費をみんな書物に代へて了ふに違ひないとあつて、犬塚さんが氣をきかして、郵船會社へ行つてその旅費のうちからともかくも船賃だけは拂つて、切符を取つておいて下すつたといふことを伺ひました。其頃もまだあたまがいくらか變だつたのでせう。犬塚さんは小宮豊隆さんの叔父さんで、後で小宮さんが大學に入られる時かなんか、犬塚さんからのお賴みで保證人になつたやうです。それから小宮さんが始終おいでになるやうになつたのです。

一七　歸朝

子規さんが亡くなられたのは、明治三十五年の九月でしたが、その亡くなられる前に一度、お土產物をもつて私が御見舞に行つたことがありました。座には子規さんのお母さんと妹さんが看護して居られました。

それは亡くなられる年の春の末頃かとおぼえて居りますが、お顔や唇はまるで半紙のやうに白く、息使ひが荒くて、見て居ても苦しさうでした。全くじつと臥つたきりで、私が來たといふのでほんの一寸頭を擡げて話をなさいましたが、あれでよくまあ生きて居られるものだと思ひました。かへつて參りましてから二三日といふもの、どうもそれが目の前にちらついて、御飯がのどへ通りません程でございました。

そのことをロンドンへ書いてやりまして、全くお氣の毒ですけれど、私なぞは一寸一目見ただけでこれですのに、貴夫は子規さんをお訪ねすれば、半日でも坐り込んで平氣で話してお歸りになる、えらいものだと申しますと、よく見舞に行つてくれた、いゝことをしてくれたと喜んで參りました。お葬式の日には、土屋忠治さんが子供のあるものはそんな處には行かぬがいゝ、私が代理で何もかもやつて上げようといつて、おくやみやら何やら一切やつて下さいました。

私がお見舞に上がつた時、子規さんが白いネルの襦袢なんぞをきて、さつぱりしてらしたのが今でも目に浮んで參ります。此間久々で根岸へお訪ねしましたら、入口のところが一寸變はつただけで、あとは其當時の儘のやうだつたので、大變懷しい思ひが致しました。

さうかうしてゐるうちに留學期限が切れて來る。もう歸つて來さうなもんだと噂してゐるのですが、いつ歸へつて來るとも、何といふ船に乘るとも、とんと音沙汰がございません。するうちに何日神戸入港の氣船で歸朝する人々といふ中に夏目の名が出てゐるといふのを誰かが新聞で見まして、そんなら一月の下旬に神戸へつくのだらうといふので、郵船會社へ問ひ合はせたりなどして待つて居りますと、一月の二十八日だつたかと思ひますが、今神戸へ上陸した、何時の汽車にのるといふ電報が初めて屆きました。それで私は父に連れられて、國府津迄迎に參りました。一緒の船で歸へつて來られた方だといつて、青山腦病院の齋藤さん（齋藤茂吉さんの御養父）外二三のお醫者さん方がおいでになりました。見たところ洋行前と別に變つた樣子もなく、たゞおそろしく高いダブル・カラーをしてきちんと身についた洋服を着てゐるのが物珍らしいやうでした。明治三十六年一月末のことでございます。

後で聞いた話ですが、新橋へつくと外に親類のものや何かゞ迎へに出てゝくれましたが、若しや噂のとほり氣狂になつて歸へつて來たのでもあるまいか、どんな樣子だらうと、半ば怖々出て見た人もあるとかいふことです。

それからすぐと矢來の、三年間擧替もしなければ何の手入れもしない、たゞ留守中雨露を凌いで

ゐたといふだけの荒れに荒れた家に入りました。それでも二三日は物珍らしくもありおとなしくして居たのでしたが、たしか三日目か四日目のことです。長女の筆子が火鉢の向ふ側に坐はつて居りますと、どうしたのか火鉢の平べつたいふちの上に五厘錢が一つのせてありました。別にこれを筆子が持つて來たのでもない、又それを弄んでゐたのでもありません。ふとそれを見ますと、こいついやな眞似をするとか何とかいふかと思ふと、いきなりぴしやりと擲つたものです。何が何やらさつぱりわかりません。筆子は泣く、私も一向樣子がわからないから、だん／＼尋ねて見ますと、ロンドンに居た時の話、或る日街を散歩してゐると、乞食が哀れつぽく金をねだるので、銅貨を一枚出して手渡してやりましたさうです。するとかへつて來て便所に入ると、これ見よがしにそれと同じ銅貨が一枚便所の窓にのつてるといふではありませんか。小癪な眞似をする。當々下宿の主婦さんは自分のあとをつけて探偵のやうなことをしてゐると思つてゐたら、やつぱり推定どほり自分の行動は細大洩らさず見てゐるのだ。しかもそのお手柄を見せびらかしでもするやうに、これ見よがしに自分の目につくところにのつけておくとは何といふいやな婆さんだ。實に怪しからん奴だと憤慨したことがあつたのださうですが、それと同じやうな銅貨が、同じくこれ見よがしに火鉢のふちにのつけてある。いかにも人を馬鹿にした怪しからん子供だと思つて、一本參つたのだといふの

ですから變な話です。私も妙なことをいふ人だなとは思ひましたが、それなり切りでこの事は終つて了ひました。病氣もロンドンで自轉車にのつて一時なほつたのが、歸へりの船の中で又いくらかつゝもとへ戻つたのだといふことは後で知りました。

留學は熊本の高等學校からしたことになつてるので、歸朝したら又五高へ舞ひ戻らなければなりません。しかも二年の留學ですから、義務年限は四ヶ年です。自分でももう二度と熊本へ行きたくなし、又昔からの友達も今では大部分東京に集まつてゐられるので、なほ更東京に止まりたい意嚮で、留學中も丁度狩野さんが一高の校長になつて居られたのを幸ひ、いろ／＼おたのみもしたやうですが、五高の方でも校長の櫻井さんが是非戻つて來てくれろといふわけで手離して下さいません。歸朝してからもいろ／＼その邊のことを接衝してゐたやうですが、狩野さんあたりの御骨折りだあつたのでせう、ともかく東京に止まることになりました。

一八　黑板の似顏

前にも申しましたとほり、着物も夜具も着破つて了つたことですから、愈々歸朝といふことにな

ればその仕度をして置かねばならなくなりまして、貧乏してゐる父の厄介になるわけには行かず、たうとう妹婿の鈴木に頼んで百圓ばかり用立てゝ貰つて、どうやらかうやら迎へる準備だけは出來ましたが、歸へつて來た夏目も殆んどこれ又無一文でかへつて來たので、さて愈々東京で家を持たうにもどうにもあがきがつきません。それだからといつていつまでもこの小ぽけな離れに厄介になつてるわけにも參りませんので、夏目は毎日毎日借家をさがしに出かけます。本郷小石川牛込四谷赤坂と、山ノ手は所構はずさがし歩るいた樣子で、かへつて來ては今日はどこそこを歩いたと、そんなことを申して居りました。よく菅虎雄さんと御一緒に出掛けました。

ところが運よくさがし當てたのが、本郷駒込千駄木五十七番地の齋藤阿具さんの御宅。齋藤さんは其頃も仙臺の第二高等學校の教授をおつとめになつて居られたのでお宅が空家になつて居りました。話をして見ると差配が貸してもいゝといふこと、齋藤さんとは大學時代から識り合ひの中で、早速そこへ移ることにきめました。しかし前に熊本から引き揚げる時に、世帶道具は一式手離して身一つで來たのですから、それから買ひ調へなければなりません。それから移轉料もいります。けれども有金は殆んどないのです。そこで大塚博士の貯金のうちから百圓か百五十圓かをお借りして、漸くそこへ落ちつくことが出來ました。

ところが私が一月に風邪を引いて、手のないところから無理をしたものでせう。なほつたかと思ふと又熱が出て、その頃でもまだはつきりせずにぶら〳〵して居ましたので、自分からそんな世帯道具萬端を買ひ調へたり、引越しの世話をやいたりしてくれました。それがたしか三月三日の事だつたと覺えて居ります。

狩野さん大塚さんなどの肝入りで、望みどほり熊本に歸へらないで、東京に居て一高で教鞭をとることになりましたが、それだけでは生活にも困らうとあつて、文科大學の講師といふことになつて、小泉八雲先生の丁度後に入ることになりました。どうしてさういふことになつたのか、其間の消息は私にはわかりませんが、當人甚だ不服でして、狩野さんや大塚さんに抗議を持ち込んで居たやうです。夏目の申しますのには、小泉先生は英文學の泰斗でもあり、又文豪として世界に響いたえらい方であるのに、自分のやうな駆け出しの書生上りのものが、その後釜に据はつたところで、到底立派な講義が出來るわけのものでもない。又學生が滿足してくれる道理もない。尤も大學の講師になつて、英文學を講ずるといふことが前からわかつてゐたのなら、その積りで英國で勉强もし準備もして來るであらうのに、自分が研究して來たのはまるで違つたことだなど〻ぐづついてゐたやうですが、結局狩野さんあたりからまあ〳〵となだめられて落ちつきました。

そこで文科大學の學長に會ひに行つたやうです。歸へつて來ての話に、いくらあつたら暮らせるかとのことだつたので、百圓位ならと言つて來たと申しますから、私もこれ迄一年半ばかりの間、ともかく二十五圓でやつて來たのだから、百圓でやつて行けないとは申しませんが、いづれにしても苦しいでせうと申したことでした。其頃月給は兩方合はせて百二十圓位でしたが、ちよい／＼お借りした金をかへしてゐたので、本當の手に入るものはいくらもないのでした。其うちに大塚さんのところでお子さんが亡くなられ、用立てゝ頂いたお金をかへさねばならなくなつて、何でも山川さんかにお願ひして肩代りをしたことがありました。

さて四月の新學期から學校へ出ましたが、大學が六時間、一高が二十時間、講義のノートを作つたりして、隨分勉強してゐたやうです。けれども學校はねつから面白くないらしく、自分では外國で計畫してゐた著述でもしたい樣子でしたが、これ迄の行きがゝりもあり、外に生活費を得る道もないので、目をつぶつて學校へ出て居たやうです。しかしいやだ／＼と口ではいつても、根が義務觀念の強い人ですから、滅多に休んだり遲刻したりするやうなことはありませんでした。かてゝ加へて外國から持つて來たあたまの病氣が少しもなほらないので、なほ更すべてのことが面白くない樣子でした。

此間、帝大醫科の眞鍋嘉一郎さんにお伺ひした話ですが、眞鍋さんは夏目が松山中學へ赴任した時の上級生で、何でも東京から新米の英語の先生が來たといふから一ついぢめてやらうといふので、英語の字引を二つも引いておいて、これなら大概參るだらうとあつて、ひそかに不意打ちを企てゐられたさうです。さていよく其時間になつたので、こゝだと思つて、先生それは違ひます、何々の字引と何々の字引とにはかうありますと天晴れな博識振りを振り廻すと、夏目の方は落ちついたもので、それは二つとも字引が違つてゐる、直しておけといふわけで、これには流石の眞鍋さんも參つて了つて、いぢめるどころでなかつたといふお話でしたが、一高邊でも學生さんたちがいぢめてやらうと計畫を立てゝやりかけると、あべこべにとんでもないむつかしいことを問ひかけられたり、べらくと洋行歸りの英語で何やら早口にやられたりして、みんな度膽をぬかれたなどといふことがあつたさうです。そんなところは心得たものだつたらしいのです。其頃或日學校からかへつて來て、

「今日教室へ入ると、黑板に高いダブル・カラーをつけて、頭をぐつと高くそらしたおれの顔が描いてあつたよ。」

と笑ひながら申しますから、

「貴方どうなさいました。」
と尋ねますと、
「仕方がないからだまつて消しておいたよ。」
と言つて居りました。其頃の夏目は所謂ハイカラで、尖の細い沓をはいて、爪先ですつ〳〵と歸つて、下を氣取つて歩るいてゐたものだとかいふことです。かまひつけない半面には、さういふお洒落のところもあつたのです。後で伺ひますと、そのいたづらをした級が野上豐一郎さんあたりの級だつたとかいふことです。

一九　別居

此頃まではまづ〳〵どうにかよかつたのですが、六月の梅雨期頃からぐん〳〵頭が悪くなつて、七月に入つては益々悪くなる一方です。夜中に何が癪に障はるのか無闇と癇癪をおこして、枕と言はず何といはず、手當り次第のものを放り出します。子供が泣いたといつては怒り出しますし、時には何が何やらさつぱりわけがわからないのに、自分一人怒り出しては當り散らして居ります。ど

うにも手がつけられません。

丁度其頃私が又姙娠して居りまして惡疽で苦しんで居ります。其上正月頃風邪をこじらせて熱がとれないといつてゐたのが、實はいつの間にやら肋膜をいくらかやられてゐたとかで熱があります。そんなわけで始終臥せり勝ちだつたのですが、どう考へても夏目の癇癪が腑に落ちません。以前はあんなに無茶苦茶に怒る人ぢやなかつたのだが、あんまり勉強でも仕過ぎて、どつか身體なり頭なりに異狀のあるのではあるまいか。以前とはまるでころりと違つて居ますので、不審でもあり心配でもあるので、其頃始終私を診に來て下さつた尼子四郎さんにお話をしまして、とてもまともに診て上げませうなどといつたつて、近頃の空模樣では素直におとなしく診せる氣遣もなし、いつか折を見て、私を診に來てゐると、どうも夏目の顏色が惡いがとか何とか云ひがかりをつけて、そのところをうまく持ちかけて診察してやつてくれませんかと御願ひしました。尼子さんも仔細承知で引きうけて下さいました。

四五日たつと、尼子さんが見えてのお話に、余程話が旨く運んだと見えて診察をされたといふのです。どんなでしたとお伺ひしますと、どうもたゞの神經衰弱ぢやないやうだと首を傾げられます。それではと重ねて御伺ひしますれば、精神病の一種ぢやあるまいか。しかし自分一人では何ともそ

このところは申上げ兼ねるから、呉博士に診て頂いてはといふお話です。さうなれば是非もありませんが又益々心配なので、ではさう願はうといふことにお話をきめて、萬事の謀は尼子さんに御願ひ致しました。

さう言はれて改めて見るせいか、どうもやることなすことが只事でありません。何が癪に障はるのか女中を追ひ出して了ひます。私にはいよいよつらく當ります。女中は居ず、その上私は病氣でふらふらして居るのですが、仕方がないから何かしますれば、それが一々氣に入らない樣子ですが此方もさうさう面當てがましく振舞はれるのでは堪まりませんし、又そのいらいらしてるのを見るのが實に堪まりません。しきりに里へ歸れといふことを面と向つて申しますので、私も考へました。こんなことが續いて、一層頭をいらいらさせて了つても惡るいし、萬一子供にどんな危害がふりかゝらないものでもない。或は私が一時子供たちを連れて身を引いてゐたら、其間それだけ目の前から邪魔物がなくなるわけで、かへつて氣が鎭まるかも知れない。一先づ身を引いて樣子を見よう。さう考へまして父に相談しまして、ともかく病氣に逆はないやうにして、一時子供を連れてどいて見ることに致しました。さうして七月に一旦里の父母の元へかへりました。其時尼子さんが病氣が惡いやうなら、私が電話を上げるなり何なりいゝやうにしますから、其方は私にまかして心配

なくと親切に言つて下さいました。

其中に尼子さんが御約束どほり呉さんに診せて下さいましたといふことだつたので、呉さんのところへ樣子を伺ひに參りますと、あゝいふ病氣は一生なほり切るといふことがないものだ。なほつたと思ふのは實は一時沈靜してるるばかりで、後で又きまつて出て來ると申されて、それから病氣の說明をいろ〱詳しく聞かして下さいました。私もそれを聞いて、なる程と思ひまして、漸く腹がきまりました。病氣なら病氣ときまつて見れば、其覺悟で安心して行ける。かう思ひまして、どんな工合かしらと時々行つてはのぞいて見ますが、いつ行つて見てもどうも御機嫌甚だうるはしくありません。さらばといつて此儘いつ迄かうして居るわけにも行かず、どうしたものかと思つて居りますと、夏目の兄さんが、これは昔風な考から、私が、むきに此儘離籍でもすると思はれたものか、夏目の爲めを思ひ、私の爲めを思つて、どうか別れるの何のといはず、其儘默まつて怒らずにかへつてやつてくれ、とかういふお話なのです。で私も、別に怒つてゐるわけではなし、夫婦別れをしようと云ふのぢやなし、虐待されたからといつて、それは誰からでもない自分の夫だから、そんなことで人樣に御迷惑はかけないつもりですが、たゞあゝいふ頭で、子供がやかましいといつてはいぢめられたり打たれたりしたのでは、第一子供の爲めにもよくないし、又自分の頭も惡くす

る一方に違ひないから、それで一時遠さかつてかうして別居して見たのだけれども、さつぱり驗がないとすれば元どほり歸へるより外に仕方がありません。どうか兄さんから話の口を切つて頂きたい。あやまつて歸へることにするからといふので、兄さんが夏目に、私がかへりたいと言つてるからと取りなして下すつたわけです。すると夏目が、

「つまり剛方で神經衰弱なんだ。歸へりたいといふんなら、そんならかへつて來るがいゝ。が、大體中根の家では子供を甘やかせて我儘に育て過ぎる。だから鏡子なんぞもあのとほり我儘で、自分のやりたい放題をやる。」

とか申しますので、兄さんも、

「外の姉妹はどうか知らんが、鏡子さんはあんたの奥さんぢやないか。細君のことなら強情であらうと我儘であらうと、自分のいゝやうに教育したらいゝぢやないか。」

とか何とか言つたやうな按配だつたさうです。そこで母を煩はしまして、母から夏目にどうかまあといつた工合にあやまつて貰つて、そこで漸く千駄木に歸ることになりました。母には別につけつけ文句も言はなかつたさうです。私はこの時今度はどんなことがあつても決して動くまいといふ決心をして參りました。これは九月のことで、まづこの事件はこゝで一段落がつきました。

二〇　小刀細工

二ケ月ばかりはそれから大分いゝので、私もよい按配だと喜んで居りました。これなら歸へつて來た甲斐もあつた。そんな風に思つて居りますうち、十月の末に三女の榮子が生まれました。するうちに十一月に入ると、さきにいくらか愁眉をひらいたのもあだとなつて、又ぞろ前にも增して雲行きが險しくなつて參るりました。

私はお産でまだ床について居ります。覺悟はきめてゐるとは云ひ條、はら〳〵するやうなことがよくあるやうになつて參るります。さうして何故か私を目の讎にして、困らしてやらう、苦しめてやらう、とにかく怪しからない奴だといふやうな素振りが見えたり聞こえたりして參るります。するうちに私が臥せつてゐる産室の屛風の蔭に參るりまして、

「貴樣はお産でねてゐるのだから、相當日がたつたらかへれ。」

かういふのです。私は始まつたなと思つてだまつてゐるのですが、看護婦や女中の手前困つて了ひました。それでもまだ子供達が小さかつたから、此の頃は何をされようとまだよかつたのですが、

これから數年たつてこの病氣が起こつた頃には、娘も大きくなつてゐたので、本當に困つたことが再々ありました。どういふわけか勿論自分の頭の中でいろ〳〵なことを創作して、私などが言はない言葉が耳に聞こえて、それが古いこと新らしいことといろんに聯絡して、幻となつて目の前に現はれるものらしく、それにどう備へていゝのか此方には見當がつきません。さうなり出すと何もかもみんな惡意に取り出すので、私のやることなすことが、話せば話したで、默つて居れば默つて居るで、何もかも夏目をいぢめ苦しめる爲めにやつてると、かう感じるらしいのです。ですから餘程續に障はると見えまして、いきなり屛風の蔭へ來て、

「お前はこゝの家に居るのはいやなのだが、おれをいら〳〵させる爲めに頑張つてゐるんだらう。」

などゝ惡態をついたりなどするのです。さうして私が臥つて居ても女中や何かを手なづけて、さうしてあれやこれやと差圖をしたり策略をめぐらしたり、夏目を苦しめよう苦しめようとするとでも思つてるのでせう。或る日學校からかへつて來ると、女中を呼んで、

「これを奥さんのとこへ持つて行つて、これで澤山小刀細工をなさいつてさう言ひなさい。」

と申しまして、銹ついた小刀を渡しました。女中は何のことかわからないながら、只ならぬ氣色におびえたものと見えまして、

「奥樣、氣味が惡うございますね。」
とおど〱してゐます。私はだまつて小刀を取つて、枕の下にかくして了ひました。つまり私が何かにつけて小刀細工をして夏目を苦しめる。これでするならしろといふ皮肉なあてつけなのです。後で考へたのですが、一番最初にお話した井上眼科で見初めた女の方の母親が、相も變らずまはし者をしてゐるのではないかなどゝいふつかない事まで、病氣が始まると一緒に聯絡を取つて、いろんな風にそれからそれへと考が發展して行くらしいのです。さうして近くに居る者程やられるのですからいゝ迷惑です。
次女の恒子が漸く三つで、丁度赤ん坊が出來て私に離れた時なので、ひい〱よく泣くのです。勿論やかましくもあるのですが、それがひどく神經に障はると見えて、夜中にでも何でもひどい目に會はします。一つには私への面當てかと思ひましたが、ともかく時々狂的にいぢめるのです。
しかし私は前にも申しますとほり、覺悟はきめて居りますし、それに産褥半ばに動いたり氣をもんだりしては惡いと思ふものですから、つとめて靜かにしてゐて、ともかく二十一日間といふもの、いかに毒づかれても動かずに居りました。そこでどんなことがあつたものか、自分の部屋以外に起こつてゐたことを知らずに居りますと、丁度其頃、實家の父から夏目に當てゝ手紙が來てゐるのが

るのだから今當人は外ならぬお産の爲めねてゐるのだからといふ、夏目から私を引き取れとでもいつてやつた手紙に對する返事と見えます。そこで私も大變氣になりましたので、使をやつて母に來て貰ひました。晝は學校へ行つてゐるのですからそこは調法でした。

「話はどうなつてゐるの。」

私が改まつて話を尋ねますと、母が實はと前置きをして一伍始什の顚末を物語つてくれましたところはかうなんです。私が產褥に居る間に、案の定夏目が父に宛てて、再三私を戻すから引き取つてくれと申してやりましたが、そんなことをいつたつて當人は今お產でねてゐるんだから、いづれ床上げでもすんだら、私の意志も聞いた上で御相談しませう。かういふ返事を其都度出しておいたものだと申すことでした。それから今假令こんな話をされて見ても、私に聞かしてはよくないといふので、今日迄だまつてゐたといふこと、しかし父は夏目の家に私が居ることを、いゝとも惡いとも言つては居ないこと、結局當人の私の意志一つでどうとも決するがいゝといふこと、ともかくなほつてからゆつくり話をしようと言つてることなどを話してくれました。それでも親類や何かはそんな精神病の男のところへびく〳〵しながら娘や孫をおくことはない。いまに何をされるかわかつ

たものでない。一時も早く引き取つたがいゝといふ風に騷ぎ立つてるといふ母の話なのです。そこで私は母へ申しました。

「そんならどうかお歸へりになつて、皆さんに仰言つて下さい。夏目が精神病ときまればなほ更のこと私はこの家をどきません。私が不貞をしたとか何とかいふのではなく、謂はゞ私に落度はないのです。なる程私一人が實家へ歸へつたら、私一人はそれで安全かも知れません。しかし子供や主人はどうなるのです。病氣ときまれば、傍に居つて及ばずながら看護するのが妻の役目ではありませんか。たゞ私だから嫌はれてゐる。私さへどいたなら夏目の頭がなほるといふのなら、又考へなければなりませんけれど、あの病氣では私がどいた、後へ誰か後妻に入つて來たといつても、あんな風にやられて誰が辛棒してゐるものですか。きつと一ト月の辛棒も出來ず逃げかへるに違ひありません。どうせかうなつたからには私はもうどうなつてもようございます。私がこゝに居れば、嫌はれようと打たれようと、ともかくいざといふ時にはみんなの爲めになることが出來るのです。私一人が安全になるばかりに、みんなはどんなに困るか知れやしません。それを思つたら私は一歩もこゝを動きません。私はどこ／＼迄も此家に居ることに致しましたから、どうか此上は何も仰言らずにだまつて見て居て下さい。一生病氣が直らなければ私は不幸な人間ですし、なほつてくれゝば

子供たちなんかも充分注意して行きます。どうか一切このことについては實家の方から差圖がましいことをして下さらないやうに……」

又幸福になれるかも知れません。危險だといふことも萬々承知してゐるから、

淚を流して母にくれ〴〵も決心の程を打ち明けて賴みましたので、母もそれ程にいふならと快く肯つてくれました。今其當時のことを思ひ出して見ましても、どうしてあんなところに居たものかと、むしろぞつとする位ですが、本當に其時は生きるか死ぬかの境に立つてゐたやうなもので、自分では全く一生懸命で死物狂ひだつたのです。相手と言へば頑是ない子供たちばかり、やさしい言葉一つかけてくれる人とも居ず、たまさかさうした言葉を聞くかと思へば、今の私の實家側の親類のやうに、たゞ私一人の身の上ばかりを懸念して、少しも夏目の身の上を勘定に入れてない、親切さうに見えて、其實不親切な言葉ばかりで、本當に情ない思ひを致しました。母も大變同情して、

「あんまり心配おしでないよ。」

と慰めてくれますから、私も

「此家に居ると覺悟したからには、めそ〳〵泣いたり、くよ〳〵考へたりして、結局體を壞したりしては何にもならないんですから。」

と元氣に母を送り出したものです。
夏目の兄さんも大層私を氣の毒がつて、飯も食はせないなんかといふわけではないし、ともかく貴女が居てくれなくてはどうにもならないんだからと、慰めたり勵ましたりして下さいました。其頃だつたと覺えて居りますが、一つには家にばつかり居て勉强してるのがいけないと思ひまして、寺田寅彦さんや高濱虛子さんにお願ひして、出來るだけ遊びにいらして連れ出して下さるやうにとお賴みしたことがありました。かういふ方々には大變いゝらしいのですが、熊本時代に家に居られた土屋さんなんぞだと、もう私の味方だとかいつて、家へ來ただけで御機嫌が惡いのだから、一緒に散步に連れ出して貰ふどころの話ぢやありません。

二一　離緣の手紙

其頃は朝學校へ出るにしても、洋服を着せようとすれば、彼方へ行つて居ろと頭からどなりつけるので、前の晩のうちにカラーからネクタイ迄揃えておいて、それを朝になるとそつと部屋へ置いておくと、ひとりで默まつて着て出かけます。出掛けますと初めて箒をもつて書齋に入つて行つて

掃除を始めるといつた工合でした。

それからお金なんぞ一文も呉れず、お小遣も元よりくれません。日用品は通で取つて月末にこれだけか丶つたと勘定を見せれば、まさかそれを拂ふのはいやだとは申さないのだからい丶のですが、手元に小遣をおいてくれないのには弱りました。みんな私を困らせる爲めだつたのでせう。此方でもいるのはいるのですから、それなりに泣き寢入りも出來ず、後には意地になつて、今度は何々でいくら下さいと日に何度でも言ひにまゐります。さう一々やられたのでは、自分でも五月蠅くて困るのでせうが、貰ひに行くといきなり一圓札を足元へ放りつけたりしたものです。それから私を呼びますから行つて見ますと、部屋の唐紙を明けるが早いか、煙草がないといつていきなり煙草盆を放りつける。さうかと思ふと時計がとまつてるといつては懷中時計を放りつける。お金をくれないのですから、煙草の切れる位は當り前なのですが、ともかく何から何までが此の調子なのだからやり切れたものではありません。

それでもどんなことをされても私が動かないので、又父のところへ引き取つてくれろ、連れ戻しに來てくれろと言つてやつたものです。父も再三のことではあるし放つて置くつもりだつたのですが、それではかへつて昂じさせてもと思ひなほして、そんなこと言はずに置いてやつてくれろと賴

みに來ました。すると彼奴（私）は小刀細工ばかりやつて怪しからぬ奴だ、さう〳〵賴むんならともかく當分試驗の爲めおいといてやるとかいつた工合で、父もそんなものの相手になつても居れず、試驗的でも何でもいゝから置いてやつてくれとそこ〳〵にしてかへると、後で私に申しますには、「お前の親父は不人情だ。おれのいふことを上の空で聞いてるが、大方おれを氣狂ひだとでも思つて相手にしないんだらう。怪しからん。」

と大層な見幕です。それからともかく親父も賴むから試驗的におくことにはしたが、おれはどうもお前が氣に喰はないから、其うちにはかへつて貰らはう。おとなしく歸へらなければ、追ひ出して仕舞うといつたやうな口振りです。私もさう言はれて見ればへえ〳〵と敗けてゐるわけには行かず、

「私は惡いことをしないのだから、追ひ出される理由はありません。それに子供を殘して何でおめおめと出て行きますものですか。私だつて此のとほり足もあることだから、追ひ出したつて又歸つて來る迄のことです。」

と抗辯して、書齋を出て了ひます。すると暫らくして父宛の手紙を書いて持つて來て、これを里へもつて行けと申します。てつきり離緣狀に違ひないので、

「手紙なら三錢の切手を張つて出さしたらいゝぢやありませんか。」

といつたわけなのです。私がどうしてもその手に乘らないので、今度は歳暮に行け、やれ年始に一寸顏を出して來いと、すかすとも命令ともつかす、誘ひをかけます。ともかく私を邪魔にして何とか里へ追ひやらうとするのです。私は私で其のては食ひませんとばかりに

「お歳暮になんぞ行くことはありません。」

「實家へ年始になんぞ行かなくたつてもようござんす。」

といつては決して動きませんでした。

此頃は何かに追跡でもされてる氣持なのかそれとも脅かされるのか、妙にあたまが昂奮狀態になつてゐて、夜中によくねむれないらしいのです。夜中に不意に起きて、雨戶をあけて寒い寒い庭に飛び出します。何をするか知れたもんぢやありませんから、ついて出たいのですが、そんなことをしようものなら、あべこべに何をされるかわからないし、第一大きな聲で呶鳴られでもしたら、四邊近所に面目もないし、息を殺ろして寢た振をてして聽耳を立てゝ居ますと、やがて何事もなく戾つて參るります。かと思ふと眞夜中に書齋でドタン、バタン、ガラガラとえらい騷ぎが持ち上がる

ことがあります。これも仕方がないので出たいのをじつと堪らえて居りますと、やがてそれも一時で騷ぎもひつそり鎭まつて了ひます。まあよかつたと翌朝學校へ出るが早いか書齋に入つて見ますと、ランプの火屋は紛微塵にわれてゐる、火鉢の灰は疊一面に降つてゐる、鐵瓶の蓋は取つて投げたものと見えてとんでもないところにごろついてゐる、一目と見られた部屋の模樣ぢやありません。留守の間に大掃除をしておくと、歸つて來て又けろりとしてそこに入つて居ります。

千駄木の家には鼠が中々居りましが、いつぞや夜中に鼠がすさまじい音を立てゝあばれた揚句、臺所の方かで何か取り落したやうな物音がしたことがありました。すると早速目をさまして、

「今ガタ〳〵したのは貴樣だらう。」

と、呶鳴り散らすのです。私もその物音で目をさましたのですが、目をさまして知つてるとあつては又五月蠅いと思ひましたので、寢呆け顏を裝つて、

「鼠でせう。」

と何氣なく答へました。するとそれが又癪に障はつたのか、鼠であつては癇癪の持つて行き場がない爲めか、

「ぢや鼠をつかまへて來い。」

とかうなんでせう。これを大眞面目で怒鳴るんですからやり切れません。

或る晩なんぞは、何でも眞夜中の二時頃になつて急に手を叩きます。行つて見るとすぐ御飯を持つて來いといふ難題です。其刻限に女中を起こすわけにも行かず、寒い中をそれでもよくしたもので、何かかんか有合せのものを見つくろつて其場の間に合はせます。お膳を置いて來て翌朝行つて見れば、別に箸をつけた樣子もないのです。そんな人困らせをやられたことも隨分ありました。

かうなつて來ると、別に刄物いぢりをするといふのではありませんが、非常に殘忍性を帶びて參ゐります。一度などは私が買ひ物に出た留守中に、女中を二人とも追ひ出して、かへつて見ると家の中は眞暗がりで、子供がその暗い中で泣いてるといふ始末。誰もランプのつけてがないのです。

そこで子供が三人もあつて、その一人は全くの赤ちやんと來てゐるのですから、何から何までではは私一人では手がまはりかねます。第一憎らしいから、朝御飯の代りにはパンを買つて來て御膳の上に出しておくと、それを小供たちが砂糖でもつけてたべてゐます。自分も默つて其御仲間に入つて、ほそ〴〵パンを食べて學校へ行くなどゝいふ滑稽もありました。それでもよくしたもので、追ひ出された女中が、家の内情をよく知つてゐるので、私や子供が氣の毒だとあつて、學校へ出た時刻を見計らつてこそ〴〵裏口から手傳に來てくれて、洗濯をしてくれるやら、片付けものをしてく

れるやら、何かと面倒を見てくれて、又夕方になつて夏目が歸へつて來る頃になると逃げて歸へるなどといふ親切者もありました。そんなわけでこの後でもパンをたべたり、長いこと辨當屋から仕出しをさせて、辨當飯をたべたりしたことなどがあつたものです。

こんな風に盛に謂はゞ挑戰してくるのですが、私がだまつてゐるので、其の口返答をしないのが氣に食はないと見え、

「貴様、だまつてさへ居ればいゝかと思つてゐる。」

と再々どやされましたが、外にどう仕様もありません。

或晩夕飯をたべてゐますと、子供が歌をうたひました。するとうるさいつといふか早いか、御膳をひつくりかへして書齋に入つて了ゐました。餘りのことなので子供たちもびつくりしてべそをかいて了ひます。私も困つて了ひましたが、程經てどうしてゐるかしらと書齋をのぞいて見ると、机に頬杖をついてすましてゐました。自分でも食べかけたのですが、あたまのこんな時にはお腹もすかないと見えます。

隣に俥屋があつて、そこのおかみさんが始終がみ〲言つてゐるのが大變氣になつたと見えて、『吾輩は猫である』か何かにも書いて居りますが、それよりも可笑しいのは、向ひの下宿屋に居るある

書生さんに對する仕打ちです。全集にのつてゐる日記の一節にも、その書生さんが夏目の噂をしてゐる夢のやうな話が書いてありますが、丁度その書生さんの二階の部屋から書齋が見下される工合になつてゐて、毎晩部屋の窓に明がついて、そこで書生さんが相當高い聲で音讀するのです。それが習慣と見えて、窓ぎはの机に向つて勉強してゐる時には、きまつて聲を立てて本を讀んでゐるのです。そこへ時たまお友達が遊びに來る。さうするとやはり大きな聲で話をしてゐるのです。それが一々夏目の異常な耳には、穩かならぬ自分の噂や蔭口に響くらしいのです。さうして高いところから始終此方の方を覗いて監視してゐる。それが氣になつて仕方のないところへ、學校の始まる時間はどこでも大概同じですから、夏目が出かける頃になると、其學生も出かける仕度をして、夏目の後からついて行く。あれは姿こそ學生だが、しかし實際は自分をつけてゐる探偵に違ひない。かう一人できめてゐるのです。學生さんこそいゝ面の皮です。

そこで朝起きて顔を洗つて、いざこれから御飯といふ時になると、まづその前に書齋の窓の敷居の上に乘つて、下宿の書生さんの部屋の方を向いて、大きな聲で聞こえよがしに呶鳴るのです。

「おい、探偵君。今日は何時に學校へ行くかね。」

とか、

「探偵君、今日のお出かけは何時だよ。」

とか、自分では揶揄つてる積りか、先方でそんなにこそ〳〵ついて來なくたつて、此方で堂々と教へてやるよといつた工合に、一ぱし上は手に出た積りらしいのです。それを毎日毎朝やるのだから、書生さんも變な氣狂親爺だな位には思つてゐたことでせう。それを大眞面目になつて斷はつてから、それから食膳につくのだから妙なことをやつたものです。

或日私が午後に錢湯へ行つてると、女中が奥樣大變ですといつて驅け込んで參ります。何事か起こつたのかと吃驚りして聞いて見ますと、前の通りでどこかの中學生がボオル投げをしてゐたのが、過まつてボオルを家の庭中へ投げ込んだ。すると此奴怪しからんとあつて、逃げる中學生を捉まへて、その家に呶鳴り込んで行くといつて根津權現の方へ引き立てゝ行つたといふのです。氣の立つてる場合どんなひどいことをしないものでもない、萬一他樣の息子さんに怪我でもあつてはと心配はするものゝ、さうかと言つて追つかけて行けば、此方で道の眞中で夫婦喧嘩でも始めなければならず、その場合醫者も變なのですが、ともかく尼子さんに相談に行くと、さあ、大したこともおやりにはなるまいが、少しのことでもあつたら、私が行つてよく事情を打ちあけて謝罪をして來るといふので案じながら待つてゐると、案外ケロリとして戻つてまゐりました。後で先方の家から

抗議でも來やしないかしらと心配してゐましたが、それなりで何事もありませんでした。何でも根津權現附近の相當の御宅の坊ちやんだつたとかいふことでした。よく裏の郁文館中學の生徒がボォルを投げ込んだりしたのが根にあるので、とんだ災難に會はれたことなのでせう。

こんなことを數へ立てたらまだ〳〵あるでありませう。此頃かういふあたまでつけてゐた日記があつたのですが、今見當りません。一體よく日記を書いては後で破いて捨てる人でしたから、これも大方捨てたものでせう。其頃書齋に入つて見ると、机の上に墨黑々と半紙にかういふ意味の文句が書いてのせてありました。

――予の周圍のもの悉く皆狂人なり。それが爲め予も亦狂人の眞似をせざるべからず。故に周圍の狂人の全快をまつて、予も佯狂をやめるもおそからず――

氣味の悪いたらありませんでした。

何でも此頃でしたでせう。又私を里へかへさうといふので、父に引き取れと手紙をやつたものです。そんなことは前申したとほりこれ迄幾度もあつたことなので、其度毎に父は相手にならずいゝ加減な挨拶をしてゐたのですが、それでは切りがありませんので、私も腰掛けの女房ぢやなし、さう〳〵そんなことを言はれたんでは立つ瀬がないので、いつ迄ずる〳〵べつたりでゐるのはいやで

すから、最後に一度きつぱりと斷はつて下さいと父に賴みましたので、父もたうとう終ひに、鏡子は理由がないから絕對に離緣はうけないといふし、私も亦同意だ。第一夫婦の離籍問題は双方合意の上でなければ法律が許さない。しかし若しどうあつても鏡子がいやだから離緣なさらうといふのなら、正式裁判にかけて黑白を決して貰ひませう。だからどうしても我を通ほすといふのなら、裁判所に願ひを出して下さいとかう出たのです。さう書いたこともチヤンと私は知つてるのですし、又その手紙を夏目が讀んだことも知つてるのですが、一向そんなものは受取りもしなかつたやうな顏をして、こんど度はお前の親父は怪しからんとも言はず、すまして居りました。

二二　小康

それでもいゝ案配に翌る三十七年の四五月頃から大分よくなつて參りまして、段々こんな無茶なことをしないやうになりました。その代り前から貧乏だつたのが、この年には一層つまつて了つて、どうにもかうにも參るりません。そこでたしか秋から帝大一高の外に明大へ一週二時間づゝ出るやうになつて、その二三十圓の金でも餘程當時の私たちの生活にはたしになりました。けれども

が、それでも學校にはキチン〳〵と出たやうです。

三十六年の暮頃からしきりに何かを描いてゐたやうですが、私が一番不思議に思ふのは繪のことです。

十一月頃一番頭の惡かつた最中、自分で繪具を買つてまゐりまして、しきりに水彩畫を描きました。私たちが觀ても、其頃の繪は頗る下手で、何を描いたんだかさつぱりわからないものなどが多かつたのですが、それでも數は中々どつさり出來ましたやうです。勿論大きいものもないやうでして、多くは小品ですが、わけても多いのは端書に描いた繪です、橋口貢さんと始終自筆の繪端書の交換をしたものらしく、いつぞや橋口さんのところからそのアルバムを拜借して澤山あるのに驚きました。

繪は死ぬ迄好きで描きましたが、尤も中程氣が進まなかつたり忙しかつたりで描いたり描かなかつたり致しましたが、不思議なことに其後も頭が惡くなると繪を描いたのは面白いことだと思ひます。自分では何をしても面白くなし、一つくさくさした氣持を繪でも描いて紛らさうといふのでせうが、現に宅に殘つてゐる南畫の密畫などは、さういふ時に幾日も幾日もかゝつて描いたもので、

こり出すと明けても暮れてもこれでいゝといふ迄、紙のけばだつ迄いぢつてゐるのだから、根氣のいゝものです。死ぬ年なども隨分中央公論の瀧田樗蔭さんなどが來られて描かされてゐましたが、此時も大分あたまのわるい時でした。南畫の密畫は大正二年前後のもので、後で自分で表裝をして箱書きまでしたのですが、其頃もいけなかつたのです。

尤も繪を描いて居れば、きつとあたまの惡い機嫌の惡い時だつたときまつてゐるのではありません。隨分上機嫌で面白さうに樂しんで描いてゐたこともあつたのですが、力作の密畫に限つてあたまの惡い時に出來たのは妙なことだと今でも思つて居ります。

一體此の時以後氣のついたことですが、あたまの惡くなる前には、まるで酒に醉拂つたやうに顏が眞赤に上氣するのです。初めはそんなことに氣がつきませんでしたが、後ではそれがわかり、子供たち迄上の方の娘などはそれを知つて、いくら前の晩ににこ〳〵してゐても、顏がゆだつたやうに火照つてゐる時には、それ明日は又と警戒してゐます。ときまつて翌朝になると、がらりと雲行が變はるのだから不思議です。

これで晩年に一度私が困つたことがありました。鈴木の妹のところでお父さんが亡くなられまして其葬式があるといふ日のことです。一體夏目は、この離縁話をやたらに持ち出した當時、最後

に父が仕方なしに法律云々をかつぎ出したのに對して、お前の親父は不人情だ、法律さへ擔ぎ出せばいゝかと思つてるが、氣に入らない女房をもつてゐたら、おれの一生の損だといふことはちつとも考へちや居ない。本當に怪しからん、おれはそんな奴は大嫌だから、今後絶對にお前の親や親戚とは交際しないことにすると申しますから、えゝ構ひませんよと私が答へます。夏目もしかしお前は實の親なり親戚なんだから、おれに構はずに勝手に行き來をするがいゝといふので、それからといふもの婚禮葬式其他一切の親類間の交際は私一人が引きうけて、夏目は一切出ないことにしてゐたのです。それが親類の間にも通りものになつて、夏目だけは特別待遇にされてゐたのです。

ところが鈴木のお父さんが亡くなられた時には、どうした風の吹きまはしか、前の晩にはお悔みにも行くし、葬式の當日にはおれも行かうといふことになつて、機嫌よくフロック・コートにシルク・ハットで、私とならんで俥で出かけましたが、其日は朝から變に顏がてら〳〵赤いのでしたけれども、私も大して氣にせずにそのまゝ鈴木の家へ參ゐりますと、先方ではてつきり夏目は來ないものときめて居りますので、鈴木が私に申しますには、お姉樣の馬車の席は取つてあるが、夏目さんのゝは取つてない。すまないが、出かけるといふ間際になつて折角編成したのをかへるのも困るから、夏目さんからは俥で行つて貰へまいかと賴みますので、私がその事を傳へますと、よろしい

と承知してくれました。そこで呑氣な私は人の馬車にのつて、わかれ〳〵に葬儀場の淺草本願寺へ行つたのです。

さていよ〳〵讀經も始まり燒香も始まらうといふのに夏目の姿が見えません。側の人に聞いて見ると、一般會葬者席で見たやうだなどゝ申しますが、たうとう終ひ迄姿を見せません。歸へりにも行き違つたと見えてわからないので其儘鈴木家へ引き上げてゐますと、そこへ家からすぐかへれといふ電話がかゝつて參りました。歸へつて見ると大變な怒り方です。

「何故おれをおいてきぼりにする。」

と、まあかうなんです。そこで私も、

「だつて一人で行つて下さいつてお賴みしたら、よろしいと承知なすつたぢやありませんか。」

と申しますと、

「あの場合さう返事する外仕方がないぢやないか。」

といふのです。とゞ、それが後々迄たゝつて、程經て埋骨式のある日、すつかり紋服に改めて行つて參りますと申しますと、

「どこへ行く？」

と尋ねます。
「鈴木のお父さんの埋骨式に參ります。」
「お前はおれより鈴木の親父を大事にしてゐる。そんなとこには行かなくてもいゝ。」
さうなつて來れば又何んだかんだと面倒くさくなるにきまつてるから、たうとうそれなりで失禮したことがあります。それから幾日か過ぎて、私が一寸外へ出ますと、近所で鈴木に逢ひました。
「夏目さんが家の葬式以來大變怒つてられるといふから、そのわけを聞いてあやまつて來ようと思つて……」
と鈴木が申しますから、
「およしなさいよ、くだらない。あの時は私が氣がきかなかつたばかりに、あんなことになつたので、又例のゝが出たのです。だから氣にすることはありませんよ。」
と答へますと、鈴木もそれならと始めて眉をひらいて、
「病氣だから仕方がないやね。一緒の馬車で行けば行つたで、それぢやよさうといふかも知れないし、お寺へついてもあの坊主のお經の讀方が氣の喰はないなんて怒り出すかも知れないんだから。」
と其儘笑つて後戻りをしたことがあります。そんなわけで顏が赤く火照つてると、いつ何かの拍

子で爆發するか知れたものでないので、頗る危險なのです。
この三十七年の夏頃、此頃は一時にくらべれば餘程よくなつたのですが、それでも時々怒つて、一度こんなことがありました。夕方恒子がしきりに泣きましたら、それが癇癪に障はつたと見えて、貴樣たちがよつてたかつて泣かせるのだらう、おれのところに連れて來ておけといつたわけで、自分の部屋に連れて參りました。ところが此の子は疳性でかへつて火のつくやうに泣くのです。私はどうする氣か知らんと半ば可笑しくも亦危かしくも思ひながら、ともかく赤ん坊をおんぶしてお醫者のところへ藥取りに參りましてかへつて來て見ますと、玄關側の書齋には灯がついて、夏のことだから窓を明け放して、簾をかけてあります。中では恒子がまだ元氣に泣いて居ります。どうしてるかしらと簾をすかして見ると、泣いてる子の側に坐はつて、しきりと團扇をもつて一生懸命あほいで居るではありませんか。それなり私も家へ入つてなほも放つておきますと、やがて女中を呼んで、
「連れて行け。」
と泣いて泣いて泣きやまないお荷物にたうとう匙を投げて了ひました。
あたまの工合がよくなりかけると、段々怒る度合が少くなつて、たゞだまつて人の樣子を窺つて

るのです。私たちにはすぐそれがわかるのですが、自分ではあたまがなほりかけて來たとは思はずに、反對に彼奴近頃はおとなし相な顏をして飴を食はせてゐるなと、それで氣をゆるさずに警戒しながら眺めてゐる樣子です。しかしよくなつたとは申せ、ほんの一時小康を得たといふ程度で、三十七八九と續いて、一進一退の狀態でしたが、本當によくなつたと思つたのは四十年に今の早稻田の家に越してからで、それから大正二年迄は、まづ〳〵出ないと言つてよかつたでありませう。其間にあたまの代りに胃を惡くして了ひまして、それがたうとう死病になつて了つたのでございます。

七月頃、私の父が高利貸にせめられて困るから、どうか借用證書に判をついて與れないか、迷惑にかけない積りだからとたつて賴みましたが、判をつくのだけはいやだと申しましてきつぱり斷はりました。しかし金は何とかして上げなければならない。殊に最初の賴みではあり、こん度ばかりはといふので、手元にはないのでやむを得ず菅さんから二百五十圓程用立てゝ頂いて、そつくりそれを父の手に渡して、一時を凌いで貰ひました。こんな時には隨分親切に骨を折る方でした。がそれもすぐに此方の肩にかゝつて來ることなので、此月から、前に外からお借りした分と一緒に月賦でおかへしして居りました。此頃が一番金に困つてゐた時なので、一寸したことにも弱りました

が、しかし苦しい中にも丸善から本を買ふのだけは、よして下さいとは言へず、足りないときはだまつて質屋通ひなどして、どうやら凌ぎをつけて居りました。尤も夏目の方でも不斷は家の暮らし向きなどに口を出すではなし、自分も本を買ふ外お小遣を使ふではなし、お客が見えたつてそんなわけですからおもてなしも出來ないのですが、それを又氣にかけて見榮を張らうといふのではなし、そんな點については、頭さへ鎭まつてくれゝば、貧乏な中にも比較的樂なのでした。

二三 『猫』の家

こんな工合に惡かつた頭も、三十七年の春から夏へかけて大分よくなりまして、無鐵砲の癇癪を起こして氣狂じみたことをするやうなことも少くなりました。それにつれて自分でも大層勉强が出來るやうな樣子で、本をよんだり物を書いたり、殊に講義のノオトなどもいゝ按配に進むらしいので、勿論合間合間に怒るやうなことはあつても、それも一時のことになつて、段々重くるしい靄が晴れて來るやうな有樣でした。ところで面白いことに思ひますのは、頭の調子がよくなつて來るに連れて、大學の講義のノオトの字が目立つて小くなつて行くことです。尤もこれは小く書いた方が

紙の枚數を使はずにすむので便利なせいだつたのかも知れませんが、翌々年の末西片町へ越した頃のノオトの字の小さいつたら、まるで虫目鏡で見なければ讀めないやうな字を書いたものです。自分でも『道草』か何かの中に、このノオトの字を形容して蠅の頭のやうな字と申して居る位ですが、今宅に殘つてゐます當時の『文學論』の講義のノオトを見ますと、最初は中判の洋罫紙に、罫からはみ出しさうな大きな字で横樣に書いて居るのが、終ひ頃になると、振り假名活字のやうな小い字になつて居ります。それでも、若い時にトラホームを病んで、それから慢性の結膜炎をやつて時々目藥をさしたりはしてましたが、元來目性がよかつたと見えて、晩年になつて老眼鏡をかける迄、目鏡といふものはかけたことが御坐いませんでした。ずつと後のこと、人相を見る人から、眼が三白眼でどうだとか言はれて自慢してゐたことがありましたが、瞳と白味のところが少しぼかされて濁つてるたやうでした。

この六七月、夏の始め頃かと覺えて居ります。どこからともなく生まれていくらもたゝない小猫が家の中に入つて來ました。猫嫌ひのわたくしはすぐに外へつまみ出すのですが、いくらつまみ出しても、いつかしらん又家の中に上がつて來て居ります。そこで夜雨戸を閉める時などは、見つけ

ると因業につかまへては外へ出したものです。しかし翌朝雨戸を操るが早いか、にやん〳〵といつては入つて來ます。それが又それ程嫌はれてるとも知らず、歩いてゐると後から足にじやれついたり、子供たちが寢てゐると、蚊帳の外から手足をひつかいたりします。其度毎に又猫がといつて泣くのを合圖に幾度殘酷につまみ出されたり、放り出されたりしたか知れやしません。が何としても圖々しいと言はうか、無神經と言はうか、いつの間にやら入り込んで、第一氣に喰はないのは御飯の御櫃の上にちやんと上がつて居ることです。腹が立つやら根氣まけがするやらで、私もたうとう誰かに頼んで遠くへ捨てゝ來て貰はうと思つてゐると、或朝のこと、例のとほり泥足のまゝ上り込んで來て、おはちの上にいゝ工合に蹲まつてゐました。そこへ夏目が出て參りました。

「此猫はどうしたんだい。」

と、何處かで貰らつてゞも來たのかと思つたものと見えて尋ねます。どう致しまして、此方は何とか打放らかして了ひたいのだけれど附き纏はれて困つてる始末、

「何だか知らないけれども家へ入つて來て仕方がないから、誰かに頼んで捨てゝ來て貰はうと思つてるのです。」

と申しますと、

「そんなに入つて來るんなら置いてやつたらいゝぢやないか。」

といふ同情のある言葉です。ともかく主人のお聲がゝりなので、そんならといふわけで捨てること は見合せました。それから猫は大威張りで相變らずおはちの上にのぼつたり、腹這ひになつて夏目が朝新聞をよんでゐると、のそ〳〵歩るいて行つては丁度脊中の眞中に乘つてすましこて居ります。しかしさうなつてからといつて惡戯がなほつたわけではなし、それどころか一層ふざけ散らして、子供をひつかいたりそんなことをして仕方がないので、時々物尺でどやされたりして居りました。

ところが或る時、よく家に來るいつものお婆さんの按摩が參りました。膝に來る猫を抱き上げて仔細にしらべ上げて居りましたが、突然、

「奧樣、此猫は全身足の爪迄黑うございますが、これは珍らしい福猫でございますよ。飼つてお置きになるときつとお家が繁昌致します。」

とかう申します。この小猫の毛並といふのが、全身黑ずんだ灰色の中に虎斑がありまして、一見黑猫に見えるのですが、そんなことも知りませんので、爪の尖や足の裏迄はしらべたこともありませんでした。が言はれて見れば全くそのとほりで、殊に福猫が飛び込んで來たと言はれて見れば何となく嬉しくもあるので、折角來たのを捨てゝはとそこは現金なもので、其日から前のやうに虐待

もしなくなり、悪戯が過ぎると御飯もやらないなんかと因業なことをしたのが、今度はあべこべに私が自分から進んで、女中のやつた御飯の上におかゝをかけてやつたりして、大分待遇が違つて參るりました。猫の方では益々いゝ氣になつて子供の寢床に入り込んだりして、其度に癇持ちの二女の恒子なんかは夜中でも、

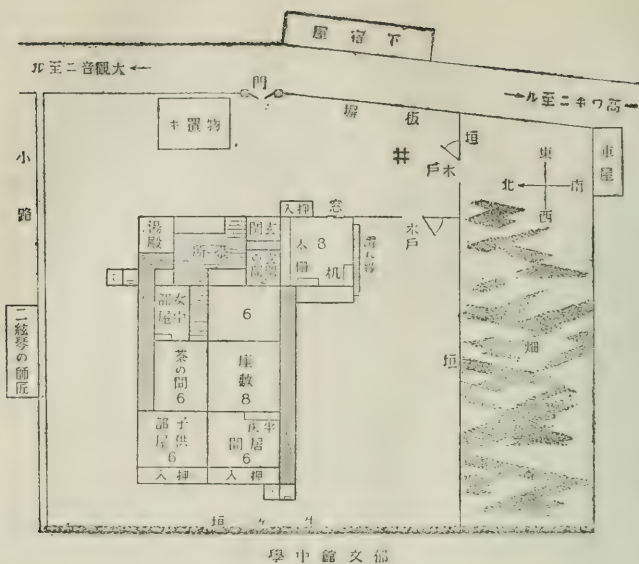
「猫が入つた、猫が入つた。」

と火事でも出たやうにキィ〳〵聲を立てます。すると夏目が物尺をもつて追つかけ步るいたりして、時ならぬ活劇を演じたこともよくありました。

これが有名な初代の猫の少年時代です。

こゝで千駄木五十七番地の家の模樣を一寸お話しておきませう。私たちはこゝで二度泥棒に入られましたのですから、餘程泥棒の入り易い家と見えます。ですからこゝであんまり詳しく家の圖面なんかを書くと、泥棒の手引をするやうなもので、現にお住みになつてる家主の齋藤博士の御迷惑になるかも知れませんから、これからのお話に必要な程度を止めて、ざつとお話しすることにして置きませう。尤もいつぞや齋藤さんは、『猫』をよむには家の模樣がわからんといかんとか仰言つてられたさうですから、或はお叱りを受けるやうなことはないかも知れません。

先づ千駄木の道に面して門があつて、門を入つてじきに玄關、玄關の間が二疊か三疊敷。玄關は東に面して居ります。玄關の間を出ると南をうけた縁側があつて、取突きが長細い六疊位の廣さの部屋。そこは物置き同然に本をつめて置きました。お隣が八疊の座敷。こゝで夏目が朝よく猫を背中にのせたまゝ寢そべつて新聞をよんでゐました。次が六疊で私の居間。こゝに私たちは寢みます。この三つの部屋が南向きで、その背中合せに、私の居間の後ろが六疊で子供部屋。座敷の後ろが茶の間で八疊、その隣が三疊の女中部屋で、それに隣合つて台所と湯殿があります。夏目の書齋は玄關脇の六疊で、間は襖になつてゐるのですけれども、そこへ大きな本棚をおいて、わざ／＼一たん廊下に出て、そこから三尺の戸を開いて入るやうになつて居ります。その書齋の東側の窓が、夏目があたまの惡い時、毎朝毎朝、道を隔てゝ向ひ側にある下宿屋の書生に、オイ、探偵君と呼びかけた記念の窓です。南に小い窓があり、あとは開いて縁側になつてゐます。大きな机を南に向けて据ゑて居りました。圓窓の前の空地には古井戸が捨てゝあります。

まづ大體これだけの家ですが、書齋のわきに木戸があつて、それから又もう一つ木戸がすぐ外側に曲の手になつてついてゐて、そこから畑に出られます。畑の西の外側が郁文館中學の運動場、南

本郷區千駄木五十七番地の家の當時の見取り圖です。元來齋藤博士のお宅でしたのを、博士が仙臺の高等學校に赴任して居られた留守中借家して居たものです。今では大分模樣がへになつたところもあるさうです。『吾輩は猫である』を始めとして多くの短篇がこゝで書かれた紀念の家で、期間は明治三十六年三月から同じく三十九年十二月迄です。今では齋藤博士が住んで居られます。

畑と庭との間に垣根がありました。

畑も大分廣いので、それが家についてゐるのを幸ひ、女中でそんなことの出來るのがあつて、茄子や胡瓜を作つたり、南京豆を植ゑたりしたものです。よく垣の下を鼬がちよこ〳〵走つたり、蛇がによろ〳〵這つたりしました。畑のところへ行つて、上の娘などは郁文館中學の運動會を見たりして居つたものでした。

ざつとこんな調子の住ひでした。九月の新學期のことだつたと覺えて居ますが、前にも一寸申しましたロンドンで御一緒だつたといふ犬塚武夫さんの紹介で、大學に入るについての保證人を賴みに小宮豐隆さんが始めて見えました。この新大學生さん、大方一高で剛健の風をおほえてゐられたのでせう。初對面なのに胡坐をかいたとかで、後でいろ〳〵客も澤山來るが、始めて來てあぐらをかいた客はまづないといつて夏目が話して居りました。

鈴木三重吉さんが手紙をよこし始められたのも此頃からであつたと思ひます。この鈴木さんの手紙では大變な笑ひ話があるのです。

今お話したこの犬塚さんが、やはり此頃の夜來ておいでになつて、散々座敷で話していざお歸へりにならうといふことになつて、玄關に出て御覽になると、帽子と外套とが見當りません。たしかにこゝにおいたのだがといろ〳〵家中でさがすのですが、やつぱりありません。外套はともかくとして、どうも帽子なしではといふので、ともかく一時凌ぎに夏目ののをかぶつてお歸へりを願ふことに致しました。多分こそ泥にやられたのだらうといふことになり、段々樣子を考へて見ますと、客と主人とが八疊の座敷で話してゐるところをこれ幸と、畑の方の木戸から入つて、眞暗な書齋に入り、それから一旦廊下へ出て、玄關の部屋にはいつて外套と帽子とを失敬したらしいのです。書齋の中は洋書ばかりなので手をつけませんでしたが、たつた一つ机の上にのせてあつたニッケルの懷中時計が見えなくなつて居りました。この時計は夏目が學生の頃七圓五十錢で買つて、それから西洋迄お伴をしたといふ大古の代物です。

ところが實際よくしらべて見ると、こゝに不思議なことが發見されたのです。といふのは、丁度其頃來た鈴木三重吉さんの、それは〳〵長い情の籠もつた手紙が、机の上に置いてあつたのですが、それの一端が机の上に殘つて障子の外へ洩れ出てゐるといふ騷ぎ。それを傳はつて行くと、すぐ前の木戸をぬけ、やがてその又次の木戸をぬけて、畑の中迄つながつてゐるのだから並大抵の長さぢ

やありません。さうして畑の中で終るところに大きな大便がたんまり垂れてあつて、その手紙の一番先でちよんと拭いてあるのですから、泥棒の度胸と言ひ用意と言ひ、それの御役に立つ爲めに机の上からずる〳〵に連れて行かれた手紙の長さと言ひ、みんな揃つて申分がありませんでした。まさか泥棒に尻を拭かせやうが爲め書かれた手紙ではあるまいし、とんだ手紙の滑稽な受難といふものです。流石に私たちも可笑しくなりましたが、夏目は夏目で、

「こんな情味のある手紙でお尻なんか拭いちやバチが當る。本當に中味を讀んだら、中々尻なんか拭けるもんぢやないのに。」

と申して居りました。其頃鈴木さんは、大學を休んで、田舍の方で靜養してられた時だつたのでせう。勿論手紙が來たのは夏目が物を書き出した後のことに違ひありません。

二四　『猫』の話

此年の暮頃からどう氣が向いたものか、突然物を書き始めました。『ホトトギス』の正月號に『吾輩は猫である』の第一回『帝國文學』の正月號に『倫敦塔』、『學燈』に『カーライル博物館』と

いつた工合に續け樣に書きました。

創作方面のことは私にはよくわかりませんが、別に本職に小說を書くといふ氣もなかつたところへ、長い間書きたくて書きたくて堪らないのをこらへてゐた形だつたので、書き出せば殆んど一氣呵成に續け樣に書いたやうです。これから翌年にかけて『猫』の續きを書き、『幻影の盾』だとか、『一夜』だとか、『薤露行』だとか、其の翌年にも『猫』の續きの外に『坊ちやん』や『草枕』などを書きまして、殆んど每月どこかの雜誌に何か發表しないことはなかつた位でしたが、書いてゐるのを見てゐるといかにも樂さうで、夜なんぞも一番おそくて十二時一時頃で、大概は學校から歸つて來て、夕食前後十時頃迄に苦もなく書いて了ふ有樣でした。何が幾日かゝつたか、今そんなことをはつきりは覺えて居りませんが、『坊ちやん』『草枕』などといふ比較的長いものでも、書き始めてから五日か一週間とは出なかつたやうに思ひます。多くは一晚か二晚位で書いたかと覺えて居ります。尤も自分ではどんな苦心やら用意やらを前々からしてゐたものか知りませんが、傍で見て居るとペンを執つて原稿紙に向へば、直ちに小說が出來るといつた工合に張り切つて居りました。だから油が乘つてゐたどころの段ぢやありません。それですもの書き損じなどゝいふものは、全くといつていゝ程なかつたものです。それが晚年になりますと、書けなくなつたのか、書きづらいものを

書いたせいか、或は妙にこり出したのか、ともかく私にはよくその邊のことはわかりませんが、山のやうに書損ねの原稿紙を出して、後でそれに手習なんかをして居りました。さうして書く量も晩年には一日に新聞一回分ときめて居たやうですが、此頃から見ると隨分違つたものです。殊に徹夜なんかしたり、傍で見る目も痛々しい程苦しんでゐる樣子がとんとありませんので、よく外の文學者の方がそんな苦心談をされるのが、そんな經驗のない私には全く腑に落ちない位のものでした。だからこんな片手間な樂なことをして、それで書く當人は面白く、私たちの生活がいくらか樂になるのだから、こんなうまいことはない位に思つたものです。今思つて見るとその創作熱の旺んなことつたらなかつたのでありませう。

此頃はまだ萬年筆を使はない前で、ロンドンから持つて來たのでせう。細身の蝶貝のペン軸を使つてしきりに物を書いて居りましたが、後で萬年筆を使ふやうになつてから、それを子供にやりました。丁度指のあたるところがすれて、いゝ工合に丸味を帶びてへこんでゐたのですが、後で子供たちのお友達が、本箱の戸をこぢあける時に使つて折つて了つたのは惜しいことをしたものです。

三十七年はこんな工合に暮れました。御正月の三日に私が臺所へ出て見ると、猫が子供の食べ殘

こしの御雜煮の餅をたべて、しきりに前足でもがきながら踊ををどつて居ります。女中たちとそれを見て、あんまりいやしん坊をするからと笑つて居りますと、ちやんとそれを聞いてゐて『猫』の中に書いて了ひました。『猫』の中にはそんな工合に子供二人が、お嫁に行くなら招魂社へ行かう、しかし九段には水道橋を渡つて行かなければならないから遠いわよなど〻話してゐるのも書いてありますし、その時代の私共一家の生活の實際が隨分澤山織り込まれて居ります。中には全く空想で、小說的に都合のい〻やうに書いたところも多いやうですが、事件や人物は大概見當がつくのが多いやうです。といふより、おいでになつた方々から伺つたお話や、その動作や癖なんぞを、い〻工合に取りまぜて書いたものと見えて、時々その人らしい斷片がちよい〳〵目に見えて來るといつた方が穩當かも知れません。

その頃よく宅にいらした方々は、寺田彥寅さん、野間眞綱さん、高濱虛子さん、橋口貢さん、それから野村傳四さんなどでした。『猫』の中に書かれてゐる生活資料の方は大體私が詳しい積りですが、文章のことは高濱さんなどの方が、ずつと詳しく御存知の筈です。第一『吾輩は猫である』などゝいふ題からして、『猫傳』としようかどうしようかと本人の夏目が迷つて居たのを、書き出しの一句を取つて、高濱さんがこれがよからうといつておきめになつたのだとか伺つて居ります。

大體『猫』は最初からあんな長篇にする積りは自分にはなかつたのでせう。ホトトギスに發表して見ると、みんなが面白いといつてほめそやすし、自分でもあんなものならいくらでも書けるといふわけで、後が見たいといふ讀者の註文と、虚子さんあたりにすゝめられて、一年もつゞけてあんな風に書いたのでありませう。その頃のさういふことは虚子さんが一番よく御存知の筈です。『猫』で最初に頂いた原稿料は、しめて十二三圓位のものだつたと覺えて居ります。

其頃久保より枝さんがよくお見えになりました。まだ結婚されて間のない頃で、お年も二十二三歳位たつたでありませう。折ふし御主人の猪之吉博士が洋行中なので、醫科大學長の大澤博士の御令弟のところかに同居して居られました。文學好きの、當時の謂はゞ新らしい女ともいふべきハイカラな方でした。いつも宅にいらつしやる時には袴をはいて、よく自轉車にのつておいでになりました。度々いらつしやるうちには、自然忙しがつて居る時もあり、又例のとほり機嫌の惡い時もあつたりで、段々私とも近しくなられて、一緒に買ひ物に出たり、時には子供たちなんかをどつかへ連れて行つて頂いて、隨分御世話になつたものです。

或る時、訪ねておいでになりはなつたが、甚だ夏目の機嫌が惡い。こそ〳〵私のところへいらし

て、自分が度々來るので不機嫌なのでせうかしらと、大變心配顏に仰言るので、私の方では久保さんの見た不機嫌位にはなれつこのことですから、又例ののが出たのですよとすまして居ります。久保さんの方ではさうでせうかしらと、平常をよく御存知ないので半信半疑でいらつしやいます。さうかと思へば機嫌のいゝ時などは、私の部屋に久保さんがいらつしやるのにわざ〳〵書齋から出て來て冗談口を叩いたりすることもあるのです。

「貴女は何故いつも袴ばかりはいていらつしやるのです。」

袴が氣になると見えて、こんな質問をして居ります。すると久保さんも心得たもので、

「帶が無いから胡魔化して居りますの。」

といふお答なので、夏目も感心して、

「あゝ、さうですか。それぢや帶の代りですね。」

といつた調子です。

矢張り此の春頃だつたと思つて居りますが、敎科書の出版をしてゐる開成館から、英語の本を編纂したから見てなほしてくれないかと申して參りまして、それに筆を入れてやりました。お禮に四十圓かいくらかのお金を貰ひましたので、それを私に下さいませんかといつて、私が橫取りをして

了ひました。といふのは長女の筆子が七つになつたのに、これ迄苦しい一方で晴衣一枚作つてやらなかつたのが氣になつてゐたので、早速その金で紋付を染めてやらうと思つたのです。そこで日頃の願ひがかなつたので、喜び勇んですぐに三越へかけつけて、紋付を注文いたしました。

ところが或る日寺田さんがいらつしやいますと、いきなり、

「おれは此間開成館から英語の本を見てやつたお禮に四十圓貰つたが、貰ふが早いか取られてしまつたよ。」

といふ話に、寺田さんもびつくりして。

「何處でとられました。」

と又泥棒かすりにでもあつたのかと尋ねられます。

「いや、家の奴にとられたんだ。」

でナーンの事だと笑ひ話になつたのですが、貰つた錢はこんな風にして使つた後へ、本が出來て參りました。見るとそれには、たゞなほしてくれと言つて來たからなほしてやつたのに、れいれいしく夏目金之助著とか何とか名前が出てゐます。今も昔もかうした商人にぬかりはないもので、怒つて見るけれども、もうすでに出して了つたのだから仕方がありません。やう〳〵のことで謝罪

に來て、詫證文を入れて、結局形に於いては默認したやうなことになつて了ひました。たしかEnglish Supplementary Reader とかいふ、中學上級生か卒業生程度の補習讀本で、英語の面白い物語を集めたものとか申します。それを勝手に編纂しておいて、間違ひをなほしてくれろと持ち込んで、編著にして出したのです。その本は三四冊出た筈です。その詫證文は今でも家にあるでありませう。

この寺田さん、よく宅へ見えては、超然と申しますか、漂然と申しますか、そんな風な話をしてらつしやいます。例へば

「昨日は妻君を連れて上野へ行きました。」

さういふのは寺田さんです。すると夏目が、

「君はよく妻君を連れて行くんだね。」

と出かけます。

「連れて行つては惡いんですか。」

超然と寺田さんが逆襲されると、夏目も仕方なしに、

「別に惡くもないさ。」

といつたわけで、話は自然別の方へそれて、

「俺は昨日又野間と二人で神田の方を歩るいて、飯時になつたから牛肉屋へ入ると、隣りの客が噂しあつてるのが、おれの知つてる奴の話だ。聞いてると如何にもウンデレでね。」

と夏目が話します。そこで寺田さんが、

「人間ウンデレに限りますよ。何でも細君のいふことをウン／＼と聞いてやつて、さうしてデレデレしてゐればこれに越したことはないぢやありませんか。ウンデレでなけりや夫婦喧嘩の絶え間がないわけでせう。」

で、夏目もそれはさうだなといつた工合にいや／＼賛成してゐるといつたものでした。

この三月頃から、文章會といふものが、毎月一回位づゝ宅で開かれました。いらつしやる方は、時に多少の異同はありましたが、大體高濱虛子、坂本四方太、寺田寅彦、皆川正禧、野間眞綱、野村傳四、中川芳太郎などゝいふ方々で、その日は何はなくとも朝から私も臺所に出て、いろ／＼晩飯の御馳走を作りました。文章會といふのは、大體ホトトギスの寫生文中心に、皆さんが文章をもちよつて讀みくらをして、互に批評し合ふものでした。『猫』などもしば／＼この席上で讀まれ

て、しかも讀み手は夏目は下手だとあつて、虚子さんがお讀みになり、それを聞いてゐて自分のものなのに、夏目迄一緒になつて笑ひこけてゐる事などもありました。お持ちよりにならない方もあつたやうでしたが、皆さん可成り御熱心の樣子でありました。

此頃『猫』の中に寒月が椎茸をたべて前齒をかくことが書いてありましたが、丁度正月に寺田さんが何か召し食つて前齒を折つてゐられた上に、『猫』が出てから寒月は寺田さんだといふことが一般に言はれてゐたらしいので、寺田さんも苦にやまれたのか、この文章會の時に、

「先生は人の前齒のかけたのを書いちやいけませんね。」

と抗議を申し込まれたものです。すると夏目は、

「何も君だとわかつてゐるわけぢやないからいゝぢやないか。」

と申すのですが、寺田さんは寺田さんで、

「だつて氣がとがめて仕方がないから、出來ることなら書かないで貰ひたいものですね。」

とひどく氣にしてゐらしたことがあります。

此頃よく坂本四方太さんや野間眞綱さんが、よそから貰つたとあつては、やれ蒲鉾だの蟹の足だのといつて持つて來て下さいます。それを見ながら夏目が寺田さんに申します。

「寺田はよく家へ來るには來るが、一向何も持つて來てくれないぢやないか。四方太は蟹を持つて來た、野間は蒲鉾をもつて來た。」

誰は何をくれたと冗談半分申しますと、寺田さんも敗けては居ず、

「先生は餘程貰うことがお好きなやうだ。そんなら僕は現ナマでも持つて來ませうか。」

などゝ笑つてられたことがありましたが、『猫』の中で寒月さんが土佐へかへつて、土産に鰹節を三本土産に持つて來て、懷から出すところがありますが、或はそんな話から思ひついて、私は忘れて居りますが、鰹節を下すつたことがあつたのかもわかりません。寺田さんの生國はたしか土佐の筈です。

『猫』に出て來る人物のモデルが誰だ彼だと詮議されて、多々羅三平だと言はれてゐる股野義郎さんが、いつだつたかあんなことを書かれちや困る、法學士にもなつて會社に勤めてゐるのに、あゝいふ風に取扱はれたんでは同僚にはひやかされるしとこぼすので、夏目の方では面白がつて、何も君と斷わりもしやしまいし、そんなに困るんなら新聞にれい／＼しく出して取消してやらうかなどと揶揄つて閉口させてゐた事がありました。それが人もあらうに、構はず屋の人のことといへばどんな迷惑でもわからないといふ風の股野さんの泣き言なのだから、夏目ばかりでなくみんなが面白

がつたのは無理もありません。が、寒月のモデルだと專ら噂されてる寺田さんなんかは、今でもそれを大層いやがつてらして、つひ此の間もこの『思ひ出』を御覽になつてのお話に、僕は生前先生にも惡いことをしたおぼえはない、又奥さんにも恨まれるやうなことをした覺えは毛頭ないのに、『猫』の話が出る度に飛んだ惡名をきせられてひどい目にあつて居る。教室でなども『猫』の話が出ると、寒月がそこに居るといはぬばかりに學生なんかゞ見るんで堪らないとこぼしてられたことがありましたが、それこそ今更取り消すわけにも行かず困つたことでございます。

あの中に出て來る重要な人物では、迷亭などゝいふ人物は誰をモデルにしたものか私には見當はつきませんが、大方、自分のもつて居る性格を、あのものぐさなむつつり屋の變人苦沙彌と、輕口屋の江戸つ兒迷亭とに二つにわけて書いたものでありませう。實際夏目にはさうした二面がありまして、冗談をいつたり輕口を言つたりすると際限のないところがありましたが、一人の獨立した人間のモデルをさがしませば、あののべつにへらず口をたたいて、うまく人と調子を合はせて行くところなどは、前に私が初めて九州へ渡つた時に福岡に居た叔父そつくりです。この叔父とは私の叔父の中、夏目が一番親しくつきあつて、お前の叔父はオッチョコチョイだなど申し申ししたものですが、迷亭の話振りを讀むと、私はいつもこの叔父を思ひ出します。此叔父も可哀さうに、去年蒲

田にもつてる工場の職工の爲めに、六郷川迄誘き出されて虐殺されました。虐殺する日、職工は工場で刀を研いでゐたさうですが、怨も何もないのにたゞ血を見たさい餘りやつた兇行らしく、職工もつかまつて一週間目位に自責の餘り獄中で自殺して了ひました。

二五　有難い泥棒

漸く少しづゝ原稿料が入つて參るやうになりましたから、今迄苦しい苦しいで隨分儉約に儉約を重ねて來て居りましたので何もありませんので、そろ／＼入り用のものを買ひ調へて、客に出す座蒲團をこしらへるやら、洋服をこしらへるやら致しました。實際小綺麗な普段着さへない始末に、原稿料を貰らつたのを幸ひ、縞の銘仙の普段着を自分で買つて來て、羽織と對の綿入れを作らうなどして居たものでした。

丁度四月のまだうそ寒い頃のことでありました。私は明け方近くなつて、抱いてゐて添乳をしてゐた赤ちやんが目をさまして乳を呑むので、私も目がさめました。何となく樣子が變なのでぢろぢろ四邊を見廻はしますと、たしかに寢る時きちんとしておいた子供部屋の簞笥の抽斗があいて、

中から子供の着物の赤いのがふしだらにこぼれて居ります。おやと思つて見ると、座敷との間が四五尺開いてゐます。これも寢る時たしかに閉めておいた筈です。益々變です。そこで隣に眠てゐる夏目を搖り起しまして、貴夫泥棒が入つたやうよと申しましたので、夏目もびつくりして目をさまします。起き上がつてさて夜着の尻にかけておいた例の一張羅の銘仙を引つかけようとすると、それがないではありませんか。おやといつて驚いてなほも見れば、シャツもない、ヅボン下もない、帶もない、夏目のものは一切合財ない始末です。それから私の普段着もきれいに姿を見せません。簞笥をしらべれば子供の着物があら方ないといふ騷動です。

家中を見て歩るくと、玄關があいてゐる、臺所口があいてゐる、どこから入つてどこから逃げたものか知りませんが、何しろ綺麗にやられました。廊下の障子に舌でなめてあけたものと見えて、大きな穴があいて居りましたが、まだ逃げて間もなかつたものと見えて、そこがぬれて居りました。

何しろ全家族の普段着を根こそぎやられたのだから困つて了ひました。少し寒かつたが夏目には袷を出して着せ、私は仕方なしにたつた一枚しかない外出着をきるわけですが、それとて一張羅の縮緬の紋付を着てゐるわけにも行かず、あとは大概家計不如意で、時節時節で質屋の御藏を拜借して出し入れしてゐる始末なので、丁度手頃なのがありません。が派手な長襦袢一枚で居るわけには

行かず、どうやら何かを見計らつて着ましたものゝ、おひきずりで居ることもならず、その上に女中から借りた木綿羽織をひつかけました。

夜が明けてから出て見ると、郁文館中學の隣の畑の中に、ズボン下の兩方の足にいやといふ程子供の着物をつめて荷ごしらへをしたのが、丁度蛙をのんだ蛇のやうな恰好をして捨てゝありました。それで子供の分は助かりましたが、其時の私の身なりなんかと來たらばみじめにも滑稽なものであつたでありませう。

交番に屆けますと、盜難にあつた品書きを書いて出せとあつて、安物ばかりですけれど品數が多いので大變です。それに一々金高を書けといふのだからいよ／＼もつて厄介です。

一週間ばかり致しますと、警察の方が玄關先へおいでになつて、此間の泥棒がつかまつたから、明日の朝淺草の日本堤警察署へ出頭しろといふのです。いかめしく命令するやうにさう言ふ傍には、若いいやにやさ男が、禮儀もなく懷手をして立つてゐます。夏目も私も玄關に出て行つて、多分そのやさ男を刑事だらうと考へたので、丁寧にお時宜を致しました。

それから巡査が屆けの品書きを出して、盜まれた品はかう／＼だらうといふやうなことをいふと、その若い男が品書きをのぞき込みます。すると巡査が貴樣はだまつてゐろと恐ろしい見幕で叱りつ

けます。變だと思ひましたら、それが當の泥棒君だつたには呆れて了ひました。唐棧の着物か何かで、色の生白い、どう見ても泥棒らしくない御人態なので、つひお見それしたわけです。よく〳〵考へて見れば懐手をしてるのも道理で、縛られてる手が出よう筈はないのですから、私達もうま〳〵泥棒に入られるだけあつて、迂闊千萬な話です。

翌朝早く何時迄出頭といふので、夏目は日本堤の警察署へ行きました。贓品は一旦質屋に入れてあつたのをうけ出して、それを古着屋に賣つたところから足がついたのださうで、歸へつて來て驚いたことには、何もかも一週間ばかりのうちにきれいになつてゐることでした。夏目の一張羅の綿入れが、さあ手をお通しなさいといはんばかりに、ちやんと對の袷に縫ひなほされて居ります。私の普段着なんかはこれ又御丁寧に洗ひ張りがしてあつて、すぐに縫へるやうになつてゐるのですから、頗る調法です。殊に有難かつたのは私の曰く附きの古コォトがなほつてゐることでした。曰く附きと申しますのは、裾のやぶけた仕方のないコォトを、手もないことなので、簡便になりふり構はず内側へ折りかへして亂暴に縫ひつけて、ともかくおかざりの下がるの丈をふせいでおいたのですが、それを雨の日着て白木屋へ買ひ物に行つたものです。すると入口のところで番頭がコォトをお預り致しませうと申します。私はぬがされてはとんだ恥晒らしなので、いゝえ、よござんすよと斷わり

ます。先方ではそれでもそんならそのまゝどうぞとは言つてくれません。言葉は丁寧ですが、つまりどうしても脱いでくれろといふのです。ふと氣がついたのは、コオトなどを着てゐると萬引に都合がいゝので、一切入口でお預りするといふことでした。今更仕方がありません。萬引女としてつけられるよりはましですから脱いであづけはしたものゝ、それを丁寧に疊んでくれたりするので、愈々もつてそのえらい代物に赤面したことがあります。

その曰く附きのコオトが、これ又至極手際よく裾なほしが出來て、すぐ樣どこへでも着て出られるやうになつてゐるのだから有難がらざるを得ません。こんな調法な泥棒なら申分がないので、どうか一年に一ぺん位づゝ入つてくれると有難いなどゝ呑氣なことを語り合つたことでした。

ともかく着物の類は殆んどみんな出て參りました。

小說を書き始める迄は、長年夏目の癖として、夜寢床の中に入る時に、うんとこさ讀みもしない本を枕元へ持ち込むのが毎夜のことでした。分厚な洋書を一冊切りならまだしも、二冊三冊と持ち込むことは珍らしいことではなく、時にはその上にスタンダードやウエブスターやらいふ大字引迄持つて來るのです。ぢや讀むのかと思へば別段讀む樣子もなく、感心に今夜はいつ迄も本を開いて

ゐなと思つて薄目をあけて見てますと、いつまでたつても頁をめくる音がしません。何の事、一頁も讀まないうちにもう眠つてゐるのです。讀みもしない本を御苦勞に持ち込まなくてもと申すのですが　手持無沙汰なのかともかく何かしらん持つて來ては枕元につみ重ねておくのです。

其頃私共はまだ石油ランプを使つて居りましたので、忘れてそのまま寢て了ふと困るし、又蚊帳を吊つてる時などは危くて仕方がないのです。ところが小説を書き始めてからといふものは、疲れるのですか、何かひとりで考へてる方が面白いのか、ふつつり讀みもしない本を寢床に持ち込む癖がなくなりました。

一體平常はよくねむる方で、午睡などは元からよくして居りましたが、夜も物を書く人としては早い方でしたでせうし、朝も學校があつたせいもあるでせうが、寢坊な私なんかよりはいつも早く目をさまして居りました。とにかくさういふ日常生活に對しては、これといふ無理もなくて規則立つて居たかと思ひます。

二六　『猫』の出版

少額ではあるがちよい／＼原稿料が入ります。それだけでも其頃の私たちには大變有難かつたのですが、丁度夏になつて帽子が欲しいといつてるところへ、たしか『猫』の稿料が十五圓か入りました。早速帽子屋へ行つて、そつくりそれでパナマ帽を買つて來て大分得意でかぶつて居りますと、其頃支那へ招聘されて北京の學校に居られた齋藤虎雄さんが、夏休みで歸へつて來られて訪ねて下さいました。見ると自分の御自慢のパナマよりも大分上等なのをかぶつて居られる。それを見て教師の傍ら一枚五十錢の『猫』を書いてゐたんぢや仕方がないなんかと憤慨して居たことがありました。

此年の秋、初めて話があつて『吾輩は猫である』の上編が出版されました。出版者は大倉書店の番頭をしてゐた服部といふ人が出したいとあつて、大倉の方からも是非頼むといふことで、服部の手で出版されました。たしか翌年になつて、その服部といふ人の店が立ち行かなくなつて、大倉の手に移るやうになつたかと覺えて居ります。

出版されて見ますとよく賣れます。外の本の賣れ行きはよくは知りませんが、ともかく當時毎月千部位づゝ極まつて檢印を捺して居りました。今日でも澤山の夏目の著作のうちでも一番よく出るのが『猫』で、世間でも漱石と言へばすぐ猫を思ふといつた工合に廣く讀まれて居るやうです。『猫』はそれから中巻下巻と三冊になつて出、ずつと後になつて合冊の縮刷本に變りました。

此頃の印税といふのがたしか一割五分だつたやうですが、印税を持つて來ると私が默つて取つて置きます。元々づぼらといふのではありませんが、金には執着の少かつた人のことですから、此程ではいくら金が入つて來るのだか知りません。それでもたしかに相當『猫』が賣れて金が入つて來てゐるのに、あれは一體どうしてゐるのだらう位に思つたことでせう。或日

「お前あの印税が入つたゞらうが、どうする積りなんだ。又困ることがあるだらうから、入つた時にちつとは貯金でもしておくといゝね。」

といふ話です。そこで私も、

「少し質屋のお藏に入つてゐるから、ともかくあれで出すことにしました。」

と、初めてこれ迄の苦しかつた生活のやりくりをしてゐたことを大體話しました。金のない無いといふことは自分でもよく知つて居り、子供は增えるしかゝりはかゝるし、もつとどうにかしなければならないなどゝ口には言つても、果してどれ程になつてゐるのか、根が御大名ですから、買ふ本は買ひ、たべるものだつて假令私たちは澤庵ばかりかじつて居ようと、ともかく頭を使ふ人にはと、それ程まづいものを食べさしてゐるわけではないので、そんなに家計が逼迫してゐるたのだとは其時迄氣付かずに居たのです。今の話を聞いて、

「さうかい」

とひどくびつくりして、二の句がつげなかつたやうでした。が、いゝ按配に、按摩の言つた福猫のせいか、それからといふものは、以前のやうな家計の不如意にはまづ／＼會はなかつたといつていゝでありませう。

此頃から方々の雜誌や出版者と關係が出來ました。雜誌ではホトトギスはいふ迄もなく、新小說中央公論などを始め、いろ／＼な雜誌の方が見えました。本屋では服部書店を始め春陽堂だの金尾文淵堂だの其他澤山あつたやうですが、段々訪問者が多くなつて弱つて居たことも度々でした。雜誌にのせた原稿料などの記憶は殆んど確かなものがありませんが、『カーライル博物館』が全體で八圓だつたのを覺えて居ります。それからホトトギスが始めは多くて一枚五十錢位だつたのが、後では一圓に上がりました。新小說がやはり一圓位、中央公論が一圓二三十錢見當だつたかと覺えて居ります。

こんな雜誌の編輯者や出版者の方々の外に、此頃になつて前の文章會の外に新らしくちよい／＼おいでになつた方に、厨川白村さんだとか、安藤さんだとか、瀧田樗陰さんだとか、森田草平さんだとかいふ人達がありました。其頃よく手紙をよこす人に森田草平さん鈴木三重吉さんなどがあり

まして、又大概長い手紙でした。殊に鈴木さんは、其頃神經衰弱だとかで、一年大學を休んで瀨戸内海の方に居られて、そこから手紙をよこされるのですが、こんな長い手紙が書けるやうなら、學校なんぞ休む必要はないから出て來給へなど、、夏目が言つてやつたことがあつたやうです。

此の鈴木さんについては、いつも／＼長い手紙でお馴染みになつてるたのですが、まだお會ひしたことがない。ところが遙々京都から寫眞を贈つて來られたものです。その寫眞が丁度大理石の胸像のやうな工合に撮つたもので、頗るつきのしやれたものです。そこで寫眞でさへこれ位だから本物はどんなに美しい方かと思つて、御友達の中川芳太郎さんに、

「鈴木三重吉さんていゝ男なのですか。」

と伺ひますと、

「えゝ、いゝ男ですよ。」

と、聞くだけ野暮だといつたお返事。ところがしばらく後のこと、或る日玄關に訪ねて來た人があります。丁度女中が居ないかで私が取次に出ますと、僕鈴木ですと輪廓だけは寫眞で見覺えのある顏が申します。おや／＼と思つて、色が大理石とは大分違ふのにとあての外れたことがありました。

二七　生と死

文章會はいつおやめになつたか、其年のうちに立ち消えになつたかと思つて居りますが、その主な原因の一つは、私が身重になつて、折角集まられても、前のやうに御馳走も出來なくなつたので、お斷りしたのがもとのやうでした。そこで外でやらうかなどゝいふ議もあつたやうですが、おやりになつたかどうか私にはわかりません。其後訪問客もめつきりふえたので木曜日を面會日にきめまして、これは死ぬ迄續きました。其頃集まられた方々は、文章會の方々の外に、鈴木、森田、小宮、松根などゝいふ方、それから野上豐一郎さんや、畫家の橋口五葉さんなどが見えたやうです。

十二月が臨月ですが、私はいつもお産が重い方なので、十四日の夜の三時頃に、しきりに陣痛が起こつて、いたみ出したのですが、今から始まつて、いつもだと明日の正午頃でなければ生まれまいと高をくゝつて居ますので、まあ／＼此時刻に人騷がせをするでもなからうと我慢してますと、四時頃になつてはどうにも我慢が出來ません。そこで夏目にも起きて貰ひ、女中をお醫者さんのところへ走らせて、いつもかゝりつけの牛込の産婆へ電話をかけさせました。が段々痛みは激しくな

る一方で、これではならないといふので、誰でも構はん、附近の産婆を起こして連れて來てくれといふわけで、又女中が走り出します。五時にもなるとどうやら生まれさうな氣勢ですから、さあ困りました。もう貴夫産まれさうですといふので、夏目の手につかまつてうん〳〵いつてるうちに、たうとう産まれつちまひました。さあ、大變だと狼狽するのですが、私は當の産婦で動きも出來ず、夏目も取り上げ婆さんは始めてのことだから、どうしたらいゝのかさつぱりわからない。ともかく悪い水が顏にかゝるといけないといふことを私は聞かされてゐたことがあつたので、ともかく脱脂綿で赤ん坊の顏をおさへておいて下さいと申します。よし來たとばかりに一封の脱脂綿で夏目が上からおさへてゐるのですが、それが海鼠のやうに一向捕へどころがなく、ぷり〳〵動くやうな動かないやうな、頗る要領を得ない動き方で氣味の悪いたらない。そこへ牛込の産婆が飛び込んで來て、第一私に風邪を引かしちやならないといふので、着物を着かへさせてねかせるやら、それ産湯をわかせといふえらい騒ぎで、やつとのことで大役を明け渡したのですが、これには夏目も度膽をぬかれたやうでした。

これが四女の愛子で、女ばかりこれで四人です。此の子が六つ七つになつた頃、つく〴〵顏を眺めては、どう見ても吾子ながら不器量だなどゝ申しまして、

「愛子さんはお父さんの子ぢやない。お父さんが辨天橋の下で拾つて來たのだ。」

などゝ揶揄ひますと、愛子も敗けては居ず、

「あらいやだ。わたしが生まれた時に、自分だけ脱脂綿でわたしをおさへてゐた癖に。」

とさも〳〵知つてゐるのにと言はぬばかりにあべこべに喰つてかゝります。

「こいつつまらないことをいつの間に聞いてゐるんだい。」

などゝ笑つてゐたことがよくありました。

三十九年は前年に敗けない程澤山書いたやうです。前年に書いた短篇が此年の五月頃『漾虚集』といふ本になつて出ました。自分の住居を漾虚碧堂と言つて、さういふ判をはらしたりしてゐましたから、そんなところから出たのかも知れません。『猫』は續いてホトトギスに出、秋になつてその中篇が出版されました。『坊ちやん』がホトトギスに出たのがこの四月、『草枕』がたしか九月だつたと覺えて居ます。新小説に出ました。十月號の中央公論に『二百十日』が出て、その三篇を一冊に纏めて『鶉籠』といふ本になつて、十二月春陽堂から出しました。この三十八九年の兩年が、夏目にとつて一番創作熱の旺な年だつたと思ひます。

この年の八月の末に、三女の榮子がお腹を惡くしまして、始めは大したことでもないと思つてゐるうち、どうも様子と言ひ便の色と言ひ變なので、更に診て貰ふと、赤痢の疑ひがあるといふことになつて、すぐ翌朝早く大學病院の隔離室に移されました。私がついて行つてやりたいのですが、何しろ乳呑み兒のあることだから女中をつけてやつて、時々行つて見ることにして居りました。あとは疊を上げるやら大消毒で大變な騷動でした。

上の二人は幼稚園に行くので手もかゝりませんが、厄介なのは赤ちやんです。そろ〳〵はひ〳〵が出來るので、私が病院へ行つてる留守の間には、女中が女中部屋につれて行つてねかせておきながら仕事をしてゐるのですが、するとくるりと起き上がつて、いつの間にやら台所へはひ出して行つて、猫の御飯を頂くのだからやり切れません。さうかと思へば縁側へはひ出して行つて、落つこちさうにのり出してゐるのをやつととめたとやら、中々手がかゝります。

さうしてゐる間に、幸ひと入院してゐる子供も次第によくなりましてこれで安心といつてるところへ、病院へ急な使が里から迎へに參りました。父が惡いといふのです。それからすぐに參りまして、一週間ばかりとまり切りで看護も致しましたが、とう〳〵九月十六日に五十六才で亡くなり

ました。

前にも申しましたとほり晩年非常に不遇でありまして、貧乏な上にも貧乏して居りましたので、さて亡くなつたが葬式を出すお金もないといふ始末。それでもいゝ按配に、其頃安田の保善社に出てゐたりしたので、其方からもいくらかのお金を貰ひ、それから昔親しかつたお友達からや前につとめてゐたところから何かと御心配をうけて、どうやらそれでも葬式を出すことが出來ました。私たち姉妹でも少しづゝ分擔するといふわけでした。

ところが前に、親類中におこつたことには一切不義理をするといふ夏目と私との間に固い約束が出來てゐるので、金も出しては呉れましたし、新聞の死亡廣告にも名前を列ねましたが、どうしても本人自身は參りません。私もなんでもかんでも來て呉れろとは申しません。結局顏出しをしませんでしたが、其時遺族にあてて長文の手紙を書きました。それが大變いい手紙だつたと弟などが申して居りますが、大事に保存しておいたのを、其後執達吏にやられたりした騒ぎのうちに紛失したのでせう。今殘つて居ないのは殘念です。

そこで葬式には行かず、しかも死亡廣告には名前が出てゐる。葬式に行かないからといつて、それでは學校へのこ〳〵講義に行くのも變だとあつて、其時は學校を休んで、家に蟄居して居りまし

た。こんなところはいかにもあの人らしい感じが致します。

この年の春頃であつたと思ひますが、『猫』で夏目の文名が急にあがりましたので、昔戀しくなつたものと見えまして、前に子供の頃養子にやられて、其後手の切れた筈の鹽原の老人が、人を介して元どほり鹽原の養子にかへつてくれないかと申して參りました。つまりお金を目あての言ひがかりでせう。このいきさつは前に一寸申上げましたが、今頃になつて、てんでお話にも何にもならない相談なので、夏目も餘り相手にならず、ともかく昔の養父子の關係もあることですから、今手が切れたといつても、御希望とならばおつきあひは致しませう。又家へ出入りして貰つては困るとか何とかいふわけではないからおいでになりたかつたらおいでになつても差支はない。しかし自分は今非常に忙しい體だから、いらつしやる度におあいそをしてるわけには行かないかも知れない。それさへおわかりになつて居ればといふ話で、其後ずつとたつてから、仲へ入つたその人が、鹽原の老人を連れて來て、いろ〱昔話なんぞをしてかへつたことがありました。

夏目が亡くなつた後で、何といふ方か名前も忘れましたが、ある雜誌に、この鹽原との話をどう聞き違へたものか、これだけに此方でも盡くして居りますのに、夏目といふ人は不人情だとか何とか、

事實も究めずに攻撃してゐた方がありました。多分鹽原の方の虫のいゝ話をそのまゝ鵜呑みにしての中傷記事だつたでありませう。

二八　木曜會

此頃からの漱石は、面會日を作らなければのべつ幕なしに訪問客があつて、自分の仕事がおちおち出來ないとこぼす位謂はゞ世間的にもなり又有名にもなつて來ましたことですから、今迄の書齋だけの人だつた時と違つて、自然身邊の話も何かと人樣に知れてることと思ひます。で私もその積りでかいつまんでお話しすることに致しませう。

三十九年も押しつまつてから、家主の齋藤さんが仙臺の方から東京へ轉任されることになつたので、長らく住み慣れた家を明け渡さなければならなくなりました。外の事情と違つてこればかりはどうもやむを得ません。そこで家を探し始めたのですけれども、さてとなると中々適當の家もなく、其上其頃は非常に貸家の拂底してゐた時なので困りました。夏目は丁度十二月の學期試驗のある時なので、試驗の答案調べにかゝつてゝ手が離されませんので、仕方がないので私が周旋屋へ頼んだり、

御用聞きに頼んだり、それから自分で方々へ出て歩るいて尋ねまはりました。それでも幾日かゝつて漸々の思ひで、本郷西片町十番地ろの七號、阿部伯爵のお邸の前を小石川の方へ下る坂道の上の方に家を見付けて、ともかく急場の間に合はせにそこへ引き移ることに致しました。この家賃が二十七圓でした。

いよ〳〵暮も押しつまつた十二月二十八日が移轉です。小宮さん鈴木さん野村さん野間さん野上さんなんぞと、お手傳の頭數は中中大變です。そこへ前々から話をして下すつた菅虎雄さんが馬力のことで來て下さいます。何でも二臺で二度往復するのだから安い、五圓だから、僅か五圓なんだからといふやうな話で、私もつり込まれてそれに應じて五圓で五圓でと言つて居りますと、側で夏目が二人の珍妙な問答を聞いてゐて餘程可笑しかつたと見えて、

「何だ、五圓五圓といやに五圓を鼻にかけてるぢやないか。」

つて大層笑つて居りました。

其うちに夏目は一荷物送り出すと、一足先きに本箱を買うといつて、五十圓ばかり金を懐にして出かけます。あとはてんでにこわれものなどを運んで下すつたのですが、小宮さんはたしかランプを持つて行かれたやうでしたし、鈴木さんは猫を運ぶ役でありました。紙屑籠の中ににやん〳〵

泣く猫を押し込んで、風呂敷で包んで抱いて行つたのですが、猫はびつくりしてしきりに泣きたてる。あばれたてる。しかし途中出してやるわけにもゆかないので其儘にして行くと、たうとう小便をひつかけられるといふ騒ぎ、猫は新らしい家に連れ込まれて紙屑籠から放免になると、しばらくの間にやん／＼泣いて居たが、其うちいつしか姿を見せなくなりました。どうしたのだらうといつて居りますと、元の家が戀しく、そこへ戻つてゐたといふことがわかりましたが、三日ばかりして又かへつて參ゐりました。

其日一番後に私が殘つて、さてこれから俥にのつて少しばかり大切なものなど持つて出かけようといふところへ、皆川正禧さんがかけ込んで來られて、何か持つものはないかといふお話。さうさうボン／＼時計があつたつけといふわけで、それを持つて行つて頂くことに致しました。皆川さんがそれを包んでかゝへられるとカチ／＼と音がします。私は思はず泥棒がボン／＼時計を盗んで背負つて行くと、背中で不意に十二時が打つてびつくりしたといふお話を思ひ出して可笑しくなりました。この柱時計はいまだに家の茶の間に、まるで古物の見本のやうな體裁でぶら下がつて居りますが、始め里の俥夫が三圓出して買つて來てくれたもので、もう數へて見ると二十六年にもなります。いまだにちつとも狂はないのには驚く外ありません。

其時夏目が買つて來た本箱は、硝子戸付きの大小二つで、兩方で三十七八圓だつたと覺えて居ります。これもいまだに書齋にあります。

翌る日鈴木さんと小宮さんとが障子を張りかへに來て、一日かゝつて全部はりかへて下さいました。そこで御禮にお小遣を五圓宛あげたものですが、それが例になつて、お小遣がなくなると、奥さん障子を張りませうか、先生障子をはらして下さいといつたわけでしたが、さう／＼一年中障子ばかりも張つては居られません。そこで今度は奥さん僕に二圓下さいませんかといふおねだりです。何にするのと尋ねますと、下駄を買ふのだとの事。當時二圓の下駄を學生が穿くのは贅澤過ぎるとあつて、夏目に、ふんだ、學生の分際で、十五錢の麻裏草履で澤山だなどゝやられてゐたものですが、そんなことといつかなこのお殿樣が聞くわけのものではなく、當時小宮さんの二圓の下駄といふのは、私どものところでは有名な話でございました。

さて西片町でも面會日の木曜日は賑はひました。これをいつしか木曜會などゝよぶやうになつたのは此頃からでありませう。これは今の早稻田南町に越してからも續き、亡くなつてからも、今迄書齋に集まつたものが此儘散り散りばら／＼になつて了ふのは惜しいとあつて、毎月命日の九日

に遺室へ集まつて談笑することになり、今に至る迄百數十囘を重ねて居りますが、この九日會などても見やうによつては、一種の木曜會の續きと見て差支ないでありませう。

其頃高濱虛子さんが國民新聞の文章欄の主任をして居られ、篠原溫亭さんがその記者でお二人ともよくお見えになりましたが、其外集まられた方々には、鈴木三重吉、野上豐一郎、森田草平、瀧田樗蔭、野村傳四、皆川正禧、野間眞綱、松根東洋城、阪本四方太、寺田寅彦、中川芳太郎、小宮豐隆こんな方々が主だつたと覺えて居ります。

私の妹婿の鈴木禎次さんが洋行から歸つて來て、名古屋の高等工業學校の教授になつたのは此頃でしたでせう。ところがこの西片町の家といふのが鈴木のお父さんの居られる家とすぐ目と鼻の間なので、名古屋から上京して來るとは、夜などよくぶらりと訪ねて來たものです。さうして机の上のノオトの細い字を見て驚きながら尋ねるのです。

「どうしてそんな小い字を書くんです。」

「こりや八百圓の元手だ。」

片方はすまし込んで答へてゐます。

「今その元手が種切れになるとこなんで、大急ぎで製造中なのさ。」

その頃大學からは一年八百圓しか貰らつて居ないのでした。丁度『文學評論』の草稿を書いて居た時だつたと思ひます。

其の鈴木が名古屋へ赴任した早々、これは一圓五十錢の名古屋瀨戶の火鉢だが中々いゝ工合だとあつて、大きな火鉢を一つ送つてくれました。夏目は大にそれが氣に入つて書齋で愛用してゐたものですが、それから後にはずつと上等のゝを買つて、それを茶の間へ下げました。一度火を入れ過ぎてふちをかきましたが、いまだに使つてるところを見ると、これも丈夫なものではありませんか。

二九　朝日入社

この年の三月初めのことだつたと覺えて居りますが、大學の大塚博士から、英文學の講座を擔任して敎授になつてはどうかといふお話がありました。その頃の敎師から得る定收入といふものは、先程申したとほり大學が年八百圓、一高が年七百圓、それに明治大學の方が漸く月三十圓位の見當でしたが、專任敎授になると月百五十圓呉れるとかいふ話でした。しかし家では月どうしても二百

園はかゝる。幸ひ原稿料が入つたり小說の印稅が入つたりするやうになつたので家計も立つて行くのであるが、敎授になつた、その代りには內職はまかりならぬとあつては、第一あがきがつかない。それにいつまで敎師になつてゐても仕方がない。さういふ肚もあつて迷つてゐたところへ、折よく『朝日新聞社』の方から、うちの新聞へ入つて小說を書く氣はないかといふ話を持ち込まれたのです。渡りに舟のわけなのですが、こゝは謂はば一生の道の岐れ目なのですから、夏目も大事を取つて愼重に考へたやうです。大學は元々好かないので、此先ともに長く居りたくはない。けれども敎授となれば、假令收入は少くとも、一箇獨立の地位安全な人間で、滅多に他から動かされる心配もない。又かうやつてずつと末長く勤めて居れば、恩給もつけば月給も上がる。さういふことも家族のものゝ爲めには考へなければならない。そこへ行くと新聞社は結局一つの商賣だ。いつ何時どういふ變動がないとも限らない。主筆が呑み込んで居ても、社主の氣がどうだかわからない。いろいろ考へた揚句、ともかく大學で敎はつて識つてるからとあつて使者に立つて來られた今の能樂批評の坂本雪鳥さん、其頃の白仁三郎さんに自分の希望を腹藏なく申上げて『朝日』の方へ傳へて貰らつたやうです。主筆が池邊三山居士で、夏目は池邊さんを非常に信賴して居りましたので、一二度話をした後はともかく入社の決心をしたやうでありました。

その時の條件が、月給二百圓、恩給は今迄社に其規則がないといふので、其代り賞與を少しづゝ餘分に出さうといふやうなことでした。夏目の責任と申しますか義務と申しますか、ともかく『朝日』へ盡くすべきことは、毎年長篇一篇、其外新聞にのせて差支のない文章をのせる、他へは殆んど書かないといつたやうなことだつたかと覺えて居りますが、つまりはどちらも信じあつての紳士協定といつたやうなものでございましたやうです。

丁度この四月は、洋行期間二ケ年の義務年限四ケ年を果したところなので、ともかくこれで漸く義務を果したとかいつて、晴々した氣持で大學の玄關を出て來たさうですが、すぐに辭職の手續きを取つて、愈々朝日入社といふことになりました。そこで年來の垢を洗ひ落す積りでもあつたでせうし、又大阪本社の方々にも會ふ必要があつたのでせう、三月の末にひとり關西へ旅立ちました。

京都では學長の狩野亨吉博士のところへ御厄介になつて、折ふし落ちあつた菅さんと二人で、ゆるく方々を見物して歩るいたやうです。それから大阪へ行つて、村山社長始め鳥居素川さんなんその幹部と初めてお會ひしたやうでした。後で鳥居さんのお書きになつたもので承知したのですが、夏目を朝日に迎へようといふ抑々の發議者は鳥居さんが『草枕』をお讀みになつて、この人な

らばと傾倒されたのがおこりだといふことでございます。

この關西旅行の留守中、女ばかりで私達が淋しいだらうといふわけで、鈴木さん野上さん小宮さんのお三人が交る交る宿まりに來て下さいました。さうして夕方になると、もう京都から歸へる頃だがなあと停車場まで迎へに出て、今日もだめだ、今日もだめだといつたわけで、おそくなつて歸へつていらつしやるのです。

かういふ或る日のことでした。鈴木さんと小宮さんとがよつて、

「野上の奴、あの若い女を自分の妹だ妹だと言つてるが、本當に妹なのかしら。」

「こんだも先生に妹が京人形を買つて來てくれといつてるたとか賴んでるたよ。」

といふ話です。そこへ噂の主の野上さんが入つて來られました。

「君あれは本當に君の妹かい。」

「だつて顏立ちが似てるだらう。」

と問はれる方はなれたものです。

「ぢやそんならそれで、此方にも積りがあるから。」

とか何とかおどし文句を二人がならべるのですが、どうも氣にかかつて仕方がなかつたと見え、

とゞ様子を見に行かうといふことになつて、貴樣行つて見て來いといふわけで、小宮さんが翌日あちらに出かけます。

さて使者の役目を仰せつかつて屋方に乘り込んで見は見たものゝ、その頃はうぶな學生さんのことですから、藤辨慶はきめ込んでるものゝ若い女の前へ出ては、たゞ一圖にきまりが惡く、ぼうと顏が眞赤にほてつて來て、問題の婦人はすぐと前に鎭座ましますのだけれども、とても顏を立てなほして眺めるどころの話ぢやありません。まるで見に行つたのか見られに行つたのかさつぱりわからないで、庭先ばかり見てかへつたといふわけ。歸へつて來ると鈴木さんが、

「おい、どんな顏をしてゐた？　野上に似てゐたかい。」

と勢込んで尋ねます。片方はしよげかへつて、

「何でも額のところが三角で、ゼムの廣告見たいな形をして居つた。」

とばかりで、それ以上何も答へることが出來ません。

「だから貴樣はだめだといふんだ。」

そんなら自分で行つて見屆けて來たらよさゝうなもんですが、そこは鈴木さんの鈴木さんたる所以で、かういつて大名威張りをして居ました。

一體野上さんの所謂妹さん問題は、若い人達ばかりの間だつたものですから、當時隨分騷がれたものです。最初寺田さんが原町に下宿して居られた頃、すぐ隣りの部屋かに一高の學生が居る、そこへ姿を見たことはないけれども、若い女持の洋傘や沓をもつて訪ねて來るものがある、一高の生徒の分際で若い女と交際したりして怪しからんなどゝ氣にしてられたものですが、それがどうやらそれらしいといふのですから、中々因緣も深いわけです。

さうかうしてゐるうちに、毎晩毎晩迎へに出てゐる時はかへらず、ひよつくり十二日の正午頃に歸へつて參りました。いろ／＼お土産物などを買つて來て、大層上機嫌でありました。例へば鈴木さんには盃、野上さんの所謂妹さんには頼まれた京人形など、其外いろいろお土産を買つて參りました。

後で野上さんが言ひにくさうに實は細君だと白狀してられたことがありますが、今から考へて見ると何だか可愛らしい氣がして罪のない話ではありませんか。その所謂顏の似て居るといふ妹御さんなるものが今のやゑ子さんであるのは申す迄もありません。

はつきりした記憶はありませんが此の留守の前後だつたとおぼえて居ります。大學で講義した「文學論」を纏めて大倉書店から出版するといふので、自分ではそれにかゝずらつてゐる暇もない。

中川芳太郎さんを煩はして校正やら何やら一切合財おまかせして居たやうでしたが、かへつて來て本になつてゐるのを見ると、どうしたものか大變誤植などが多い。自分の豫期に反したものでありませうか、こんな間違ひだらけな不滿足な本は、自分の名によつて世間へ出すことはならない、つまり學者的良心が許さない。早速みんな集めて來て、庭先きで燒いて了ふといつた見幕でしたが、いかんせん其時にはすでに市へ出た後なのでどうすることも出來ませんやうでした。後でそれでは氣がすまなかつたと見えて、正誤表を出して方々へ配つたり致しました。『文學評論』の出版についても講義の整理を同じく此頃瀧田樗蔭さんと森田草平さんとがまかされて始められたやうです。何でも金尾文淵堂から出版することに大體きまつてたやうでした。お二人がお引受けになつたのも、勿論夏目のだから進んでやらうといふ外に、いくらかそれによつて生活の足し前にしよう、又此方でもさういふ風にして上げようといふ双方の諒解があつたのでありませう。ところがそのうちに瀧田さんは中央公論の方で忙しくなり、森田さんは森田さんで所謂煤煙事件でこれ又尻が落ちつかず、そのうちにいつしか草稿が見えなくなつたなどゝいふ騷ぎがあつて、これの出版はずつと後へ延びて、發行所も春陽堂になつて出たかと思つて居ります。

話は何もこれの續きではありませんが、序だから夏目が人樣の世話をして、かなり面倒を見ては、

後で何だか裏切られたやうな氣持にされたことが時々あつたことを申上げませう。勿論全部が全部ではなく、裏切られた方がむしろ例外だつたかも知れませんが、とにかくさういふ目にあつたことも二度や三度のことではありませんでした。一體に夏目は涙もろい質で、人の氣の毒な話などにはすぐに同情して了ふ方でしたし、又頼まれゝば慾得を離れて、かなり骨折つて何かと面倒を見る質の人でした。晩年にはそんな事も憶劫になつたのか、滅多に自分から進んで勞をとるといふやうなこともしませんでしたし、又他人なんか頼りにならないものだと口癖に申しても居りましたが、其頃は頼まれゝばいやとは言はないで損ばかりしてゐたものです。

それからずつと後のことではありますが、或時何かの拍子で丁度そんな場合にのぞんでゐたものですから、私が、

「それ程にすることもないぢやありませんか。どうせ人に親切を盡くしても、此方の心は通はないで、結局はつまらない目に會ふ位が關の山ですから。」

といつも裏切られることの多いのを申しますと、夏目は、

「親切を盡さうといふ此方にまで不親切な心を起こさせるのは、つまり先方が惡いんだね。」

としんみり申して居た事がございます。後では冷い、理智的な、物を離れて眺めてだけ居る人の

やうにとられもしたやうですが、元來隨分と情深い情味の厚い人だつたやうに思はれます。それに何よりも人との關係で氣のつくのは、恐ろしく几帳面なことでございました。だから約束なんかは本當に堅いものでした。その代り人がそれを破つたりするやうなことがあると、一ぺんにその人に對する信用をなくするといふやうな傾きもありました。

朝日入社もきまり、學校も一切やめて自分の書齋に落ちつくやうになつたこの四月のある木曜會のことでした。鈴木さんの發案で、中川さん小宮さんが助手格で、御三人で台所を借りて料理をするといふ騷ぎ。御客はといへば夏目を始め始終木曜會に集まられる方々。何が出來るかと見てると、そのうちに出來上がつたのが、幾かさねかの御重詰。みんな頰冠りをしろ、鉢卷をしろとあつて、御座敷の中で花見氣分といふわけなのです。夏目や虛子さんや溫亭さん四方太さんなぞ、みんな變な顏を見合はせてにやり〳〵しながら、仕方なしに鉢卷をしたり頰冠りをしたりしてゐます。自分でしないものは鈴木さんがかぶせるのですが、すると坂本四方太さんが大して面白くもないといつた顏をして、これに何てこつてすといつて冠せる後からすぐに鉢卷を放り出す。鈴木さん甚だ御機嫌斜めで、あんな變な奴はない、だから女が惚れないんだなんて大變な見幕です。飲めや歌へで

とんだ御座敷の花見の宴をやつたわけですが、此頃は鈴木さん得意の絶頂の頃で、小宮さんと二人か甚だ肝膽相照らして居られて、二人で三味線入りの心中をしやうなど、共鳴して居られた頃です。

此頃森田さんは丸山福山町の昔一葉女史の居たといふ家に住んで居られて、お子さんの病氣が重いといつて心配してられたので、私どもが始終面倒を見て頂いてゐた尼子さんを頼んで上げましたが、其うちたうとう亡くなられました。其お惡い頃は、大抵日に一度位づゝは家に來て、今日はどうだとか容態を仰言つては心配してゐられたものでした。

其頃『漱石山房』といふ大きな石印をどなたかにほつて頂いて、それが珍らしいのか得意なのか無闇と捺して居りましたが、小宮さんあたりに來て頂いて、藏書に一々捺して貰つたり、それから森田さんや松根さんなどは大きな字を書かせては、それにこの大きな印を捺させたりしてらつしやいました。夏目が短冊以外――短冊は俳句をやつて居りましたので、前々からちよい／＼書いて居りましたやうですが、――半折や何かに字を書いたり、それが面白いと見えて、ちよい／＼手習ひを始め出したりしたのは此頃からでありましたでせう。しかし道具が揃つて居るわけではないので、毛氈なんぞ勿論その頃は持つて居りませんので、森田さんの所にある其頃書いた大字の横額などには、疊の目が鮮かに出來てゐて、ぺたりとこの一寸五分四方もあらうかと思はれる『漱石山房』

が横柄に据はつて居るのです。松根さんも隨分下手な字くばりの惡い此頃の書をお持ちのやうです。

『虞美人草』を書き始めたのは、たしか五月末頃からだつたでありませう。新聞に出始めたのは六月に入つてからで、それから十月初め迄續いて出ましたが、何しろ始めての長篇ではあり、重い責任をもつて新聞に入つて書く最初のものであり、殊に暑さに向つての勞作のことでしたから、隨分骨も折れたやうでした。これを書いてる間、始終少し興奮して居まして、さうして例の胃弱で相當弱つても居りました。がとにかく一生懸命で、外のことは一切手につかないといつた工合にこの作に打ち込んでこつて居つたやうですが、さてこれ程の苦勞をして出來上がつて見ると、どうも練れてゐない、垢ぬけがしてゐない、さうして匠氣があるなどとか申して、自分では不滿がつて居りました。この氣持は後々になるにつれて一層募つて來た樣子で、この作を英語に飜譯したいからとアメリカあたりに居る方が言つて來られた時も、外にもつと適當のものがあるだらうからと即座にお斷りしたり、芝居にしたいと方々から言つて來るのを無下に卻けたり、人がほめるものがあれば擽ぐつたいやうないやな顏をするといふ風でありました。けれども當時は中々評判の高いものでして、夏の始め頃には『三越』で『虞美人草』の浴衣を染めて賣り出しまして、私のところへも二反ばかり呉

れますし、池ノ端の玉寶堂あたりでは、虞美人草の花模樣の中に小い養殖眞珠をはめたのを、名前程のことはなく貧弱のものではありましたが、『虞美人草』の指輪だといつて賣り出しますし、讀者からは手紙が來ますといつたわけでした。手紙や端書なんぞも澤山あつたでせうが、中にこんなのがありました。

「多大の興味をもつて拜見いたして居りました虞美人草がもはやおしまひとは情なくなります。小夜子と絲子は滿足のうちに一生を送るでせうし、小野さんはこの畫のやうな眞似をして、(繪端書には兩方から手が一つづゝ出て、すかしになつてゐる鰻を攫まうとしてゐる)そして逃がさぬところ中々うまくやりました。小野さんはうまくやりましたが、つまらないのは藤尾さんばかり、かの女は宗近君を弄んだのではない。始めから小野さんを愛してゐたのに兩方から投げ出されては可愛相です。姉さんのやうに思つてる藤尾さんを、どうかうまく救つてやつて下さい。御願ひです。」

この『虞美人草』を書きかけて居る最中、總理大臣の西園寺さんが、有名な文士を招じて、一夕の雅宴を開くといふ例の雨聲會の招待が夏目のところにも參りました。こんなことは面倒臭い方の夏目は、すぐに葉書にお斷りの句を書きました。それは

時鳥厠なかばに出かねたり

といふのですが、丁度それを書いてるところに、私の妹婿の鈴木が參りまして、それを見て、相手は西園寺侯ではあり、葉書とはあんまりひどいぢやないかとか何とか言つて居りましたが、本人一向平氣なもので、ナーニこれで用が足りるんだから澤山だよとか何とか申して、それを投函して了ひました。

後でこれを何とかかんとか世間では噂して、或る人は痛快だと言ひ、ある人はすねてゐるとか言つて居たやうですが、夏目にして見れば、時の宰相に招ばれたからといつて、それを一ぱし名譽か何かのやうに心得てる方々が面白くもなかつたではありませうが、何はともあれ第一番に面倒くさかつたに違ひありますまい。

三〇　長男誕生

六月五日に始めて男の兒を得まして、純一と名づけました。これ迄四人生まれて、四人共女の兒でしたのが、こん度初めて男なので夏目も大層喜んで、後で長女に聞きますと、學校から歸へつて

來ると男の子だ男の子だと喜んでゐたさうです。小宮さんと鈴木さんとが大きな鯛を祝つて下すつたのを覺えて居ります。そんなことから初め鯛一と名づけようかなど〻申して居りました。

こん度のお産は始めから難産らしく思はれ、三月頃から息苦しくて歩行も自由ならず、全く病人で居りましたのですが、それといふのも男の子だつたせいもありませうが、第一位置が惡いのでした。で早くから看護婦を雇つていろ〱世話して貰らつて、萬一に備へて居もし、又再々産婆に胎兒の位置をなほして貰らつたのでしたが、いよ〱といふ時になつてやはり思つたとほりの難産、そこへ長々で私の體は弱つてゐる、心臟の脉搏は結滯するといふわけで、とても産婆の手ではおへない、醫者を呼ばうと騷いで居りましたが、いゝ案配に醫者が産室の敷居をまたぐと同時に無事に男の子が孤々の聲を上げて、先づ一安心といつたわけでした。夏目の四十一才の時のことでした。

七月頃のことでありましたでせう。朝日新聞社の方で賞與として五十圓か月給の外に呉れました。賞與五十圓といふのはどう考へて見ても理窟には合はない、第一最初入社當時の約束の時も、少くとも賞與は半期半期月給の三月分以上はといふやうな話だつたのに、これは又意外にどうしたことかと、敢て金が欲しいといふのではないが、當初の約束に違うではないか、今から約束を違へるや

うでは、末が思ひやられるといふわけで、最初仲に立たれた坂元雪鳥さんのところへ言つてやつて、朝日の幹部に尋ねるやうにといふことでしたが、入社六ヶ月以内のものには賞與のない規定のところを池邊さんかゞ特別にしるしばかりながらこれ丈寄こされたものだと事情がわかり、かへつて厚意を謝してゐたやうなことがありました。かういふところは几帳面で、金のことだからといつて潔白さうにずるずるにしておくといふやうなことはなく、その代り事の仔細がわかれば釋然となるといつた工合で實以つてさばさばしたものでした。

此頃だつたでせうか、又泥棒に入られましたのは。一體私たちが呑氣者揃ひで間がぬけてゐるのか、それとも何となく泥棒の方が虫が好いて入り易いとでもいつたものか、どこへ行つても泥棒の御見舞をうけますが、こん度の泥棒は全くのコソ泥で、別段風流な逸話奇譚も殘さず、ごくあつさりと夏目の書齋に入つて、懷中時計（それもニツケルの）だとか小刀だとか鋏だとかいふものをもつてかへりました。庭から入つたのでせうが、あんまり泥棒にやられたといふ程の損害もうけずにすみました。

泥棒序にこん度は内から出た泥棒のことを申しませう。やはり此の頃のことではありましたか、

奥様、或は二階に上がつたり下りたりして、さういつた氣持で此方は泥棒に入られるのは慣れつこになつてゐますから落ちついたものですが、あんまりやかましいので二階へ上がつて見ると、窓の棧が折れてゐて、窓際に泥がいつぱい積み上げてあります。が見たところ泥足のついてる氣勢もなければ、第一どこから入つたといふそれらしい見當もつきません。たゞ泥が積んであるだけで、いかにも變な樣子です。そこで呑氣な私も、こりや變だと感付きました。さういへば此間からちよい〳〵小金がなくなつたりしたことがあるが、この女中が怪しいとにらみまして、さあらぬ態で玄關脇の簞笥などを入れておく部屋に入つて、抽斗をぬいて見ますと、外から入つた泥棒なら抽斗をぬいたまゝにしておくでせうのに、これはきちんとしまつてゐて、中がすつかりひつくりかへしてあります。益々變だとは思ひましたが、さて何と何とが無いといふことも其場ではわかりませんでした。

それから御飯をすませると直きに、其女中を巣鴨の方へ使にやりました。出がけに女中部屋で、此間伯母さんからこさへて貰らつた新らしい着物を着て行かうかどうしようかと、口に出しては思ひ迷つてゐたさうですが、外の女中にいひつけて監視させてあるので、ともかく着のみ着のまゝで

出かけました。出かけた後で行李をさがしますと、私の妹の外出着をあづかつてゐたのが、一番行李の底にキチンと風呂敷にくるまつたまゝ入つてゐるのを初めとして、いろ〳〵なものが出て參ります。伯母さんから貰らつたといふのは、私の妹の着物をいふのです。それから怖くなつて私の用簞笥などをさがして見ると、指輪がない何がないといふわけで、大分無いものがあるのがわかりました。

夏目は非常に怒りまして、さういふ不埒な奴は警察へ渡して了へと申しますのですが、年もまだ十八かそこいらですし、氣の毒だと思つて漸々なだめて、すぐに親元を呼びにやりますと、本人が圖々しく姉と一緒に來まして、さうしていふことには、奧樣わたくし泥棒なんか致しません。誰か私を憎んでる人が取つて入れておいたんでせうと空々しく毒付くのには呆れかへつて了ゐました。後で聞いて見ると、親達も承知で方々渡り歩かせては時計だ指輪だと稼いでゐたものらしいのでしたが、警官が來られた頃には、とうに喫呵をきつてどこかへ行つて了つた後でした。其翌未明にお隣りで泥棒が入つたとかで騷いでるのを聞きつけ、泥をもつて來てうまく私たちを欺さうと細工をしたのだとは後でわかりました。ともかく私たちと泥棒とは余程因緣が深いと見えて、越す先々でやられるには呆れます。これから間もなく早稻田へ移るのですが、こゝでもたしか二度ばかり入ら

れたものです。

三一　最後の轉居

九月初めに長らく荷にしてゐた最初の新聞小說『虞美人草』を書きあげてほつとしたところへ、こゝの家主が、最初入る時には二十七圓の家賃で入つたのを、いつの間にか三十圓に上げ、それでも足りないで、入つて十ヶ月もたゝないのに、こん度は三十五圓に上げると言つて來たので、別に入りたくて入つたお氣に入りの家ではなし、初めから腰掛けの積りのところへ、いつまでハイ／＼言ひなり放題に家賃を上げられてゐたんでは際限もなし、學校へ行く必要もなくなつた以上、强ひて本鄕の近くである必要もなくなつたので、思ひ切つて引越さうといふことになつて、丁度小說を書き上げて手もすいてゐたこととて、毎日散步の積りで鈴木さん小宮さんあたりを相手にして、どこといふことなくぶらついて家を搜しまはりました。さうしてたうとう今私たちの居るこの早稻田南町七番地の家をさがし當てたのです。ともかく三百五十坪程の地面の眞中に古いながらに手頃な家があつて、庭は造つてはないけれどもかなり廣いし、これといふ庭樹があるわけではないが、相

當大きな樹木などもあります。それに書齋に當てるに工合のいゝ西洋式とも日本式とも支那式とも
つかない珍妙な部屋が、玄關を入つて右手にあります。こゝならといふことで差配をしてゐるすぐ
前の中山さんといふお醫者さんに尋ねると、月四十圓といふこと。しかし先方でも此方の名刺を見
て、長く居て下さるなら三十五圓にしませうと言つてくれるので、此方も實は懷加減からいふと
三十圓しか出せないところだが、折角だから私も五圓奮發しませうといふことになつて、そこへき
めて參りました。さうして此方の家主の手前、九月中にはきつと引越して見せようといふ望みが、
たうとうかなつたわけです。

又引越しの時には、菅さんが前囘どほり馬力の世話をして下さり、鈴木さんが猫を紙屑籠に入れ
て持つて行つて下さいました。こん度は前よりずつと遠いので、大分手數がかゝり、着物にいつぱ
い猫の小便をひつかけられたりして、ぶう〳〵言つて居られました。

たしかその引越しが九月二十九日で、それが何でも丑の年の丑の日に當つてゐたのかも知れませ
ん。熊本に居ても東京に居ても、いゝかげん一つ所に落ち着くとはそれ引越しといふことになつて
ゐたのが、それからといふものずつとこゝに居ついて、たうとうこゝで永眠致しますし、それで亡
くなつた翌々年には、記念と思ひまして土地ぐるみ持主から讓つて頂き、今に至る迄二十何年早稻

田の住人になつて居るのでございます。

と申しますと大變此土地此の家が氣に入つたかのやうに響きますが、夏目にしましても私にしましてもそれ程氣に入つたといふわけではなく、越した當座こそ狹い所から、急に少しばかりのんびりしたところに來ましたので、夏目なども伽藍のやうだなどゝ言つてゐたものですが、段々小かつた子供たちが大きくなるに從つて、家が目に見えて狹くもなり、其上裏側の隣りに貧民長屋があつて、そこで朝から晩迄夫婦喧嘩があるとやら何とやら、好もしくないことが夥しいのです。垣を結へばその垣をぬいて焚きつけにする、垣から一段低い家の臺所を見下ろして何のかんのといふものもあるといふわけで、あんまり氣持のいゝ住家ではなかつたのです。そこでいゝ加減落ち着きたい位に思つた私が、

「貴夫、こゝを買ひませうか。」

と何かの拍子に話を向けますと、

「いゝや、こゝはいやだ。」

と夏目が申したことなどもあります。さうかと思へば、又感ずるところもあつたと見えて、

「しかしかういふあさましいところも世の中にはあるてことを子供に知らせる爲めには、これもい

い場所だね。」
などゝ、つく〴〵申して居たこともあります。さうしてゐるうちに又夏目がいやになつて、どこかへ越さうかと云ひ出す頃には、私が又この荷物の始末をしなければならないことを思ふと尻込みするといふわけで、幾度かお互に切り出して見ては、いつもそのまゝずる〳〵になつて了つたのです。ところが亡くなつてからこゝを買ひ取りますと、じきに長家が取り拂はれてきれいになりました。生きてるうちにかうなつたら喜んでくれたことだらうなどゝ思はれてなりません。

さて本郷から早稲田へ移りましたが、相變らず鈴木さん森田さん野上さん小宮さん等といふ人達はよくお見えになります。殊に木曜會にでもなると皆さん勢揃して押しかけてらしつて、何を話してらつしやるのか知りませんが、いつでも夜の十二時が打つてもまだお歸りにならうといふ氣勢もありません。夏目もそれにおつきあひをして面白くしやべつてゐる樣子ですが、流石に十二時を過ぎると、默つてゐたら朝迄も話し込まれさうな勢なので、やむを得ず私が出て行つてもう十二時とつくに過ぎたのだからいゝ加減にお歸りなさいと、追つ立てを喰らはします。それから漸々尻を上げて歸へるといふ譯なんです。

四人さんが同じ方向におかへりになるので、さて家を出てから其頃はいゝ工合に電車はなし、ぶら〳〵歩るいて本郷臺の下小石川の柳町あたり迄行きつくと、やれ〳〵といふわけで一ト息入れて、そこへらのおでん屋に入つて、いゝ加減空き腹になつてるところへおでんだ燗酒だと送り込む。時には食べ過ぎて、みんなの財布をたゝいても拂が足りず、近所の森田さんが家へ走つて一圓五十錢持つて來て漸く拂つたなどゝいふこともあつて、そこで又元氣を出してすぐ近くの容橋のところ迄小宮さんを送つて、それから鈴木さんと野上さんとは巣鴨へ歸へるのださうです。漸く家について、やれ〳〵と思ふと一番鷄が鳴くといふのが例になつてるたさうで、そんなわけで金曜日の大事の講義は申合せたやうにお休みといふことだつたさうです。それを夏目が聞きまして、

「飛んだ道樂者だな。」

などゝ笑つてるたことがありました。

このおでん屋のかみさんが一寸澁皮のむけた女だつたとかで、鈴木さんが、こんなのに手をつけちやいけない、蔭にどんな怖いのがついてないものでもないからと、いつぱし先輩がつて言ひ言ひされたものださうですが、皆さん其日の夏目のとこでの話をあれこれ〳〵とそこで繰りかへしながら、親分が親分がと夏目の噂に花を咲かされる、それをそのかみさんが聞いてるて、

「貴方方二言目には親分親分と親分のお話をなさいますが、どんなお方が親分なんですか。」
といふ話に
「いゝ親分があるんだよ。」
といつたわけで、上機嫌のものであつたといふお話です。
ところでこの親分乾分ですが、何しろ其頃の私の家と來たら、子供が五人で、赤ん坊が居るといふわけで、女中の一人が風邪を引く、一人が親の病氣でかへるなどゝ、手が狂ひだしたら最後始末がつきません。さういふ時には野上さん小宮さんなどいふ御連中が、床を敷いて下さるやら、御飯がないとあつて鮨を取りに走り使ひをして下さるやら、隨分親切にして下すつたものです。それから子供なんぞもよく遊ばして貰らつて、上の方の子供などは、小宮さんあたりからよくせがんではお話しを聞いてゐました。側で聞いてるとどうやら口から出まかせらしいのですが、それが面白いと見えて子供たちは喜んで居ります。出まかせにしろそれを見て夏目はつくづく感心して、とても俺にはあゝは出來ないなどゝ言つてゐたことがありました。
ところが鈴木さんと來ては、今でこそ大の子煩惱で、しかも小供の雜誌迄やつてゐられますが、其頃は子供が大のおきらひだつたものです。其頃のことでしたでせう。野村傳四さんが結婚された

其の御祝儀の内宴だとか何とかいつて、茶の間の圍爐裡で皆さん車座になつて酒を呑んでゐらつしやると、子供がわい〱言つてやかましい。そこで鈴木さんが子供なんかこんな時にはみんな簞笥の抽斗に入れて錠を卸ろしておけばいゝとか何とか一ばい元氣でやつたのを、一番上の筆子などはそれが余程こたへたと見えて、いまだに覺えてゐますが、長く子供たちに怨まれてゐたものです。

野村さんの新婚に何をお祝ひしたらいゝか、そんなことを夏目が申して居りましたので、

「何をといつてもありふれたものばかりでつまらないから、一そのこと貴方俳句をお書きなさい、それを袱紗に染めさせませうから。」

と申しますと、

「お前にしては珍らしくいゝ考が出たな。」

とか何とかひやかしながら、それにきめました。其時の句が、

　二人して雛にかしづく樂しさよ　　漱石

ともう一句あつたのですが、それは忘れて了ひました。都合三枚染めて、二枚を上げて、一枚私自身使つてゐたのでしたが、それもいつの間にやら姿を隱くして了ひました。

其年、つまり四十年の暮のことでありました。紹介者もなしに突然一人の若者が訪ねて參りまして、自分は坑夫をして、隨分いろんな面白い話がある、苦勞もして來た、その材料を供給するから、それを是非小說に書いてくれないかといつて參りました。年は十九か二十歲で、きりつとした丸顏の男でしたが、今迄一度も會つたことも聞いたこともなし、最初はいきなり飛び込んで來たので氣味惡がつてゐましたが、是非書いてくれといふし、相手は書生つぽう見たいで毒も無さそうですので、氣をゆるしてともかく話をさせて材料を取るといふことになりました。それからは木曜會によく來たりしてましたが、其際氣の毒だからといふので、書生見たいにして家においてやることに致しました。どつか變な男でありましたが、それでも子供の相手になつて、作文や習字などに甲だの乙だのと點をつけたり、何事もなくしばらく家に居りました。

後で考へて見ればいろ〳〵不審の節も出て來るのですが、其時は夏目も私も一切その男のいふことを眞に受けて聞いてゐたものです。殊に人一倍同情深い夏目は、その男が身の上話をして、自分

が親類に養子にやられて、そこの娘の婿になる筈だつたのが、別に養女として養はれてる娘の方と戀に落ちて、どうしてもそこへ居られなくなつて、それから家を出て放浪し始めた、又その相手の女は女子高等師範に居るから、どうかその女に會つてくれないかといふわけで、それから夏目が女子高等師範に手紙を書いて、いつ幾日に來て下さいといつてやつて、二人で待つてゐましたが、來もしなければ音沙汰もない。そんな面倒迄見たのですが、さて同情して家に書生同樣おいては見たものの、俥夫をやつたことがあるの、蕎麥屋の出前持ちをしたことがあるのと申しますけれども、根が勉強するではなし、一向落ちつきのない男で、どう見ても取柄がなささうです。さうしてゐるうちに夏目の『坑夫』といふ小說が朝日に出ます。

或る時その坑夫の書生さんがこんな事を私に申します。自分が大層困つてゐた時に厄介になり、さうしてそこで病氣になつたりして二十圓ばかり借りたのが、高利なものだから今六十圓程になつてゐる。一度その小母さんとやらに會つて見てくれないかといふ賴み。會つて一段段話をして見ると、双方の話がとんちんかんで一向辻褄が合ひません。かけた金をかへしてくれと催促すれば、今に夏目さんに小說を書いて見て貰らうから、さうしたらそれを金に代へてとか何とかいつてゐるといふ小母さんの話。さうかと思ふと、私と其の女の人と長々と話をしてゐたものですから、立ち聞きもし

てるた樣子でしたが、歸へつて了ふとのつそりやつて來て、あの小母さんどう言つてゐましたと聞くあたり、前に話が仕組んであつて、それをうまい工合に言つてくれたかどうかと尋ねてゐるとしか思はれません。その女の人には小金を包んでかへしましたが、段々變だなといふ氣が募つて參るりますばかり。

すると或時夏目が外へ出まして、亡くなられた沼波瓊音さんに會ひますと、其頃沼波さんは萬朝報に居られたのですが、此間ある若い坑夫だといふ書生みたいな男が新聞社に來ての話に、夏目漱石といふ男は怪しからない奴だ。私に身の上話をしろといふのですると、その材料でもつてれいれいしく新聞に小說を書いてどつさり金を取つてる癖に、自分には一文も呉れない。全く卑劣な奴だから、うんと惡く書いてやつてくれないかといふ賴み。其時沼波さんはさういふ個人一身上の話は書けないと斷はつたが、氣をつけないといけませんよとの話に、夏目もびつくり致しまして、歸へつて來て早速本人に尋ねますと、斷じてそんなことはないと白ばくれて居ります。しかし夏目もかなり色をなして、

「君もそんなに金が欲しいのならば、これだけの材料を提供しますから、いくらくく下さいといつたらいゝぢやないか。自分も紳士だからさうならさうでちやんと約束通りしもしよう。尤もそれ程

迄にして書きたいとも思はないが……」

といふやうなことを申しますが、男の方ではかうなつてもやはり不得要領で、強情なひねこびれた、それでゐて煮え切らない態度で居ります。夏目も業を煮やします、私も面白くなく思つて居りますと、どう考へたものか翌日になると、今迄歸へるところも無かつた筈のが急に歸へりたいからと申します。いゝ按配だと思つてそれ切り縁を切つたわけです。

後で伺ひますと、其足ですぐ萬朝報の沼波さんを尋ねて、此間のことは書かなくてもいゝと言つて行つたさうです。それから又新渡戸さんのところへか、やつぱり私のところへ來たやうなことを言つて行つたとかいふことが何かの新聞に書いてあつた事がありました。

其後二三度訪ねて來て、夏目に會ひたいと申して居りましたが、夏目はいやだと言つて會ひもせず、私がその都度三圓ばかりづゝ包んでやると、そのまゝおとなしく歸へりました。

三三　謠の稽古

長いことやめて居りました謠を、又思ひ出したやうに始め出したのは此頃からであつたでせうか。

話は少し前後しますが、この正月の元日に、森田さん鈴木さん松根さん小宮さんなどといふ常連の外に、森巻吉さんなども見えて、森田さんが新調のフロック・コオトを着ていらしたので皆がひやかしたり、御當人も大層氣にしてらつしやると、こん度は森さんの奥さんが、三重吉さんの小說の愛讀者だといふ話から、森さんが自分の奥さんに參るつてらつしやるなどと、例によつて例のとほり惡口やら冗談やらで盛んなところへ、ひよつこり紋付袴の禮裝正しく虛子さんが入つて來られました。正月に紋付を着るのに不思議はないのですが、森田さんのフロック・コオトとの對照で殊更目立ちましたのか、そんなところから謠の話になつて、どうです一緒に謠ひませうかと、虛子さんが夏目を誘はれます。謠つてもいゝねといふやうなことで謠が始まりましたが、其うち虛子さんが近頃鼓を打つてるといふやうなことを言はれると、それは是非きかせなさいとなつて、車屋を走らせて虛子さんのお宅から鼓も取り寄せることになりました。

愈々鼓が來ますと、虛子さんは皆がひや〳〵する前で、臺所から七輪をもたせて來て、かん〳〵する炭火で皮をあぶつて、さて夏目に謠へといふのです。夏目も鼓を入れて謠つたことがないので澁つて居ますが、皆さんが面白がつて謠へ謠へとすゝめるものですから、ついその氣になつて謠ひ始めました。と、虛子さんが力強い掛聲を入れて、ポンと鼓をお打ちになります。夏目の謠聲がプ

ル〳〵と震えて仕舞ひます。それではいけない、鼓を氣にしないで、いつものとほり謠へといふ注意なのですが、又掛聲諸共ポンと來ると、謠手がヘナ〳〵になります。とう〳〵終ひには鼓に敗けて、皆目謠へなくなつて自分でも笑つて投げ出します。皆さんもお笑ひになります。虚子さんお一人、仕方がないもんでやりかけた謠を一人でお謠ひになつて、御自分で鼓を打つてかへられました。夏目の謠は散々の不評判で、普段頭ごなしに惡口を言はれてゐるので、此時だとばかり私迄が皆さんの尻馬に乘つてひやかしたものです。此日森田さんはおろしたてのフロック。コオトでべろ〳〵に醉拂つて、沓足袋が破けてゐるから奧さんお出しなさいと、玄關で素足になつて默々をこねて居られました。

それから謠を少し本式にやらうといふことになつて、虚子さんの紹介で寶生新さんに來て頂くことになりました。外の家元だと御禮も大變だし、其上御飯を出したりして中々手がかりであるが、新さんは手輕に來てくれるといふので、何でも其頃一週二度づゝ來て下すつて、一月八圓かの御禮だつたとおぼえて居ります。

ところが新さんが稽古日にいらつしやらない日が時々あります。名人といふものは氣が向かないと謠ふなどもいやなのだらう、まして出稽古などには來たくない日があるのだらう、さういふ氣持

は自分にもわかるか、しかし今日が稽古日だと思へば、此方もその積りで先生を迎へる氣で居るから、何となく心が落ちつかない、さうして外のことには手がつかない。此方もその意氣で居るのだから、さう〳〵はぐらかされるのも困る。がこれはえらい先生を頼むからのことで、えらくなければ文句はないのだから、一つ其のえらくない方の先生から續けて來て貰ふやうにしようかなどと申しまして、ともかく話し合ひの上でと新さんに其旨手紙をやりました。新さんがおいでになつて、どつちでもいゝといふ話で、又元通りおいでを願つて居りました。

一體藝事でも何でも、下手上手はともかくとして、やりかけると中々熱心にやる方なので、謠も一時は相當熱心にやつたやうです。やり出せば自分で面白いのも一つでせうが、又折角先生が氣を入れて下さるのだから、其手前少しは上手にもならなければといふ氣持もあつたでありませう、一週二度の出稽古だけでは足りず、後では神田にあつた新さんの出張所へ散步へ出た序などにお邪魔に上がつて稽古もしてゐたやうでありました。安倍能成さんや野上さんなども其頃の同門であつたでありませう。

こんな調子で胃が大變惡くなる迄は、とにかくにも續いて謠の稽古をやつて居りました。そこで毎晩夕食を食べると謠ひ始めます。自分では運動の積りなのでせうが、それが毎晩大概時刻がきま

つて居りますので、それ又夏目さんの旦那さんの謠が始まつたと近所では言つたものださうです。夏などになると白いものを着た人が、通りがゝりに生垣のところに佇んで聞いてられるのも屢〻お見うけ致した。中々いゝ聲だといふ評判ですよと、ある時そんなのこ評判を申しますと、乃公の謠なんか聞いてるものがあるのかなあと、ひどく謙遜して居ましたが、さうかと思へば、貴方の聲より安倍さんの謠聲の方が餘程いゝなどと人をほめやうものなら、お前には謠なんかわからないんだ、安倍は一寸聞きのいゝやうに言ひまはしがうまいんだとか何とか申しまして御機嫌斜なのです。

胃をひどくしましてからは、胃に響くからと言つて、近所の醫者などは謠はおやめになるがいゝなどとすゝめたものですが、自分では少し位は運動になつていゝ、自分のやうな運動不足なものはせめて謠なりと謠はないことにはと、この忠告には屈しないで、やはりちよい〳〵謠つて居りました。

前にそんなことがあつたので、新さんも精出して來て下さいましたが、やむを得ずおいでになれない時には、小鍛冶さんが代稽古に見えます。新さんの方では、どうせ御殿樣稽古なんだからといふ腹がおありなのだから、あんまり嚴しいことも言はず、そこのところには手加減がおありなのでせうが、小鍛冶さんと來たら、お年もお若い上に藝事には、御熱心で几帳面なので、少しでも悪い

となると、同じところを何べんでも謠はせになります。それが次の間で聞いてると可笑しいのですが、實に遠慮會釋なくぴし〳〵やられるので、夏目もこれは少し勝手が違ふといつた風に思つてるのでせうが、ともかく謠つてはなほされ謠つてはなほされ、汗だくで叩かれてゐる樣子です。小鍛治さんの方では、御自分で修行されたとほり苦しまされたとほりをやらせようといふのでせうから、ずぶの素人藝の夏目から見れば骨が折れます。後で私が、

「大變な御稽古なんですね。」

と同情して申しますと、夏目は、

「新は世間なれがしてゐるが、あれがいゝんだよ。」

とつく〴〵小鍛治さんの熱心な稽古振りには感心してゐる樣子でございました。さうして續けて申しますことには、

「乃公がたまによく出來ると、今度は大變いいですがとほめてくれるのはいゝが、眞顏になつて、しかしこれはまぐれ當りかも知れませんから、いま一度どうか謠つて御覽なさいつていふんだから、あれにはかなはないよ。」

と、思ひ出し笑ひをして居つたことがありました。

こんな工合に稽古をして居りまして、番數はかなり上げたやうですが、どれだけ謠へたものか私にはわかりません。其頃本當だかうそだか知りませんが、他の人にくらべるとかなりむづかしい所謂ゆるしものを謠つたりしてゐましたが、どうも新先生小遣が欲しくなると、ゆるしものゝ押し賣りをやつて行くやうだなどと笑つて居たことがありました。

お能は淸子さんあたりとよく九段の御能樂堂へ出掛けたやうでした。

三四　所謂「煤煙」事件

三月のいつ頃でしたか、まだうそ寒い季節だつたと覺えて居りますが、森田草平さんが夜おいでになつて、例のとほり書齋で夏目と話していらつしやいます。私は前の錢湯に行き、子供たちは隣の坑夫の書生の新井と歌加留多を取つてはしやいで居りました。私が錢湯から歸つて子供たちがやつ〳〵とはしやいでる玄關突き當りの居間へ入りますと、ふとその障子がなめたやうに丸く穴があいて居ります。ついぞ見なれない穴で、子供たちでもいたづらをしたのかしらと玄關の間に出て見ますと、入口の障子の端が二尺ばかりあいて居ります。おやといつて上り框のところに出て見ま

すと玄關の格子戸が細目に開け放しになつて居ります。見れば夏目のはいた下駄もなければ、森田さんの沓も見當らない。外套や帽子も根こそぎやられて居ります。又々こそ泥にやられたのです。仕方がありません。もうおかへりといふ森田さんに穿きものがないので、ともかくも下駄を買はせて漸く其場はかへつて頂きました。

常連の森田さんがおいでになるのは珍らしいことでも何でもないのですが、折も折とて丁度泥棒にやられたのと、もう一つは私のところから歸へられて間もなく、例の名高い「煤煙」事件の爲めに、鹽原の山中へ雷鳥女史と驅落ちをされた、其夜の訪問が私たちにそれとなく別れを告げに來られたのだと後でわかつて、特別によくおぼえて居るわけです。

一體森田さんは隨分づぼらな質で、其頃松浦一さんの口きゝでどこかの宗教學校に教鞭を取つて居られましたが、試驗の日を間違へて、翌日の日曜日に學校へ出たら誰も居なかつたといつた風で、松浦さんあたりから苦情が出たりしたものです。尤もその頃は戀愛事件なんぞで一倍忙しくもあつたのでせう。が、ともかく夏目はそのづぼらさ加減が餘程氣になると見えて、中々口やかましくつけ〳〵と申します。例へばお湯へ一緒に行つたりなどしますと、行く度にさつさと自分は先に洗つて、さて出がけに、おい、森田、この石鹼箱をきれいに洗つてちやんともつて來るんだよと、噛ん

でふくめるやうに命令するのださうです。何もそれ程に言はなくたつて、僕は今さうしようと思つたところだのに、先生程人を子供扱ひにする人はないつて、森田さんがぶつ〳〵仰言ること仰言ること。夏目の方ではいくら言つても彼奴には足りない位に思つて居るのでせう。萬事この調子なのです。

　ところがこの森田さんが急に姿を隠したといふ騒ぎです。私たちも驚きまして、さては先夜に暇ごひに來られたのだなと思ひましたが、さあといつてどこと目當てのないことで呆然として居りますと、生田長江さんが見えてのお話に、どうも行先は鹽原らしい。捜索に行くから旅費を貸してくれといふことでした。ともかく生田さんが刑事を二人お連れになつて鹽原へ立たれます。程なく鹽原から見つかつたといふ電報が參りました。何でも雪のある山中に立てこもつて死を待つてゐるうち、森田さんが水を取りに下りて來られたのをつかまへたとやらそれから足がついたとやらで、たうとうお二人とも無事で連れ戻されておいでになります。生田さんが森田さんを連れておいでになつて、大變興奮してゐるから、なるべく小言も言はずおいてやつてくれろといふお頼みでした。仕方がない、他へといふわけにも行かず、ともかく今度のほとぼりがさめて、それから今後の方針のきまる迄居たがよからうといふことになりました。

そこで夏目が私に申しますには、森田を外へ出してはいけないよとかういふのです。萬一のことを慮つてのことでせうが、大の男が仕事もなしにごろ〱してゐて本を讀んだりして居る位のことで、胸にはいろいろもや〱したこともあるのでせうから、それを一概に外出させるなと閉門同樣の仕置きをしようとしたつて、それは申す方が無理に違ひありません。始めのうちはえらく神妙に家へすつ込んで小さくなつて居られましたが、段々夏目の目を竊んではちよい〱夜など外出されます。それも長いと私が心配すると思つて、一時間そこ〱で歸つて來られるのですが、或る夜十時頃になつて漸く歸つて來られたから、どこへ行つたのと、私も一つには義務で、一つには好奇心で尋ねますと、程近い榎町の洋食屋へ一ぱい呑みに行つたといふ話。そこでコロッケを食べたらとてもまづい。で今夜家で食べたコロッケの方がずつと旨いといふと、そこの者が、貴方はどちらですときくから、辨天橋上の夏目だといふ。では夏目さんの旦那さんかと又尋ねる。いや、旦那さんどころか居候だと斷はつて來たといふ話に、そんなに居候を鼻にかけなくともいゝぢやないのつて笑つたことがありました。

初め森田さんが家にいらした時に、寢る時どこにしようかといつたら、夏目の側へ寢なさいと申しますと、どうも先生の側は氣づまりでいやだ、僕は女中部屋で結構だといふわけで、女中部屋へ

床を敷いておやすみになります。時たまのぞいて見ると、強度の近眼鏡を外して、キヨト／＼して居られます。さうかうしてゐるうちに、いかにも窮屈さうで見てゐる私が氣の毒になりまして、夏目の留守の時などは、禁を破つて、少しばかりお酒を上げたりします。と始めは内證内證で小さくなつて呑んでゐられるのですが、さていゝ加減醉がまはつて來ると急に大きくなつて了つて、夏目がかへつて來て床に入つてゐるのに、どし／＼と大きな足音を蹈んで威張つて書齋を通りに行きながら、

「今日は奥さんに御馳走になつて酒をのましてもらつた。」

と大きな聲でどなつて廊下を通ります。大に勉強でもなさる氣なのでせう。それを見て夏目が、

「又お前呑ましたな。」

と言ひ言ひしたものでした。

さて、其の鹽原事件の眞相といふやうなものは私にはわかりませんが、それから先方の御隠居が再々家へいらつしたやうで、自然中に立つていろ／＼話もきくし骨も折るしといつた工合でした。が元來大樣の出來てしまつた行爲をとやかくいふ方の質の人ではないので、あんまり批評がましい事は聞きませんでした。たゞ先方で森田さんの方をしきりに悪様に言ひ擬らすのを耳にして、一體

に逃げたのだもの、悪いといへばどつちだつて悪いに違ひない。森田がそれについて默つてゐるがあれがいゝと申して居たことがあります。さうして自分では自分の頼まれたことを几帳面に果してゐたやうでした。

一體自分が頼まれて引きうけたことは几帳面にする代りには、自分から人に頼んだこと、それから中へ入つて人に引きうけさせたことなどには、極めて嚴格で責任をもつて貰ふことを要求して居ました。其後森田さんが朝日新聞に『煤煙』をおかきになるやうになつてから、時々休載のことがあります。するとどうも怠けてゐるんぢやないかとしきりに氣にして、下宿迄見に行つたりしました。或時、そんなわけで神樂坂を歩いてゐますと小宮さんにお遭ひしたさうです。先生、どちらへいらしたのです。今森田のところへ行つて見たが居なかつた。『朝日』の小說欄は休みのないのが自慢なのに、近頃よく休みがあるから、大方又例のづぼらを極め込んでゐるのではないかと見に行つたところが案の定居ないといへば、そいつは森田の奴怪しからん、小說をすつぽかして遊びに歩るくとはと、二人で道端でぶう〳〵いふといつた按配で、自分の世話したことには非常な責任をもつて居りました。それから自分が朝日新聞社の一人として他へ小說や原稿などを頼む時なども、隨分後輩の人などへも、ちやんと禮をつくして相手を尊敬して頼んだもののやうです。

三五　猫の墓

九月十三日に猫が死にました。其次にも又其次にも猫を飼ひました。夏目といへばすぐ猫と聯想される程猫には緣があるやうに思はれたものなので、訪ねておいでになる方が緣に遊んで居る猫を見られて、此猫は何代目ですなどとよく聞かれたものです。この死んだ猫は有名な初代の猫ですが、こちらへ越して來てから妙に元氣がなく、殊に死ぬ前などにはたべたものをもどすやらもらすやら、一體にしまりがなくなつてゐて、子供の蒲團といはず、客用の座布團といはず、隨分よごしたものでしたが、いつの間に見えなくなつたかと思つてゐるうちに物置の古いへつついの上で固くなつて居りました。車屋に賴んで蜜柑箱に入れて、それを書齋裏の櫻の木の下に埋めました。さうして小い墓標に、夏目が『此下に稻妻起る宵あらん』と句を題しました。九月十三日を命日と致しまして、毎年それからこの日はお祭りを致します。

其時夏目が御懇意の方々にあげた死亡通知のはがきがございます。

『辱知猫儀久々病氣の處、療養不相叶、昨夜いつの間にかうらの物置のヘッツイの上にて逝去致

候。埋葬の儀は車屋をたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行仕候。但し主人「三四郎」執筆中につき、御會葬には及び不申候。　以上」

其後文鳥が死んでこゝへ埋められ、それから又犬が死んで同じくここに葬られました。犬の墓標には『秋風の聞こえぬ下に埋めてやりぬ』といふ句が題されて居りました。すると子供たちが眞似をして、金魚が死んだりすると、金魚の墓をこさへなどして、まるでこゝは生き物の墓地見たいになつて了ひましたが、猫の十三回忌の時に、小い祠でも建てやうかと思つたのを考へなほして、九重の石の供養塔を建てました。さうして雜司ケ谷の墓地にあつた萩を移して周圍を飾りました。

初め猫の墓をこさへてから茶碗に水を上げたり、心ばかりの供物をあげたり、野の花を捧げたりしておきますと、小い子供たちがその水を呑んだりして閉口させたものでした。それで思ひ出すのは、あるとき三重吉さんがこんな句を作られました。『猫の墓の茶碗の水も氷りけり』これを夏目が聞いて「もではいけない。茶碗の水の氷りけりだな。」といつてこれをなほしたといふことを鈴木さんに伺つたことがあります。

十二月に入つてから、三女の榮子がチブスで長いこと寢てゐて、漸く癒つたので看護婦をかへして間もなくのことでした。夜中どこかでガタガタといふので目をさまして、子供を連れて厠へ立ち

ました。さうしてその足でさつと臺所まはりの方を見て歩きましたが、これぞといふ變つたこともありません。それが三時頃で、やがて床へかへりましたが、何となしに不氣味なので目が冴えてねつかれません。してゐるうちに四時を打ちました。もう明け近いことだ、かう思つて始めて安心して寢たところへ、隣りの部屋から女中が得體の知れない叫び聲を擧げて飛込んで來て、ガバと私の蒲團の上に倒れました。何事が起こつたのか、一時私にはわかりませんでしたが、よく〳〵聞いて見ると、腰をぬかして震え聲で「泥棒、泥棒」に叫んでゐるのです。その叫び聲を聞きつけた夏目は、日頃私が炬燵を入れて寢るのを危いからと氣にしてゐたもので、てつきり火事だと思つて飛び起きたのださうですが、泥棒と聞いて早速次の部屋に入つて見ますと、簞笥があけつ放しになつて居ります。そらと臺所口へ出て見ると、そこの雨戸が外づれて外には寒い月が出てゐるばかりで人影もありません。

私が厠へ立つて間もなく、女中も目をさましてはゞかりへ立ちまして、どうも眠られないのでおち〳〵してゐると、何やら耳元近くでする〳〵と引つぱり出した音がします。ひよつと目をあけて見ると、すうつと人の影がする。怖い怖いと思つてゐた矢先なので、矢庭にキャッと叫んで私のところへ飛び込んで來たものださうですが、騒がれた其爲めに泥棒は仕事を半分にして逃げ出したも

のでせう。
朝になつて警察に屆けます。刑事が來るとやら、泥棒の足跡を見つけたとやらで大騷ぎをしましたが、盜まれたのがみんな帶ばかりで、數へたら十本ありました。その中には子供たちの帶もあつて、長女の筆子などは、お正月にしめる一張羅の丸帶をとられたとあつてべそをかくといふ始末でした。夏頃になつて盜まれた中で私のしめてゐた帶が一本出て參りました。市ケ谷監獄かの牢番のおかみさんがしめてゐたさうで、それから段々手づるを求めてさがしたが、さつぱりわかりません。おかみさんも賣りに來る古着屋から買つたといふのみで曖昧でしたさうですが、それなり切りになつて居りました。すると二三年後になつて、その牢番が泥棒であつて、おかみにやる爲めに稼いで、盜つた中の一つ二つをやつて、後はわからないやうに賣り飛ばしたり入質したものであつたさうです。

これが私たちの數多い盜難の最後のものでありました。

それから一週間ばかりして六番目の子供が生まれました。申年に生まれた六番目の人間だといふので、申に人篇をつけて伸六と名づけました。

三六　滿韓旅行

翌る四十二年の夏頃、當時滿鐵の總裁だつた中村是公さんが出ておいでになりまして、一度滿洲へやつて來ないかといふお誘ひ。金がないよと申しますと、金はやるから來いとあつて、何でもた百圓かを頂きました。それで中村さんが八月末かにおたちになるので、一緒にまゐる筈で居りましたところが、又胃の工合が惡く、とても同行が出來ませんで、一船おくれて立ちました。

元々この滿洲行きには、中村さんがただまだ見ない土地に御自分の舊友を連れて行つて、いろいろな風物を見せてやらうといふ思召だつたのでせうが、其外に自然當時は人がよく知らない滿鐵の事業や何かの紹介をやらせようといふこともあつたものと見えます。しかし自分では別に提灯持ちをする氣はなかつたでありませう。

中村さんとは大學豫備門時代かに下宿したりして中々親しかつたものらしいのですが、其後ずつとお會ひしなかつた樣子でした。一度ロンドンでお會ひしたとか申して居りましたが、どの道學校を出てから中村さんも夏目も地方生活を多く致しまして、それから夏目が東京へ舞ひもどつた頃に

は、中村さんは後藤さんの下で臺灣に居られ、それから滿洲といふわけで、いつも離れ離れになつてゐたのです。夏目の方では中村さんを、法科の人間には自墮落のものが多いが、あれは全く信義に厚い人間だ、頼めば何でも本氣で親身になつてやつてくれるから、かへつて迂濶には頼めないなどと申して居りましたが、大體其頃は中村さんの方で夏目を大騒ぎしてらしたやうでした。學生時代から夏目は西洋かぶれをするでもなければ御世辭を言ふでもなく、ちやんと自分を崩さずに持つてゐて、それでゐて同級生から尊敬されてゐたものだなどと語つて居られたことがありました。

やはり此頃のことでありましたでせう。夏目が中村さんにお會ひしての雜談の折に、

「どうもいつまでたつても貧乏で困る、金が欲しい。」

と申しますと、中村さんが、

「それぢや持つて來てやらうか」

といふ景氣のいゝ無雜作なお話。

「そんなんぢやない。世襲財産か何かゞ欲しいんだよ。」

「そいつは困るなあ。」

夏目のゝは突飛で駄々つ兒見たいな言ひ分なものですから、中村さんも驚いてゐられたなどと申

して居たことがありました。

丁度其頃に「それから」が朝日新聞に出て居た頃で、毎日それを書いて居りましたが、大概二十回分位書きためては届けて居りました。さうして出発前にすつかり書き上げてまゐりました。丁度其頃西村濤陰さんがお妹さんと一緒に家に厄介になつて居られた頃で、その原稿を届けるのが西村さんの役目です。松根東洋城さんがいらして西村さんを捉まへての話に、

「三千代が代助によばれて何と返事をするだらう。どうも待たれて仕方がないが、君知つてゐたら う。何と書いてある。」

と中々の御執心振りです。

「えゝ、僕知つてゐます。しかし先生はきわどいところをあつさり切り抜けるから食ひ足りない」

「それが見たいな。」

松根さんは新聞に出るのが待ち切れないかのやうに、しきりに見たがつて居られました。

此時分から段々胃が本式に悪くなつて行つたものらしいですが、痛んで来ると自分では懐爐かなんかで暖めておいたらいい位にしか考へて居なかつたのですが、旅行中幾度か痛いお腹を抱へて俥に乗つた記事が、『満韓ところどころ』の中に書いてあります。

滿洲のかへりには朝鮮へまわつて、總督府の度支部長をしてらした鈴木穆さんのところで御厄介になつて居りました。この方は私の妹婿の鈴木の弟さんです。そこで燒いた樂燒がありますが珍らしいものです。

十月の中旬に旅行から戻つて參りました。玉やら翡翠やらそんなものを大分御土産に買つて參りました。一體が支那趣味の人で、お金もないので大したものゝ買へやう筈もないのですが、それでもちよい〳〵虎の門の晩翠軒あたりへ行つて、何かと買つて來たりして居たものです。隨分紫檀が好きで、お盆でも机でも莨入れでも無闇と紫檀を買ひ集めます。それを見て私が、貴方はなんでも紫檀ならいゝのでせう。其中には紫檀の机に紫檀の椅子で、何でもかんでも紫檀ずくめで、支那のものならなんでも御座れとすましてゐたらいいのでせうが、愛國心のない人だなど申しますと、夏目の方では、お前は又卷繪だとか梨地だとか、そんな金々塗つたけばけばしたものなら何でもいいのだらう。卷繪さへしてあればいゝかと思つてゐるが、隨分下品なことだなどとけなして居たものです。さうしては紫檀の机につやぶきをかけて、光澤の出るのを喜んで居りました。

三七　修善寺の大患

次の年になりましてから、胃の工合が益々いけません。始終痛む樣子ですが、やつぱり手當はいい加減な其場限りで、ありきたりな胃病の藥をのんで、通じでもつけとくといつた手輕さです。親類の年寄りなどが、私の顏を見ると夏目の樣子を尋ねますから、これ〳〵だと說明致しますと、そんなことして放つておくと癌になつたりするといけないから、專門醫にかゝつたがいゝと忠告してくれます。さう言はれて見ると私も氣持がよくないので、歸てきてすゝめますと、癌になつたらなつたで仕方がないぢやないかと、中々それでは診察して貰ひに行かうと申しません。が顏見る度に私が注意するので、其度每に又そのとほり申します。が、たうとう自分でも氣味惡くなつて來たものでせう、內幸町の長與胃腸病院に行つて診て貰ふことになりました。それが六月のことであつたでありませう。

診察の結果、どうも胃潰瘍らしいが、ともかく便を見てといふことで、翌日又參りますと便の中に出血してゐるといふことで、胃潰瘍の診斷を下されました。さうして大したことはないが、家

では手當も屆くまいし、毎日こゝ迄通つて來るのも大變だから、一時入院したがよからうといふことになりまして、六月の半から一人で入院致しました。幸ひそこで靜かに療養してますうちに大變工合がよくなつて、もうよからうといふことで、七月三十一日に退院致しました。
其頃松根東洋城さんが、北白川宮樣のお附で修善寺へ行つてられるから、病後の靜養に來てはどうかといふことで、自分でも識つた人が居た方が何かにつけていゝと思つたものでせう。では行つて見ようと申します。つまり療養旁々松根さんと一緒にゆつくり俳句でも作る氣であつたものと見えます。

　ところがいよ〳〵修善寺溫泉へ參るといふ前日、胃腸病院に一度診て貰ひに參りました。行きかへりとも市內電車で、かへりには外濠で神樂坂下におりて、そこから家迄步るいてかへりました。途中で大變胸が惡くなつたさうですが、車にものらず其儘我慢してかへつて參りました。

　その翌日修善寺へ向けて一人で出發ました。途中三島で松根さんと落ち合ふ約束だつたのださうですが、どういふ間違かお會ひが出來ず、そこのプラット・フォームに待つてる間に、八月の暑いさ中だといふのに、非常に咽喉をいためて了つたさうで、汽車に乘つてから、どこかの驛で、西洋人と驛夫とがしきりに何か言ひあつてゐましたが、双方の言葉が通じないので、とんと埒があきませ

ん、聞いて見れば西洋人の手荷物がなくなつたとやらで問答してゐたのださうですが、いつまでたつても果てしがつかないので、仕方がなく中へ通辯に入つてすぐに用を片づけさせたさうです。が其通辯の時、話したくてもまるで聲が出なかつたには閉口したと、後で申して居りました。一體どういふものか胃を悪くする時には、きまつて其前に咽喉を悪く致しました。此時もそれでしたが、亡くなる前にも大變咽喉をいためましてしきりに咳をしますので、咳止藥をのませますと、こん度は胃が苦しいといつて、それ切りでやめたことがあります。

そんな工合で着いた三日目から早や床について了ひました。松根さんが見兼ねて含嗽藥をこしらへさせてあてがつても、さあおやりなさいと言はなければ、中々含嗽をしない。世話がやけるつたらないなどとこぼしてゐられたことがあります。

さうかうして居るうちに、容體が面白くなかつたものと見えて、土地の醫者をよんで診て貰ひますと、東京へ歸つて治療したがよからうといふことだつたさうですが、病人は動きたくなく歸りたくないといふので、では主治醫の方へ話をして見て、先方から醫員に來て頂くなり何なり取計らはうといふことで、長與胃腸病院へ電話をかけました。病院の方では自宅の私のところへ電話をかけて様子を報らせようとしたのですが、合憎其頃はまだ宅へ電話が引いてありません。そこで毎日新

聞にかけて聞いたら仔細がわかるだらうといふので、新聞社へ電話をかけます。新聞社ではびつくりしまして、すぐに阪元雪鳥さんが、胃腸病院の醫員の森成麟造さんと一緒に修善寺に急行されました。

そこへ松根さんから電報が參りました。電文が短いのでどんな樣子かさつぱりわかりません。いづれ驅けつけるにしても、も少し詳しいことが知りたい、さう思ひまして御近所の山田三良さんのところの御電話をかりまして、修善寺の菊屋本店にかけます。すると自分で電話口に出て參ゐりました。自分で電話口へ出て來る位だからと、ほつと安心はしましたものの、それにしても話の樣子がいやに他人行儀で、さうして電話も遠いのですが、一向要領を得ません。後で聞いて見ると、私の妹かと思つて、改まつていゝ加減な挨拶をしたのださうですが、それにしても床についてゐる病人を、あの菊屋の長い廊下の、しかも上つたり下がつたりの一道中を、帳場迄呼び出したのかと思ふとぞつと致します。そのうちに不得要領のうちに電話が切れます。仕方がないので電報で問ひ合はせますと、來るに及ばずといふ返電でした。電話口に自身出て來たことと云ひ、又この電報と云ひ、私はほつと致しました。

まだ入院中からの話で、この夏は子供たちを海水浴にやつてやらうといふので、茅ヶ崎の海岸に

小い家を借りまして、私の母からついて行つてもらつて居りましたのですが、此頃は毎日毎日連日の大雨で、どこもかしこも大洪水、汽車は不通になるし、さつぱりよその様子がわかりません。茅ヶ崎の様子も知りたいが、どうにも仕様がありません。そこで矢來の兄さんに頼んで、郵便局の電話で聞いて頂くと、茅ヶ崎は大丈夫といふ返事で一安心して居りますと、こん度は箱根の[illegible]住へ行つて居た私の妹と一番季の弟とが流されたといふ話。がこれもどうすることも出來ません。そんなこんなのごた／＼を水見舞旁々夏目のところへ手紙を書いて、行きたくも行けないことを言つてやつて居りました。

其内に汽車は開通します。まづ何よりも茅ヶ崎へ水見舞に參ります。出がけにいゝ按配に箱根で遭難した妹も弟も命から／＼避難して横濱にかへつたといふ通知をうけました。それ迄心配するとわるいからと、母には内證にして居たのですが、もう大ぴらに言つてもいいので、そのわけを話して會ひに行つておやりなさいと、入れ代りに横濱へやつて、私は其晩子供たちのところで泊まつてやらうと思つてゐたのでした。

と、入れ違ひに、私を追つかけるやうにして、修善寺から家へ打つた電報を、留守居の人からこゝへ打ちかへして來て、修善寺へ急行せよといふことです。すぐ樣子供たちをこゝの家主のお神さ

んに頼んで、又母のあとを追つて横濱へ參りました。しかし其日はおそくなつて、修善寺行きの汽車には間に合ひません。不安な一夜をそこに明かして、翌朝早々とたちました。

修善寺へついて早速松根さんに會ひました。かなりの出血があつた後で、今は落ちついて居るけれども、これがをさまつたら東京へ連れてかへるがいゝといふお話。段々話を伺つて見ると、此方へ來てからずつと胃の工合が惡くて、此頃は毎日便に出血を見るとのことでした。何にしても並々ならぬ容體のやうでしたが、其晩に又々血を吐きました。

ところが胃腸病院から來られた森成さんが、ほんの一寸の診察のつもりで來たのに、かうやつていつになほるとも知れない病人にいつまでついてるわけには行かない、胃腸病院の仕事もそのまゝにしてあるのだから、かへりたいといふ私の顏を見てのお話。それはいけないでせう。此方へ來る前に胃腸病院へわざ／＼行つて、旅行してもいゝかどうかを伺つて快諾を得て來たのであつて見れば、來るや否やすぐ病氣を發するなどといふのは、一部分たしかに病院の責任ともいふべきことでせう。ですから私からいへばお醫者の診察違ひとでも言ひたいところだのに、その病人を打つちやつて歸へるなどとは以ての外だと私が抗議を申し込みます。森成さんもお困りになつて、長與さんへ電報をお打ちになる。夏目氏全快迄居よといふ返電がつきます。さうして其上副院長の杉本さん

が診察に見えるといふこともわかりました。

前晩あたりのことだつたさうですが、修善寺のお祭りでしきりに花火が上がる。それを縁の端近迄床を引いてもらつて寢ながら眺めて、西瓜の汁をすゝつてゐたが、其中に一粒の種子が入つてゐたのを知らずに呑み込んだので、森成さんたちが心配したことがあつたさうです。が其日は大層血便も少く、この分ならば遠からず東京へ移せると、皆がやゝ愁眉をひらいたさうです。

杉本さんが見えるといふ日、朝からお待ちしてゐるのですが、胃の工合も惡く顔色もよくありません。氷で冷やしたりしてゐるのですが、顔の色などまるで半紙見たいで、見て居ても氣持が惡いたらありません。心臟も惡くないやうだが、先生神經でもおこしてゐるんぢやないかしらなどと、お醫者さんも言つてられたものです。それからしきりに胸が惡いと訴へて居りました。

夕方牛乳を少しばかり呑みましたが、大變氣持の惡い樣子でした。そこへ杉本さんがお見えになつて診察がすみます。やれ／＼と思つて、お醫者さん達が彼方の部屋に退いて、一風呂浴びて夕食でもたべようとなさいます間、私が側へよつて話でもしようと近づきまして、あんまりいやな顔をしてゐるものですから、

「氣持惡いですか。」

と尋ねますと、いきなりすげなく、
「彼方へいつてゝくれ。」
と申します途端に、ゲエーッといふいやな音を立てます。様子が只事でありません。隣室に高田早苗さんがお子様方をお連れになつていらして居ましたが、そこへ女中さんが來て何やら話をしてゐます。ともかく場合が場合ですからなりふりをかまつては居られません。急にその女中さんを呼びまして、今行かれたばかりのお醫者さんたちを呼んで貰はうとしました。と又ゲエーッと不氣味な音を立てたと思ふと、何ともかんとも言へないいやな顔をして、目をつるし上げて了ひました。と鼻からぽた〱血が滴ります。私は躍氣になつて通りがゝりの番頭を呼んで醫者を呼ばせます。お醫者さんたちは中庭を隔てゝ向ふの部屋に居るのですから、その後姿などがちら〱見えてゐるのです。其間に夏目は私につかまつて夥しい血を吐きます。私の着物は胸から下一面に紅に染まりました。

そこへ皆さんが馳けつけておいでになります。顔の色がなくなつて、目は上がつたつ切り、脉がないといふ始末。それカンフル注射だ、注射器はどうしたといふ周章方です。注射を續け樣に十幾本かを打ちますが依然としてよろしくない。では食鹽注射だといふことになりましたが、合憎と

森成さんも杉本さんもその注射器を持ち合はされない。漸く土地のお醫者から借りて來たもの丶、それが壞はれてゐるといふ始末。壞はれたつて針さへあればい丶、灌腸器の何とかをどうしてと、上を下への騷動です。一晩中壞はれかけた注射器を武器にして、お醫者さんと病氣とが闘はれたわけですが、たうとうい丶按配に脉も出て來て、危いところで一命を取りとめることが出來ました。

後で病人に聞きますと、そんなに騷がれてゐるにも拘らず、自分は血を吐いて了つたら、實にもや〱してゐた胸がからりと晴れ渡つた氣持になつてせい〱したさうです。さうして皆があはてて話をしてゐるのが聞こえるが、たゞ自分でも相手になつて口をきく氣がしないだけのこと、かうなつた上は子供を呼ばなければいけないでせうなど丶いふのが聞こえるので、急にぽかんと目をあけて、いや呼ぶには當らないよと言つて皆を驚かしたり安心させたりしたものだが、病人なんてものは横着なものだと述懐してゐたことがあります。

社の阪元雪鳥さんが、この危篤の狀態に驚いて、各方面へ電報を打つてられる。鉛筆か筆かを操つて電報用紙に向ひながら、奧さんしつかりしてらつしやい、しつかりしてらつしやいと、私が此上氣が轉倒でもしてはと思はれるものかしきりにはげましてくれられたのですが、私どころか御自分の手がぶる〱震えて、どうしても電報の字が書けないのでした。

社からは主筆の池邊さんが來られる。其外いろ〳〵な方々がお見舞にかけつけて下さいましたが、この容態なものですから、會つて頂くわけに參りません。

ところが其日はどうやら落ちついたもの丶、翌日になると杉本さんが院長の長與さんが重態でどうしてもかへらなければならないと仰言います。もう少し居て頂きたいのは山々ですが、それも致方がございません。かへり際に、吐血で病人を殺ろすのは全く醫者の不注意なんですから、森成にもよく言つて萬端遺漏のないやうに致させますが、しかし御覽のとほりのこの御重態のことですから、もう一度大出血がないとも限りません。萬々一それがあれば絶望だと思つて頂かなければなりませんといふお話。そこで池邊さんにもそのことをお話して、こゝ二三日が大警戒を要する時だとあつて、東京から看護婦を呼んだりして、手當に手落ちのないやうにつとめました。いゝ按配に吐血はそれ切りとまりました。が手足は動きません。これが八月二十四日の出來事であります。

こゝで一寸迷信的なお話をつけ加へておきませう。一體私は元からさういふ質でもなかつたのですが、殊に夏目の頭が病的に惡くていぢめられた頃から、物事を運命的に觀ずるとでも申しませう

か、占ひを見て貰つたりするやうになりました。別にそれを人に強ひるといふのではなく、言はゞ自分の安心の爲めに見てもらうのですから、こつそり見てもらつたりするのですが、これがいつの間にやらわかつてしまつて、お前はいつも亭主より先に天狗に相談するなどゝ笑はれたものです。天狗といふのは私がよく見て貰ふ占者のことです。

この大出血の前日、つまり二十三日のことです。どうも夏目の容態が氣になつて仕方がないので安心の爲めと思ひまして、天狗に手紙を書いて、容態のことをいつてやりまして、どうか占をして見て、その上祈禱をして下さいと申してやつたものです。すると二十五日に返事が參りました。易をたてゝ見たら、出た易がとても惡い。謂はゞ體に彈丸が當つて爆發したやうな形だから非常に惡い。が私は齋戒沐浴して一生懸命三七日の間御祈禱して見ませう。どうか一週間一週間に息をぬいて一休みしますから、一週間たつたらそちらの容態を知らせて下さいといふ返事です。丁度二十四日の危篤の日を挾んでの手紙の往復でした。それでそのとほり七日目七日目に此方の容態を報らせてやつて居りました。そしていゝ按配になほつたので禮狀を出しておいて、後で御禮に參りました。すると其時天狗が申しました話が少々怪談めいてゐるのですが、妙に面白いのです。

何でも私からの手紙をうけとつた二十四日の二三日前、どこからともなく見なれない黒猫が天狗

の家に入つて來まして、その儘逃げもせず家に居ついて了つて、御飯をやればたべるし、坐はつて居れば膝に來て抱かれるといつた工合でありました。ところが私の手紙で、これから祈禱をしようと壇を組んだりしてゐますと、いつの間にやら姿を隱くして、それからといふもの幾日たつてもかへつて參りません。妙な猫だなと時々思ひながら祈禱を續けて居りますうち、滿願に近づいてひよつくり入つて來まして、さうして血を吐いて死んださうです。どうも猫が身代りになつたのぢやないかなどゝ申して居りましたが、さうして夏目と猫とだと取り合はせもよくて益々怪談めいた因緣話になるのですが、それを聞いた時が場合が場合なものですから、非常に感謝したい氣持になつたものです。

三八　病床日記

この二十四日から、私が側にあつた夏目の日記の尻につけた其日其日の心おぼえがございますから、こゝにのせませう。當時の大體の輪廓がわかつて好都合ですから。

二十三日迄は夏目が書いて居ります。この年の六月六日からずつと每日書き續けておいたもので

す。二十三日の夏目の日記から始めます。

八月二十三日

快晴。女郎花、野菊、男郎花、薄、萩、桔梗、紫の玉（藤の如きもの）

○おくび生臭し、猶出血するものと見ゆ。便は無類血色あり。

○高田早苗氏の名刺を番頭持參。坂元に此方の名刺を依賴。高田氏謠をうたひ初む。

八月二十四日

朝ヨリ顏色惡シ　杉本副院長午後四時大仁着ニテ來ル　診察ノ後夜八時急ニ吐血　五百カラムト云フ　ノウヒンケツヲオコシ一時人事不生　カンフル注射十五　食エン注射ニテヤヽ生氣ツク　皆朝迄モタヌ者ト思フ（筆者註。こゝまで萬年筆、以下終り迄鉛筆にて書きつけあり。尙假名の混用其他原文のまゝ）社ニ電報ヲカケル　夜中ネムラズ

八月二十五日

朝容態聞ケバキケンナレドゴク安靜ニシテ居レバモチナホスカモ知レヌト云フ　杉本氏歸ル　東京ノ家ノ東カラ電話ガカヽリ今朝一番デ夏目兒上高田姉上御夫婦小供三人高濱さん森田さん中根倫さんお立ちになりましたと云ふ　大塚さん大磯から來ラル　阿部さんも來てクレル　一氣車ヲクレテ野村さんも來ル　池邊氏も來ラル

八月二十六日
容態やゝ良好
見舞客奥村鹿太郎　滿鐵ノ山崎氏　鈴木三重吉　春陽堂　湯淺廉孫　高田知一郎　菅虎雄、森巻吉、看ゴ婦二人　春陽堂ハ菓子折ヲクレル

八月廿七日
容態別ニ異ナシ
見舞客
小宮豐隆　渡邊和太郎香水トビスケツトヲモラフ　高尾忠堅早稻田大學の學生、早矢仕四郎元同

其時小供兄姉ト同ジ學校ニ居タ人ノヨシ、奥村又モ少シヨクナツテ來マストテマヽニカヘル
野村さん一處ニカヘル

八月廿八日
容態別狀ナシ
森成さん東京ニ用事ガ出來テ歸ル　病院カラスカダト云フ先生代理ニヨコシテクレル
見舞客
小林郁　高須賀淳平　石井柏亭　行德二郎　野間眞綱

八月廿九日　晴
容態良好ニテ此分ナラバ心配ナシトノ事皆安心シテ東京ヘカヘラル
大塚さん、菅さん　森さん　野上さん　湯淺さん。大倉書店ヨリ見舞狀ニソヘテ小包ヲ菓子折ヲクレル　名古屋の鈴木カラ心配シテ毎日容態ヲ電報デシラシテ呉レロト云テクル見舞トシテ金二十五圓クレル其金デ毛ブトンヲ買テ病人ニカケヨウト思ヒ野上さんニタノム

八月三十日

晴　容態別異狀ナシ

ヌカダ醫師午後二時ノ汽車ニテ歸ル　森成サン入リカワリ東京カラ歸テクル　其時行德サン高須賀サン一處ニ歸ル　夜滿鐵ノ中村サンカラ山崎氏ヲヨコシテ　御見舞トシテ金三百圓ヲ下サル

八月三十一日

晴　容態異狀ナシ

今日カラソツプヲノマセルト云故朝トリテ買テ切テモラヒ　酒ドツクリヲカリテ其中ヘトリヲ入レ　ユセンニカケテ火鉢デソツブラコシラエル　夕方名古屋カラ鈴木ガクル　二三日前ニアツラエタハネブトンガクル

九月一日

晴　容態ヤヽ良好ナリ

早稲田大學生小林脩一郎ト云フ人ガクル　中村さんノ伊山崎さん歸ル　鈴木モ午後カラ歸ル　イロイロ東京へ買物ヲ頼ム　夕方野間さんが東京カラクル

九月二日

晴　容態變りなし

今日からソツプガ三度ニナル食ベル事バカリ考ヘテイルコシ　坂本サンカ七時頃カライリオシテ腹ガイタイト云ヒ出ス　カイロヲコシラエテ上ル　夜九時頃ニナリ内丸サンガ來ル

九月三日

雨　容態異狀ナシ

朝十時ノ氣車デ内丸サンガ歸ル　野間サンモ午後二時ノ氣車ニテ鹿兒島へ歸ル

九月四日

晴　容態同ジ

朝九時頃湯淺サンガ東京カラ歸リ道ニヨル　阿部次郎サンカ午後ニクル　山形カラ歸リ道東京ヲス通リシテ當地ニクル　病人ニ話シタラ酒デモノマシテ上ケロト云事故ビールヲ二本小宮サントニ人デノム　湯淺サン六時ノ氣車デ歸ル

九月五日
雨　容態だん〳〵よろし
阿部サント小宮サンカサン歩ニ行キ、歸リニ草花ヲ取テクル　花イケニサス

九月六日
晴　異狀ナシ
今日ハ十時食鹽ノカン腸ヲスル　四人ガヽリデオコシテ　大便ヲサセル　少シ出タヨシ
ハダカニシテセナカヲアルコールテフキ着物ヲネルト取カヘル　ワラブトンノ上ヘナミノフトンヲ二枚カサネテ其上ヘ寢カス　皆大變心配シタレド別ニ變リナシ　大キニ安心　阿部サン午後二時ノ氣車デ東京ヘ歸ル

九月七日

雨　容態よろし

今日一番デ坂本サン歸ル　カハンヲ持テ行テモラフ　野上サン夕方クル　御土産ヲクレル

私の日記はほんの心覺えでしたが、こゝで終つて居ります。するともうその翌日の九月八日から、ねながら書くのですから少々亂雜ではありますが、この同じ日記帳に句を書いたり、英語まじりの感想らしいものを書いたりし始めました。それが日増しに日記の體をそなへて來て、句をしきりに作つてかきつけ、それから漢詩なども次々に出來る樣子でありました。

私の日記は周章てゝ居る時ではあり、そんなことには餘り氣のない私のことですから、まるで小學生のそれのやうに、平假名と片假名とがまじつて居たり、ノウヒンケツと假名で書いたなどゝ、後でこれを見て夏目に笑はれたものですが、ともかくこんなものでも書きつけておいた御蔭に、これを見ると何かと當時のことが思ひ出されます。しかし何と申しましてもさうした文筆の方面には疎い私のことでもあり、旁々當時の詳しい樣は忘れても居たり、又自分でも落ちついて居た積りで

もすつかり周章てゝ居たことでせうから、かなりとんちんかんなことをして居たことに違ひないので、そこへ行くと外の方がかへつてよく覺えてもいらつしやるし、又はつきり當時の狀態なども描き出して居られます。丁度今夏日の机わきの手文庫の中に、當時安倍能成さんが書いて置かれたものが殘つて保存されて居りますので、少々重複の嫌はありますが、ともかくそれをこゝにのせることに致しませう。

此時安倍さんはチブスの後の養生に沼津の海岸に來てられたのですが、二十四日夜の危篤電報をうけとるなり、翌日の一番で修善寺へ乘りつけて下さつたのださうです。それ迄は私と主治醫の森成さん、それから社の坂元雪鳥さん、それに東京から前夜診察に來てくれられた副院長の杉本さんだけだつたのですから、何だか援兵が來たやうに力強く思つたものでした。これは後の話ですが、さうなつてくると私のやうな質のものはなほ更縁起をかつぎ出しますが、いの一番にかけつけて下すつたのが、安倍能成、つまりアンバイヨクナルだから、この病氣はきつとなほると御幣を擔いだものです。それを聞いて安倍さんが、そんなら僕の功勞は金鵄勳章に價しますねといつて自慢してられたことがあります。

さて朝早々と着かれたものゝ、病人の意識が危篤と思はれない程はつきりして居ます。安倍さん

たのだが、危篤電報で皆さんを呼びよせたのを會はせるのに、下手なことをするといけないといふので、どゝはおくびにも出さず、新聞で中々お悪いといふのを見たのでお見舞に來たといふことにして病室へ案内しました。さうとは知らう筈もなく、安倍さんがわざ〳〵來てくれたといふので、私を呼んでいろ〳〵世話をやきます。以下が安倍能成さんの手記です。

二十五日　　能成

夜半危篤の報に接して、朝五時の汽車で沼津を立ち八時こゝへ着いた。夏目さんと尋ねたら番頭が「あゝさうですか」といつた口調で、先生はまだ無事で居られると一先づ胸を撫でおろした。坂元君にあつて昨夜の危篤の模樣をきいた。續け樣に血を吐かれて、幾ら注射しても注射しても一向きゝめがなくて、都合十五度まで注射した相である。坂元君は終夜森成氏と共に看護せられたから、今日は自分が病床に侍することゝなつて、午後に先生の少しく落着かれた時分に、先生の病室の一番へ出ていつた。何心なく沼津から先生の見舞に來たことにきめておいた。部屋へはひると先生は少しく頭を上へ向けて、ジロ〳〵と自分の方を見られる。自分が御時儀をすると一寸うなづかれた。それから側の下女に

「奥さんを呼べ。」
といつて、奥さんに、
「安倍君が來た。」
といはれたので、奥さんと自分とは改めて御時儀をした。下女にお茶を持てこいなどゝ注意されて、
「やつぱり沼津に居るのか。」
「何時の汽車で來た。」
「大仁から歩いて來たのか。」
「飯は食つたのか。」
「こんなにわるいとは思つてなかつたゞらう。」
などゝいはれたので、好い加減に返事をしておいた。
「湯にはひつて休み給へ。」
などゝもいはれた。先生の御顔には大分やつれが見えて、腭髯が一ぱいにはえて、時々あらぬ方を凄い目付をして眺られる。顔色は赤味がなくて土色に青味を帶びて居る。開かれた胸の上には

ガーゼがかぶせてある。胃部に氷嚢をのせてあるのが、大に自分を驚かした。それでも首のあたりから胸へかけての日頃から頑丈なからだつきが何となく心丈夫に思はれた。足の上には浴衣がかけてあつた。昨夜の電報で先生の兄上、姉上御夫婦、上三人の御孃さん、中根の弟君、それから大塚先生、高濱氏、森田、野上の諸君が午後二時頃に來られたけれども、病人の神經を刺戟する恐があるから皆あはず、野村傳四君だけがあつて、自分と交代に病床に侍することゝなつた。夜朝日の池邊氏が來られて病床に通られた。先生は

「色々と御世話をかけました。」

と禮をいつて居られた。今朝以來一つも食を取られず、時々氷で口を嗽がれるばかりである上に、眼を閉ぢられても唯暫らくの間に直ぐさめて仕舞はれる。醫者に、

「身體も動かされず、物も食へないから、少しく眠りたいんですがね。」

といはれた。出血を止める爲めに注射をする。先生は其れが痛いので隨分いやがられたけれども、醫者が徐々にその必要を說いたので漸く首肯かれた。夜は八九時頃であつたか、牛乳の滋養浣腸をやつた。醫者は變があれば十二時後だといつたので、十二時過から起す。それで野村君と醫者と自分と三人で夜交代に起きて居たが、幸に事もなく、時々眼をさまされたけれども比較的よく安

眠せられた。

廿六日

昨日にくらべて少し顔がいゝといふ話であるけれども、自分にはよくわからなかつた。午前中に高濱氏が一寸あつた時には、先生は一寸笑顔をして挨拶せられた。

「新井に御泊りですか。」

など〻言つて居られた。やつぱり午前中に池邊氏が暇乞に來られた時は、隨分暫一つも物を言はれなかつた。側からは氣分がそれ程引立たなかつたのであらうと思はれた。それでも池邊氏の方から挨拶をせられた時には、色々返事をして居られた。午後になつてから伊勢の湯淺氏、東京から高田氏、春陽堂の小林氏なども來られたが、高田、小林兩氏は晩に歸られた。夕方のことであつた。

「此間は死にかゝつたよ。」

など〻言はれた。それから

「氣分のぼーつとして居る時など子供なんかにあひたくない。唯こゝで死ぬるのはいやだ。」

と話された。其後やつぱり話が一昨晚のことになつて、醫者が、

「あの時はしくぢりましたよ、普通の患者なら分るものぢやないんですけれども、精神力が御強いものですから。」

といつたら、

「別に精神力が強いといふわけでもないでせう、やつぱりそれだけの體力があるのでせう。」

といはれた。自分は

「獨逸語が分つた相ですね。」

といつたら、

「ウントートが何とかゞシユワツハだとかいつて居た。」

と云はれた口調に先生の平日があつた。昨日より氣分がよささうだとはいふものゝ、何だか鬼氣人に迫る樣な凄味は一向失せない。この樣な風で段々と弱つて行かれるのではあるまいかなどゝ思ふと、今かうして居られる先生と已に息絶えた先生とが思ひくらべられて、どうしても解けない謎を眼の前につきつけられた樣な氣がした。それでも先生は中々やかましい。醫者の色々やる處置について、一々說明を求められる。こんな風では又少しよくなつても自分勝手の考に任す樣なことをせられはすまいか。こんな大病人でありながら「俺のからだは俺が知つて居る」といふ樣な顏を

して居られるのが氣になつた。今日はたしか葛湯を少し飮まれた筈である。

「氷を飮んではいけませんか。」

と醫者にきかれる。

「口を御歎ぎになる時に多少ははひるでせう。」

と答へると、

「それは止むを得ずはひるのです。若し直らないときまつて居れば、ドシ〱飮むんだけれども。死ぬるのはよいけれども、又此間の樣に苦しいと困るから、それでなければあなたが何といつてもどし〱たべるのですけれども。」

といはれた。今日午後二時頃に東京から看護婦が二人來て、午後六時から看護に從事する樣になつた。それで野村君と自分とは時々顏を出すばかりにした。夜分に異狀なく、十一時頃に床についた。時々起きる積であつたのに、朝までグツスリとねむりこんでしまつた。

今日正午頃であつたか鈴木三重吉君がやつて來た。大塚さんや門下生諸君の間に、中村滿鐵總裁から醫者をよこしてくれるといふことだから、入澤達吉博士を願はうといふ議が成立した、その晚瀧居祕書にあてゝ電報を以て願つた。

廿七日

昨夜來異常なし。脈搏は九十度以下、呼吸は二十四内外、熱は三十七度を上ること少し位の狀態で今日中を過ごした。今朝先生の兄君姉君とお孃さん三人と中根氏とは先生にあつて歸られた。今日午前小宮が來た。野村君は正午に歸つた。先生の病氣にも目下の所變狀がないので、皆の控室が大分陽氣になつて來た。今日は葛湯の外に平野水の少量を飮まれた。時々煙草を吸はれた。昨日はアイスクリーム一匙、午前は二匙であつたが、午後三匙目の時にもう一つですかと非常に嬉しさうにいはれた。夕方に看護婦に鏡を取らして、舌を出したり脣や瞼を返したりして、頻りに見て居られた。

夜菅さんと森卷吉氏とがやつて來られた。しかも皆あはれなかつた。夜先生は酒のことを醫者にきいて居られた。

「酒は飮める樣に稽古が出來るものですか。」

など〻言つて居られたが、どんな心持で此の問を發せられたかと思つた。

廿八日

今朝野上森田と湯淺氏とは病室に通つて面會した。

「よく來たね。」

と言はれた相である。

午後病室へ行つた時には色々と話をせられた。沼津で肴を食つて居たかといふ御話から、先生は肴は食いたくないが、野菜が食ひたい。豆腐や雁もどきが食ひたいといはれた。昨日にくらべると眼付が大分やさしくなつて、時々あらぬ方を凄く見つめられることが少くなつた。今日四時の汽車で醫者の森成氏は長與院長の見舞に歸つた。其の代りに一兩日前獨逸から歸朝の醫學士額田君が見えられることになつてゐ今夕から時々病床を見舞はれた。額田君の話では樣子が非常によい、大抵大丈夫であらうといふことで、皆が大に喜んだ。

今日は注射をした箇處の痛が大分とれて、腕を動せる樣になつたので嬉しがつて居られた。皆が一寸顏を出しては直ぐ引込むので、

「皆俺の顏を見て直ぐ引つこむがどうしたのだ。」

と聞かれた。奥さんが、

れ」

「病氣にさはるといけないと思つてゞす。」

といはれたので首肯かれた相である。坂本氏が朝日から来て居るのを先生は前から氣の毒がられて居たので、一昨夜一寸用足しに歸つて今晩又來たといふ風にいつた。其時先生は、

「早く片形が付くのならばよいけれども、快くなるとしたらいつまでかゝるかわからないのに、さう居ても切りがあるまい。」

といはれた。先生自身は大いに生きるウィレを抱いて居られるらしくて、頼もしかつた。菅さん大塚さんから、滿鐵から名醫をよこしてもらふことにしやうといふ議が又起つた。此前の電報を出した時には、入澤さんは長與さんの病氣で差支へてるから、尚ほ池邊さんと相談の上でどうにかするといふことになつたのであつた。そこで森田が朝日や滿鐵に話をする爲め今晩の七時頃の汽車で歸ることになつた。

今日鹿兒島から野間氏、佐賀から行德氏、東京から小林郁氏が見えた。

廿九日

午前中大塚、菅、小林、森、野間諸氏は先生に面會せられた。大塚さん菅さんは思つたよりもや

つれも薄く、元氣があるといつて喜んで居られた。湯淺氏は上京してから又歸りによるといつた私が、
「中々死にやしないからもう來なくともいゝよ。」
といはれた。正午野上を加へて上の諸氏は二臺の高等馬車に搭じて一先歸られた。
午後も別狀なく夜に入る。高須賀淳平君が昨日やつて來て、先生にあつた。

三十日

今朝病室へ行くと、先生は朝鮮の合邦、梅さんのことをきかれた。野上は歸つたかときかれた序に小宮の來た由をいつたら、どふして來たのだらう、あの人は新聞は見ない筈だがなどゝいはれた。
それから、
「こゝへ來る連中を見ると、僕の樣になつてはすまないかと思つてこはくて仕方かない。杉本の樣にふとつて居る人は別だけれども、森卷吉なんかひどいのだからね。」
といはれた。話をするとお草臥れですかといつたら、
「長いとくたびれる。」

との答であつた。又今朝胡瓜もみが食ひたいといはれた相である。

瀧へ行つたかともきかれた。

午前中に行德氏は先生にあつて、二時の汽車で額田醫學士及び高須賀君と一所に立つた。額田氏は二週間もすれば東京へつれて歸つていゝだらうといはれたが、自分は本統にさうなつてくれゝばよいがとやつぱり氣づかはれる。額田氏と入り代りに森成氏も歸つてこられた。

午後小宮と一所に病室へ行く。先生は少し疲れられたのか、一向物を言はれなかつたが、自分が出た後では、小宮に、

「新聞は何新聞に出て居たか。」

とか、

「田舍は面白かつたか。」

とか色々のことをきかれた相だ。

夜滿鐵から中村氏の命を傳へて山崎氏が見舞はれて、入澤氏が來られぬので、宮本博士に來てもらうことゝなつたが、今十日もせねば來た所で診察も出來ないから、來るのは少し後にするとのことであつた。

三九　經過

安倍さんの手記はこゝで終つて居ますが、當時の模樣をよく傳へて居ますので、こゝで拜借致しました。

私の日記にも亦安倍さんの手記にもありますやうに、もういよ〳〵だめらしいから、今のうちに子供たちに會はせておいたらといふので、茅ヶ崎に居た上の三人の女の子を呼びまして會はせました。丁度夏目の兄さんや姉さんたちと汽車で落ちあつたといふので一緒に參りました。病室にとほすと、病人はたゞ目を開いてじつと見て居ただけで何とも申しませんでした。何しろこゝ二三日が一番危險で、又どう急變するかも知れないといふので、東京へ賴んだ看護婦は中々來ず、皆で注意に注意をして看護したものでしたが、少し手を動かしたり足を動かしたりすると、すぐ樣傷口から出血するものと見えて、顏の色が變はつて目を白くする始末です。とても怖くて氣が氣でなくて見て居られたものではありません。そこで別の部屋に入つてなるべくこの物凄い場面から遠ざからうとして居りますと、見舞に來られた鈴木三重吉さんが、

と、私が不實でもあるかのやうになじられます。しかし私はとてもとても氣が氣でなくて、どうなることかとこんな慘ましい樣を見るに堪へないのですから、

「奥さん、何故側へ行かれんのか。」

「氣持が惡いから………」

とか何とか返事をするのですが、それはいけないてなわけで、先方で親切で言はれるのはわかつてるものゝ、私の氣持が汲んで頂けないので、場合が場合なので大變言ひ合をして、たうとう終ひには間へ安倍さんが入つて、つまらないこと言ひ合つたつて始まらないぢやないかつてわけで、鈴木さんをなだめられたりなどしたことがあります。何しろいつどんなことがあるかも知れないといふので、ひやひやしながら皆が別室につめ切つて、夜も交代で不寢番をして警戒致しました。

さうかうして居るうちに醫者の森成さんが、胃腸病院の院長の長與さんか危篤の重態だといふから、日頃御世話になつた方でもあるし、是非一度歸へらせて貰らつて告別がてらの御見舞がしたいと仰言います。御尤もな話なのですが、此方も此方でいつ何時どういふことがないともいへない重病人なことなので、元々貴方がこゝへついてゝ下さるのは、胃腸病院を代表してついてゝ下さるも同然なのだから、よくそこをお考へになつて無責任なことをなすつちや困ります。お歸へりになる

ならなるで、貴方の代りになるちやんとした方をよこして、それからおいでになつて頂きたいと申しまして、丁度洋行からお歸へりになつたばかりの額田さんが入れ代りにおいでになりました。額田さんがお見えになつて大分調子がいゝとのことで、皆安心したことは安倍さんの手記にも書いてあります。

最初の一日は絶食、それからアイスクリーム二匙、それから段々少しづゝ食量を増して、葛湯などもやるやうになり、自分でもしきりに何かゞ欲しくなつて、ドロップをもう一つよこせの、アイスクリームをもう一匙よこせだのと駄々をこねます。ところが困つたことにはそれからずつと二週間もたつ間、ねたまゝではどうしても便通がないといふので、たうとう二週間目かに、血止めの注射をした上に、カンフルの注射をして、四五人がゝりで便器にかけさせまして便をとりました。其時皆が心配して又悪くしやしないかとひやひやして居たのですが、自分では少し胸が悪かつたと丈で、何事もなくてすみました。そこで東京から届いた高い藁蒲團の上にねかせかへたり致しまして、私達も漸く愁眉をひらいたといふわけです。

滿鐵の中村是公さんからの意を傳へて、前々からえらい名醫を寄こすから診て貰へといふ話があつたのですが、菅さん大塚さんなどもしきりと胃腸病院は不都合だ、入澤さんに見せようといふや

うなことを仰言います。しかし私は新規の醫者に此際いぢらせるのはいやだし、さうして樣子のよくわかつてる前々からついて居てくれる醫者の感情を害すのもつまらないことだし、第一胃潰瘍だといふれつきとした診斷がついて居て、徐々になほりかけてるのだからいゝではありませんかと、中々素直におうけをしようとは申さないのですけれど、その話が一度ならず出て、皆さんの御好意からといふこともわかりますので、そんならともかく一度診て頂かうといふことに致しました。とところが入澤さんがどうしてもおいでになることが出來ず、代りに宮本博士がおいでになるといふことになりましたが、しかし今行つても仕方がないから、いま少しなほつてから出かけようといふことでした。

其うち一時つめかけておいで下すつた方々も次第次第に歸京されますし、後は私と森成さん、それに東さんの三人が殘りました。程經て御約束により宮本さんがおいでになることになりましたので、又おいでになつてから、俺は新規の醫者に診て貰ふのはいやだなどゝ默々を捏ねないものでもありませんので、一度相談致しますと、案の定、森成さんも居ることだし、段々なほつて來てるのだから、そんな無駄な手數をかけないでもいゝぢやないかといふ調子です。そこで、實は私も皆さんにさう申上げて一度は辭退したのですけれど、重ね重ねの御好意を無にすることもどうかと思

ひ、東さんや大塚さんの顔も立てておうけすることにしたのだと理由を話しますと、機嫌よくさうか、そんなら診て貰はうと、さらりと申してくれました。それが九月の半頃でしたでせうか。來て診て御覽になつて、大分いゝがまだ動かすには早い、もう二週間もしたら歸京しても差支あるまいといふお話で、私たちも大に力づきました。

其中にお腹が益々すく樣子で、食べ物の方も葛湯がオート・ミールに代り、それから重湯刺身などといふ風になつて參りましたが、重湯は如何にもまづいと申して殆んど頂きませんでした。ところがいよ〳〵お粥といふことになつて、初めてお粥を戴きました時には、こんなに美味しいものを口にしたことがないと大變な喜び方で、お醫者さんをわざ〳〵枕元に呼び迎へまして、お粥をたべさせてくれてどうも有難うと御禮を言つて居りました。

何しろお腹が空いて空いて仕方がないと見えて、無闇とたべたい樣子で、いつも御醫者さんと喧嘩です。私が居ると五月繩い、又何か言はれさうだ、居なけりや喧嘩相手がないからそれ切りになら う、文句を言はれるのがつらいとあつて、食事の時になると森成さんが外へ散歩かなんかに逃げ出して了はれるなどといふことがよくありました。自分ではねながらいろ〳〵献立を頭の中でこさへて、やれ西洋料理だ、今度は鰻だといふ風に想像の中で御馳走をならべて見るのだと申して居り

ました。

それからやがて本が讀みたいと申しますのですが、自分では力もなし、第一本を手にもつてるのは病氣の爲めよろしくないといふので、ついてる東さんが本をひろげて見せるのを仰向けになつて居りながら見るのですが、もつと遠くへ離せとよく小言を言つて居りました。先生どうも老眼になられたらしい、無闇と離して本を見られるなどと東さんが言つて居られましたが、やがてそのうち自分で本をもつて見るやうになりました。

それから喧嘩の種に今一つ新聞があります。時々新聞を見せろとやかましくせがむのですが、これもたうとう見せずに置きますと、或時しきりに要求しましてこれ又喧嘩です。といふのは丁度其頃胃腸病院の長與さんが亡くなられて、それを知らせずにおいたのが、新聞を見るとわかるので見せずにおいたのです。だから修善寺をたつて、又再び胃腸病院に舞ひ戻つて來る迄、院長の死を知らずに居たのです。といふのは非常に長與さんを信頼して居りましたので、こん度の病氣についても長與さんから特別御厄介にもなり、長與さんの方でもよく氣をつけて下すつた上に、何事につけても夏目さん夏目さんと言つてくれられるし、夏目の方でも長與さん長與さんとしたつて頼つて居たものなのです。その信頼して力にしてゐた先生が、自分の病中亡くなられたと言つては力を落す

だらうといふので、長與さんが危篤だといふことも、それから亡くなられたといふことも一切隱くして居たのです。一度隱くして了つた以上、たうとう終ひ迄隱くすことになつて、病氣が大丈夫といふことになつても話がそれへ落ちることを避けて、皆でいゝ加減に逃げて居たわけでした。

さてこんな風に段々快方に向つて參りますと、こん度は私としては氣になるのは家のことです。といふのは何しろ眞夏、急をきいて周章てふためいて飛び出して來たまゝ、それつ切り家に歸つたことがないのに、容捨もなく秋は一日増しに寒くなつて參ります。家の事が氣にかゝつて仕方がありません。ともかく一度歸つて冬仕度の心配もして、それから又出なほして來たいと思ひましてさう申しますと、お前に歸られちや困ると申しまして手離してくれません。さう言はれて見ればこれを振り切つてかへるといふわけにも參りません。又氣が氣でなく觀念して居るのですが、其頃は長いことやはりいろ〳〵氣を使つたり何かしたのがもとでせう、不眠症にかゝつて了つて困りましたので、私も病氣が大體よくなつて來るにつれて、三度三度の食事のお粥だのスープだのを看護婦と二人で廊下の火鉢で造る外一寸用のない體になつたので、ともかく晝は精々どつか歩るくことにして、氣を紛らせて居たりなどして居りました。

四〇　歸京入院

宮本博士の二週間もしたらといふ日も來て、大丈夫といふ見極めがついたので、いよ〳〵東京へかへることになりましたが、大丈夫と申しましても、いつ何時變事がないものでもないので、これ迄でも始終枕元には注射器だのそれに使ふ藥品だのをならべ調へておいて、いざといへばすぐに應急手當をする手筈をしておく位なのですから、この病人を運び出すからしてが大變です。ともかく二階の借り切つて居た四つの部屋も片付けて、（一時危篤の時には殆んどこのならびの二階全部を借りておいたものでしたが）十月十一日といふにこの宿へわかれを告げることになりました。其時修善寺の御醫者がうまい乘物を考案して下さいました。といふのは一寸申せば舟形の寢臺で、うしろへ半ばねたやうになつてよりかゝれるといふ趣向に出來たものです。それに蒲團を敷いて、そのまゝ馬車へでも汽車へでも移してのせようといふ考案です。至極うまい考案で助かつたのですが、この家は二階から裏口へ運び出すのには、殆んど危險な段々もなくて至極簡單に通りへ出られるのですが　お醫者さん迄かついで了つて、ともかく裏口なんか縁起でもない、堂々と表の大玄關から

送り出さうといふので大騷動です。でもいゝ按配に一等馬車の中に運び込んで、まづ〱ほつと致しました。馬車の中ではその舟形の寢臺を横に座席に渡して、うまく納まりました。それへ看護婦と森成さんが同乘されました。

大仁で汽車にのりかへて、又三島で東海道線に乘り換へなければならない。それを苦にやんで居りますと、宿屋から番頭さんが屈強な人足を四人連れて來てくれたので、兩方とも難なく運びましたが、さて三島の乘りかへの時には、此方の汽車がついて見ると、いつもはかなりの時間を待たなければならないのが、どうしたものかもう本線の方が先着してプラットフォームに待つてる始末に、橋を渡つてる隙もなく、人足がひどい雨の中の線路を横切つて、漸く間にあつて運び込んでほつとしたことでした。

大仁からの汽車にのる前に、さういふ病人だと一等車の貸切りでなければならないといふ話で、そんならといふので坂元雪島さんから來て頂いて、會社と掛け合つて頂いたのです。夏目も贅澤な、貸切りなんて勿體ない、そんな大仰な眞似をすることはないと申します。此方も言はれて内心やゝびく〱もので居りますと、何のこと、十二人乘りかの一等車室が貸切りとなると十人乘りかに割引きされて、それより人數の增えた時は一人分づゝ拂つたらいゝのだとか云ふことで、總勢合はせ

れば優にそれ位になつて、何だバカ〳〵しい、貸切りにおどかされたと笑つたことでした。
スープやオートミールを用意して、藥品や注射器を携帶しての旅です。氣がゆるせませんのでしたが、いゝ按配に心配した程のこともなく、まづ〳〵障りもなくて東京につきました。出迎への方も澤山停車場にお見えになつて居られましたが、どんな方々でしたかおぼえて居りません。それからすぐ又內幸町の胃腸病院に入院する約束なのです。舟形の寢臺をそのまゝ吊臺にのせて、後からたしか松根東洋城さんがついて行かれました。自分では寢ながら、暗い覆をかけてかつがれて行くので、どこをどう通ほつて行くのかさつぱり樣子もわからず見當もつかず、方角のわからないのが不安で仕方がなかつたと申して居りました。
病室へ送り込んで、私も漸くほつと安心致しました。自分でも安心した樣子でしたが、私が何かと整理をして、ともかくこれでよしと見極めをつけましたので、何より先に家へ歸へらうと思ひまして、
「私これから家へかへりますよ。」
と申しますと、
「さうか、どうもいろ〳〵有難う。」

と、心から厚く禮を言つて居りました。
ところが私が歸へつた後で困つたことがおこつた。といふのは入院したものですから、後で病院の醫員が診察に來られた時に、夏目が今度の九死に一生を得たことについて、いろ〳〵お禮を言つて、本當に長いこと御厄介になりました、どうか長與院長によろしく仰言つて下さい、如何です、近頃お變りもございませんかと尋ねたので、どうも樣子が變だ、いづれこれには何か仔細があるのだらうといふんで、醫員の方はいゝ加減に挨拶をして出て來はしたものゝ、もうこゝへ來てはいつまで隱くし立てをしてゐるうちに、結局辻褄の合はないぼろを出すに違ひないから、私から打ち明けてくれろといふ森成さんのお賴みなのです。仕方がありません、蒔いた種子ですから刈らずばならないのですが、きつと先生が怒られるでせう。怒られたら僕が隣室で聞いて居て、これは私が醫者としてやつたことだからと罪を買つて助け舟に出ますからといふ森成さんのお話です。承知しましたといつて翌る日私が打ち明けました。
「實は貴方の病氣がお惡るかつたものですから、丁度其頃長與さんもお惡くてたうとうお亡くなりになつたのですが、貴方もあれ程慕つて力にして居られたものだから、若しやおきかせして病氣に

障はつてはと思つて、つひ今日迄隱くして居たのです。別に貴方をだます積りではなかつたのですから、どうか惡く思はないで下さい。」

さういつてわけを話してあやまりますと、

「さうかい。」

と、涙ぐんだやうな顏をして、しばし言葉が出ない樣子でしたが、やがて、

「それは大變御氣の毒のことだつた。道理で昨夕診察に來てくれた人に聞くと、何だか返事を濁して居たので、其時變だなあとは思つたが、さうかい、それはお氣の毒だつたな。」

と、本當に感慨深い面持でありました。隣室で仔細の樣子を聞いて安心した森成さん、いきなりそこへ飛び出して來て、

「どうも先生すみませんでした。皆で先生一人を欺ましてゐやうで氣になつて仕方がなかつたのです。どうかまあ……………」

といふ話に、夏目も怒りもせず、

「そんなことはないが、本當にそれはお氣の毒でしたね。」

と、つくづく身につまされて同情して居る樣子でありました。

修善寺に居るうちに、滿鐵の中村さんが、御見舞だといつて三百圓下さいました。それは有難く頂いておきました。するとこん度は朝日新聞の方で池邊さんが、宿屋の費用をいくらか出すからといふお話でしたが、何しろ見舞客が多くて、一時は夏目が寢て居たあたり近所の二階全部を借り切つてる始末に、それには縁もゆかりもない『朝日』の方から金を出して頂くのは異なものなので、其事をお斷りしますと、では折角だから夏目一人の分をといふ御申出でした。どうしたものかと思ひ迷つて居りますところへ、親類の鈴木が見舞に來てくれて、金はどうなつてるかと、それも同じくお金の心配をしてくれるので、これこれだと言ひますと、そんなら折角さう言つて下さるものを無下にこゝでお斷りするのも角が立つ、かといつて夏目が新聞社の公用で出張してゐて病氣になつたとか、社の爲めでその仕事に殉じたといふならだが、修善寺に保養に來て居てなつたのだから、謂はゞ個人的のことで、そこを社から理由なくして金を貰ふといふのも夏目の氣性としてはいやだらう。が今はそんな面倒な理屈をならべて居る時でもなし、又好意の程は充分有難いのだから、

ともかく夏目が本復する迄默まつて預つた積りで貰つておいたらいゝと、こんな風に申してくれますので、其積りに致して居りました。

其うちに又中村さんが、もう金のない頃だらうが、しかし夏目に直接やるなど〻言ふのでは頑固だからいらないといふにきまつてゐる、奥さんに行つて内諾を得て來いといふわけで、秘書の龍居さんがお見えになつてそのお話をなさいます。そこで私も、下さるお金がいらないといふ程の金持ではございませんが、どうなりかうなり治療費養生費位の貯はございますから、さう〳〵理由なしに無闇とお金は頂き兼ねますとお斷りしたものです。すると龍居さんは現金なんぞをやるといつて、さぞ失禮なとお思ひになる事かも知れませんが、それで實は私が内意を伺ひに出たので、總裁がそれを心配してられますといふお話に、私は別に怒つたりなんかするどころか、御好意は本當に有難く思つてるのですが、どうか惡からずと申しますと、さう思つて頂ける位なら、折角私が使にも立つて來てるので、總裁の好意もとほり、又私の役目も果たさせて頂きたいといふわけで、たうとう口說き落されて、又もや三百圓頂いて了ひました。

ところが胃腸病院に參りましてから、何かの折にもうよからうと思ひまして、この話を致しますと、「朝日」の分は貰ふ理由がないから私にかへして來いと申します。そこで池邊さんにお會ひし

て其事を申上げますと、貴方のところだつてお金持ぢやない、一旦社の會計から出したものだからいいぢやありませんかとのお話。それでも困りますから是非にといつて御願ひして參りました。其中に池邊さんにお會ひしますと、あゝ迄仰言るものだから社長に話して見ましたが、君にやつたんだからいゝやうにしたがいゝ、返へす必要はないといふことでした。もう誰に氣兼もいらない金だからといふやうな有耶無耶なことでそれなりになつて了ひました。

其うちに足腰も立ち、段々恢復して參りますにつれて、ぼつ／＼散歩などにも出るやうになります。さあさうなると中々醫者のいふことなどをハイ／＼と素直にきかなくなります。それどころか散歩に出た序に、どこで買つて來たものか、胃腸病に關する本なんか買ひ込んで來て、それを勉强してあべこべに醫者をやりこめるといふ始末です。

或る時こんなことがありました。散歩に出てかへつて來ての話に、どことかの坂を上がつたら、どうも息切れがして仕方がなかつたといふ話に、お醫者さんの森成さんが、それは病氣上りのせいでせうといふと、いつかな承知しません。しかし俺は病氣前はどこ／＼の坂を上がつても何ともなかつたものだとかいふ風です。そこで森成さんが言はれるには、先生、鶯の啼き聲を御存知です

か、あれは毎年毎年同じやうに啼くけれども、實は春先のまだ寒い頃には、すつかり去年の啼き聲を忘れて了つて、笹啼きなどゝいつて殆んど啼けないのです。それが段々お稽古をして又元どほり啼けるやうになるのですが、先生もそれと同じことで、大病なすつたので足の力などは子供のやうに弱つて居る。それですから段々に少しづゝ元へ稽古をして戻すのですといふ話法です。

「さうですか。」

夏目も一言もなく默まつて、それ切り文句も申しませんでした。其話を鈴木三重吉さんにお話しすると、

「そりや相手が醫者だからだまつて聞いて居たんだが、僕達がそんな講義をしやうもんなら、三重吉、貴樣は鶯の啼き聲を知つてるかつてあべこべにやり込められるところだ。」

に、なる程、そんなことかも知れないと笑つたことがありました。

其頃、病院へ行つてると小宮さん東さんなどがおいでになつて、奥さん、歸へりに鰻をおごつて下さいとか何とか言つてられると、夏目が、

「俺が病院に入つて居るのに、料理屋へ行かうなんて細君を誘ふ奴があるか。」

とえらい見幕で苦い言葉を浴せかけたので、這々の態で外へ出て、やがて東さんが、
「先生もあんなにいはなくたつていゝのに、大人氣ないな。これから何を食べたつて不味くなる。」
と不平をならべて、二人とも悄氣て、その儘どこへも行かず、おわかれして了ひました。すると翌日病院に參ゐりますと、機嫌よく昨日はあれからどうしたいと尋ねますから、どこへも行かずにすぐかへりましたと申しますと、さうか、そりや氣の毒だつた。小宮の奴、いつもあんまり呑氣で贅澤なもんだから、つひあんなに強く言つて見たのだと申して居りました。

たしか十月も終り頃になつて、原稿を書き始めました。こん度の大患のことを『思ひ出す事など』と題して書いたものがそれです。この原稿だつたと覺えて居りますが、一度池邊さんが原稿を書いてるところへお見えになつて、今から原稿なんぞ書かなくたつていゝ。又そんなに頭を使ふと、胃の酸が出ていけないではないかといふので、原稿紙を取り上げられたことなどがありました。

しかし書かうと思ひ出せば、人が何といつたつて書くのでしたが、此頃は病氣のせいもあつたでせう、以前のやうに日に何枚何十枚と書くといふやうなこともなく、氣に向けば一日新聞一回分を書いてぐつたりするといふやうな樣子でありました。がそんなに書き始めたり、ゆつくり落ちつい

て本でも讀もうといふ時に、又よく訪問客がある。どうも少々煩はしいなどと申しまして、病室の入口に、面會謝絶などといふ札をはり出したこともありました

しかしともかくこん度の病氣で、前のやうな妙にいら〱してゐる烈しいところがとれて、大變溫くおだやかになりました。私にも本當にこの大患で心機一轉したやうに見受けられました。何と申しますか、人情的とでもいふのでせうか、見違へるばかり人なづこくなつたものでした。誠に病中人樣にいろ〱御世話になつた、それが大變有難いと口癖に申して居りました。修善寺で危篤だといはれて居た頃、次々に知つた顏が訊ねて來てくれて、誠に有難いことだと思つて感謝して居ると。後で電報で呼びよせたのだと聞いて、その有難さが半分位になつたなどゝ笑つて居りましたが、しかし私たどに對しても、この病氣以來ずつと心持が違つて來たやうに思はれます。

まだ修善寺に居る頃、親類の名古屋の鈴木が、毎日毎日容態を電報で知らせてくれたといふので、そのとほり日課のやうに實行して居りましたが、よくなつてからといふものは、毎日毎日同じことになつて、書くことがありません。毎日毎日同じ電文でもつまらないといふので、後では面白半分今日はお粥になりましたとか、今日は御飯を何ばいたべましたとか書いて打つたものです。いつだつたかやはり書くことのない電報用紙に、今日はひげそりあたまを刈り、大きに男振りを上げたと

か何とか書いたことがありましたが、これは實に名電文だなどと歡迎されたことがあります。かうして自分は段々なほつて、いろ〳〵心配して頂いた病院の院長がかへつてなくなられ、續いて自分よりもお若い大塚楠緒子さんが、大磯に轉地してられて、此方からも御見舞に行かう行かうと思ひながら、自分の方のことに取紛れてつい時を失つてゐるうちに、秋も末頃になつて、ほつくり亡くなられる。病んで、死の瀨戸際迄辿りついて又かへつて來た身には、人一倍感慨深いものがあつたでありませう。『思ひ出す事など』の中にはこれらのことがよく書いてありますが、亡くなられたと聞いて、よくくやみを言つておいてくれとくれ〴〵も私に申して居りました。私が御宅へお悔みに上つた時には、奧さんはもうお骨になつてかへつてゐらつしやいましたが、お葬式の日には、私が風邪を引いて居て、つひ御會葬が出來ませんでした。

ある程の菊投げ入れよ棺の中　　漱石

といふのは夏目の手向けの句でございます。

修善寺で非常に御厄介になつた醫者の森成さんに何か御禮をしなければならない。何か記念の品をお贈りしたいがといろ〳〵考へた揚句、自分で銀座の天賞堂あたりから、銀のシガレット・ケー

スを買つて參りまして、それに自分の筆で、

修善寺にて篤き看護をうけたる森成國手に謝す

朝寒も夜寒も人の情哉　　　漱石

と書いて、それをはらせましてお贈り致しました。いつぞや遺墨遺品の展觀をした時にこの銀の卷煙草入れも出陳されてゐて、そゞろ其頃のことも偲ばれて懷しい思ひが致しました。

『思ひ出す事など』の話が出ましたので、こゝで話はずつと後のことになるのですが、この原稿のことをお話致しませう。

夏目が亡くなりましてから、段々評判になつたものですが、よく原稿があちこちの古本屋などで賣りに出てるといふことを聞きましたが、たゞで新聞社の屑籠あたりから拾ひ出して來たのか、それとも新聞社の方が保存されたものが、何百圓だとかいふ滅法な相場で賣り込みにかゝつてゐるので、つい一つ二つ買へば手に入つたものを、そのまゝ人手に渡して了つたことなどもありました。原稿そのものの性質として、家に殘つてるものは書きくづしばかりで、畫などは自分で表裝をして箱書き迄してのこしたものがあり、書も少しはあるのですが、原稿ばかりは、俳稿詩稿をのぞいては大

學での講義のノオトがある位のもので、別に何もありません。欲しいとは思ひますものゝ、そんなわけで一寸手が出なかつたのですが、其うちに松岡が本郷あたりの古本屋に『思ひ出す事など』の原稿が賣りに出てゐるといふことを聞きつけて見に行きました。するとこの原稿の外に、亡くなる年の正月に書いた『點頭錄』といふ感想の一部分と、外に朝日文藝時代に書いた原稿が二つばかりありました。しかし『思ひ出す事など』の方はみんなそろつて居たのを、纏つての買ひ手がなく、あれには詩があり句がありなどして、一回分づつでもそれ〴〵面白いので、新聞一回分づつ、つまり片面の原稿紙八九枚程宛を、なにがしかに分賣したといふので、五六回分缺けて居りました。賣つた先がわかつたら、折角揃つて居たものをちり〴〵ばらにして疵物にするのは惜しいと思つて、いろ〳〵尋ねて見たさうですが、結局店賣りをしたので買ひ手がわからず終ひ、とにかく殘りを全部買ふ約束をして、屆け先を言ひますと、先方では松岡と知らず値をきめたので、そんならもつと高く吹くんだつた、儲けそこねたと口惜しがつたさうです。そんなわけで『思ひ出す事など』の原稿は今宅にございます。後は『點頭錄』とそれから後で知人からわけて頂いた『彼岸過迄』の原稿と、原稿はそれ丈しかございません。最初の頃しきりに出た時分に買つておけばよかつたと、近頃そんなことを思ひますが、此頃では大變な値を言はれるので、欲しいにも手が出ません始末です。

一人ぽつねんとして原稿を書いて居りまして、いやに正月らしくなくあたりがひつそりして居ります。どうしたのですかと尋ねますと、三ヶ日は休みだとあつて、看護婦が羽根をつきに出たのだと申して居りました。

この病院で正月を迎へました。正月二日に行つて見ますと、附添の看護婦も居ず、

かうした病院生活を書いて居たんでは全く果てしがありませんから、いゝ加減なところで見切りをつけませう。

此頃同じ病院に「朝日」の澁川玄耳さんが、やはり胃腸を悪くして入つておいでになりまして、よく行き來をして居たやうですが、澁川さんはおそく入院されて、夏目よりも早く退院されました。もうそろそろ歸へり話の持ち上がる頃になつて、私が二月の二十五日が日がいい、退院にその日にして下さいなど〻、無闇と日のよし悪しなどを申しますので、澁川さんに、何でも家では日のいゝ日に出なけりやならんのださうだが、幾日にこゝを出たものだらうなど〻とぼけてきいて居りますと、澁川さんは澁川さんで、それは幾日の午前何時がいゝだらう、その時刻は囚人が牢獄を出る時間だからなど〻笑つて、私をからかつたりして居られたことがあります。

この頃になつて運動に謡をやると申します。が前にも一寸謡の話を致しましたが、謡などを謡つては、お腹に力が入つていけないでせうといふので私が賛成致しません。しかし退屈のことではあるし、自分では寒くて散歩といふわけにも行かず、とにかく運動がてらにといふ位の氣なのでしたでせう。

そこで、意見の一致を見ないので、それぢや醫者に尋ねて見よう、醫者がいゝといつたら謡本をもつて來るんだよといふわけです。すると日ならずしてこんな手紙が病院から私宛に舞ひ込みました。

拜啓　本日回診の時病院長平山金三先生と左の通り談話仕候間御參考のため御報知申上候。

旦那樣「もう腹で呼吸をしても差支ないでせうか。」

病院長「もう差支ありません。」

旦「では少し位聲を出して、——たとへば謡など謡つても危險はありますまいか。」

病院長「もう可いでせう。少し慣らして御覽なさい。」

旦「毎日三十分とか一時間位づゝやつても危險はないですかね。」

院長「ないと思ひます。もし危險があるとすれば、謡位已めて居たつて矢張り危險は來るので

すから、癒る以上は其位の事は遣つても構はないと云はなければなりません。」

旦「さうですか、有難う。」

右談話の正確なる事は看護婦町井いし子孃の堅く保證するところに候。して見ると無暗に天狗や森成大家ばかりを信用されては、亭主程可愛想なものは又とあるまじき悲運に陷る次第、何卒此手紙屆き次第御改心の上、萬事夫に都合よき樣御取計被下度候　敬具

二月十日　町井いし子立合の上にて認む

夏目金之助

奥樣へ

たうとう私がまけて謠本を運びました。こんな冗談まじりの何となく心から微笑ましくなるやうな手紙をよこすなどゝいふことは、以前にはまづ〳〵ありさうにないと言つていゝことでした。

四二　博士號辭退

退院をしようといふ間際になつて、たしか二月二十日のことだつたと覺えて居りますが、自宅の方へ文部省から手紙が參りまして、明日の午前十時に學位の授與があるから通常服で出頭せよ、若し差支があれば代人を差出せといふ達しが參りました。突然のことですから、私にははつきりどうしたらいゝのかわかりませんので、ともかく電話をかけて指圖をうけようと思ひまして、翌早々と、いつもお電話を拜借する御近所の山田三良さんのところへ參りました。

夏目も私から文部省の達しの話をしますと、いづれかういふことは人の內意を聞いてから、欲しいと思ふ人にはやるし、欲しくない人には、本人の意志を無視して迄やらうとは言はないのだらうから、一應の自分の內意を聞いて見る爲めに出頭しろといふのだらうといふ風にとつたらしいのです。そこで私がかう言つて來て居るのだから、とにかく入院中であつて見れば、森田さんでも賴んで代人を出しませうかと申しますと、それもいゝだらうが、それにしても此方で欲しいやうな挨拶をさせてはいけないよといふ電話の返事でありました。

するとその電話を聞いてられた山田さんが、あゝは言つて來るものゝ、正直に代人なんか出さなくとも放たらかして置けば、文部省から屆けて來ますよといふ先刻御承知のお話なのですが、私もさう迄言はれても、さうでございますかと言ふ位で、そんなことは始めてのことですし、それに手

紙にはちやんと出頭云々と書いてありますことなので、やつぱり何が何やらはつきりわかりませんでした。すると代人を出すも出さないもないうちに、私が電話をかけてかへつて來て見ますと、ちやんとその證書と申しますのか何と申しますか、ともかく文學博士にしたといふ學位記とかいふものが、紙筒入りで屆いて居るではございませんか。それで森田さんに手紙迄書いて代人をお願ひしようといふのもおぢやんになりましたが、さて納まらないのは夏目の肚でございます。

元々一應此方の內意をたしかめて、受けるといへばくれるものと思つてゐたのに、いきなり欲しいとも思はず、寧ろ邪魔臭いと考へてゐるのに、斷はりなしに押しつけて、其上出頭しろ代人を出せと言つておきながら、此方から出頭もしないうちに屆けてよこす。萬事が夏目の氣持に反して居りますので、至極簡單にこんなものはいらないから送りかへせといふことになつて、自分で當時の文部省專門學務局長福原鐐二郎さんにあてゝ手紙を書き、さうして同時に證書も病院から返送して了ひました。當時相當噂に上つた博士辭退問題といふ事の發端はこれでございます。

これについては自分は至極當然な、又甚だ平凡なことをやつた積りだつたのでせうが、世間で騷ぐので、そのいきさつなどを書いたり話をしたりしてゐるのがあつて、それで盡くされてるとは思ひますが、今も自分の手文庫の中に當時の文部省關係から來た達しや手紙、それから自分で書いて

出した手紙の寫しや原稿などが保存されてありますから、こゝへ再錄して見ませう。
まづ文部省專門學務局長福原鐐二郎氏から二月二十一日午前十時に學位授與に付出頭の達しがあります。それについての辭退の手紙の原稿があります。證書を返送すると同時に書いて出したものです。

拜啓　昨二十日夜十時頃私留守宅へ（私は目下表記の所に入院中）本日午前十時學位を授與するから出頭しろと云ふ御通知が參つたさうであります。留守宅のものは今朝電話で主人は病氣で出頭しかねる旨を御答へして置いたと申して參りました。
學位授與と申すと二三日前の新聞で承知した通り、博士會で小生を博士に推薦されたに就て、右博士の稱號を小生に授與になる事かと存じます。然る處小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡つて參りましたし、是から先も矢張りたゞの夏目なにがしで暮したい希望を持つて居ります。從つて私は博士の學位を頂きたくないのであります。此際御迷惑を掛けたり御面倒を願つたりするのは不本意でありますが右の次第故學位授與の儀は御辭退致したいと思ひます。宜敷御取計を願ひます。　敬具

夏目金之助

二月二十一日

專門學務局長 福原鐐二郎殿

それから四月になる迄文部省からは何とも言つて參りません。この手紙の返事が來たのはやがて二ヶ月も過ぎて四月十二日附の福原さんの御手紙です。

復啓 二月二十一日附ヲ以テ學位授與ノ儀御辭退相成度趣御申出相成候處、已に發令濟に付今更御辭退ノ途も無之候間御了知相成度、大臣ノ命ニ依リ、別紙學位記御返付旁此段申進候。

敬具

それに對する夏目の返事

拜啓 學位辭退の儀は既に發令後の申出にかゝる故、小生の希望通り取計ひかねる旨の御返事を領し再應の御答を致します。

小生は學位授與の御通知に接したる故に、辭退の儀を申出でたのであります。夫より以前に又辭

退する必要もなく、又辭退する能力もないものと御考へになられる事を希望致します。學位令の解釋上、學位は辭退し得べしとの判斷を下すべき餘地あるにも拘らず、毫も小生の意志を眼中に置く事なく、一圖に辭退し得ずと定められたる文部大臣に對し、小生は不快の念を抱くものなる事を茲に言明致します。

文部大臣が文部大臣の意見として小生を學位あるものと御認めになるのは已を得ぬ事とするも、小生は學位令の解釋上、小生の意思に逆つて、御受けをする義務を有せざる事を茲に言明致します。

最後に小生は目下我邦に於る學問文藝の兩界に通ずる趨勢に鑑みて、現今の博士制度(は)功少くして弊多き事を信ずる一人なる事を茲に言明致します。

右大臣に御傳へを願ひます。學位記は再應御手元迄御返付致します。

四月十三日　　夏目金之助

敬具

――――――――――――殿

文部省の返事。

學位辭退ノ件ニ付四月十三日付御書面ノ趣了承致候。貴下ノ御意思ニ相背候段遺憾ニハ候ヘドモ、右ハ學位令ノ解釋上辭退ノ途無之モノト省議決定致候次第ニ付、不得已義ト御承知相成度、尚學位記ハ更ニ御返戻相成候處、辭令書ヲ受領セラルルト否トニ拘ラズ、發令後ノ今日ニ於テ、貴下ハ已ニ文學博士ノ學位ヲ有セラルルモノト認ムル外無之候。就テハ學位記ハ更ニ御送付可致筈ニ候得共、再應御返戻相成候コト故、御送付ノ義ハ此際見合、當局ニ於テ保管致置候間御承知相成度、右大臣ノ命ニ依リ重テ申進候也

明治四十四年四月十九日　　文部省專門學務局長　福原鐐二郎

夏目金之助殿

手紙の交渉はこれで一段落ついて、つまり物わかれになつたわけで、自分はたゞの夏目金之助の積りだし、文部省の方では文學博士夏目金之助といふことになつたのでございませう。學校の教師をして居りませんので、自然其後文部省との交渉もなく、この文學博士もその後役立ちもしなかつたやうでございますが、亡くなつてからなど、日本博士錄とか何とかいふものを作るから、文學博士夏目金之助の略歴を知らせてくれろなどゝ、物好きなことを言つて來た方もありましたが、今で

もかういふ博士號のついた夏目云々には一切相手にならないことに致して居ります。
この最後の手紙の往復のあつた前日の日附で、どこかへ發表する積りで書いたらしい原稿が殘つて居りますが、其日でしたかに芳賀博士あたりがおいでになつたり、福原さんがお見えになつたりしたのでせうか、書いた切りで發表しなかつたやうでございます。當時の氣持がわかるやうに思はれますので、少々くどいかも知れませんがこゝにのせます。

學位授與の問題が大分八ケ間敷なつて居る。學位を與へようとした人々の量見が好意に出でたのであると云ふ事は勿論の事である。

とはいへ世間が一般に名譽と思ふものであるからと云ふて、推薦した人々の了見が好意に出でたのであると云ふ譯で、受けない方が無理だと論ずるのは餘りに單純である。

親切は押し賣をすべきものでない。押賣をすれば既に親切と云ふ事は出來ない。

學位を與へるのは命令であるとか、與へられる者は之を受けべき義務があるとか云ふのは俗論である、屁理窟である。

學位を與へるのは名譽の爲だと云ふならば無理に與へねばならぬ理由はあるまい。官職さへ

も強制せぬのである。名譽を強制する理窟は到底發見することが出來ぬのである。謂はゆる己を以て人を量つたものである。手前の手落の爲めに人に迷惑をかける理由はあるまい。學位に頓着しないで獨り自ら高うする者があると云ふのは、邦家の爲に寧ろ祝すべきではあるまいか。

與へると云つたら喜んで受けるだらうと思つたのは、思つた人の誤りである。

與へようとした初めの親切心に立戻り、受けたくないと云ふならば、潔く先きの決定を取消せば夫で濟むのである。餘り窮屈に考へるから物事が面倒になるのである。實に詰らぬ問題と自分は考へる。

この博士辭退については、隨分世間でいろ〳〵と取沙汰をしたやうでした。痛快がつて流石は漱石だなどといつて來られる方もあれば、前に西園寺さんの雨聲會のことなどもあるので、又も變屈な男がつむじを曲げたのひねこびれてゐるの、貰つておいたつて荷になるものぢやなしの、賣名だらうの、結果はこの方がかへつて器量を上げたのと、いろ〳〵勝手な說をなす方々があつたやうでございますが、世評はどうあらうと、平常から博士が嫌ひだつたことをよく知つて居りますので、

私たちは別に何とも申しませんでした。自分でもあたり前のことをあたり前にしたのだと思つてゐるのでせうから、殊に話が表沙汰になつてからといふものは、なほ更のこと何のかんのと私などに迄とやかくこの事で申したこともございませんでした。それでもそんな眞意のわからない親類のものなどは、やつぱり博士を大層な名譽と心得てゐるのですから、自分ではいらなくても、子供たちの名譽の爲めに貰らつておけばいゝのに、金ちやんはすね者だからなどと惜しがつてゐた者もありました。ともかくこの問題については、文部省のやり口を面白くなく思つてゐたのは事實でございます。

四三　良寛の書など

この修善寺で大病を致します前に、朝日新聞で懸賞小説の募集をしまして、幸田露伴さんなどと御一緒に選者に頼まれました。二三篇は義理堅く讀んだやうでしたが、どれもこれも大したものでなく、又大したものもありさうにもなかつたのでせうし、其上丁度病院通ひをしてゐる矢先で、とても自分で悉皆目を通すことも出來ないし、又それ程の必要もないと思つたのでありませう、代理

た森田さんに頼んで修善寺へ參つて了ひました。さうして修善寺ではあのやうな大患にやられて、結局森田さんに前以てお願ひしたのがよかつたやうなわけでございました

その賞金が一等三千圓かでしたので、冗談に私が森田さんに、そんな選者なんかして居るより、御自分で應募して三千圓お取りになつたらいゝでせうにと申上げたものです。すると森田さんが、そりや應募作品が皆下手で、そのうちの上乘なものでも、あんなものならいくらでも書ける自信はあるが、しかしいくら匿名にしたつて、先生には僕の書いたものだつてことがすぐわかる。わかれば先生といふ人は、自分が選者をして居つて、自分の門下生を當選させるなどといふことはてんから嫌ひで、吾々門下生には全く皮肉な程片意地なんだから、よし一等の實質があつてもわざ〳〵二等にするし、二等だつたら落選にするにきまつてる。だからてんでだめですよ、融通がきかない程公平過ぎるんだから、と笑つたことがありましたが、全くさういふ點はそのとほりで、世話する時は隨分世話はしますが、あるべきところには全く舊弊な位嚴格だつたやうでございます。

ところがこの應募作品のうちで、一等に値するものがなく、田村俊子さんのものがわづかに二等に當選致しました。幸田さんのつけられた點も森田さんの點もほゞ同じ位で、兩方共つまり同意見だつたわけです。すると程へて田村俊子さんが宅へ御禮に見えました。何でも秋の頃だつたと覺え

て居りますが、丁度胃腸病院に入院してゐた時なので、私が玄關でお會ひして、折角ですが今入院中だといふことを申しました。眞逆其時改まつての御挨拶に、實はあれは森田さんですから、その方へ御禮にいらつして下さいとも言へなかつたのです。其事を後で森田さんにお話しますと、奥さんはつまらない遠慮をする、實は僕だと大ぴらに言つてくれゝばいゝのにといふことでしたが、どうも訂正するわけにも參りません。ですがよくしたもので、その後どこでどう知れたものか、田村さんの方でわかつたと見えて、ちよい〱森田さんの方へお見えになるやうになつたらしうございます。

長い病院生活から家へかへりまして間もないこと、長いこと常住ついてゝ御世話になつた醫者の森成さんが、お國の越後の高田へかへられて、御自分で開業なさいますことになりました。何でもお父さんが、高等教育をうけると、此節の若いものは皆國へ歸つて來ないとか何とかいふことでしたのを、ともかくも醫專あたりでもといふので醫者になられたので、其頃はしきりに歸國を促されて、開業する家も見立て、其上奥さん迄略きめて御待ち兼ねの樣子でした。そんな一切を下見とでも申しますか、とにかく一度歸へつて見てくると仰言つて歸國されて、それから東京へかへつ

ていらした時に、どうでした、御貰ひにならうといふ奧さんはと尋ねますと、何もかも僕の望みとは反對の女房ですよなどと笑つて居られましたが、さて何にしても嚴格な伯父さんが御世話なさるとかで、當節の若いものは、嫁を貰ふのに顏がどうの器量がどうのといつて不心得千萬だ、昔は家柄とか心掛けとかをまづ言つたものだ、若し自分の見立てゝ世話する嫁がいやだなどといへば、自分は腹を切つてゞも申譯を立てなければならないといふ見幕なのだから、いくら僕だつて伯父に腹を切らせる程殘酷でありませんから、文句なしですよなどゝ冗談がてらに仰言つてられたことがありました。

四月になつていよ〳〵歸國ときまりましたので、大變御世話にもなつたことだしするので、送別のおしるしに御馳走がしたいと思ひまして夏目に話しますと、それは非常にいゝことを思ひついてくれたが、しかし御馳走といつてもごた〳〵何かならべ立てゝ見ても仕方がない。それよりか森成は鳥の肝臟や臟物が殊の外好きだから、さういふもので招んで皆で集まつたらどうだと申します。そんなら方々へ案内をやつて下さいといふわけで、修善寺大患以來森成さんと心安くなつた心置きのない方々を澤山お呼びして、肝臟會といふものをやりました。さうして書齋の前で皆で紀念の撮影をしました。四月十三日のことで、中々盛な會合でございました。

其頃のことだつたと思ひますが、森成さんにお頼みして、越後の方から良寛の書を手に入れました。紙をつなぎ合はせた中々の大幅で私どもが見てはさつぱり讀めない草書が書いてありましたが、其頃はまだ良寛熱の盛にならない前のことで、三十五圓か何かそんなことのやうでした。がこれはあまり出來がよくないとか申しまして、もう少しいゝ良寛が欲しいといつて又御願ひして居たやうでした。するとそれから程經て、森成さんの御存じの方かで良寛を集めて珍藏してられる方があつて、それ程お好きなら外ならぬ先生のことだから、珍藏の一幅をわかちませう。その代り何か字を書いてくれろといふことで、自分でも喜んで半折か何かを書いて上げて、其上五十圓ばかりの謝儀をつけて上げたやうでした。物は小い横物で、和歌が書いてありました。これは大變氣に入つて珍重して居たやうです。

大正五年に亡くなりまして間もないこと、この小點良寛の舊藏者から私宛に手紙が參りました。あの良寛は私の珍藏品で、先生だつたから惜しいけれども手離して上げたのです。けれどももう先生が亡くなられた以上御不用になつたでせうから、どうか舊藏者の私の手元へかへして下さいと書いてありました。が故人手澤のものは出來る丈當時のまゝ襲藏しておきたいと思ひまして折角でしたけれども御手紙の趣に添ひませんでした。

良寛のことが出ましたから、少し夏目の書畫のことをお話致しませう。元々書畫を觀ることは好きなやうでしたが、此頃からよく散歩に出ては、書畫屋や古道具屋などをのぞいて、何かと安物を漁つて參りました。ほんのお小遣で買つて來るので、贋物であらうとそんなことは一向お構ひなしで、自分が觀て繪が面白ければそれでいゝといふ風で、ぼろ／＼のきたないものを買つて來てはかけて見て樂んで、さうしていゝと思つたものは、表具屋へやつて表裝を仕かへて、自分で箱書きをして居りました　勿論お金といふお金を出さないのですから、大したものゝあらう筈はありませんが、ともかくこんな風にして自分では樂しんで居りました。

一體謠をうなる位で外に何といふ道樂のある人ではなし、まあ／＼本を讀むの位が道樂で、一時は隨分本も買ひましたが、段々その本も買はなくなつて、全く自分の爲に使ふお小遣といふものゝいらない人でした。隨分つゝましい儉約なところもあつた代りには、又お金には至極恬淡で呑氣なものでもございました。お小遣なども、物を書き出して居ますと一向いらないのですが、それでも私が頃を見計らつて紙入れの中にいくらかづゝ入れて置きます。それがいくら入つてるのか知らない樣子で、月によつてはちつともへらないことがあります。それでも時々入れておいてやりますと、それが二ケ月三ケ月の間には少し纏つた額になります。と、そこへ誰かゞ來て泣きついてその

金を借りて行くとか、自分で好きな書畫骨董を買ひに行くとか、そんなことでございました。今でもかうして自分で買つたり、又人様から頂いたりした書畫骨董（といつても美術倶樂部あたりに出るやうな金目のものは一つもないでせうが）が、そつくりその儘殘つて居ります。隨分ガラクタもあるやうですが、ともかく自分の趣味でつつましく集めたのが面白いと思ひます。

良寬をしきりと習ひまして、あんな細い字を書いたりしたことは、これからしばらく後のことでしたと思ひますが、此頃からしきりに人様から何か書いてくれるやうにと賴まれます。自分でも嫌ぢやないので書き書きしてゐたやうですが、書いてゐるうちには面白くなつてきりと手習ひもして居たやうです。

良寬の外に好きで集めたものに、といつて三四點位づゝのものですが、それに伊豫の明月上人と藏澤とがございます。二つとも松山出身の森圓月さんがもつて來られて、夏目に字を書かせてお禮に寄せられたのが元で、自分でも所望して手に入れたやうでした。殊に藏澤の墨竹は大變珍重しまして、自分でもそれを手本に竹を描くといふので、毛氈の上に紙をひろげて、尻をはし折つて一氣に墨痕淋漓と勢よく描き上げようといふので大騷動でした。尤もこれは大病のなほつたたしか翌年頃だつたと思ひますが、この藏澤張りの墨竹をやたらに描いた時代がございます。

四四　善光寺行

六月の中旬頃、長野の教育會で講演に來てくれろといふお賴みがありまして、自分でも彼方の方へは行つたことがないので、行く氣になつてお引きうけ致しました。けれども私の身になつて見れば、又汽車に搖られて折角なほつた體をいけなくするやうなことがあつてはいけないといふので極力反對するのですが、ナーニもう大丈夫だ。心配することはないといつて承知してくれません。そんなら私も一人旅をされてどこでどう病氣をされないものでもなし、家に留守居をしてゐてもそんなことを考へては不安でなりませんので、ついて行くと申します。夏目は夏目で、講演に行くのに女房なんか連れて行くのはいかにも見つともよくないからよせととめます。しかし私はどうしてもついて行くと頑張ります。そこへ丁度子供が少し熱があるかしてゐたので、小兒科の豐田鐵三郎さんがお見えになりました。すると夏目がいゝ事幸に、

「ねえ、豐田さん、こん度長野へ講演に行くのに此奴がどうしてもついて行くと云ひ張るのですが、小學校の先生の集まつてる中に、女房なんか連れて行くのは見つともないですね。」

と援けを求めました。すると豐田さんが、
「いゝえ、そんなことは決してございません。僕の先生の弘田博士なんかは、講演にいらつしやる時には、きまつていつも奧さんと御一緒です。」
といふ返事に、さういふ先例があつてはと、たうとう夏目の方が敗けて、一緒に行くことになりました。
一等は高崎迄といふから、二等でいゝかいなどゝ上野の驛で自分から切符を買つて來て、其晩長野の犀北館へとまりました。途中輕井澤あたり迄迎への人が出てられて、いろ〱說明やら案內やらをしてくれられるのを、夏目は物珍らしさうに頷いて汽車の窓から眺めて居りました。
其晩宿へ高田から森成さんが訪ねて來られて、高田へ行くこと、高田へ行つては、森成さんの母校だといふのでそこの中學校で講演をすることなどをきめてかへられました
翌日善光寺に參詣しまして、それから講演をしました。お禮を六十圓か貰ひましたが、丁度善光寺の門前で松崎天民さんにばつたり行き遭ひました、私は存じた方ではなかつたのですが、其後間もなく松崎さんの書かれた紀行文か何かの中に、善光寺の門前で白チョッキに麥藁帽で、細君を連れてにこ〱やつて來る人がある。誰が笑つてるのかと思つたら夏目漱石だつたとか何とか書かれ

て了ひましたので、それ見ろ、かう書かれると見つともよくないだらうとか何とか言つて居たことがありました。

其日のうちに高田へ行き、森成さんの新居に御厄介になつて、一日は中學の講演をやり、一日は五智へ遊びに參りました。講演は私も聞いたことがないので、其時も森成さんに誘はれましたが、雨の中だつたものでたうとう行かずに了ひました。長野で御約束したのでしたか、それから諏訪中學で講演することになつて、松本へ出て、そこのお城へのぼり、それから諏訪で講演をすませて、諏訪神社へ參つて、さうして歸京いたしました。旅中いろ〳〵食べ物に氣を使つて、そんな堅いものはいけないとか、今度はパンがいゝでせうとかいふ風に口やかましく申しまして、ともかく何事もなくいゝ工合に元氣でかへつて參りました。自分でもそれで體に自信が出來て安心したやうでしたし私も大變安心致しました。

四五　二つの緣談

少し話が前後しますが、この四月五月の頃に、家から二人嫁入りをさせて、一人は親代り、一人

は媒酌をしたお話です。

私の母の妹の子で、つまり私たちの從妹にあたるお房さんといふのが、小いうちに家が零落して、親子共私の父が面倒を見て居りましたのですが、其うちに叔母は死に、兄は奉公に出て、そのお房さん一人が私の母の元に居りました。丁度私のところでは子供が澤山あつて、いつも人手が足りない一方なので、其後ずつと手傳ひに來て貰らつて居りました。年頃にもなつたし、良緣があつたらどこかへ片付けたいと言つてるところへ、折よく名古屋の親類のものが、自分の下に使つてる建築の技師かでいゝ人があるからと口をきいてくれたので、本人に聞いて見たら行かうと言ひ、先方でも貰らはうといふわけで、見合ひもせずに、手取り早く話がきまつて、ともかく式はお婿さんの方が名古屋から出て來て、日比谷の大神宮であげるといふことになりました。

前々から兄の方へ、當節は何もかけないやうにといつても、それでも女一人を嫁にやるには相當かゝりもかゝることだから、いざといふ時になつて、一度に出すのも勤め人の身にして見れば大變だから、五圓でも十圓でも月々私に預けておいて準備をしておくといゝと言つておいたのですが、商賣人には五圓でも十圓でも大變だ、其時になつたら又どうにかするとか何とか申しまして少しも世話をしようとしません。ましてかう早急の間に話がきまればなほのこと出來る道理もなく、仕方

なしに出來ないながらも私の古いのをやつたりなほしたり、それに買ひ足したりで、どうやら私の手一つでみすぼらしい乍ら仕度を調へました。

夏目と私とが親代りで、お嫁さんについて日比谷の大神宮へまゐります。お互嫁方も婿方も知らない顏同士なので、夏目が鬼が出るか蛇が出るかなどゝ興がつて冗談言つて居りましたが、ともかく其場は納まつて、其夜新郎新婦相携へて名古屋へ下りました。けれども半年ばかり後で、どういふわけでしたか不縁になつて夫婦わかれをして了ひました。

お房さんの方がともかく片付いてやれ〳〵と思つて居ますと、すぐ追つかけて、もう一人手助けに居たお梅さんといふ、西村濤蔭さんの妹さんに又結婚話が持ち上がり、これも難なく纏まつて、又一切合財私が世話しなければならないことになりました。前のお房さんの時には、皆が妙に氣が張つて何かとその積りで世話もしたのですが、二つ重なつたので、この後の方は何だかがつかりして身が入らないといつた風でした。がこれは東京で嫁入ることになつて、私たち夫婦が仲人をしなければならない破目になりました。兄の西村さんは其頃大連に行つてられるし、又私が無けなしの算段をして、これもどうやらお嫁さんのお仕着せを調へました。つまり親元兼仲人なのです。そこで何から何迄私たちがしてやらなければなりません。

結納の目錄を書かなければならないといふので、私が大奉書を夏目の前に持ち込みます。どう書くもんだといつたわけで、それをどうやら書いて貰つて先方へ屆けます。それから式は先方の家であげるので、長女の筆子が十三でしたがお酌に頼まれ、何でもかんでも家つこでといふのはいゝが、さて私始め夏目などはなほ更のこと、こんなことには不調法ですので、ともかく老人に聞くに限るといふので、私が母に大體敎はつて來て、それを夏目と筆子とに敎へるわけなのです。ともかく口で言つたばかりぢやいけない、一應稽古しておかなければならないと申すことで、夏目がお婿さんになりお嫁さんには誰がなつたか忘れて了ひましたか、多分本當のお嫁さんだつたでせう。何でも座敷に二人向ひ合つて坐はつて居ると、筆子が銚子をもつて來て、お辭儀をしては三三九度の盃をまはす稽古をしました。私が謂はゞ舞臺監督なのだから笑はせます。

さていよ／＼當日となつて式が始まります。先方の家が手狹なので宅とは勝手が違ひます。そこへ御銚子に雄蝶と雌蝶とを結びつけなければならないのですが、どうも私たちの手ではうまく結びつけられません。そこで貴夫男ですからと夏目に頼みますと、今度はどちらが雄蝶でどちらが雌蝶だかわからないといふ始末です。それをいゝ加減當て推量で結ぶと、今度はあんまり強く引つぱり過ぎたものと見えて絲が切れて了ひました。

「あつ、切れた、切れた。」

失策つたと思つたものでせう、夏目が頓狂な聲を出します。場合が場合ですから、いやなことをいふ、切れたの何のと甚だ御目出度くないことをいふので私が氣にします。が夏目はそんなことには氣がつきません。其うちにいよ〳〵三三九度の盃といふ段になつて、兩方から向ひ合つて出て來て、いゝ鹽梅坐はつたのはいゝけれども、今度はいくら待つてもお酌が出て來ません。間のぬけるつたらありません。仕方がないので私が筆子の待つてる唐紙の腰をとん〳〵と叩くと、漸くにこ〳〵出て來て盃をまはすといつた工合で、氣のもめるつたらありません。一ぺんで仲介には懲り懲り致しましたが、このお嫁さんは折合よく行つてゐましたが、七年目かに氣の毒なことにお産で亡くなつて了ひました。

四六　朝日講演

坪内さんの文藝協會が、ハムレットを公演されたのは此頃ではなかつたでせうか。私も誘はれたやうですが、一緒に行くことが出來ませんでした。朝日新聞かにその批評を書きまして、あんま

り有難くなかつたやうな批評をしましたが、それからといふもの、文藝協會で招待の切符を下さるのが、いつも樂近くなつての日取りなので、初めに惡口を書かれたので、又書かれると困ると思つてか、いつも終頃になつてくれると笑つて居りました。

大概切符を二枚頂くので、よく一緒に行きました。オセロの結末の慘酷なのを見て、私があんな慘酷なのは嫌ひだ、どうも芝居は罪もない人が殺されたりなどするのは見て居ても氣が氣でない、やつぱり勸善懲惡式のゝがいゝと申しますと、あれが本當の悲劇といふものだと說明してくれました。その外マグダとか人形の家とかいふのにもついて參りましたが、須磨子の女主人公が、どうしてもお三どんめいて居て、いくら情熱的に西洋人の仕草をしても、情が移らないなどと申して居りました。

一體芝居でも不自然なことは嫌ひのやうで、だから無理の多い舊劇にはどちらかといふと同情のない方で、腹を切つてから長々と文句を言つたり、子役が不自然な聲を出したりすると、芝居の方はそつちのけにして、ぷり〳〵して皮肉な批評を呟いたりして居りました。それから私が呂昇が好きで、よく聞きに參りましたが、それに誘ふと快く一緒に參りまして、いゝ聲だと言つてはうつとりと聞いて居りましたものです。

八月に入つて大阪朝日新聞社が關西で講演會をするといふので、講演を頼まれました。今度は眞夏のことではあり、暑さは暑し、健康の人にしてからがうだつて了ふ時なのですから、病弱な人がよしたらいゝと申すのですが、まさか講演旅行に味をしめたわけでもないでせうが、第一眞夏で家に居ても仕方がないし、知らない土地や違つた土地に行つて見たくもなつたのでせう。其上外と違つて義理のある朝日新聞社からのお話なので、前に信州へ行つて大丈夫だつたのに自信を得て、大丈夫だと言つて出かけました。行く行かせないで又言ひ爭つたのですが、結局私がまけて、今度は一人で出かけました。

和歌の浦、堺、明石、などで講演をすませまして、一番最後の大阪の講演に、お腹の具合が惡くつて藥をのみ〱堪へてすませたさうですが、たうとうそれが終るとたほれて了つて、宿へかへるなりすぐに床について了ひました。これではならないと、自分では氣を勵まして、ともかく東京へかへらうと思ふのださうでしたが、何としても起きることか出來なかつたさうです。朝日の小西さんなんぞは、自分が御丈夫なものですから、夏目さん、胃が惡るいやうだつたら、一寸有馬の温泉へでも行つてらつしやい位のことを言つてられたさうですが、夏目にして見れば丁度大患をやつた

一年目に又も寢込んだのですから、外の誰よりも悪いのがわかつたのでせう。どうにもならないと見極めがついたので、どこか胃腸病院を世話してくれろ、入院するからと朝日の方に申出ましたので、初めて朝日の方でも驚くといふ始末で、ともかく湯川病院に入院することにして、私へすぐに來てくれろといふ電報を打つて參りました。暑さの中を驚いて私も大阪へかけつけました。

病狀は案じた程の大事でもありませんでしたが、何しろ去年苦い經驗をして居ますので、始めは流動物ばかり當てがつて大事をとりました。其頃大阪朝日の社員でした長谷川如是閑さんなどが御見舞においでになつて、どうも夏目君は不養生だ、此間和歌の浦で飯鮹をしきりにたべるから、そんな不消化ものをたべて大丈夫ですかと心配して注意して上げても、大丈夫だといつてはしきりに食べるんだからといふことに、夏目も寢ながら、ナーニ、飯鮹のせいぢやないよと抗議を申込んで居りました。

社の方がよく代る代る御見舞に來て下さる中に、小西勝一さんは毎日毎日顏を出して、初め私がまだ參らない前には、お氣の毒な位心配して何かと氣をつけては買ひとゝのへたりして下すつたさうですが、自分の發議で夏目さんを引つぱつて來たのだから、病氣にしたのも自分がしたやうな

ものだとあつて、中々よくして下さいました。夏目はかへつてお氣の毒な位だつたと申して居りました。後でも社が退けるときつと一度は顏を出されて、奥さんの前だが、夏目さんの講演は至るところ女學生に大持てでしてねなどと話してかへられたものでした。

其の入院中には津田靑楓さんだとか、兄さんの西川一草亭さんだとか、その外大阪の俳人で水落露石さんだとか、靑木月斗さんだとかいふ方々がよくお見えになりました。此間靑木さんにお目にかゝつた時のお話に、何でも病院に訪ねていらした時、夏目の指圖でアイスクリームを出したさうですが、その頃の大阪ではそれが大層珍らしいものに思はれてびつくりしたといふお話でした。

湯川病院には三週間入院して居りました。幸ひ順調になほりまして退院間際になつた時、すぐ病院の脇に居た莫大小屋の主人かゞ、扇子を持つて來て何か書いてくれと申します。餘り結構な扇子でないので、近所の扇子屋に買へにやらすと、こん度は扇子屋が、私にもどうかと言つて持ち込みます。そんなわけで都合五本かの扇子を賴まれて書きましたが、夏目が出來榮がよかつたのか、自分でかいた扇子を見ながら、これなら一本五十圓のものはあるねと申しますと、丁度國から歸へりがけに立ち寄られた小宮さんが、そんなら五本あるから二百五十圓だ、只今持ち合せがないから、これでどうぞ入院料をと院長にかけ合つて來ませうかなどと冗談言つて笑つたことがありまし

た。

同じく退院間際のことでしたが、こゝの便所が西洋式になつて居りまして、水で流すやうになつてるのですが、それがどうしたのか壞はれてゐて、始終じやあじやあ水が流れて居りました。夏目がそこへ入つたのはいゝが、長いこと出て參りません。又便所の中でゝも卒倒したんぢやないかなどと心配して居りますと、やがて何のこともなく出て參りました。どうしたのですと尋ねますと、水がたゞ流れてゐるのが勿體なくて、それが氣になつてどうしてもその儘出て來られない。そこで便器の上にのつかつて、上の水槽をいろいろいぢくつて壞はれたのをなほさうとしたが、やつぱり駄目だつたと申して居ります。で、おお、危い、まだふらふらしてゐる癖に便器の上にのぼつたりなどして、若しや足を踏みすべらして倒れでもしたらどうするんですと小言を言つたことでしたが、こんな些細なことにも氣を使つて、バカバカしいやうなことを丹念にして居ることがございました。

もう大概大丈夫といふので、寢臺にのせてかへりましたが、又汽車の中でどうかしやしないかと思ひますと、全く氣が氣でありません。動けば動いたでどつか苦しいのではないかと思ひ、すやすや眠つて居れば、若しや息がたえてるのぢやないかと案じて、そつと手をのばして觸はつてみて、

手が温くて、その上息をしてゐるのでほつとするといつた工合に、氣を使つておち〳〵眠りませんものですから、朝方になるとこん度は私の方がかへつて半病人になつて、東京につくとかへつてあべこべに私が世話して貰ふといつた工合でした。それも名古屋を通過するのが夜中の十二時頃で、親類の鈴木がわざ〳〵見舞がてら會ひに來てくれたのですが、口をきくのが退儀だといつて、ひつそり寢たまゝで居たりしたので、さては又惡くなつたのぢやないかと、私の方がえらく心配して了つたものなのです。

四七　破れ障子

九月の半頃大阪からかへつて參りましたが、それから間もなく痔が惡いといふので、又も病院通ひで、たうとう切らなければいけないとあつて手術を致しました。切つた時は局部麻醉で事なくすんだのでせうが、後で床を歩るいても響けるといつて飛び上つて痛がりました。でもこの病は中々しつこくて、翌年になつてもまだ膿が出たりしてなやまして居りました。

そんな工合で、其頃の夏目の體は、全くのこはれもので、病氣ばかりしてゐる上に、いつ何時命

にかゝはるやうな病氣にやられないものでもないので、實際のことには氣を使ひました。けれども急場を通ほり越すと自分では案外平氣で居りました。

少々きたないお話になりますが、此頃胃は悪るし、肛門は悪るしで、よく瓦斯が出るのですが、それが誠に妙な音を響かせます。中村さんでしたか菅さんでしたか、何誰かがおいでになつてゐてその奇態なおならを聞きつけて、まるで破れ障子の風に鳴る音だとか仰言つたので、それから破れ障子は面白い、全くその通りだといふので、落款をほらせる折に『破障子』といふのをたのんで、自分の書に捺してゐました。

これで思ひ出しますのは、もう少し後のやうでしたが、子供たちがいろいろは歌留多を取つてゐますと、其のお仲間に入ります。みんな目が早いのにこのお父さん一向に取れません。たゞ『へをひつて』といふ札と『あたまかくして』といふ札との二枚切りがお得意で、それを自分の前にならべて睨めつこしてゐますが、それさへよく子供たちにぬかれて凱歌をあげられて居りました。

一體に世間からは、皮肉ばかり言つてゐるつむじまがりで敗けん氣の、しかめつ面したこわいいかめしいをぢさんのやうに思はれて居りましたやうですが、こんな時には本當に好々爺で、子供たちとよく角力をとつたりなんかしますし、全く他愛がありませんでした。さうして隨分子供らしいと

ころがあつたやうです。

それから非常に澁好みの癖に大のおしやれで、着物などは自分でいい着物をきることも好きでしたし、子供たちなんかに美しいものを着せて眺めるのも好きのやうでした。よく私が新らしい着物をこさへてやつたりしておきますと、それが大の自慢で、おい、小宮、こん度こんないゝ着物をこさへたから見せてやらうといつた工合で見せびらかします。

さうかと思ふと私がいゝだらうと思つて買つて來た柄が氣に喰はず、こんなもんが着られるか、すぐにかへして來いといつた見幕で劍突を食はせる時もあります。それをいつの間にやら下着に仕立てたりして着せますと、これも襲ねて見ると案外いゝなてなことで、さきのくさしたのなんかはどこへやら、けろりとしてほめて着てゐる事などもありました。それから二枚襲ねがきちんと合はないと大變なのですが、それを又そつと着てくれゝばいゝのを大變氣にしまして、着るとは下の方の袖口を引つぱつてみたり、襟先を引き出して見たり散々に引つ張るのだから、並の仕立では出て來るにきまつて居ます。さうすると見ともないといつて叱られるので、いつも引つ張つても大丈夫なやうに、少し寸法をつめてこさへて置たものです。

洋服などでもきちんとしてゐないと氣がすまない方で、中々のハイカラでしたが、さうかと思ふ

と變なところで非常に舊弊で、頑固で可笑しい位のことがあつたりします。例へば此頃になつてもまだ石油ランプを使つてゐて、電燈は贅澤だといふ風に申しまして、どうしても電燈をつけようといふことに賛成してくれません。ランプより電燈の方が便利だといふことも知つて居り、又ランプの方が趣があるといふわけでもないのですか、許してくれません。子供は多いし、ランプ掃除から第一たまりませんし、それに女中や子供がランプを引つくりかへして、幾度危い目にあつたか知れないのですが頑張つて居ります。其頃一燈一圓で引いてくれるので、これは許しをうけてゐたんではいつ迄立つても埒があかないと思ひまして、病院に入つてる留守中に一存でさつさと引いて了ひました。するとかへつて來て驚いて、家の細君は御大名だよと何誰かに話したことがあるさうです。

話でも非常にむつつりしてゐるかと思へば、(又さういふ印象をうけて居られる方も多いだらうと思ひますが) 調子にのると案外の輕口で、駄洒落や皮肉をかつ飛ばして面白がるといふ風で、生粋の東京人のさうした一面をよく表はして居たかと思ひます。

此年の十一月頃のことでしたでせう。『朝日』で主筆の池邊三山さんがおやめになるといふので、

自分でも謂はゞ池邊さんから迎へられて、池邊さんを信じて入社したやうなわけなので、それに殉じてと申しますか、辭職をするといふので、屆書迄出したやうでした。

事の起こりはどういふところにあつたものか、私のやうなものにはわかりませんが、ともかく大分社内が動搖したらしうございます。ただ夏目からは、今度『朝日』をやめることにするかもわからないが、おれは一體世間に出て融通のきく方の人間でないから、これから『朝日』の月給を離れたら、或は筆一本で從前どほりの收入の途が立たないかも知れない。かといつて又教師をする氣もしないが、どうだ、それで家の經濟はどうなりやつて行けるかといふ相談がありました。そこで私も、印税や何かで、まあ〳〵どうにかかうにかやつては行けませう。收入が少くなればなつたで、そのやうにして出ればやつて行けると思ひますから、どうか名分の立つやうに自由にやつて下さい。しかし去年の大患の時には『朝日』から一方ならぬ世話になつて居ますが、今おやめになつて其方は差支ないのですかと念を押しました。すると夏目も、成る程世話にはなつてるが、それとこれとは別だからと申しまして、辭職の決心をきめたやうでした。

そこへ澁川玄耳さんだとか弓削田さんだとか、其他いろ〳〵な方々が宥めにおいでになつて、辭職を思ひ止まるやうに仰言られます。さう頼まれて見ると、元々自分が排斥されてるのではなし、

皆さんの意志がわかつてるのに、いつまで女々しく自分一人强情を張つてるでもないとあつて、それぢや自分の方はきつぱり辭職を思ひ止まらうと申しまして、屆書は引つ込めたやうでございました。しかしたうとう池邊さんはおやめになつて了ひました。

それから間もなく、たしか二月頃の寒い眞夜中の事でございました。寢てゐたところを俥夫に起こされましたが、今池邊さんが急に危篤になられたから、此俥にのつてすぐに來てくれろといふお迎へです。眞夜中ではあり、何となく不氣味でもあつて、それではすぐにまゐりますといつてその俥屋をかへし、家で乘りつけの俥屋の亭主を起こしてまゐりました。池邊さんは急死されたのでした。

澁川さんなどの『朝日』の方が澤山居られたので、

「わざ〳〵、この寒い眞夜中に病身のおれを起こして何にするんだい。又何か書かせるつもりなんだらう。」

と夏目が申しますと、澁川さんが

「まあ、そんなところだね。」

と仰言つたとかへつて來て話して居りましたが、早速『三山居士』といふ追悼文を書きました。

しかし澁川さんもお亡くなりになつて、書かれた人はいふ迄もなく、書いた人も、書くやうにすゝめた人も今ではみんな亡くなられて了ひました。

澁川さんとは早く熊本時代から識つてゐたらしく、何でも澁川さんの方で留守中に訪ねて來られて名刺をおいて行かれ、その裏に俳句を五句書いておかれたさうです。それを見て澁川といふ男が來たが中々俳句がうまい、一度會つて見たい、話せる男に違ひないなどと言つてゐたことがあるさうです。

四八　雛子の死

前の年の三月、桃の節句の前の晩、お雛樣を飾つて宵雛のお祭りをして、門下の方々が幾人かおいでになつて白酒をのんだりしてゐらつしやる時に、私共の一番末の女の兒が生まれました。節句にちなんで雛子と名づけました。これが早く亡くなるからでもあつたでせうが、智慧も早く、非常なおしやまつ子でございました。一年半もたつたこの年の秋頃には、よちよち裏で遊んで居ては、自分も見樣見眞似で猫の墓にお水を上げに行つて、序に自分もその水を飲んで了ふといふ按配でち

つとも目が離せません。それが又中々の癇癪持ちの意地悪るでございました。
十一月末のことでございました。此の日も夕方長女の筆子に長いことおんぶされたり、それからおもりと一緒に猫の墓のあたりで遊んでをりました。そのうちに夕飯時になります。いつもですと小いのばかりがうぢやと集まるのですから、とても大騒動なので、この雛子とその上の小い男の子の方とだけは、めい〳〵お守りがおんぶして外へ避難して、さて皆食事がすんだ頃を見計らつてかへつて來て、それから御飯をやるといふ方法でやつて居たのですが、此日はどうしたはづみか、御飯を一足先きにたべさせて、それから外へ行くといふので、茶の間の隣の六疊で始めました。ところが自分一人で御飯を預かうといふので、おもりのもつてる箸を取り上げて、お茶碗片手に、「かう？かう？」と片言まじりに食べて居りますうち、急にキャツといふなり茶碗を持たまゝ仰向けにたふれて、了ひました。一體この子でもこの上の男の子でも癇が強くてひきつけることがしば〳〵ありまして、殊に男の子の方など來たら障子を閉めちやいやだと駄々をこねてるのを閉めたとあつて、いきなりひきつけるなどといつた工合で少々極端なのでしたが、その代りひきつけたからといつて皆でなれつこになつて居りますから、顔に水を打つかけると、又息を吹きかへすといつた位簡單なのでもあつたのです。此の女の子もこのでんで前に四五度ひきつけたことがあつたので、又か

と大して驚きもせず子守が萬事呑み込んで水を吹きかけますが、これは又どうしたことか、いつものやうに手取早く息を吹きかへしません。

其時、私は外の子供たちと一緒に茶の間で御飯を食べかけてゐたのですが、隣りの騒ぎもいつものものと聞き流してそのまゝ箸を運んで居りましたが、何だか長いのが氣になりますので出て參りました。さうしていつもやるやうに水を吹つかけて、喚んだり搖すつたりして見ましたが、ぐたりとして白眼をむいたまゝ一向きゝめがございません。どうも自分たちの手におへさうもないので、すぐ前のお醫者さんを呼びにやりました。

醫者がかけつけてすぐ樟注射をして下さいます。反應がありません。どうも樣子が變だから、ともかく洗腸をして見ませうといつてその仕度にかゝりますと、すつかり肛門が開いてゐるといふので、びつくりして了ひました。これはいけない、いつもかゝりつけのお醫者さんをといふわけで急き立てました。

丁度其時、書齋には中村古峽さんが見えて居りまして、夏目と話をしてらつしやいました。雛子の樣子が變なので夏目を呼びにやらせますが、夏目もいつものゝだと高をくゝつてゐるのでせう、一向來てくれません。たうとう私が驅け込んで、貴方大變ですから來て下さいといつたわけで引つぱ

つて參ゐりました。しかしそのうちにいつもかゝりつけの豐田さんが來て下すつて、いろ〳〵手を盡くし品をかへてやつて見ましたが、注射もきかず、人工呼吸もきかず、藥は元よりうけつけず、辛子湯も効なく、何もかもきゝめがありませんでした。どうにも仕方がありません。といつてあきらめて了ふには、餘りに呆氣ない、うそのやうな咄嗟な出來事で、みんなぼんやり何かにつまゝれたやうな氣持になつて了ひました。誠にこれ迄澤山の子供たちも一人殘らず生長して來て缺けたものもないので、なほ更のことこんな始めての不幸に參ゐつて了つたわけでございます。がどう考ても夢のやうで、つひさつきまで元氣にしてゐた吾が子が、ぽつくり死んで了つたといふ感じがして來ないのでありました。

けれども亡くなりました上は、如何に夢心地で嘆いて居ても是非がありません。ともかく形ばかりでもお葬を出してやらなければならないのでございますが、さてこゝに一つの困つたことがおこりました。といふのは私たちは分家をして居りまして、家から葬式を出したこともなく、又誰の位牌もないので法事をしたこともないので、きまつた菩提寺といふものがないのでございます。一體夏目の本家は代々、小石川小日向の本法寺といふ淨土眞宗の名刹の門徒で、そこに先祖からのお墓もあるのですが、夏目が餘り眞宗を好みません上に、本法寺の檀下になるといふ氣もしないので、

どうしたものだらうかと言つて居たのですが、此の場合、急にうまい分別もなく、兄さんなどもともかく今度は本法寺に頼んだらよからうといふことで、ではこん度のところはといふので本法寺にきまりました。

さて葬式となつても、仰々しい馬鹿騷ぎは困るし、第一それに子供ではあるし、普通の盛り物だの花だのといふを嫌つて、何とか突飛でなく、しんみりみんなで身内のものを葬ふといふ氣持になれることがないかと申して居りましたが、そのうちにふと西洋に居てあちらのお葬式を見た印象から思ひついたとか申しまして、誰彼れの區別なしで家中みんなで送つて葬つてやらう、これが一番いゝといふ至極簡單な思ひ付きで、葬式の日には、葬場の本法寺へみんなで馬車を連らねてついて行くといふことに致しました。

御通夜になつて本法寺から通夜僧が來ます。夏目は、おれは通夜なんか嫌ひだ、みんなかへつてねた方がいゝぢやないかといつて居りましたが、私たちが死體を守る爲めだからなどゝ申しましてそれはそのまゝ續けてやりました。自分ではいゝ加減おそくなつてからねて了つたやうでございました。

其時、夏目が申しますには、

「おれなんぞ死んだつて通夜なんかしてくれるなよ。」
といふので、私の母が、
「でもみんなでかうやつてゐるのは、一には死んだ佛に明日はおわかれするそのお名殘りを惜しんでゐるのですが、その外鼠でも出てかぢつたりなんかしないやうに死體を護つてついてゐるのでございますよ。若し貴方の時に、誰でもついてなくつて鼻でもかぢられたらどうなさいます。」
と申しますと、夏目は興がつて、
「さうなつたら、かへつて痛い痛いつて生きかへるかも知れませんね。」
と皆を笑はして居りました。
其通夜僧が餘り上品な方ではなく、よせばいゝのに何でもかつかじめるやうな話を致します。
「お寺では何でも頂戴致します。死んだ佛のものは、皆どこでもお宅では氣味惡がられたりしますので何でも頂きますし、又宅によつては供養の爲めとあつて遺品を御寄進なさいます方もございます。」
といふやうな話から、
「どうかそんなものがございましたら御遠慮なく。」

と氣をきかした積りで、今にもそこにあるものは何でも貰らつて行かうといつた素振りをします。

「例へばお棺におかけになつてる白いきれ、あんなものでも頂きます。」

に、たうとう夏目もあいそがつきたといふ風に、

「いや、あれは葬儀屋から借りたものです。」

とにべもなくそつ方を向いて挨拶して居りました。

かうして棺を本法寺へもつて參りまして、お經を上げて貰ひ、さうして落合の火葬場でやきました。

お骨にしましてからしばらく家におきましたが、家が狹くもあり、第一子供たちが多いので氣にもなりますしするので、埋葬する迄お寺へ預けることになりました。ところが私が埋葬書だけもつてると、どこかになくしさうな氣がしますので、お骨の箱に入れたまゝ、それなり寺へあづけて了つたものです。

それからしばらくしてから雜司ケ谷に墓地を買ひましたので、いよいよそこへ埋葬しようといふことになつて、お骨を寺に貰ひに行くと渡してくれません。寺の方では、寺の墓地へ墓を立てさせ

て餘にしようといふ魂膽なものと見えて、此方から使にやつたものには何のかんのと理窟を構へては、どうしても手渡してくれないのです。埋葬書ぐるみお骨をとられてるのでどうすることも出來ません。そこで始めから本法寺にお墓をこさへる意志はないのでしたが、かう露骨になれば愈々いやになつて、意地にも早く取り戻さうといふことになり、かといつていゝ加減の使を差し向けておいたんでは先方が動かないので、そこで私の弟にたのみまして、弟の知り合ひの辯護士磯部尚さんの手で告訴狀を書いて貰ひ、さうしてやつと取り戻したのでした。お骨は雜司ヶ谷の墓地に埋めました。夏目が自分で小い墓標を書いてやりました。

其後、墓をたてゝやらうといふので、津田青楓さんに御墓の設計をお願ひしましたことなどもありましたが、たうとう墓は造らずにしまひました。

子供の死因はたうとうよくわからずに了ひました。其時私は解剖でもして見たらと思ひましたが、それも殘酷のやうな氣がしてそのまゝ默つて居りました。程經て何もかもすんだ後で其話をしますと、本當に解剖すればよかつた。さうすれば死因もよくわがつたゞらうに、ちつとも殘酷なことなんかないよ。自分はまるでそんなことに氣がつかなかつたと惜しさうに申して居りました。夏目が亡くなりました時に、私が進んで解剖して戴くやうに申し出ましたのは、その時のことを思

ひ出したからでございます。

子供をなくしたことは始めての悲しい經驗であり、それが又いたいけ盛りの季の子である上に、看護も何もしないでもぎとられたやうにわかれたのですから、當座は何も手につかず、ほおつとして居りました。口に出してこそ何も申しませんでしたが、これは相當にこたへた樣子で、隨分心のうちでは悲しんでも居たやうでした。子供に逝かれるといふものはいやなもんだなあなど丶、何かの拍子につく〴〵思ひつめたやうに言つて居たこともありました。

一體頭さへ惡くない時には、隨分の子煩惱で、子供たちが何をしようと、にこ〳〵笑つて見てるるか、自分も相手になつて遊ぶか、でなければわれるやうな騷動の中に坐はつて、すまして一向氣にもかゝらないらしく本をよんだりして居たものでした。例へば長女が一番先に立つて、箒をかついで號令をかけると、みんなぞろ〳〵ついて大變な足踏みで書齋の廊下を調練したりして歩るいても平氣な顏で、やかましいとも言はず書見してるるかと思へば、前に西片町に居た時などは、二階に子供たちが居て、今にも落つこちさうにあばれても、今にどうなることかと思つたねなど丶呑氣なことを言つて氣にもとめずに居りました位です。此頃の子供たちのあばれやうと來たら大したもので、家の子供たちの外に友達が集まつてさわぎ立てるので、散歩に出て大通りから家の方へ曲が

る二三丁先の角迄來ると、ワァツ〳〵と家の中で子供達があばれてるのが手にとるやうに聞えるといつたわけです。しかし頭が惡くなつてつむじをまけない以上呑氣なものでした。

この雛子の急死の模樣は、『彼岸過迄』の中の一篇『雨の降る日』といふ中に詳しく書かれて居ります。この小說は亡くなつた子供の悲しみから漸く氣をとりなほして、一月から四月迄朝日新聞に連載したものなのですが、亡くなつた子供の追憶ともいふべき『雨の降る日』は、丁度雛子の二度目の誕生日の三月二日に書き出して、百ケ日に當る七月に書き了つた、それも何かの因緣で、子供の爲めにいゝ供養をしてやつたといふ風なことが、急死のあつた時居合はされた中村古峽さんへ宛てた手紙に書いてあります。こんな因緣めいたことをいふなどゝいふことはなかつたのですが、今度のことは餘程身にしみたのでせう。私が萬事につけて迷信的で、日がいゝとか惡いとか、方角がどうとか、神樣や佛樣へかれこれお參りするとか、占を見て貰ふとかいふことがいろ〳〵あるのを、たゞ一圖に笑つたりけなしたりして居たものですから、こんな手紙を見たりなどしますと、一寸妙な氣がします。しかしそんなことをいつたらあべこべにそれ御覽なさいとでも言はれると思つたのでせうが、一切かういふ氣の弱さうなことは私には申しませんでした。

しかし隨分感じの强い人と申しますか氣の弱い人と申しますか、理窟の上では迷信的なことを一

切けなしつけてる癖に、怪談じみた因縁ばなしなど致しますと、怖がりまして、もうよしてくれ、ねられないからなどゝ、よく寢がけにこんな話になりますと降參したものでした。

或る時こんな話をしたことがあります。

親類の鈴木の兄弟が、四日市でチブスに罹つて、暮から大變重くなつたといふので家の者が心配して居りますと、丁度大晦日の一夜あければ元日になるといふ夜のこと、鈴木のお父さんがねてますと、枕元にその病人がフロック・コオトを着て坐はつて挨拶をして居ります。病氣だといふのにどうしたのだらう、あゝ、さうだ、てつきり年始に來たのだなと思つて、此方でも挨拶をしようとするとふつと目がさめた。おかしなことがあるものだなと思つてると、元日早々非常に病狀が悪いといふ報らせが來ました。お父さんは夢見のこともあり氣がゝりなものですから、すぐに四日市へ向けてたちました。すると二日の日にたうとう亡くなつて了ひました。

さうなつて見ると、御年始に來たと思つたのは、實はお暇乞に來たのだといふ話になつて、お父さんがそんなことを言つてられますと、附添の看護婦が不思議なことを申します。三十一日の夜のこと、病勢が大層悪くなつた病人はうと〳〵とねむつて居りまして、夢現ともなく、××さん、××さんと看護婦を呼んで、どこそこに入つてるフロック・コオトを出して下さいといふ。熱にう

なされて囈語を言つてるとは思ひましたが、貴方は今御病人ですから駄目でございますよ、おなほりになつたらお出ししませうと答へますと、あゝ、さうですかと言つた切りしばらくそのまゝ默つて居ります。するうちに又一時たつと、××さん、フロック・コオトを出して下さいといふのださうです。變なことゝ思つてゐたが、今になつて思ひ合はせて見れば、丁度お父さんのところへフロック・コオトを着ておわかれにいらした時刻だといふことでした。

こんな話をしますと、もうよしてくれ、ねられないからと、本當に心から怖いものと見えて、それはく臆病らしくいふのでございました。

四九　私の迷信

其雛子のお骨をいざ埋めようといふ前になりまして、私が又日のいゝとか惡いとかいふことを氣にしまして、其頃丁度私の妹をよそへかたづけるのでちよいく里へ參ります其のかへり道に、今日は一寸日の吉凶判斷に例の占の天狗のところへよつて見て貰らはうと思ひまして里を出てまゐりますと、ひよつこり小石川の白山のところで森卷吉さんにお逢ひしました。家へいらつしやる

とのことで御一緒にしばらく歩るきましたのですが、一旦思ひついたことなので、天狗行きが氣にかゝり、私は一寸失禮しますから、どうぞお先へお越しを願ひます。すぐにかへりますからといつて横道へそれて了ひました。

日を卜つて貰らつてかへつてまゐりますと、御約束どほり森さんが來てお話をしてらつしやいます。夏目は私の顔を見ると、

「さつき森に逢つたといふが、大分遲いぢやないか。矢來（兄さんのところ）へでもよつて居たのかい。」

と申します。そこで私も正直に天狗のところへ寄つて、雛子のお骨を埋める日の吉凶を占てもらつて來たと申しますと、夏目は又かといはぬばかりに、

「此奴は變な奴だな。亭主より餘程天狗の方を信頼してるんだからかなはないや。」

に、傍の森さんも大笑ひで仰しやいます。

「そいつはよかつたなあ。」

頭がよくつて、機嫌のいゝ時に、こんな其場の笑ひ話で事はすむのでしたし、又大患以來一つは一々そんなことをかれこれいふのも大人氣ないとも思つて居たのでせうし、第一氣もおとなしく落

ちついてゐて、私が旅をするのにお守りなんかを入れてやつても、別にそれをどうするといふこともありませんで、かへつてお前の入れてくれたお守りがお尻の方へまはつて、ねたら丁度尻の下になつたが、かへつて勿體ないぢやないかなど〻いつてゐたものです。それからそのお守りを、一緒に旅したお友達がお連れになつた藝妓が見て、不思議がつて尋ねるから、細君が女難よけのお守りを入れてくれたんだよと言つたなど〻冗談を言つてゐた位のものです。しかし一旦頭の工合が險惡になつて來ると、隨分の悲喜劇をおこします。私の迷信的な仕草が一々氣に入らなくなるのですが、私の方でもさうなると自然愈々迷信的になるといつたところも出て來て、こつそり夏目に知らせないやうにして、夏目の頭がなほるやうに氣が鎭まるやうにといふくなことをするのでした。後から考へると滑稽な事でも、其時には苦しまぎれに神頼みをするやうなものですから一生懸命です。

例へば、大正二年には正月から例の頭が惡くて、以前洋行後千駄木に居た頃程ではなかつたにしても、ともかく大變は見幕で手のつけられない始末に、子供だまし見たいなおまじなひなのですが、牛込の穴八幡の入口に大變よくきく蟲封じのお札を出すところがあると聞いて、それをもらつて來て子供達の居る六疊の部屋に南向に柱に打ちつけておきまして、長い釘を『封じ』と書いてある眞中に打ち込むのです。それを毎日一度づ〻鎚で打つのですが、夏目が外へ出たら打たうと思つて

ますけれども、かう頭が險惡になつて來ると、殆んど家に閉ぢ籠もつた切りで散歩にも出ないのが常ですから、打ちたいにも打ち込む時がないのです。若し居る時にでも打たうものなら、それこそ怎て一喝されて、取り上げられるのは知れ切つて居ります。ところがいゝ按配に其頃小說を書いて居りまして、一回分出來上ると、それを封筒の中に入れて、角の郵便函へ自分で投げ込みに行く、これが日課でもあり、又たつた一度の外出なのです。それも五分間とかゝらぬ暇なので、其間に釘を打ち込むわけなのです。出かけるとそれとばかりに大早技で毎日少しづゝ釘の頭を叩いて、何喰はぬ顏をして居りました。

ところがある日のことです。その日の原稿を書いてポストに入れに參るとて玄關に出ました。送り出て門を出た頃を見計らつてゆつくりやればよかつたのを、それといふので玄關に居るうちに大急ぎに六疊にかけ込んで、かんかん釘の頭を叩いたものです。と、これを聞きつけて、何をするんだといつて六疊に上がつて參りました。見ると恐ろしい見幕で、折角の虫封じの札を滅茶苦茶に叩きこわし、それを一まるめにしてごみ溜めの中に捨てゝ了ひました。後で勿體ないといふのでそれを拾ふやら大騷ぎをしましたが、頭の險惡になつた時には、耳が異常に働くので、何かやつてるに違ひないと感づいてるところへ、飛んだぬかりをやつたものらしいのです。それでもさうなつて來

ると妙なもので、愈々虫封じのおまじなひがやめられず、次には矢來の兄さんの家に置いて貰らつて、毎日一度づゝ行つては釘の頭を叩いて居たなどゝいふ喜劇もございます。

それからまだこんなこともあります。何でも頭が氣狂じみて險惡になるのは、毒が頭にのぼるからだ。あれを下せば自然なほるといふ占者あたりの忠告なので、私も始終様子を見てゐて苦しめられてゐると、つひ其氣になつてふと思ひついたのは、毎度食事の後には二度づゝ藥をのみます。其の藥の中に毒掃丸を入れて、一緒にオブラートに包んでやつたらよからう。かういふ素人流には名案だといふものを考へつきまして、少しづゝ丸藥を藥の眞中に入れて包んでやつて居たのです。最初は怖る恐る少量づゝやつて居るうちに、段々いゝ氣になつて大膽にもなり又ぞんざいにもなつて、長女なんぞが始終それをやるのですが、なれつこになつて粉の中にうまく入れゝばいゝのを外へはみ出して作つてやつたものです。と、たうとう或る時見付かつて了つて、小つぴどく怒られたことなどもありました。餘り苦しくなると、つひそんな今から考へると愚にもつかないことを考へるやうになるのです。

しかしこれは頭の險惡の時のことです。

子供が亡くなりましてからといふものしばらくの間は、あとの子供たちにも親切で、以前には殆んどそんなこともなかつた一家總出でどつかへ行くなどゝいふことも致しました。一度月島へ汐干狩に行つたことがございます。夏目も卒先して汐干狩には行つたことがないから行かうと申し、子供たちも父と一緒に一家打ち揃つて行くなどゝいふことはないことなので喜んで參りましたが、合憎と風が強くて海へ出ることが出來ません。仕方なしにやはり汐干に來て、同じく海へ出られない連中が、月島の川が海へ出るところの岸につながれて、中では飲めや唄へで踊つたりはねたりの大はしやぎ、其の酒宴の舟と舟との間に私どもの舟をつないでそれを觀て居りました。子供たちは面白がつて見て居りますが、夏目も汐干より此方が面白さうぢやないかと言つて喜んで見て居りました。

ところが其うちに神鳴りがなつて來る、えらい夕立が來る。お蔭で汐干どころの騷ぎではなく、みんなずぶ濡れになつて這々の態でかへつてまゐつたことがございます。

やはり其頃のこと、同じくみんなで井ノ頭へ參ゐつたことがあります。此の時も大層上機嫌で、廣い池のまはりで子供たちが嬉しさうに遊ぶのを、ベンチの上に仰向けにねころんで始終にこ〳〵しながら眺めて居りました。

長塚節さんの長篇小說『土』を、自分の紹介で朝日新聞にのせたのは此の少し前かと思ひますが、それが御緣になつて長塚さんがちよい〳〵お遊びに見えて居りましたが、九州の方へいらつしやるについて、喉頭結核にかゝつてられて、それを福岡大學の久保猪之吉博士に診て頂きたいといふので、久保さんに宛てゝ紹介狀を書いたのは此頃だつたでございませう。

長塚さんの『土』には大層感心した樣子で、序文を書いたりして居る位ですが、其中に自分の娘に是非この小說を讀ますなどゝいふことが書いてあります。が元來娘たちに小說をよませるのは大嫌ひで、殆んど嚴禁の形でありました。といふのは、第一生半可な文學話などをやられては堪らないといふのと、それが昂じて、よく女流の作家で家へいらしたりなどする方のやうになられちやかなはないと口癖のやうに申しまして、娘が小說を讀むのをひどく嫌つて居りました。そんなわけで自分のの人のの區別なしに、後になつても大きな娘達には全く小說を讀ませないといつてよい位でした。

長塚さんについてはこんな話がございます。この『土』を朝日に出したについて原稿料が一度に相當まとまつて取れることになり、當時文藝欄の助手格だつた森田さんが受け取つて來ての話に、

今日これだけの金を長塚さんに渡すのだが、きつといろ〳〵厄介になつてるから、今晩は御馳走をしてくれるに違ひないなど丶私に言つてられたものです。がさて節さんにその金を見せると、どうかその金はそつくり田舎へ爲替で送つてくれないかと頼んだなり、御禮にといつて新聞に包んだバナナを一房出されたのには口あんぐりだつたといふ話がございます。後であての外れた森田さんの言ひ草が振つて居ます。

「節の奴、あの金できつと田地を貰ふんだよ。」

長塚さんのつましいのは評判でしたが、私どものところにもその時御禮だとあつて、五六十錢かと思ふ半分腐りかけた果物の籠を持つて來て下すつたものでした。

笹川臨風さんや横山大觀さんなんぞがおよび下すつたのも、此の前後であつたかと覺えて居ります。一度前におよび下すつた時には執筆の方が忙しいとかで失禮し、其後ひとりで大觀さんのところをお訪ねしたことがありました。すると取り次ぎの書生さんが先生は留守だといふので、其儘よろしくといつてかへりますと、後から書生さんが追つかけて來て、お會ひしますからどうぞおかへり下さいといふので、又素直について行つたさうです。大觀さんは繪を描いてられて、繪を描いて

る時には面會人を斷はる習慣になつて居るので、玄關子が氣をきかして居留守を使つたものと知れ、御馳走になつてかへつて來たなどゝいふことがあります。其後大觀さんから尺八の柳の繪を頂き、そのおかへしに所望されて全紙に自作の詩を書いて贈りましたが、それが出來上る迄には、隨分稽古をしてはしくぢらして居つたやうです。

此頃、橋口五葉さんの兄さんの橋口貢さんが、外交官で支那で領事をしてらしたので、よく彼地の骨董品を送つて下さいました。多くはこまぐした文房具の類か石摺の類でした。橋口さんは以前私どもが千駄木に居た頃始終おいでになつて、夏目と繪端書の交換などをしてらしたのです。夏目はそれら支那骨董を又大變珍重がりまして、物によつては机の上において眺めたり磨いたりして居りましたが、送つて下さるものだけに滿足が出來ず、此方から自分で欲しいものを言つてやつて買つて頂いたりもして居りました。それがみんな三圓だの五圓だの、高々十圓位がとまりなのです。支那のものは面白くて安いといつて喜んで居りました。

五〇　呑氣な旅

夏には子供たちを鎌倉へ海水浴にやつてやらうといふので、鎌倉に居らつしやる菅さんにお願ひして家を見ておいて頂き、私が出掛けてきめて來たのですが、菅さんが又神經質で、あの家は肺病やみが居たからいけない、あの家はどうと中々詮議がむづかしいのを、材木座の、私が若い頃よく行つた大木さんの別莊の近くに、小いほんの二間かそこいらに臺所のくつついてゐる家を借りることに致しました。一夏百二十圓ばかりだつたと覺えて居ります。

七月の末に學校が休みになると、子供たちがぞろ〳〵其頃文科大學の學生だつた岡田さん（現臺灣の高等學校教授林原耕三氏）に引率されて參るります。程へて自分でも行つてとまつて來ましたが、狹いのにびつくりして、夜になつてみんなとまると家中足の踏み場もない程人で人でいつぱいになる有樣に、こゝでかうやつて修養して居れば、いついくら貧乏しても驚かないなどゝ申して居りました。子供と一緒になつて海に入つて泳いで居たさうです。

ところがさうやつて子供たちは鎌倉に居り、私たちは東京に居りますうち、一番末の男の子が猖

紅熱に罹つたといふ急報に接しまして、愁いて私が急行しますと、今入院させたところだといふところへ參ゐりました。それからといふものしばらくの間手が離せないので、私も共々鎌倉に止まつて、東京の家には私の母を頼んで居て貰ひました。其うちに病氣の方も次第次第に順調になほりかけて參ゐります。自分でも見舞旁々參ゐりまして、その足で長谷の中村さんの別莊の方へ行きました。そこで御約束が出來たものか、御一緒に旅行に出るといふ下相談をきめたものらしいのです。

それからしばらくたちましてから、中村さんと一緒に善光寺の方へ旅行することにしたが、お前が居ないと仕度が出來ないから、一寸歸へつてくれと申して迎へに參ゐりました。子供の方もいゝので一緒に歸へつて何かと仕度をして居りますうち、愈々明日たつといふ晩になつて、急に私がひどい腹痛をおこして了ひました。折から松根東洋城さんが來てられていろ〳〵世話をして下さるやら、そこへ森田草平さんが見えて手をかして下さるやらで、大分落ちつきはしましたものゝ、まだ不安心でなりません。で、明日の旅行はどうしようかといふわけ。ともかく一日のばして樣子を見て、それで大事ないやうだつたら出かける、でなければ取りとめといふので、ともかく中村さんも準備してらつしやるだらうから、其事を傳へて、一日おくれて出發するといふことになり、女中は山出しで用は足りず、夏目が五錢玉を握つて自分で自働電話をかけに參ゐりました。

かへつて來て今交換孃に叱られたと申しますから、皆さんが面白がつてお聞きになると、何でもチリン〳〵とベルをならして交換手を呼び出すが早いか、先方でお入れなさいとも言はないうちに、五錢玉をチンと落して了つたのださうです。だからさあお出になつたから料金を入れて下さいと言はれた時には、手にお金がないのです。で、仕方がないので正直にさつき入れたのですがと辨解はしても、交換手の方では中々許してくれず、自働電話の講釋よろしくあつて、それでも親切にも、今度だけはつないで上げますけれども、この次からは氣をつけなくてはいけません、そんなことをしては無効ですよとこん〳〵と意見されたので、ハイ〳〵と畏まつて用を足して來たのだといふのです。

「そいつはよかつた。先生も御殿樣ですな。」

と松根さんなんかは大笑ひをされて居りました。

い丶按配に腹痛も大したこともなかつたので、一日おくれてたつて參りました鹽原へ行き、それから日光、日光から輕井澤、上林溫泉、赤倉とまわつて八月三十一日かに十六七日目にかへつて參りました。

これは至極呑氣な旅で、中村さんが御馴染の新橋柳橋あたりのきれいどこをお連れになつての旅

でして、夏目さんと御一緒ならとお宅の方でも御安心なさるといふので、何でもかんでも一緒に行けと誘はれての上の、つまりだしに使はれて參るつたやうなものでした。お宅の方には、夏目の外に連れがあるのは大方內證だつたのでせう。歸へつてから笑つて居りましたが、行く先々で、中村さんのお馴染の御茶屋の女將さんや女中さんに手紙や繪端書を出すのに、君は字が上手だからとかその方が專門なんだからと言つて、夏目に代筆をおさせになる。片方も呑氣なもんで、面白半分繪端書に書くこともないので、この大佛はいゝ男でせうなんぞと勝手なことを書いて出すのださうです。ところが奧さんのところへおやりになる御手紙ばかりは、まさか代筆ではつとまらないと見えて、あの不精者が自分で几帳面に書いて居たよなどゝ申して居りました。

こんな風にどこへ行つても呑氣だつたのでせうが、その代りどこへ行つても田舍の人の癖で、何か書いてくれといふ揮毫責めにあつたらしいのです。中村さんは滿鐵總裁といふので依賴者も自然多かつたのでせうが、硯をつきつけられさうになると、この人に書かせろ、この人はうまいんだからといつて、自分では逃を打つて、夏目にばかり押しつけて居られたさうです。鹽原妙雲寺に平元德宗師が居られて所望されたものでせう。東京にかへつてから妙雲寺觀瀑といふ詩を書いて送つて居りました。

其頃、矢來の兄が職をやめられまして、僅ばかりの恩給だけになりましたので、その方へいくらかづゝ補助をして上げなければならなくなりました。ところが前々から私の實家の方にも少しづつ補助をやつて居たのですが、さうなつて見ると兩方ではとてもやり切れない。私の弟も大學を出たのだから、少しでも月給をとつて家のたし前にしてくれなければといふことになり、弟もその氣になつて就職口をさがして居ましたが、丁度この旅行中それで夏目から中村さんの方へ御願ひして、いゝ手蔓があつたやうでした。

上林の温泉宿の話でしたか、中村總裁にお會ひしたいといつて土地の有力者が訪ねて來ましたところ、宿のものが女ものゝいつぱい下がつてる部屋へとほして了つたさうで、中村さんが、本統に氣のきかないことをすると困つてらつしやると、ナーニ知らないのは東京の奥さん位で、みんな知つてるのに、あいつまだ誰も知らないかと思つて馬鹿な奴だとばかりに茶目振りを發揮して喜ぶといつた工合で、ともかくこの旅行は非常に呑氣なものだつた樣子でございます。

かへつて參ゐりましてから、賴まれたのだと言つて、一緒に行つた葭町か柳橋かの藝者に繪を二三枚書いてやつて居りました。何でも菊の花を描いて、それに俳句の賛をしてゐたことをおぼえて居ります。

九月に入つてから又々痔が悪くなりまして、神田錦町の佐藤病院に參りました。丁度私が頭が重くて臥つて居たのですが、行つた切りかへつて參るまりせん。何でも又手術をしなければならない病勢で、それにはすつかりお腹のものをきれいに洗つて、それからは流動食で居なければならず、かれこれ一週間位入院しなければといふので、自分でもすぐ入院する氣になつたものと見えて、さう言つてよこした切りかへつて來ないのです。私もどんな工合か行つて見たいのですが、自分の方で臥せつてる始末に、森田さんに賴んで行つて見て頂くと、

「先生、おとなしくねてましたよ。」

といふ御報告。豫定どほり一週間もするとかへつて參るりましたが、まだ床を敷いてねたまゝ人樣にお會ひしたりして居りました。床の上でねながら人に會ふと、大變自分がえらい殿樣にでもなつたやうな氣がするなどゝ申して居りました。

夏目がかうやつて病氣ばかりして居りますのに、私は又、三十迄はやせて居たのですが、この頃はだんく肥えて參るりまして、まるで別人のやうに肥えて了ひました。よく夏目が、今に一人では用が足せなくなつて亭主を使ふだらうなどゝ言ひ言ひしたものでした。でも亡くなる時二十日ば

かりの看護をし、それから何やかやで大分痩せましたが、それからといふもの、前のやうな馬鹿ぶとりはしなくなりました。

芝居は死ぬ迄行くには行きましたが、たうとうあんまり好きになりませんでした。けれども義太夫は好きで、前に呂昇の好きな話は一寸致しましたが、此冬文樂の越路が來た時にもよく一緒に參ゐりました。外にも私の母とか小宮さんなんぞを誘ひ合はして、幾日も幾日も行きまして、何でもどなたかに貸したお金がかへつて來たのを、これ幸とみんな――といつても勿論大したお金ではないのですが――越路で使つて了ひました。

長女がピアノを習ふやうになつてから、よく連れて音樂會に參ゐりました。芝居を見る時には、芝居より棧敷の方を觀るのが多い位なものなのですが、音樂會の時には非常に几帳面で、いつぞや長女が一緒に行つた時、一寸後ろを振りかへつたら大變怒られたと申して居りました。こんな時にはキチンと御行儀よくして居なければ承知が出來ないのでせう。さうして自分でもキチンとしたなりをして行くので、だらしのない見ともないことをするのを非常に嫌ひました。

此頃になつて、先年奥さんを亡くされた大學の大塚さんに、後添を貰はないかといふ話がちよい

ちよいあつたものと見え、其うちの一つで、あるところから口がかゝつて來て居るから、どうだらう、自分にはよくわからない故、夏目に一度見てくれといふお話があつて出掛けて參つたことがありました。かへつて來ての話に、あんな女をいゝと思つてるのか、學者なんてものは仕樣のないもんだ。大方本を讀む外は、たま〳〵世間へ出ても、といつて西片町から大學迄通ふ間位のものだが、それも其間地面ばかり見て歩いて居て、どんな女がそこへらに居るもんか、まるで知らないんだらうから困つちもうなんかと、ひどいことを申して居りました。それ位ですから自分では中々氣のつく方で、道を歩るいて居ても芝居小屋なんかに入つても、いつの間にかちやんとどこそこに綺麗な女が居るとかなんとか見てるのです。それに女ばかりではなく、道具屋へ入つてもその調子で、隨分目が早かつたさうでございます。

これに關聯して面白いことがあります。すぐ近所の大通りに紙屋がありまして、そこのおかみさんがあの邊の町家には珍らしいほつそりした色の白い人でしたが、それが大變なお氣に入りで、と言つてそれをどうしたの、かうしたのといふのでは勿論ありませんが、散歩の度にのぞいて見たりして來るのでせう、今日はどうしてゐたとかかうして居たとか歸つて來て言つてるのです。さうし

て子供たちに、冗談とも眞面目ともつかず、あのおかみさんはお父さまの好きな女だから、みんなあの前を通ほる時には恭しくお辭宜をしてお通りなさいなんかと申して居りました。別に下卑た口調でもないんですが、そんなことを子供達ばかりでなく、門下の方々へも敗けず吹聽して居りました。私たちが大した美人でもない、まるで幽靈のやうに影が薄いおやありませんかなどゝ申しましても、あゝいふのが好きなんだとか何とか申して居たものですが、この女も先年亡くなつて了ひました。

五一　二度目の危機

機嫌がよくつてにこ〳〵して居るのですが、暮から妙に顔が火照つててか〳〵して居るので、變だ變だと思つて居りますと、又も例の頭がひどくなつて參りました。丁度この前に一番ひどかつた時から十年目にあたります。此年は正月から六月迄が一番ひどくつて、揚句の果はたうとう又もや胃を悪くして寢込んで了ひました。胃が悪くなると、それで段々頭の方はなほつて來るのでしたが、此時には始めに兩方でしたから、隨分大變でございました。

何でもお正月の二日か三日のことです。どうも女中が變だとか何とかひとり語を言つて居りましたが、やがて女中に向つて、いきなり木に竹をついだやうに、そんなことは言はないでくれとかう申します。しかし女中は別に何も言はないのですから、怪訝な顏をして、何も申しませんでございますがと答へると、怖いいやな顏をして默つて了ひます。後で私に、

「あんなことを言はせちや困るよ。」

と大層不興氣にたしなめて居りました。火照つた顏と言ひ、とんちんかんなことをいふこと〻言ひ、先づ耳から始まること〻言ひ、又も例の恐ろしいのが襲つて來たのだと感付きましたから、女中達にも子供達にも、あんまりべちやくちやおしでないよと警戒して居りました。それでも子供のことですから、何かの拍子にそんなことを忘れて了つてげら〳〵笑つたりします。すると自分のことを笑つてでも居ると思ふのですか、大きな聲で呶鳴つたり、呼びつけて叱つたりするのです。さうして尻尾はいつも私に參ります。子供たちがポン〳〵ピアノを叩く。それが又氣に食はないで一喝を喰らはします。かうなつて來ると家中は急にひつそりかんとして、全く虎の尾を踏む心持と申しますか、みんな爪先立て〻足音をぬすんで歩るくのです。ちつとでも音を立てやうものなら、コラツとやられて了ひますといふ工合です。

此方でみんなかういふ工合に警戒して、さはらぬ神に祟りなしと注意に注意をして居りますと、夏目は夏目で一生懸命聽き耳を聳てゝ、あらぬ妄想を構へて、疑の上に疑を築いて、根堀り葉堀り飛んでもないことを考へるらしいのです。それも自分の狂つた耳を土臺にして、そこへ突飛な想像をつけ足して、いろ〳〵なことを描くらしいのですからやり切れません。それ丈ならまだしも、その自分で勝手にこさへ上げたものから、こん度は逆に實際に私たち、殊に私に當つて來るのだからたまりません。

例へば女中が何か自分の惡口を噂してるのを聞いたといふ風に感じますと、それを私が放たらかしてさせておくか、或は進んで私が言はせるといふ風にとるらしいので、そこでむきになつて突つかゝつて來るのですが、又始まつたと思ふものですから、成るべく相手にならないやうにして居ります。すると默つてればいゝかと思つてる、自分一人にしやべらせて、自分を馬鹿にしてると言つて怒ります。

それから自分でもさうなつて來るとしきりに難題を吹つかけるのですが、言ひながら自分でも難題と知りつゝ、これでもかこれでもかと先へ先へと裏へまはつてあられもない、人を苦しめるやうなことを考へ進めるのです。どうしたつて氣に入る筈はないのですから、その手には乘りませんよ

と、それを見て見ぬ振りをしてすまして居ますと、亭主が惡いことをし、無理なことをしてゐると知りながら默つてゐるとは何事だ。忠言をして人格をなほさせるのがお前の本分ぢやないかと、自分が百も承知でをいぢめておきながら、いふことがなくなるとこんな難癖をつけるのです。

それでもちやん〳〵と小說は書いて居りましたが、終ひには胃と兩方を惡くしたので、一時執筆を中止致しました。それは『行人』でしたが、こんな頭で書いたものか、この小說は隨分疑り深い變な目で人を見てるところが書いてあるかと思はれます。とにかく小宮さんが私に電話をかけて來ましたら、自分で出て行つて、何の用だ、人の細君を呼び出したりしてとか何とか言つてどやしつけます。森田草平さんでも鈴木三重吉さんでも、隨分ひどく怒られたりして、手のつけられないことがありました。

電話では頭が惡くなると始終問題をおこして居りました。其頃家に電話をひいたのですが、非常にベルの鳴るのを氣にしまして、時には自分が出て行つたりなどしますが、或る時などは、電話に出て行つたと思ふと、今、モシモシ、夏目さんですかとどつかからかけて來たから、知りませんよと言つて切つて來てやつたなどゝ申して、何が何やらわからずぷり〳〵怒つて居つたことなどもあります。

それ程ですから、こんな時に間違つた電話でもかゝつて來やうものなら大騷動です。自分で電話口へ出て行つて、交換手を呼び出し、何故間違つたのだ、どうしてそんなに間違ふのだ、其理由を言ひなさい、大分人を邪魔し馬鹿にするのだらうなどゝ、常にはそんなことを言ふ人でないのですが、かうなると遠慮會釋なくくど〳〵とやり込めるので、聞いてる此方がひや〳〵する位でした。さうしてそんな間違つた電話なんか聞く必要がない、五月蠅いとあつて受話器を外しておきます。局の方ではいくら呼び出しても誰も出て來ない。電話に故障があるのだらうといふので係が調べに來る。と受話器がかゝつて居ないのだと知れてお目玉を食ひます。と又歸つた後からすぐにその故障が始まります。又も係りが調べに來る。それといふので受話器をかけます。かへると又外しておくといつた工合に、頭の惡い時に殊に電話を邪魔にするので弱りました。死ぬ前などにもこんな工合でしたもので、たうとう離れへ移した事があります。

まだ寒い頃でしたでございませう。女中が咽喉をいためて變なかすれ聲で聲をつぶして居りました。するとそれを大層氣にしまして、何故そんな聲をしてゐる、大きな聲を出して見ろと申します。いくら聲をつぶして居たつて、一聲二聲普通の聲は出るものですから、相當大きな聲を立てますと、それ見ろ、出るのに何故出さない、貴樣はうそをついてる。細工をして怪しからん奴だと言つて怒

りつけました。何でも細工をしてると見るのが、病氣になるとこの人の癖でした。さうしてそれを非常に嫌つて憎むのでした。

この悪い最中のこと、私が留守中の出來事でしたが、留守の間男の子どもを外へ遊びにやつてはいけないと夏目が言つてゐたのに、いつの間にやら男の子どものことですから、どこへか遊びに行つて了つたさうです。すると出すなといふのに何故出したといきり立つて、一人を廊下から下へ突き落し、一人が門のところへ出たのを追うて、門前の路の上で人が見てるところでポカノヽ擲つたさうです。女中二人は怒つて了つて、いくら御主人でもあんまりだ、まだ人の見てないところでひつぱたかれたのなら我慢もするが、こんなことでは今に何をされるかわからない、此上は一時も居られないといつて、そのまゝ私のかへらないうちに出て行つて了ひます。それを見てゐたのが長女の筆子で、いくら父でもあんまり無法なことをすると悲憤の涙にくれて居りますると、やがて夏目が出て來て、女中は出て行つたか、怪しからぬ奴だと言ふので、そこで筆子が憤然とそれは出て行きますとも、あんなことなさるんですものと、女中の肩をもつて了つたのです。さあ、さうなると堪まりません。何だ、この生意氣な奴め、父に口答するとはといふわけで、ポカッと來ます。私が歸へつて參りますと、女中は居ず、筆子は口惜しがつて泣いて居る。夏目は夏目であの奴怪し

からぬ奴だと女中は居ないので、筆子一人を目の讎にしてしきりと奮慨して居ります。今にも刄物沙汰でも仕兼ねまじい形相なので、これは危いと見てとつて、目の前に居なければそれ迄のことですから、矢來の兄さんのところへ逃がしてやりました。それはそれですんだんですが、女中をみんな追ひ出して了つたのですから、第一臺所が困ります。そこで筆子が臺所をするのですが、さてさうなつて見ると矢張り自分でも心配だと見えて、時々臺所へ出張して來て、今日のおかずはきまつたのかなど〻五月蠅く尋ねて居りました。

一番可笑しかつたのは、女中がないので、誰も書齋の緣側を拭く者がありませんから、埃で自分でも氣持が惡いのでしたでせう。がこれも自業自得だから此方も意地になつて誰も構つてやりません。尤もさうなるとたまに拭かうとすると、拭かないでもい〻と意地張つて怒つてるので一切よりつかずに居りますと、堪り兼ねたと見えてそのうちに一人で風呂場へ入つて、ガチャ〳〵音はせて居りましたが、やがて猿又一つになつてバケツを下げて參るりました。どうするかと見て居りますと、自分で書齋の廊下に雜巾がけをするではありませんか、餘りのをかしさにこれを見た時、思はず長女と顏を見合はせてくす〳〵と笑つて了ひました。

それから頭が惡くなると、朝早く四時半か五時に目をさまして、自分で起きて戸をあけ、それか

ら「おきろ」と呶鳴るのです。家中のものがぴりつとして一ぺんに起きて了ひます。それから呶鳴らない時にも、湯殿へ入つて、安全剃刀を自動式の革砥でカチヤ〳〵カチヤ〳〵ととぎます。その音を聞くと皆飛び上つたものです。それからさうなると怖いもんで、てんでに寢床をあげます。それを自分が監督顔にまはつて來て、何を愚圖愚圖して居ると小言を言ひながら、此方へ貸しなさいとばかりに取り上げて、ぐる〳〵と丸めて、何でもかんでも戸棚の中に押し込みます。蚊帳や布團がはみ出して落つこちさうになつてるのを、構はずぐん〳〵唐紙を閉めるのでした。

この女中を出して了ふ前のことでしたでせう。末の男の子が泣き虫でよく泣きます。それに頭の惡い時には實に怖い人相になるのですから、子供が見たらなほのこと怖いので泣きたてます。すると、守をして居た娘が尻をつねつたのだと言つて、たうとうこれも出して了ひました。

それからこの泣き虫が泣くのを、みんながいぢめるからだと言つて、泣くとは出て來て、いゝ子だ、いゝ子だ、御父さんがついてるから大丈夫だよと言つてあやすのです。段々聞いて見ると、自分が末子で皆にいぢめられ、其上父からも可愛がられなかつたから、この子も末子でみんなにいぢめられて泣くのだらう。けれどもこの子には、父たる自分がついて居て、みんなから守つてやるとかういふ意味なのです。ところがその泣虫は、其實夏目の怖い顏を見るとなほ一層泣き立てるのだ

から世話はありません。

かうなつて來ると、いつもの式で、叉も別れ話です。しかし今お前に出て行けといつても行く家もないだらうから、別居をしろ、お前が別居をするのがいやなら、おれの方から出て行くとかうです。で、別居なんかいやです、どこへでも貴夫のいらしたとこへついて行きますからと、てんで取り上げませんのでそれなりになるのですが、いつもきまつて小五月蠅くこれをいふのでした。さうして終ひに胃を惡くして床につくと、自然そんなこんなの黑雲も家から消えて了ふのでした。いはば胃の病氣がこのあたまの病氣の救ひのやうなものでございました。

この時もかなりひどくもありましたが、外國からかへつて來てからの時にくらべれば、餘程おだやかになつて居りました。さうして病氣の間も短うございました。其後亡くなる年にも亦おこつて居りましたが、この時にくらべれば、ずつと叉靜かになつて居りました。が、たうとう死ぬ迄時々思ひ出したやうに起こつて居りました。

頭が惡くなると繪をかくと前にも一寸申しましたが、この時にも隨分繪をかきました。この病氣が起こると側に居る私たちも困るのですが、第一自分も苦しいのでせう。それを遁れる一つの方法が繪であつたことはたしかだと思ひます。だから繪は寫生風のものより、頭にあるものを勝手に描

くといふ風に見受けられました。さうしてそれは風景にしても人物にしても現實とは飛びはなれた浮世ばなれのしたものばかりでございました。

この頃しきりと描いて居たものは、日本畫とも水彩畫ともつかない、みづゑの紙に描いた妙ちくりんな繪でした。よくは存じませんが、繪具は水彩繪具でせう。日本の筆で、日本畫みたいな線を引いて描いたものです。それを根氣よく幾枚も幾枚も描いて居りました。それを大分頭がなほつて後のことでしたでせう。長女に、お前たちにやるからみんなもつておいで、しかし人にやつちやいけないよといつてくれてやりました。子供たちは喜んで、六疊の部屋の三方の楣間へずらりとピンでとめて飾つておいたものです。すると親類のものや子供たちの從兄弟や何かが來まして、これは面白い、是非一枚下さいとせがむので、一枚や二枚はわかるまいとやつて、いつの間にか少し數のへつたところへ、六疊に入つて來まして無くなつたのを見付け、何故人にやつたと怒りまして、貼つてある殘りのものを全部、はがしては引き裂きはがしては引破りして、みんなもみくちやにして屑籠の中に捨てゝ了ひました。

大きな南畫風の繪を描き出しましたのは、この年の暮あたりからだつたかと覺えて居ります。一枚繪が出來ますと、それを一月も唐紙にピンで止めておいて、毎日眺めてなほしたり、人の批評

を聞いて筆を入れたりして、それでもなほ見あきないとなると、始めて表具屋へやつて表装をさせました。だから一日一日に模様が變はつて來て、昨日は松林だつたのが今日は山になり、峰がわかれ〳〵になつてゐたのが、いつの間にやら一つの大きな山に變はつてゐたり、鳥が多くなつて居たり、さうかと思ふと大きな白鳥見たいだつた鳥が、次の日には家鴨位になつて居たり、出來上る迄には千變萬化するのですから、出來た後でも仔細に見ると、いりもしない横だの縦だのゝ線が入り亂れて跡をのこしてゐるのが、山の腹やなんかに見えるのが澤山あります。さうしておいて、これでいゝといふところ迄やつて見ないと氣がすまないらしいのです。隨分慘澹たるものだなどゝ口の惡い皆さんから批評されてゐたことがあります。その又批評にも容易に降參する分ぢやないのですが、しかし其道で心得があるとか一家をなしてるとかいふ方の批評は、素直に求めても聞いて、手を入れるといふ風でございました。これは繪だけではなく、何事に於いてもさういふ風があつたかと思ひます。

五二　醉漢と女客

このあたまの悪い最中の二三月の頃のことでしたでせう。森田草平さんが面會日の夜に、初めて小栗風葉さんをお連れになつていらつしやいました。それがどうしたわけか大層醉拂つていらつしやるのです。一體醉拂つて、初對面か何か、ともかくあんまりどころか一向親しくもない人のところへ顏を出されるのから異なところへ、さうしてそれを甚だ面白くなく思つて居るところへ、酒の勢にまかせて何かかにか仰言つたものと見えます。私は其場に居ませんので、どんなことがどんな風に行はれたかは存じませんが、大層氣に障つたものと見えて、堪まり兼ねたやうに、

「かへれ！」

と呶鳴る夏目の聲が聞こえて參ります。何事が始まつたのだらうと只ならない樣子に吃驚して居りますと、やがて森田さんもお連れの御方もそこ〳〵におかへりになりました。それでも夏目の怒りは鎭まりません。あんなことを言はせにわざ〳〵あんな奴を連れて來るとは、森田の奴も怪しからん奴だ、といつた工合で、雲行きが險惡です。あんまり夏目が腹を立てゝ居るので、それからといふもの森田さんも家へ足踏みが出來ませんやうなことになつて了ひました。が時が時ですし、うつかり私からあやまつて見たところで、かへつて場合によつては藪蛇にならないものでもないので、まあ〳〵もうしばらくの間辛抱してらつしやい、其のうちには機嫌もなほらうからと、森田さ

んをなだめて居ました。何しろ森田さんも大分お困りの樣子でした。
小栗さんが前々から森田さんに、夏目のところへ一度連れて行つてくれるやうに賴んで居られたのを、其日ではこれから出かけようといふことになつて、折からの木曜會で一緒に途中までいらしたところが、榎町のうなぎ屋のところで、こゝで飯をたべて行かうといふのが抑々の始まり、其うちにしらふではとあつて一本二本つけてるうちに段々小栗さんの氣が大きくなるので、これは困つたことになつたなと案じたけれども、今更後へも引けず、夏目のところへ行つたらかへつてよからうといふので引つぱつてらしたのださうです。すると小栗さんが大に親しさうに、つまり對面といふことにこだはらないやうにと書齋へ入るといきなりから元氣を出して、突立つたまゝまだ挨拶もしないうちに、醉拂ひのうすら本心で、大に磊落のところでも見せ合ふつもりか、
「やあ、夏目君」
と仰言つたものださうです。それからこの調子で森田さんあたりがはら〳〵してゐるにもかまはず、愚にもつかないことをまくし立てられたので、いつもの時なら相手にもならずいゝ加減あしらつて居たでせうが、頭の惡い時だから堪りません。たうとう一喝喰らはして追拂つたのださうですが、自分で連れてらしたとは云ひ條森田さんこそ飛んだ御難です。

それから程經て五六月頃の、少しあたまの方も靜まつたある面會日の夜のことでした。玄關からは來にくかつだと見えて、臺所口の方から森田さんが覗いて、今日はどうでせうと樣子をお伺ひにいらつしやいました。大分機嫌もなほりかけて居る時だから、怒られたら怒られたで、其時は今度こそ私が責任をもつてお取りなしをするから、何も改まつた文句を言はずに、集まつてられる皆さんの中に入つてらつしやいと申しますと、それではといふので上がり込んで一座の中に坐はつて居られました。別に先日は惡うございましたともすみませんとも改まつた挨拶をなさらず、一緒になつて笑つたり話したりしてられるうち、何にしに來たとか、怪しからん奴だとか、そんな角の立つやうなことも言はれず、それなり有耶無耶のうちにこの事はすんで了ひました。

其頃女の方でいらつしやる方が中々ありましたが、其うちで變はつてるのを二三お話し致しませう。

自分でも『硝子戸の中』に書いて居りますが、自殺をするすると仰言る若い女の方がちよいくいらつしやいました。この方は近所の喜久井町に宿をとつて居て、朝出がけに宿のかみさんに、今日は死ぬかも知れないから歸つて來ないかも知れません。若しかへつて來なかつたら、後をこれ

これにしてよろしくとか何とか言ひおいては出るといふ一風も二風も變はつた方とやらで、よくいらしては夏目に身の上話や何かをなさいます。と、夏目は、人樣のさうした死なねばならないなどといふ不幸な話には、人一倍同情する質なものですから、ひどく同情しまして歸へつた後で、氣の毒だなとか、どうとかならないもんだらうかなどゝしきりと氣にやんで居りましたやうでしたが、其後少し機嫌がよくなりましてから、この話の出た時に私が申しますには、どうも少し變ぢやありませんか、死ぬ死ぬと廣告をして歩るいてる者もないもんだし、死ぬからどうでせうと人に相談に來る人もないもんぢやありませんか。それ程死にたけりや勝手にさつさと死ねばいゝものを、どうも見たところまだ死にさうな氣勢もなし、又死んだといふ話も聞かないのは變ですよと言つて居りますうち、何かの雜誌の六號に、この女のことが書いてありました。噂話の有ることないことを掃き集める六號活字欄なんかあてにはなりませんが、とにかくそれによりますと、其女といふのが中々のしたゝかもので、手をかへ品をかへて夏目をだましに行つたがさつぱり驗がないので、此頃は河岸を代へて、佐藤紅綠さんのところへしきりに行つてるといふことが書いてありました。そこでそれ御覽なさい、食はせものでせうと申しますと、夏目はいやな顏をして默まつて居りました。

さうかと思ふと、女子大學の學生だといふ方が又一しきりにいらつしやいまして、先生とお二人

切りでこん度雜司ヶ谷を散步しませうなどと言つて見たり、ねてらつしやい、按摩を致しませうなどと言つたりするので、一人ものぢやあるまいし、何を言つてるんだとばかりに急にいやになつたりして居たこともありました。

かと思ふと、又數學ばかりやつてるといふ女の方が見えて、これ又散步をしませうといつた按配に、おれが爺だと思つて、やたらに妙な女が訪ねて來やがるなどゝブックサ言つて、辟易して居たことがありました。

大正元年頃から、私は人にすゝめられて當時流行した岡田さんについて、岡田式の靜坐法を初めまして、自分では大變工合がいゝやうに思ひましたし、又岡田さんなんかも夏目のやうな人にはきつときくと言つてられましたが、夏目自身はそんなことをする氣もありませんでした。しかし大體人のやる事には干涉しない質で、私がいゝと思つてやつてることは全く私の自由に放任しておいてくれました。

五三　自費出版

岩波さんが書店の商賣をお始めになつたのが此頃であつたでありませう。近頃でこそ岩波書店も押しも押されもせぬ堂々たる天下の大出版者でありますが、この創業當時は、さう申上げては失禮ですが、まあ〳〵微々たるものでした。それで時々お金の融通を私どものところへ頼みにいらつしやいました。

或る時岩波さんが夏目のところへお見えになつて、何かとお話しになつて居ります。と、夏目が私を書齋に呼びまして、いきなり株券を三千圓ばかり持つて來て岩波へ貸してやれと、藪から棒にかういふのです。何が何だか一向様子がわからないので、一體どういふわけで株券を御用立てするのですかと尋ねますと、いや、話はわかつてゐんだと面倒臭がつて居りますから、それではいけません、よく伺つた上でなくてはと尋ねますので、そこで事情を言つてくれました。

事情といふのは、其頃岩波さんがどこか大きな圖書館あたりの注文を一手に引きうけて、書物を澤山取り揃へてお納めになる、さうするとそれについて相當の利益があるといふ確實な商賣の口が

あるのですが、さて大事なお金がない、そこでかういふ確かな、間違ひっこのない商賣なんだから、その爲めにどうか三千圓ばかりしばらくの間貸してくれないかといふお話なのです。そこで仕事は確かだから貸してやつてもいゝが、家には現金がないから、そんなら少しばかりある株券を貸せるから、それを銀行で擔保にして資金を調達したらいゝだらうとかういふのでした。
一體其頃私どものところでは、長い間の貧乏生活からやゝ救はれまして、こゝ何年かはいゝ按配に、隨分の大病もしたこともあり、又多人數の子供だちも揃つて大きくもなつて、何かと物入りもあるのでしたが、どうやらかうやら少しづゝ殘る勘定になつて居りました。勿論大した纒まつたお金の殘る道理もないのですし、其當時にあつては本が賣れるといつて見たところで、近頃のやうな大量出版だの何だのといふ派出なこともないのですから知れたものですが、それでも少しづつ殘るものを、其儘銀行にねかせておいてもつまらない。確かな會社の株券を少しづゝでもいゝから買つておくと、自然子が子を生むやうになつていゝものだと敎へられ、そんなことには一切無頓着だつた私どもも、成る程それはさうだと感心しまして、丁度小宮さんの叔父さんで、ロンドンでお識り合になつた犬塚さんが銀行の重役してでらして面倒を見てやらうと仰言るのをいゝ事にして、小金がたまるとは犬塚さんのところへお屆けして、少しづゝ株券を買つて頂いておいたのです。その株

たゞ家の用箪笥の抽斗に入れておくのでした。

そんなわけでしたので、岩波さんの事情を伺つて見れば、お貸しするのは差支ないのですが、ともかく三千圓といへば私どもにとつては大金です。なる程、夏目にも岩波さんにも當事者同志双方間違がなければ何のことはないのでせうが、人間のことですからいつ何時どういふことがないとも限らない。其時になつて、萬一面白くないことなどがあつては困るから、ともかくどちらがかけても第三者にもわかるやうな契約をして頂きたいと、私が株券を持つて出て、岩波さんを前にして一寸開きなほつた形で申したものです。岩波さんはこれは様子が違ふぞとでもお思ひになつたものか、びつくりした顔をしていらつしやいました。一體かういふことには呑氣な夏目のことですから、そんなに迄するのは氣の毒な位にも思つたでせうが、とにかく私のいふところに從ひまして、別に君を疑ふわけではないが、細君があゝ迄いふのだから、契約は契約としておいてくれ給へといふことになつて、岩波さんも手續きをお踏みになつて、株券をお渡し致しました。

かういふ例があつてからといふもの、時々大口の註文などにお金がいると、よく私どものところへいらして、事情を打ちあけて融通をつけていらつしやいました。或る時、やはりかういふ工合で

融通をしたのが、期間が來てかへしていらした小切手が、たしか三千圓だつたと思ひますが、それを私が受け取つたまゝ用箪笥に入れておきました。いつもお金を入れておくところなのです。其うちに私も外出をします、上の娘たちも居りません留守の間に、丁度若い方にお金でも出して上げようと思つて、自分の財布をあけて見るとお金がなかつたのでせう。私がかへつて參りますと、一寸入用があつたから、そこから金をいくら〳〵出したよと申しますから、さうですかと言つて居りますと、部屋の圍爐裡傍に小い紙切れが一枚落つこちて居ります。何でせうと思ひまして拾ひ上げて見ますと、つひ先頃岩波さんから受け取つたばかりの三千圓の小切手ではありませんか。吃驚しましてどうなさつたんですかと尋ねて見ますと、皆が居ないので金の在所がわからない。そこで一番小い娘の愛子にお金はどこに入つてるかと尋ねますと、そこの用箪笥の中だといふことに、入用だけの金を出したまでだといふので、自分でそんな小切手なんぞがあるとも知らず、又落つこちてもいらない紙切れでも落ちたな位にしか想つてなかつたものと見えます。こんなことには全く無頓着なものでした。すぐに見付かつて拾つたからいゝやうなものゝ、圍爐裡の中で燒けてでも了つたら一騷動するところでした。

とにかくお金にかけては前にも申したとほり呑氣な性分で、私が時時机のわきにある財布の中に

お小遣を入れておくのを、たまるとは人に借りられたりする方が多いのでしたが、中には隨分ひどく圖々しい方などがあつて、度重なつてそのやり口が惡どいので、たうとう夏目を怒らして了つて、段々足の遠くなつた方なども二三ありました。だからよく夏目が、さういふ連中がどつさりあたりに居るのだから、おれは枕を高くしてねられないなどとこぼしたりしてましたて、几帳面に誰それにいくら貸したなどと帳面につけたりしたことがありまして、今でもその帳面が殘つて居りますが、なる程それで見ると、短い期間だけのほんの一部でしかないのですが、中々盛なものです。で、よくおごりつこならてんでに嚴格のわり前で行くんだよなどゝ申して居りました。そんなわけもあり、旁々自分で持つてると何か買ひたくなつて困るといふので、一切お金は自分が持たないで、お小遣を私が入れておく外、少し入用のもので高いものなどになると、これは小遣以外だよなどと斷つて買つて居たものでした。

岩波さんにそんな工合に融通をして上げるにしましても、前にも申したとほりに至極呑氣なもので、時には銀行に少しばかりの定期預金などがあつて、それを途中で出して貸して上げるといふやうなことがあつても、そうなつたらどうなるものやら、そんなことは一向存じませんので、大體の說明をしますと、さうかとか何とか上の空で聞いてるといつた工合でした。

そんなこんなの岩波さんとの關係もあつて、大正三年の夏だつたと覺えて居りますが、『心』を出版するについて、方々の前々から關係のある書店からも出してくれるやうにといふ申出もあつたのですが、岩波でも出して欲しいといふことになり、とゞそれでは自費出版をしようといふことで、岩波から出すことになりました。ところがこれ迄は一切出版のことは出版者がやつてくれたのですが、今度は一切合財面倒なことは岩波へまかせるとは言つても、まだ創業當時の素人であり、一々相談をしてやらなければならないので、中々手數がかゝる樣子でした。そこへ持つて來て岩波さんが理想家で、何でもかんでも一番いゝものを使つてひどく立派なものを作らうとする。いゝものはいゝもので結構には違ひないが、それならそれで定價は高くなつて、結局賣れなければ結局損をしなければならないといふ破目になるので、そこで夏目が、君のやうに何もかもいゝものづくめでやらうとしちや引き合はない。表紙がよければ紙を落すとか、用紙がよければ箱張りをもう少し險約するとか、何とかそんな風に工面して、いゝ工合に本といふものは作るのだ。元手ばかりかけても、これが賣り物だといふことを少しも考へなくては、結局皆目儲けがなくなつて了ふぢやないかと小言を申します。ところが岩波さんの方では、いくら小言を言はれたつて、何でもかんでも綺麗な本を作りたい一方なんだから、顏見る度に小言です。

それでも『心』は自分で裝幀をするといふので、表紙も見かへしもみんな自分で指圖してやつたやうです。表紙は橋口貢さんから贈られました支那の古代の石鼓文とか申すもの、石摺りから取つたものださうで、其後亡くなりまして全集を出す場合に、あゝでもないかうでもないの評議の末に、結局全集の表紙には、夏目自身の裝幀した『心』の裝幀をそつくり借りるのが一番よささうだといふことになつて、前の全集でも今度の普及版でも、みんなその『心』の裝幀によつてやつて居ります。其後『硝子戸の中』の裝幀も、自分で更紗模樣の中から取つてこさへたやうでした。

自費出版ですから、最初の費用は一切私の方持ちで、その代り段々儲かるに連れて、岩波の方でそれを償却して行くといふ契約でして、それを年二期づゝに計算して、半期半期に儲けた折半して持つて來るといふ隨分やゝこしい方法でした。が亡くなる迄これを繰りかへして居りましたが、どうも面倒でたまりませんので、亡くなつてから普通出版に改めて了ひました。

此の頃のことでしたでせう。いろ／＼世話になるからといふ積りか、お盆か暮かに岩波さんが、三尺四方位の卓を持つて來て下さいました。見るからに不意氣なので、どうせ呉れるなら紫檀の卓でもはづめばいゝとでも思つたものか、夏目がつけ／＼と惡口を申します。すると岩波さんが、そんなに先生お嫌ひなら、折角持つて來たのですが、それぢや又持つてかへりませうとあつさり御言

ると、夏目も貰ひそこねちや損だとでも思つたのか、いや持つてかへるには及ばないさとすまし込んで申しますので、みんなで笑つて了ひました。

五四　芝居と角力

大正三年頃一時しきりに芝居を觀に參るりました。よく皆さんで脚本を書いて見たらどうですなどゝおすゝめになつたので、自分でも書いて見る氣になつたものか、それとも又どういふ下心があつたものか、その邊のことは私にはわかりませんが、とにかく芝居へ參るりました。しかも行く時には、自分一人で行くのはきまりが惡いとか申しまして、よく私を誘つたり、小宮さんあたりと同行したりして參るりました。ところが御芝居の方はあんまり面白くないと見えて、

「おいおい、御覽よ、あの座敷で雛妓がおさしみで御飯をたべてるよ。」

などゝ申しますので、

「そんなもの見なくたつていゝぢやありませんか。」

と申しますと、

といつたわけです。こんなへらず口を叩いて居りますと、小宮さんなんぞも敗けずに、「だつて見えるんだから仕方がないぢやないか。」

「先生、あすこに綺麗な藝妓が居るでせう。あれは時藏の馴染で魚といふ字を書いてとゝ子と讀ませるんです。」

に、夏目は夏目で、

「そんな馬鹿なことがあるもんか。そんなら米といふ字を書いてよゝ子と讀ませるんかい。」

てな調子で、一向芝居の方はどうでもいゝ樣子です。さうしてかへつて來ては、どうも舊劇は不合理だとか何とか申してぶつ〳〵言ひます。

或る時、高田の森成さんが久々で上京されましたので、一晩芝居へでもお連れしようぢやないかと申しまして、自分で切符を買ひに行つてくれました。買つて來てくれましたのはいゝけれども、さて當日參りまして案内されて見ますと、二階の大變後ろの方で隨分舞臺に遠いので見難いのです。どうしてこんなにうしろなのです、こゝの外席がなかつたんですかと尋ねますと、いゝや、席はいくらも前があつたんだが、おれは老眼で、丁度此邊からだとよく舞臺が見えるんだよと言つて居りました。

此時の出し物が丁度『千代萩』でしたが、かへつて來てから、どうもおれはあゝいふ芝居は嫌ひだ。子供がキイ〳〵聲でマセたことをいふ。腹を切つてから舞をまつたりする。不自然なことだらけだと憤慨して居りますと、森成さんが御醫者さんだけに、全くですよ、あすこなら文句なしに食鹽注射といふところですにね、たうとう笑ひ出して、憤慨もけし飛んで了ひました。まあ、こんな調子でございました。

菊五郎や吉右衛門が前後して訪ねて來たのも、此頃のことだつたでせう。菊五郎はたしか長谷川時雨さんがお連れになつて、狂言座の顧問かにされ、脚本なんぞも書いてくれといつた話があつたかと思ひますが、顧問の方は直きに何か氣に入らないことがあつたと見えて斷はつて了ひました。吉右衛門は小宮さんがお連れになつたのです。當時の小宮さんの吉右衛門贔屓と申しますか崇拜と申しますか、それは〳〵大したもので、吉右衛門ならでは夜も日もあけない惚り方でして、何でも芝居者なんか無學で何も知らないから、あゝいふ社會であの儘おいては、折角の名優も駄目になる、一つ連れて來てみんなで新らしい教育をしてやらなければならないと、何でもこんな意氣込みで連れていらしたのです。それが又お若い時の向ふ意氣の强い時で、夏目のところへ同じ集まるも

のでも、年の若いものや話のわからないものぢや仕方がない、吉右衛門を連れて來た時はさういふ邪魔者は斷はつて、自分とか森田さんとか鈴木さんとかさういふ人達が揃つて教育したいんだなどと勝手な熱をお吹きになるので、人に甲乙をつけたりすることの嫌ひな夏目は、何だ、貴樣達ばかりがえらいんぢやないとばかりに一喝を喰らはせて、その手には乘りませんでした。

しかし菊五郎にしても吉右衛門にしても、夏目の方でそれ程芝居に乘り氣でないので、其後に訪ねても來ませんでした。

芝居はこんな工合で、たうとう性に合はないと申しますか、最後迄本統に好きになれない樣子でしたが、角力は本場所になるとよく出かけました。芝居はうそで堅めた上に又うそがある、しかし角力は八百長角力以外は、自分の力のありたけを出し合つて戰ふ。そのうそいつわりのない、謂はば無邪氣な正眞正銘かけ値なしのところが見て居て氣持がいゝといつたところがあつたやうです。で角力には根氣よく通ひました。

丁度其頃中村是公さんが席を取つてらして、そこへ來い來いと誘れましたので、いつも御邪魔をして居たのでした。そこで他樣の席だといふので、家族のものを連れて行くではなし、自分一人で

ひよつこり出かけて、かへつて來ても、此方できくでもなし、自分で進んで話すでもなし、一向角力の話は出ないのでしたが、それでも翌日になると又出かけました。餘程好きだつたと見えます。だから私どもはどんな顔をして角力を見てるのか知らず、かへつて朝日新聞に出た岡本一平さんの漫畫などで、それを知るやうなものでした。

この、人樣の席だから子供などでも決して連れて行かないなどゝいふ律義なところが、如何にも夏目の夏目らしいところで、かういふところは禮儀正しいと申しますか、遠慮深いと申しますか、或は小心と申しますか、とにかく窮屈な位几帳面で、キチンとけぢめがついて居たものでした。

この大正三年の十月に又もや胃を惡くして一月ばかり床につきましたが、いゝ按配に大したことにも至りませんでした。此頃は毎年少くとも一度は臥せるのが例になつて居りますので、又かといつたものでしたが、自分でも觀念して大事にもしますので、ひどく惡くするやうなこともありませんでした。修善寺大患以來といふもの年百年中藥を離れたことはございませんでした。

此の年から此の次の年にかけて、無闇と縮刷本が出ました。一番最初は大倉書店の『吾輩は猫である』の縮刷で、これは元々菊判三冊の本でしたのを、この形では大分賣れもとまつたので、こゝ

らで一つ型をかへてポケット入りにかへて見たらどうかといふ書店の新案でやつて見たのが大變いい工合だとあつて、それから次々にいろ〳〵なものが縮刷に形をかへて出るやうになりました。夏目は恥の上ぬりをするやうなものだが、とに角一度かいた恥なのだから、目をつぶらうなど、申しまして、請はれるまゝに次々に縮刷になるのを許して居りました。御承知のとほり、只今の四六判全盛の時代と違つて、夏目の本の初版本といふのは『硝子戸の中』と『切抜帳』とかいふ例外はありますけれども、外は殆んど菊判の大型のものばかりでしたが、それが急に縮刷となつてポケットへでも入りますので、大變喜ばれたものでした。尤も此頃は一般讀書界では袖珍本流行の時でもあつたのではありますが。

五五　京都行

水彩畫と日本畫の混血兒見たいな繪をしきりに描いたり、大物の南畫をせつせと仕上げたりしました此頃、油繪が描いて見たくなつたと見えて、繪具箱を買つて參りまして何かと寫生をして居りました。大きさはスケッチ板ばかりで、大概板に描いたのですが、初めの頃のは、青ずんだや

うな靄みたいなものが一面にあるばかりで、繪具と繪具がこんがらかつて、何が何やら形のけじめのつかないものが出來て居ましたが、やがて四枚五枚と根氣よく描いて行きますうち、大分物の形のわかるものが出來て參りました。相談相手は津田青楓さんで、一緒に靜物の寫生なんぞをやつたりしてましたが、どうもこの油繪ばかりは素人目にも如何にもまづく、自分でも窮屈だつたらしく、たうとう物にならず了ひで、ろく〳〵繪具を使はないうちにやめて了ひました。性が合はないとでも言ふものなのでございませう。

津田さんとは以前からの識り合ひだつたのですが、自分が繪に熱中しましてからといふものは、殊の外親しくもし、縮刷本の裝幀なども殆んど津田さんの手を煩はすやうになつて居りました。又繪の上とだけではなく、あのぬうつとして居られる無口なところなどが好きでもあつたでせう。

其頃の話でしたでせうか。或日津田さんが訪ねていらつしたから、書齋に居ますよと申しますと、其儘つか〳〵書齋へ入つていらつしやいました。が、いつまでたつても挨拶もなし話し聲も致しません。變だと思つてのぞいて見ると、夏目はいつものやうにぐなつと横になつて、座蒲團を枕にして午睡をして居ます。そのわきに津田さんは手持無沙汰にちやんと坐はつて起きるのを待つてられるのです。このごろりと横になつて午睡するのが夏目の癖で、書齋や縁側で横になつては、苦もな

くうと〳〵と眠るのでした。

　そこで目を覺まして、津田さんの顔を見ていふことが振つて居ます。おゝ、君だつたのか、さつき跫音が近づくのを聞いてたんだが、又細君が何か用事で來たのかと思つて、其儘狸を極め込んで居るうちに、いゝ氣持になつてうと〳〵して了つた。君と知つたらあの時すぐに起きるんだつたに、失敬したといつた風です。こんな工合で氣がおけないで、下手に神經を尖らせたりすることがなくつてよかつたのでせう。殊に此頃は夏目がしきりに南畫を描き、津田さんも西洋畫ばかりでなく、同じく日本畫を始められたのも此時分からでしたでせうから、繪が出來ると、津田さんに見せて批評をして貰ふといつた工合でした。又津田さんの方でも夏目に見せていらしたやうです。

　この津田さんがどういふ御都合でしたか、大正四年の春先に京都の桃山の奥の方へ移られました。お立ちになる前に、どうも近年は病氣ばかりして居る上に、あたまの方もはつきりしない模樣だから、京都へ行かれたら、一つ旅行に誘つて、京都へ呼びよせて遊ばせてやつて下さい。違つた土地で呑氣にしてましたら、きつと體の爲めにも頭の爲めにもいゝだらうからといふので、連れ出して下さるやうに呉々もお頼みしたのでした。それぢや僕が向うで落ちついたらお誘ひして見ませうと言つておわかれ致しました。

津田さんからの誘ひが來る。自分でも行かうかなといふ氣が萠します。私の方でも行つてらしたらとすゝめます。行くのはいゝけれど、出かける迄が億劫でなど、又もいつもの傳で消極的な引つ込み思案をして居りましたが、それでも思ひ切つて彼岸の入りに東京をたちました。別に何の目的もない全くの呑氣な遊びなので、京都大學にいらつしやる知つた方々や、朝日新聞の方などにも知らせず、從つて宿なども人の知らない靜かなところがいゝと言つて居りましたのですが、折よく津田さんの兄さんの西川一草亭さんの紹介で、此程店を開いたばかりだといふ木屋町御池の北ノ大嘉といふのに落ちつくことになりました。京都へ參りましてからは、元々遊ぶつもりで行つたのですから、津田さんや西川さんの御案内で、一力の大石忌を觀たり、方々の別莊を見せて貰らつたり、雨でも降れば宿に居てみんなで寄せ書きをやつて字を書いたり繪を描いたりして遊んださうですが、東京をたつ前に、もう亡くなられましたが芝川照吉さんから、京都へ行つたら祇園にお多佳さんといふ有名な文學藝者が居る。今では大友といふお茶屋の女將だが、この女に是非會つて御覽なさいとすゝめられ、自分でも興味をもつて居たのでせうが、京都へ行つてその話を西川さんにすると、すぐ呼びませう、喜んで來るからといふことで連れておいでになる。話がいかにも面白くて、一中節などは大の御得意。そこで暇な時にはよく遊びに來て貰らつて、話を聞いたり一中節をきか

せて貰らつたりして相手になつて貰ふ。いゝ遊び相手だつたのでせう。

そこへお君さん金之助さんといふ二人の仲のいゝ人達が、是非、夏目先生といふえらい先生が来てられるさうだから、たつた一目でもいゝから會ひたい。會へなければ襖越しに聲だけでもきゝたいからと言つて、先輩のお多佳さんを大嘉の玄關に呼び出してのたつてのお頼み。さうなると京都式のやゝこしい押問答で、片方でそんなことは自分には出來ないといへば、一方では是非どうとかして下さい。若しそれも出來ないといふなら仕方がないから、こゝへ持つて來た短冊か何かに何でもいゝから一筆書いて頂きたいといつた押問答があつて、とゞのつまりお多佳さんの方が敗けて、それではともかく夏目に願つて見ようといふことになり、二階にかへつてさう申しますと、夏目の方は至つて氣輕なもので、お上りなさいといふわけに、二人はこんな嬉しいことは無かつたと申して居ります。一人のゝが二人増えて都合三人になつたので、それからといふものは中々賑かであつた様子です。

殊にこの中で金之助さんといふ人が、きさくな滑稽家で、自慢のお座持ち藝妓といつた女でしたので、なほ更賑かなことでしたでせうが、お君さんといふ人は又その反對で、全く貴婦人タイプの無口な人でしたが、金光教の大の信者で、その信心から醫者も手離した危い一命を救はれたといふ

程の人だけあつて、どつかリンとしたところがありました。三人三樣の、いづれもみんな東京とは違つた京都女のそれ〴〵のタイプなので、時々宿へ遊びに來てもらつては氣樂にくつろいで興じて居たさうです。

さうかうして一週間ばかり遊んで居りますうちに、又々胃の工合がよくないので、津田さんを誘つて奈良へ遊びに行つたりしようといふのを取りとめて、あんまり惡くならないうちに東京へかへらうと思つて居たさうですが、丁度其頃高田の姉さん（夏目の姉）が不遇のうちに突然腦溢血かで亡くなつて了ひました。知らせてやりましたけれども、かへつて來られないといふことに、私が葬儀萬端にまゐりましてそれをすませたところへ、こん度は京都の方から、急に病氣だから來てくれといふ電報が參りました。そこですぐ京都へ行きました。

まだ電報の來る前のことでした。自分でも京都をいゝ加減に切り上げるについて、今迄西川さんや何かに何くれとなく御厄介になつた、その御禮心にどこかで一夕お招きしたいといふので、お多佳さんのお家で舞妓の踊でもといふ段取りをつけて、それには金が少し足りさうにもないので、すぐに百圓許り送つてくれろと申して來ましたのでそれを送りました。丁度病氣が惡くなつたのはその招待の日のことで、木屋町の御池から祇園の新橋迄、俥でいらしたらといふのを、道も近いこと

ですから歩るいて行つたさうですが、段々お腹がいたみ出したのを、初めはどうやら我慢に我慢して居たもの〻、終ひにはやり切れなくなつて臥つて了つたのださうです。ところがお多佳さん初め他の人達もそんな事には出會した事がないのでびつくりして了つて、じつと樣子を見ると夏目の臥つてゐる樣子たらないのださうです。といふのは、苦しいので物をいふのもいやなので、默りこくつて、額に玉の汗をいつぱいかいて、それが息もせずに苦しさうにねているので、死んだんぢやないかと思つて覗きこんではみとつて居たさうですが、さて樣子を見てゐると、なほりさうにないどころか、益々いけなくなる一方のやうに見受けられるので、私から來て貰らはうかどうかといふ相談です。するとそれを小耳にした夏目が、何も家内なんか呼ぶことはないからやめにしてくれろと申すのださうです。何故と申しますと、私がやつて來て、又お惡いんですかとか何とかいふと、それ丈けでぞつとするとかやり切れないとかいふんださうです。が、そんなことをいつてられない程どうも樣子が惡い。このま〻にしておいて、若しものことがあつてはといふので、そこで夏目が怒つたら怒つたで責任は自分が負ふといふので、津田さんが私のところへ電報を打つて來られたのださうです。

私が行つた時には、大友（お多佳さんの家）から宿へかへつて臥つて居りましたが、いつもの病

氣で大したこともない樣子で、まあ〳〵と一安心しました。そこへ又皆さんがお見舞ひを兼ねて來て下さいます。中々賑かなことでした。

病氣は例によつて例のとほりなもので、落ちつくと段々よくなりましたが、それからといふものは、ずつと床の上にねたり起きたりして、自然に癒るのを待つて居りました。別にむづかしい本を讀むでなし、自分でも大變悠々とした氣持で、少しよくなつてからは、床の上に坐はつては、よく繪を描いたり、俳句を短冊に書いたりして居りました。畫帖なんぞも大分持ち込まれて、自分では暇なものですから、手當り次第によごして行くといつた工合でした。

此頃西川一草亭さんが見舞にいろ〳〵珍らしい御手のものゝ花を下すつたりして居りましたが、畫帖や絖やらを持つていらして、夏目にいろ〳〵と繪や字を書かせていらつしやいました。何でも西川さんは、以前淺井忠さんの元へいらした時分、一向そんな慾がなくて、いつか何か描いておいて頂かう位の氣持で呑氣に構へて居るうちに、淺井さんが亡くなられ、結局何も揮毫されたものを持つてないで、惜しいことをした經驗があるとかで、病氣でのんびりしてゐるのをいゝ事にして、今の書いて貰へるうちに書いて貰つておけといふわけで、せつせと書いて貰つておかれたものだといふことです。それに力を得て、お多佳さんでもお君さんでも金之助さんでも、大分何かと書

いてもらつて居られましたが、私などは側について居て、自分には慾はなし、又いつでも書いて貰ひたい時には書いて貰へるといふ氣もあり、他の方々もさう言つては、私が扇子に描いてもらつた分迄分捕つたりされたのですが、結局人様がお貰ひになるのばかり見て居て、自分ではたうとう何も描いて貰はずに了ひました。今思ふと惜しいことをしたと思ひますが、あれ程多病の人をいつ死ぬかわからぬなどゝは元から思はず、反對にいつまでも生きてゝくれるやうに呑氣に構へて居たのですから、考へて見れば人間の氣持なんていふものは儚い變なものでございます。

京都からかへる時には、こんな風に散々いろ〳〵書いた上に、まだ畫帖を皆さんから三四冊も預かつて來まして、好きな道とは言ひながら、根氣よく花卉とか風景とか詩とか俳句とかをかきまして、屆けてやつて居りました。此時のものは、病氣でのんびりしてひまにあかして描いたものゝせいか、私どもにも大變面白いかと思はれます。

お多佳さんに一中節を唄つてもらつては聞いて居りましたが、其内でどういふのか道行きが大好きで、一中節の所望といふと道行きなのです。あんまり道行きばかりやつて貰ふので、私がさう道行きばかりやるのはおよしなさいよ、線香でもない、自分で道行きがやりたくなるといけないから

など〻言つても、其時はやめても、直き又道行きを所望するのでした。

このお多佳さんがのべつに駄洒落を飛ばします。輕口にかけては夏目もよく出る方で、まけずに駄洒落を飛ばしまして、傍で聞いてられないなど〻言つて笑つたことがありますが、實によく駄洒落のかけ合ひをやつたものです。私が來るといふ時に、夏目が洒落のめすお多佳さんに、家の妻は洒落が大嫌ひでね、そんなに駄洒落をいふと怒られるよなど〻言つてゐたさうですが、家に居る時でも、よくこの手には引つかかつて、眞面目に聞いてゐると、なあんのことだと言つた落ちになることがあつて、いまく\しがつたものでした。例へば私が夏目に旅の話の出た時に、私まだ伊勢へも高野へも行つたことがないから、いつか連れてつて下さいと申しますと、そらお前駄目だらうよ、純一（長男）でも大きくなつてから連れてつてお貰ひとかう申します。何故ですのと、私が何か仔細があつてのことかと眞顏で尋ねますと、だつてコウヤノアサッテていふぢやないかといつてはぐらかして了ひます。

又、死んだ夏目の姉さんが、夏目の修善寺の大病の時、深川の不動さんに願をかけて、どうか病氣をなほさして下さいますやうに、若しなほりましたら、本人は來られますまいが、本人の家內なり誰なりが御禮に上りますと言つて來たといふから、私御禮參りに行つて來ますと申しますと、

輕くよしとけ〳〵とあしらへます。だつて願をかけてお約束したのですのにと申しますと、そんなら ハガキで間に合はせておいたらよからうといつた調子です。機嫌のいゝ時には隨分駄洒落輕口を飛ばしたものです。

病氣も大分よくなりました或る日のこと、西川さんの案内で、南禪寺の方へ別莊を見に行くといふので、夏目を俥にのせて、私や津田さんもついて參りました。一つ二つ拜見したところで、もう一つい丶のがあるのだけれども、どうしませうかといふ西川さんのお話に、大分疲れたやうですから、此の邊でかへらうぢやありませんか。まだあるなど丶いふと、それも見ようといふにきまつてゐるが、若し體に障はつちやいけませんからと私が申しまして、い丶案配に打ち合せをしてかへることになりました。途中、津田さんと私とで、まだ歸へつても早いし、夜二人で芝居へでも行きませうと話し合つて居たものでした。

ところが宿へかへりましての話に、どうしたはづみか津田さんが、うつかりもう一つい丶別莊があつたのだけれどもと、ついうか〳〵と打ち明け話をして了つたものです。するとどうしたのか夏目が急に機嫌を損じまして怒り出して了ひました。さあさうなると、さつきの約束もあつて、芝居

に行く時刻もせまるのですが、二人とも妙にばつが悪くなつて、お尻を上げるわけに參るらなくなりました。そこで貴方も一緒に芝居へいらつしやいませんかと誘つて見たところが、かへつて藪蛇で又もや怒られて、たうとうその日はどういふ風の吹きまはしか、すつかり面喰はせられて了ひました。

別莊の話でもう一つ。大阪の實業家の加賀正太郎さんが、京都から二停車場大阪よりの山崎に別莊をおこしらへになるといふので、地を相し、大體の設計迄出來たから、是非一度其の地へ來て別莊の名を選んで頂きたいといふことで、お多佳さんと御一緒においでになつて、しきりにお賴みになります。伺つて見れば大分山の上の方だとのことで、身體は惡し、とても行けさうにないと當人も申しますし、私どもも心配なので一緒になつてお斷りして居ますと、加賀さんの方ではお多佳さんあたりの援兵で、さうでもありませうが是非おなほりになる迄滯在してらして、それからとに角一度來て見てくれるやうに、山の下迄自動車で、それから上は山籠を用意させるからといふ、たつてのお話です。そこで東京へかへるといふ二三日前になつて、夏目、私、西川さん、津田さん、お多佳さんといふ一座で參りました。山崎の停車場のところから、五六丁の急阪を登るのでした。つ

まり天王山の中腹にあるわけです。
別莊地といふのはこれから工事を始めようといふところで、本當に景色のいゝところでした。おくれ咲きの山櫻などがちらほら殘つて居りまして、そこでこさへたおでんなどのもてなしにあづかりまして、半日のんびりと遊びました。するとすぐ背中合せのやうになつたところに、古い三重の塔があつて、元もつと奥にあつたものを一夜のうちにそつくりその儘豐臣秀吉が今の地に移して、山崎合戰の時に物見臺に使つたとか何とかいふ昔噺を聞いて居りますと、どなたかゞそこの寶寺のお話をなさいます。三重の塔といふのはこの寺の塔なのです。
その寺に有名な大黒樣があつて、打出の小槌があるが、今寺で出す鬱金の財布をうけて、御祈禱と一緒に其の小槌で打つて貰ひ、それをだまつて捧げもつたまゝ門迄持つて出ると、大變お金持になるといふので、京都大阪はいふ迄もなく、隨分遠くからでもその黄色な財布をうけに來る人が多い。しかし門迄のうちに一言でもしやべつたらだめなのだといふお話なのです。私たちが面白がつて居りますと、夏目がお前行つてこの財布をうけて來いと申します。しかし私も一人では極まりが惡いので、それぢやお多佳さん一緒にいらつしやいといふことで、二人で財布を貰つて、それから祈禱をして貰つて小槌で叩いて貰ひました。さてそれからが無言の行なのですが、さうなるとむづ

むづ可笑しいやうな妙な氣持になつて仕方がありません。それを危くかみ殺して、大眞面目な顏をして門のところ迄來ると、其れが又堪らなく可笑しいとあつて、西川さん津田さんが待ち構へてらつしやいます。たうとう門を出たところでみんなで吹き出して了ひました。

東京へかへりましてから、別莊の名前をあれやこれやと澤山考へて言つて上げたやうですが、お氣に入らなかつたと見えて、其うちからの名前はおつけにならなかつたやうです。夏目はそれを面白からず思つてたやうで、惡ければ惡いで、あれでは氣に入らないから、もつと別なのを考へてくれと言へばいゝにと申して居たことがありました。其後其の御禮心か、別莊の主から印材を贈とかいふことでしたが、うける筋がないと申して、たうとう頂かないやうでした。ところで、私はこれが緣になつてか、其後殆んど每年京都の方へ行つては、寶寺へお參るりして御堂から門前近無言の行をするならはしになつて了ひました。

私が京都へは初めてゞしたので、隨分方々を見物しまして、それからもう汽車に乘つても大丈夫といふ時を見計らつて、東京にかへりました。丁度一月ばかり京都に居たわけです。

五六　子供の教育

京都からかへりまして暫らくしてから、六月頃からだつたでありませう。『朝日新聞』に『道草』を連載し始めました。これは主に私共の千駄木時代に起こつた一寸した事件を題材に取りまして、それに自分の昔の記憶などを結びつけて書いた、謂はば自敍傳小說とかいふものなのでせう。この中に私初め親類のものなどが出て參ります。それにその前の『硝子戸の中』にも昔のことなどが出て來るので、自然矢來の兄さんなどにも差障りのあることがあつたのでせう。いつぞや兄さんから、あゝやつて書くのもいゝけれど、自分達も子供が大きくなつてるのだから、あんまり打ち明け話を書かれたりすると、子供の手前みつともないからとかいふ、一寸した抗議が、私迄出たことがありますので、その事を申しまして、私なんぞは『猫』でも散々書かれてるからいゝやうなものの、あんまり家のことや人のことを書くのは感心しないとか何とか言つたものです。すると夏目は、何だ、お前達それで飯を食つてる癖にと申しますので、これには全くそのとほりなので參るつて了ひました。

この兄さんの話をどう聞きかぢつてゐたのか、四番目の愛子といふその頃十か十一かだつた娘が、或る時夏目に申します。

「お父さんたら、伯父さんのことや人のことばかり書かないで、もう少し頭を働かせなさい。」

夏目は笑ひながら、

「この奴、生意氣なことをいふ。そんなことをいふと、こん度はお前のことを書いてやるよ。」

などとからかつて居ましたが、『硝子戸の中』の一番終りに、焚火をしてゐる子供達のことなんか書きまして「あら、いやーだ」と悲鳴を上げさせて居りました。

この愛子がお父さん思ひで、夏目がよくお菓子をつまんだりするので、お腹によくないと思ひかくしておきますと、書齋で勉強をした後で一つ羊羹でもつまみたくなつて出るのでせう。戸棚をさがしてもありません。すると子供は目が早いので、私の隱くしておいたところをちやんと知つて居て、氣の毒だと思ふのでせう。お父さん、こゝにあつてよと出してやります。おゝいゝ子だいゝ子だ。お前は中々孝行者だなんかとにやくしながら、お菓子をつまんで頰張つて居ります。胃の惡い癖に、こんなことは平氣な方でした。

娘の子でも、上の二人とは、娘の方で夏目の頭の惡い時の記憶などがでか自然しつくりなづまな

い樣子でしたが、下の二人とはよく兩方で裸になつて、角力をとつて遊んだりからかつたりして居りました。次の年に夏目が亡くなるのですが、よく二人とも生きてるうち角力なんかばつかりとつて居ないで、其暇に書畫でも澤山書いて貰ふんだつたになどと今でも言ひ言ひして居ります。

子供達のことが出ましたら、子供達の學校の方の話を致しませう。

女の子の方は放任主義といふのでせう、一向構ひつけず、私があすこがよからうと思つて、上の二人は女子大學の附屬の方へやり、その下の一人は女子大學の方がどうかと思つたので双葉女學校へやりましたが、夏目の考へではどうといふやうなことも無かつたやうでした。たゞ始め琴などを習つてゐたのを、ピヤノがいゝとか、ヴァイオリンがいゝとか言つて變らせたりしたことはありますが、女の子の教育については先づそれ位のところでした。といつて學問をさせないの何のといふのではなく、小生意氣にハイカラがられてはいやなのですが、學問を當人が望みですることには、自分が好きな道ですからとめたりはしないのでした。

ところが男の子が小學校に上がるといふ段になつたら、大分自分に考がある樣子で、九段上の『曉星』がいゝ。あすこは生徒も上品の子が多いし、小學校から外國語（佛蘭西語）をやるし、制服も可愛いいといふので、わざ〳〵自分で行つて規則書を取つて來てくれて入れたものです。とい

ふのも外國語をみつちりやらせようといふ考だつたらしいのでございます。まづ小學校で佛蘭西語をやる。中學校へ行つてそれに英語が加はる。しかし外の中學よりは程度が落ちるといふから、中學へ行つたら英語は自分が教へる。それから高等學校へ行つたら獨逸語を教はる。すると大學へ行つた頃には英佛獨三ヶ國語に通じることが出來るとかういふのでした。實際自分でも、英語はお手のものでしたでせうが、始終佛蘭西語の雜誌や本をよみ、獨逸語は大分忘れたからといつて、一時小宮さんから獨逸語の本をよんで貰らつて勉强してゐたことがあつた程ですから、私にはわかりませんけれども、絶えず語學のことは心掛けて居たのでございませう。それ位ですから男の子のことが心配だつたものと見えます。

そこでまづフランス語を見てやるといふので、學校からかへつて來ると、書齋へ呼んで教へます。それを隣の部屋で聞いて居ますと、馬鹿野郎馬鹿野郎の連發で、たうとうしまひには男の子が泣き泣き書齋から出てまゐります。どうも教へてるより、馬鹿野郎の方が多い位です。そこで私が見るに見兼ねて申すことです。

「貴様のゝは傍で聞いてますと、教へるより叱る方が多いぢやありませんか。これ迄隨分方々の學校で先生をしてらして、いつもあんなに生徒に向つて馬鹿野郎と呶鳴り續けてるんですか。」

「彼奴は特別出來ないからだ。一體おれは出來ない生徒にはどこの學校でも仇敵のやうに思はれたもんだが、其代り出來る生徒からは非常にうけがよかつたもんだ。」

とかう申しますから、

「でも相手は子供ぢやありませんか。そんなに馬鹿々々と叱つてらつしやる間に、出來なけりや親切に手をとつて教へたらいゝでせうに。」

と申しますと、彼奴は頭が惡いんだとか何とか言つて居りますが、それからといふものは、あんまり馬鹿々々を言はなくなりました。一體こんな些細なことでも、その時は愚図愚図申して居りましても、自分が惡いと思へば後ですぐに改める質の人でした。やはり此頃のことでしたでせうか、よく見ず知らずの人が玄關に來て、短冊を書いてくれの何のと頼みますと、氣に向けば直きに出て行つて書いてやつたものです。さうかと思ふと、座敷へ上がつて賴んだ人にも斷はつたりして居ます。それでは第一不公平だし、又それが例になつて、始終玄關で何か書かされてはやり切れないのでさう申しますと、其時は、おれは氣が向けば書くし、氣が向かなければ書かないんだなどゝ言つて居りましたか、次からはぱつたりそんなこともやめて了つたことなどもあります。

この年の十一月に、中村是公さんに誘はれて、一週間程湯ヶ原へまゐりました。かへつて來てか

らの話に籠で箱根へ越したなどゝ申して居りました。
此頃には以前からおいでになつた所謂漱石門下といはれた人達の外に、若い人達が大分お見えになりまして、一時一寸さびれたかと思はれた書齋も隨分賑かになりました。和辻哲郎さん、太宰施門さん、江口渙さん、内田百間さん、岡榮一郎さんなんかゞ、始終ではなかつたでせうが、ちよい〳〵おいでになつて居たやうです。中でも賑かなのは赤木桁平さんで、家中に透るやうな甲高い聲で、始終喧嘩でもしてるやうに一人でしやべつてらつしやいました。姿を見たのは餘程後のことで、私は聲だけ聞いてるのですが、「あの聲はどなたです」と、尋ねますと夏目が、あれは赤木桁平といつて、あの字をケタヘイと讀むと怒るんだよ。あれのいふことはよくきいてると片側町でね、裏は田圃なんだよなどゝ、冗談を言つてゐたことがありました。それから來ては殆んど商賣のやうに字や繪をおかゝせになる中央公論社の瀧田樗蔭さん、この方も風變りな常連のお一人でした。少しおくれて芥川龍之介さん久米正雄さん、それから松岡など、まだ此外にも若い方々がよくお見えになりました。しかし大半は私名前や噂や、時には隣の部屋で聞く聲位のもので、お會ひしてお顏をおぼえたのは、夏目が亡くなる時からでした。

五七　糖尿病

大正五年の正月には夏目も數へ年の五十を迎へました。大患以來毎年引き續いての病氣に、此頃ではすつかり老け込んで、髪といはず、髭と言はず、隨分白くなつて居りました。

この正月元日の夜のこと、例年夕方から夜へかけて、澤山の若い方々がおいでになります。その御相手をして、御屠蘇氣分の氣焰を聞いたりして居るのでしたが、此年も愉快さうに御相手をして居りました。皆さんがおかへりになりますと、こん度は小宮さんだつたと思ひますが、お一人だけお殘りになつた方と御一緒に離れて參るりまして、子供たちのお仲間に入つて歌留多を取つて遊んで居りました。此頃私どものところは家が狹くて間數が少いので、同じ屋敷內にある小い家を一緒に借りまして、そこを子供たちの勉强部屋にしておいたのですが、そんなところには何年にも足踏みしたこともない癖に、此日はどうしたものか大變上機嫌で遲く迄遊んで居りました。が札の方はからきし取れないので、小宮さんあたりが少し取れる口で、あとはみんなだめなのですが、其のへぼ連中の中でさへ、それそこにあるとか何とかばかり言つて居て、皆目取れないのだから滑稽な

のです。「天津風」なんかを前においてにらまへて居ますが、その札さへ子供達にぬかれたりして參るつて居りました。

正月のうちに片方の手が痛いと申しまして、按摩をしたりお湯に入つたりしてましたが、いつまでたつても同じやうな痛みで埒があきません。神經痛かリョーマチスのやうなものらしいのですが、さりとて痛んで痛んで仕方がないといふ程でもなく、とにかくそれを氣にして不便がつて居りました。そこで溫泉へでも行つてはといふので、湯ヶ原へ行く事になりました。

とにかく利き腕が痛いといふのですから、何かにつけて不便でせうと思ひまして、行きます前に私がついてつて上げられゝば一番いゝのですが、一寸家をあけて子供達ばかり殘すといふわけにも參るりませんから、代りに看護婦でもお連れになつてはと申しますと、考へて居りましたが、まあ、よさうよと申します。何故ですかと尋ねますと、とかく男一人女一人なんてのはいけないからといふことに、ではなるべく年寄りの看護婦をお連れになつたらと言ひますと、自分ではこの爺さんに間違はないとは思ふが、しかし人間にははづみといふ奴があつて、いつどんなことをしないものでもないからなどいつて、たうとう一人で行つて了ひました。

亡くなつた後で何かのきつかけでこの話を森田草平さんに致しますと、先生といふ人はいつもこれだ、先へ先へと用心して世を渡る人だか、實際妙な癖だと、さも／＼行き當りばつたりのことをしないのが惜しいつてな口調でしたが、やがて、しかし先生はうまいことをいふ、はづみが怖いといふが、實際男と女との間なんてものは、其時々のはづみだからなと感慨深さうに言つてられたことがありました。

　何でも參りましたのが一月の二十日過ぎのことで、それから二月に入りまして、どんな工合だか一度見舞に參りませうと思ひまして出掛けました。一人のことで淋しいだらう位に思つて行きますと、湯ケ原の天野屋の玄關へ立ちますと、番頭さんが、中村さんたちと御一緒でございますがおよろしうございますかと尋ねます。それぢや中村是公さんたちも見えてらつしやるのだなと初めて知りまして、部屋へ案内して貰ひますと、丁度皆さん御一緒でおひるの御飯をたべてらつしやるところでしたが、見ると夏目と中村さん、それに同じ年輩位の男の方がお一人、外に馴染の新橋あたりの阿娜者が一人。なる程、皆さまと御一緒でよろしうございますかと言つた番頭の言葉が讀めたわけです。私が入りますと、それを見て中村さんが奥さんですかと言つて挨拶をなさいます。と、それをきつかけに男の方と阿娜者とがつと立つて姿をかくして了ひました。聞いて見ると、夏目が

一人で淋しいので呼んだものか、中村さんの方で見舞がてら遊びにいらつしたものか、かうやつてしばらく一緒にいらつしやるといふお話でした。もう一人の方は滿鐵の田中さんといふ方でしたが、田中の奴どこへ行つたんだらう、飯を食ひ散らしてなど、夏目が言つて居りましたが、後で外の部屋へ避難してらつしやる田中さんのところへ、中村さんがいらして聞いてらした話に、夏目の細君なら逃げるんぢやなかつた、君も識つてるならその場で紹介してくれゝばいゝのに、僕は又おふくさんいらつしやいと聞いたから、どつかの女將かなんかで其場に居ちや惡いのかと思つたといふお話に、成程、言はれて見れば、夏目も夏目で、僕の家内ですとも言はず仙人氣取りなのですから、私といふものの正體が何であるかはわからなかつたものと見えます。女の方は田中さんのお連れの方でした。

湯ケ原でも療養に行つたのですから呑氣の樣子でした。どこへ行つてもつきものゝ字なんかを書かされて、二月の半頃歸へつて參りました。かへり際に鎌倉の中村さんの別莊に二晩ばかりとまつて來たやうでございます。

一體、若い時から神經痛だのリョーマチスだのといふ氣がない人で、按摩なんぞでも擽つたいと言つて嫌つてゐたものでしたし、第一頭が重いの體が重いのといふことを自體知らないと言つてい

い人でした。それに引きかへ私と來たら、年中肩がこるの頭がいたいのと言つて、氣候の變り目などにはよく神經痛をおこしたりしたものでした。それがこの年になつて珍らしく夏目がそんなことを言ひ出したのでした。が、それといふのも後でわかりましたが、其時すでに糖尿病があつたからでございませう。

四月の初め頃のことでしたか、又も胃を惡くしてねましたが、これも大したことはなく、按配にすぐに起きました。この頃はその方のお醫者さんは、もと胃腸病院に居られた須賀さんといふ方にかゝつて居りまして、年から年中藥をもらつて居るので、一寸惡いといへばすぐに來て手當をして下さるといふ風でした。ところが此方がたしか四月だつたと思ひますが、一寸十日ばかりおわづらひになつて亡くなつてお了ひになりました。藥のことはそれでも殘つた方にすつと調合して頂いて居りましたが、いつ何時どういふことがないとも限らない病人をかゝへてゐるも同然なのですから、かういふよく病狀をお存知の方でお心安い方がいらつしやらないと困ります。さあ、どうしたものだらうかと不安に思つて居りました。

この須賀さんが亡くなられる前後に、昔松山中學で英語を教へたといふ因緣で、今の大學の物療

の眞鍋嘉一郎さん（東大醫學部教授）と何かの機會にお會ひしたところ、自分の健康のことが話に上り、それでは一度診て上げようといふことであつたさうですが、診て頂いて、檢尿をして頂くと糖尿病だといふことで、それからといふもの、始終尿の檢査をして貰らつては、專ら食べ物などの指揮をうけて、その方の療養を續けて居りました。それで糖分も日に增し少くなつて、自然手の痛いのなども忘れるやうになりました。

其後もずつと眞鍋さんのおつしやるとほりに、日をきめては大學の物療へ尿をお屆けして檢査して頂いて居りましたが、こんなことは隨分几帳面で、自分から病氣をしに此の中へ生れて來たのだなどといつてる位、食前食後の服藥、食餌療法、その他なんのかんのといふことを左程面倒臭いといつた顏もせずにきちんと續けて居たものでした。

こんな工合で糖尿病も大分いゝといふので喜んで居りましたが、例の胃がいつ何時やつて來ないものでもないところへ、かゝりつけのお醫者さんが居られないので、いざといふ時のことを内々案じて居りますと、毎年夏にはきまつて床につくのが、いゝ工合に此年に限つては至極健全で、秋になつてもどうといふことはございません。それに春の終り頃か夏の初め頃か、娘たちが離れで勉强して居ますと、人玉が家の屋根から飛んで出たといつて前の人達が騷ぐので氣味惡がつてゐました

が、私もそれを聞いて何だかいやな氣持がしたのでした。ところが反對に體の調子がいゝ様子なので、不安がつて居た私は、その爲めにかへつて二倍にも安心致しまして、此分ならば家のことを片付けて、一週間や十日家をあけても大丈夫と思ひまして、十一月にもなりましたら、年來の望みだつた伊勢詣りでもしたいものだと、名古屋の妹のところへ手紙をやつたりして、そのつもりで居たのでした。この二月夏目が湯ヶ原へ療養に行つてる間に、この妹の長女が丁度私の長女と同年で仲のいゝ間柄でしたが、ふと悪性のチブスにかゝつて亡くなりました。妹がそれを悲んで居たりしたので、慰め旁々一緒にお伊勢様へ案内でもして貰ふ積りだつたのです。ところがそれどころでなく、十一月の二十二日に死病の床について了つたのです。これは後でお話いたします。

全體此夏頃から、後で考へれば何となく生氣がなく、脊中にアセモらしいものが出來て、お湯から上るとはそれに粉の藥をすり込むやうに塗つてやるのでしたが、藥を擦り込みながら脊をさすつて居りますと、氣のせいか背中の肉が一日増しに落ちてく氣配がします。最初はそれ程にも氣がつかなかつたのですが、氣がついて見ると氣のせいかそれが大變ひどいやうで、指の尖で一日一日とやせて行くのがわかるのでした。夏まけかしら、それとも糖尿病の食餌療法で食べ物が違つたので、

からも目に見えて痩せるのかしらと、何にしてもいやなことだと思つて居りました。が、自分で氣になる丈にかへつて夏目には話もしませんでしたが、それが十一月頃になると、めつきり痩せ衰へて居りました。今から思へば秋頃からもうそろ〳〵死の徴候があつたのでございませう。

ところが肉體の方はそのやうに段々衰へて參りますのに、創作の方は大變油が乘つてる樣子で、六月頃から朝日新聞の爲めに書き出した長篇小說『明暗』を、きちんと一回分づゝ午前に書き上げて、出來上るとそれをポストに出しに參ります。それから小說ばかり書いてると頭が俗になつて堪らないとか申しまして、小說がすむと午後から夜へかけて漢詩を作るのが、この夏あたりからの日課のやうでございました。私などにはそんなことは申しませんが、若い門下の方々などには、以前大學の敎職にあつて講義した『文學論』なんてものは仕方のないものだから、漸く此頃になつて自分の文學觀といつたものが出來たから、これによつてもう一度前の名譽恢復に講壇に立つて見たいなどゝ申したり、『明暗』の世評なども一切意に介しない風で、まあ出來上りを見てくれといつた自信の口吻を洩らしたり、則天去私などゝいふこと、悟りとか道とかいふやうなことなどをしきりに御話して、非常に意氣込んで居たいふことです。後から思ひ合はせますと、いろ〳〵思ひ當る節もございます。

この新らしく作りました詩なども『明暗』を書き上げて了つてからゆつくり御清書をする積りだつたのでせう、書き損じの原稿紙にいつもその作つた詩などの手習ひをして居りました。これから小說を書き畢つたら大幅の三幅對の繪を描くなどゝも申して居たさうですが、『明暗』を書いてゐるうちは、むつ〳〵しながらも、邪魔になると思つてか、さうしたものに手を出さうとしなかつたやうです。それだけに又『明暗』には打ち込んでも居たのでせうが、半途で病に斃れたのは本當に殘念なことでございます。自分でもこればかりは心殘りだつたでございませう。

五八　晩年の書畫

この亡くなる前の丁度一年間といふもの、たしか前年の十一月頃からだつたさうですが、毎木曜の面會日となるとは、正午過ぎ早々中央公論の瀧田樗陰さんが俥でいらつしやいました。さうして紙をどつさり持ち込んで來て、自分で墨をおすりになり、毛氈を敷き、紙を展べて、一切の準備をとゝのへて、さあ、先生御書き下さいといつた工合に、殆んど手を持たんばかりにして書や繪をお書かせになつたものです。それも少し遲く成ると若い方達が次々にお見えになつて話がはづむ。さ

うなると邪魔だといふので、早くまだ皆さんがお見えにならない前にいらつしやいますのです。さうして玄關をお上りになる時には、あの太つた金太郎さんみたいな格好で、紙とか毛氈とか筆洗とかいふものを一抱へ抱へて上つていらつしやるのです。さうして二三時間の間といふもの、殆んど休みなしに何かとお書かせになるのでした

一體瀧田さんといふ方は遠慮のない方で、どうも人の迷惑などゝいふことには餘り氣を使はない質の人だつたやうですが、もう一たん來てつかまへたとなると最後、後から訪問客があらうとそんなことにはお構ひなしに、どん〳〵御自分の計劃を運ばせになるとしか見えません。だもんですから皆さんで、瀧田の奴は失敬だ、不遠慮に先生を占領してなどといふ不平もあつたやうです。しかしそんなことにかけてに調法千萬な人で、何と言はれようとかんと言はれようと、どし〳〵自分の流儀を實行してられたやうでした。

その又何かとお書かせになるのが、瀧田さんにはこん度はかういふのを書いて下さいといふ註文があるので、『吾輩は猫である』と書いて下さいとか、『時鳥厠半に出かねたり』と書いて下さいとかいふのを初めとして、屛風にするからとか、いや、何をかういふ風に書いて下さいとか、この繪に賛を入れて下さいとかいつて中々註文があるのです。それを氣むづかし屋の夏目が文句も言はず、

言はれる位に書いてやつて居たのだから、餘程書かせる呼吸がうまかつたのでせう。或る若い方などは、先生はおとなし過ぎる、瀧田は横暴だなど丶これを見て憤慨して居た人もありましたが、そこが瀧田さんのうまいところで、とにかくその日書かせたものは、次の木曜日迄には大急ぎで表裝をさせて持つて來られ、さうしてそれに箱書をさせて一々共箱になさるのですから、書く方でも惡い氣持がしないのでせう。俺のこんな下手なものなんかをどし／＼表裝する奴が居る、無駄なことだなんて言つて丶も、そこはやつぱりさう迄されて見れば滿更でもないでせうし、それにどうせ木曜日は一日面會日につぶして居るのですから、紙から一切持つて來て、好きな手習ひをさせてくれる位に片方では考へて居たのでせうから、そこはすなほにいくらもで御稽古の積りで書いたものと見えます。書畫には大分氣が有つたやうですから、かうやつて大に稽古して居て、いづれ腰を据ゑていゝものを書く位の意氣込みで居たものと見えます。

　しかしいくらお稽古の積りでも、人にやるのだから餘り見ともないものはやりたくない位の氣はあるのに、默つて居ると書き損じでも何でも持つて行かれるので、そこで出來の惡いもの氣に喰はないものは絶對にやらないといふので、さういふものは書いた後から見てる前で引き千切つたりな

んかして了ひます。又素人のことですから、繪なんかも面白半分で描いてる中に、段々あゝでもない、かうでもないと慾が出て來ていぢくつてゐると、其うちに氣に入らなくなります。とびりびりと破つて了ふので、繪がいゝ加減に出來かけて形をなして來ると、あゝ、面白い、よく出來ました、もうそれでいゝですなんかと、描いて貰ふ方ではひやひやしながら早くよさせようよさせようとしたものです。しかし夏目の方では中々これでいゝと自分の得心の行く迄は人手に渡しやしません。さうしては結局引き千切るやうなことにするのでした。

何でもかんでも持つてかへらうとするといふのでせう、瀧田さんのことをぼろつかひだなどゝ申して居りましたが、そのぼろつかひなどの手をのがれたものを一纏めにしておいて、暮の二十八九日頃になると庭へ出て、私の末の弟や植木屋などに火をつけて燒かせます。燒きながら一つ欲しいなと思つても、傍について監視してるのだからどうにもなりません。亡くなつた時丁度年末近くだつたので、この書きくづしが一抱へ書齋にございまして、燒かれる運命をまぬかれたのでしたが、手廻しのいゝ人は別として、誰しもまださう急に亡くなるとも思はず、普段は何時でも書いて貰へると思つて、何にも書いて貰はずに居れた方々が澤山おありになつたので、生きて居りますれば勿論日の目を拜むものぢやなかつたのですが、これをかたみにお存知の方々へお上げ致しました。

當時は瀧田さんが一人で書かして一人で占領するといふので專ら非難もあつたのですが、しかし今から考へて見れば、若し瀧田さんのやうな熱心な有志家がなければ、假令どういふ動機が瀧田さんの頭の中に働いて居たにせよ、とにかくあれだけ澤山のものを遺すことはとても出來なかつたことで、この點は幾重にも瀧田さんに感謝してもいゝことだらうと存じます。殊に不平不服を言つてられた方々などが、それでも一品二品手に入れられたのなども、大概瀧田さんの持つて來られた紙に書いてるのを貰つたものが多く、書き損じの遺品の遺墨なども、さういふ意味からは大體瀧田さんの餘慶といつていゝかも知れません。生前、そんな不平が洩されると、貴樣達は自分のものをもつて來もしない癖になどと夏目が言つて居たものですが、誰が何を持つといつたやうな小い考を離れて大きな目で見れば、とにかく或る意味に於いては恩人だといつていゝかも知れません。瀧田さんの前には森次太郎さんがあつて、この方は瀧田さん程圖々しくはなかつたやうですが、大分早くから目をつけて、何かとお書かせになつたやうでした。

何しろこの年に書いたものは夥しい數に上りませう。大正九年に漱石遺墨展覽會といふものをやりました時に、瀧田さんから出陳して頂いたものゝうちで、掛軸ばかりが五十點位、其れに屛風な

どもあり、色紙短册などは各々帖をなしてる外に、まだまだどつさりお持ちの様子で、とにかく大變な數でした。が、この蒐集も二三年前、瀧田さんが亡くなられて日本橋俱樂部あたりで入札されて散つて了つたやうです。しかしこの澤山のものも、書は「歸去來辭」の全卷などといふ長さ四間もあるといふ横卷の大作は別としまして、あとは半折程度のものが多く、繪も前に描きました細々した南畫風のものはなく、全く席畫式のもので、簡單な墨繪に贊をしたものか、あつさりした淡彩のものでした。手の込んだものは、描くと人にやるのが惜しくなると見えて、自分で表裝させて自分の手元にとめておくのでした。

瀧田さんはこれ丈お書かせになるには、それでも中々資本を使つてらつしやいまして、何かと持つて來て下さる樣子ですが、夏目も瀧田が入つて來ると、今日は何をもつて來てくれたかしらと、小脇を見るなど〻笑つて居たことがあります。しかし瀧田さんも中々考へて居られて、硯や墨などを持つて來て下さる時には、墨は自分で書いて貰ふのだから飛び切り上等のものをもつて來、硯は置いて行くのだからといふのであんまり上等でない安物を持つておいでになる。それを夏目が彼奴考へて慾張つてゐるなど〻看破しまして、その硯はどこから買つた、芝の晩翠軒ですとわかると、晩翠軒へ電話をかけて、自分で電話口に立つて、瀧田さんの買つて來た硯は惡いから、もう少しい

い硯をもつて來てくれ、餘分の代は自分が拂ふからなどゝ言つて居たことがありました。こんな風にして前年の十一月頃から死ぬ年の十一月迄、瀧田さんは根氣よく木曜日には通ひつめて來てお書かせになつたのでございます。

夏目の古い親類で田中といふ質屋が牛込にありまして、そこで字を書いてくれといふので紙を二枚屆けてよこしました。日ならずして一枚書いて屆けてやりましたが、受け取つたとも有難うとも申しません。夏目も田中て奴は物を知らない男だ。人に賴んで字を書かせておいて、一言の挨拶もしないと何かの時に申しましたので、それを矢來の兄さんに傳へますと、兄さんの方から又田中へ言つたものと見えます。すると田中の方では商賣人のことですから、二枚紙をやつたのに一枚しか屆かない、いづれ二枚目のが屆くだらうから、其時になつたら挨拶をしようと思つてゐたと、一枚の時に何とかしたら損でも行くといつた話を聞きましたので、其事を夏目に話しますと、人に一枚の字を書かせようと思つたら二枚持つて來るのが禮儀のものだ。一枚は此方が取つておいていゝものになつてるのに、どうも物を知らない慾張りには困ると言つて居たことがあります。

人樣の爲めにはいくらでも賴まれゝばお書きするのに、私はまだ何も書いて貰つたものがありません、そこで私にも一枚何か書いて下さいと賴みますと、どうするんだと尋ねます。いづれ家でも建てたら、自分の部屋へ掛けておくのに書いて下さいと申します。とその家の建つのはいつのことかななどゝ笑つて居りましたが、お前なんかいつだつて貰へるぢやないかなどゝ言つてそれでも書いてくれました。私は見ずに卷いたまゝ簞笥の中に入れて置きました。

すると床へつくほんの數日前のことでございましたが、いつぞやお前にやつたあの書を出しなさい、あれは出來が惡いから書きなほしてやると申します。しかし出したら其場で引き千切られるにきまつて居りますので、いやです、出すとやぶかれるんですものと否みますと、大丈夫、きつと約束した、すぐに書きかへてやるからと申します。仕方がないので出しますと、それを持つて行つて直き代りに書いてくれました。それをそのまゝ又元の簞笥にしまひ込んでおきました。亡くなつてからそれを思ひ出してひろげて見ますと、一枚かと思つたら二枚で、自分の詩を全紙に書いておいてくれたのでした。

やはり此頃のこと、つまり虫が知らせたとでもいふのでせうか、同じく中村是公さんのところへいきなり賴みもしない字が屆いたさうです。どうしたんだらう夏目の奴、書けたつて中々書きも

しない癖に、頼みもしないものを氣まぐれに、これが出來たからやらうなどゝわざ〳〵送つて來たのはどういふ氣だらうと、中村さんが奥さんにお話しになつたさうですが、丁度欲しがつてる人があつてそれを見てしきりに所望するので、夏目のならいつでも書いて貰へると思つてらしたので、それをすぐ人にやつておしまひになつたさうです。が私のと言ひ、中村さんの場合と言ひ、かれこれ思ひ合はせると一寸妙な氣が致します。

五九　二人の雲水

二年程前から、神戸の祥福寺といふ禪宗の僧堂に居られる雲水の鬼村さんといふ方から、ちよいちよい手紙を寄こされ、それが無邪氣で眞劍でいゝ氣持だつたのでせう、ずつと手紙の來る度に返事を出すといふ工合で、手紙の上の交際を續けて居りましたところ、後にはそのお友達でやはり雲水で富澤さんといふ方からも手紙が來て、つまり同じ僧堂の雲水さんから二通りの手紙を貰ふといふ風でありました。鬼村さんの方が年下で、兵隊檢査の年頃だつたと思ひますが、その人が又大變な漱石崇拜一家でお寺の裏の竹藪の中に入つて『猫』を耽讀して、姉さんの惡口なんかを『猫』の

口調で書いて來るといつた調子で頗る愛嬌があり、やにつこい小說や七面倒臭い讀物などに飽いてゐる頭には、それが大變氣持よく受け入れられたものと見えます。先方でも乏しい財布の中から名物などを送つてよこす。此方も新らしい自分の本が出たり、又お坊さんが讀みたいといふ哲學の本なんぞを送つてやつたりして居りました。

するとこの年の十月にお二人から手紙が參りまして、年來の宿願で東京見物がしたい、しかし元より雲水のことで金のある道理もないのだから、どうか泊めてくれないかといふのでした。手紙を見せまして、私にどうだ、泊めてやれるかとのことに、私も折角のことではあり、手もかゝらぬ人達のことでせうから、それでは何とかしませう、然しどうしても不便のやうだつたら、近くに同じ臨濟宗の大きなお寺なんぞもある事から、何とかなるでせうといふのでお宿をすることに致しました。さうして離れの子供たちの勉强部屋をあけて、ともかくそこへ迎へることに致しました。

さて二人の若い雲水が、あの雲水の法衣のなりでチビ下駄を穿いてやつて來ました。頭がきれいに圓いので、家の子供たちがくすくす笑ひます。しかし二人ともにいゝ人達で少しも氣がおけず、それにいつも書齋へ出入される小說家や小說家志願の若い方などゝ違つてといふより、寧ろまるで

反對の無神經で、ぼおつとしてゐるといふのかぬうつとしてゐるといふのか、とにかく一向氣づまりな、いら／＼したところがございません。それが大層夏目の氣に入つた樣子で、自分は案内は出來ないが、今日はどこへ行くといゝとか相談相手になつて、行く先やら電車やらを教へてやり、かへつて來ると其日の行程を聞いて笑ひ興じるといふわけでございました。とにかく毎日朝道を聞いて出かけると、夕方になつて飄然とかへつて來ます。おひるに何をたべたのと尋ねますと、蕎麥屋へ入つてもりをたべたといふ。大たべな人達のことですからいくつたべたのと聞くと、八つづゝたべたが、東京のもりは中味が少くてまだ足りなかつたといふ。しかしその八つを一度に頼むのは恥しいから、一つづゝ／＼と注文してぺろりとたべるのだといふので、又も大笑ひをします

どこか芝居を見せて上げようといふので、一度歌舞伎座へ案内し、一度は活動寫眞を觀に帝劇へ案内しました。洋食堂で一緒に御飯をたべますと、一人の坊さんがビフテキを半分卓の下に落して了ひました。するとそれをいかにも當り前だといつた平氣な顏をして、拾ひ上げると何の氣なしに食べて了ふのでした。それからどこでゝも御飯の時には手を合せて禮拜します。食べ物の文句はなし、何を出しても氣持よくどつさりたべるといふ風なので、その僞りのない、あけすけとした、しかも單純のうちに儀禮と感謝の念のこもつてるのが、痛く夏目を感心させた樣子でした。

この帝劇へ行く時でしたか、電車に乘りますと大變混雜して居ます。私たちは眞中の方に入つたのですが、坊さんの一人は戸口に立つて居ました。すると一人の婦人が同じく隣りに立つてるゐのですが、どうしたのかその人が人形を抱いて居まして、ふと坊さんの姿を見ると、何と思つたのか、一寸人形を抱いてゝ下さいませんかといつて差し出しました。坊さんも賴まれたので抱いて居りますと、其うちに降りるところへ來たと見えて、どうも有難うございましたといつて、人形を受け取つて降りて參ります。何が何やらさつぱりわからないのですが、かへつて來ての話に、東京の女つてみんなあんなもんですかねと感心して居ます。さうしたとぼけたところが又も氣に入るといふ風でした。一體かうした單純生活には前々から憧憬をもつて居たのでせうし、自分も若い頃一寸鎌倉の圓覺寺へ坐はりに行つたとかいふ程でしたのですが、かうした生活を、特別な禪堂といつた場所でなく、自分の家で一緒に居てまのあたり見て、いよ〳〵好きになつたといふところがあつたやうでした。さうして禪堂の實際の生活狀態の話などに大變興がつて居りました。臘八接心の後で甘酒の接待がある、それもたつた一杯切りといふので、せい〴〵大きな丼を買ひに行くなどゝいふ無邪氣な話や、お湯に入ると五人ばかり輪になつて、てんでに背中の洗ひつこをするなどゝいふ話や、それから自分のまはり一切自分で洗濯をするなどゝ一人がいへば、だつて貴公は褌のきたないの

をどつさりためとくぢやないかなど丶やり返す滑稽や、一人の坊さんといふのがごく簡單な寄せ算しか出來ない、つまり數の觀念といふものがないのに會計方をやつた可笑い話など、みんな夏目を喜ばせ、何かかう尊いといつた感じさへ起こさせたものと見えます。

實際かういふ素朴な生活を見るにつけ夏目に思はれるのは、自分の間近にひろがつてる周圍の生活であつたらしいのです。みんなそれ〴〵お出來になる世間なみには立派な方々ではありますが、どうも話がやゝこしい、誰がどうしたの彼がかうしたのと、年がら年中夏目の耳に聞こえて來るのは、大して愉快な話といふものもなく尊いといふところもありません。其上みんな神經質でいらいらして、頭ばかりが發達して七面倒くさいこと夥しい。つく〴〵それとこれとの比較をしたものと見えまして、此雲水さんたちが神戸へかへつてからやつた手紙に、貴方は私のところに集まつて來る若い人達より餘程尊い人達です、有難い人達です。私のところへ集まる人達も、私さへもつとえらければどうにかなるのだらうがなど丶感じの一端を洩らして居りますが、餘程さうした感慨は深かつたものと見受けられます。

日光へ行く旅費をやつて日光見物をさせましてから、二人の雲水さんはかへります。かへつてか

らしきりに手紙をよこします。歸りぎわに一人には墨繪の松に賛を書き、一人には同じく墨竹に自賛をつけててんでに贈りました。さうして自分からもしきりに返事をやつたりして居りましたが、餘程氣に入つたものと見えまして、亡くなつた後で見ますと、机のわきの手文庫の中に、その二人の若い禪僧の手紙ばかり何通となく特別にしまつておきました。

雲水さんたちがかへつて一月もたゝないうちに病床につくのですが、丁度夏目が危篤になつた頃には、禪宗の方では大事な臘八接心の眞最中で、接心に入つては新聞も讀むことが出來ないので、そんなこととは露知らず、八日に臘八があけて、晩には例の甘酒の接待があるといふので、大きな丼を樂しみにして神戸の町へ買ひに出たのが若い方の雲水さん、町でふと新聞を見ると夏目が危篤だといふことにびつくりして、甘酒の樂しみなんぞどこへやら、大きな丼を抱いたまゝ、ぼろぼろ大粒な涙を流し乍ら神戸の町をところかまはず歩るいたさうです。夏目は翌日の九日に亡くなりました。時を移さず二人から弔電が來ました。一人から『始隨芳艸去、又逐落花囘』一人からは『野花燒不盡、春風吹又生』といふのでしたが、前のゝは夏目が好んで書いた句なので、一層感じの深いものがございました。

六〇　死の床

十一月二十日前のことでした。山田三良さんの奥さんがお見えになつて、その二十一日に御自分のお妹さんが長野隆さんと結婚され、その披露が築地の精養軒であるから、是非出席して頂きたい、長野の方でも是非にと望んで居りますからといふお頼みなのですが、相變らず夏目の方では、自分はのつぴきならない義理のある所の外はどこへも出ないことにして居るし、又そんな席へ出るのが實に億劫だといつてお斷わりして居ります。奥さんは奥さんで、さうでもありませうが、折角私がかうやつて上がつて、こんなにもお願ひするのですから、そんな因業なことを仰言らずに來て頂きたいと涙を流してのお頼みです。夏目もそれに動かされて、私を呼びまして、どうだいと申します。そこで私も奥さんの身になつても考へて上げると、さう迄仰言つて下さるのにと存じまして、折角なんですから參ゐりましてはとすゝめました。が、ふと考へてどうしてもおいやなのですかと念を押しますと、いや、どうしてもといふわけではないが、どうも面倒臭いのだといふ例のとほりの曖昧な返事です。ではとにかく其時になつて行けないやうだつたら其時の事として、一旦おうけ

してゐたがよからうといふので、奧さんも大層お喜びになつておかへりになりました。

さてお請合はして見たもの丶、奧さんがお歸へりになつてから考へて見ると、私の禮服がないのです。といふといかさま不樣のやうですが、實に何年か前に昔妹が結婚する時かにこさへた物で、其上自分がめつきり此程肥つて來てゐるのでどうにも着られさうにない代物なのです。どうしたものかと夏目の耳に入れますと、そりやこさへたがい丶だらうと言つてくれましたので、三日のうちに間に會うかどうか、間に會はなかつたら失禮するとして、ともかくもすぐと三越でしたか白木屋でしたかへ參りました。行きますと、下足札から註文をうける番頭の番號から、どれもこれも重ね重ね四十二とか何とかいふいやな番號なので緣起でもないと顏をしかめました。

さて當日の二十一日になりますと、心配して居た紋付もい丶工合に間に合ひました。着て見て氣のついたことですが、下着から帶から何から何迄すつかり新らしものづくめなのです。變なことになつたものだなと又も氣になりましたが、ともかく出かける時刻も迫まつたので書齋に參ゐりますと、胃が痛いといつて、面白くない顏をしてぼんやりして居ります。無理に連れ出しても惡いし、後で又床につかれるやうなことがあつてはと存じまして、そんならどうなさいます、おやめにしま

せうかと尋ねますと、行けないことはないから、ともかく行かうと申しまして、それから大儀さうにして仕度をしました。

精養軒へ行つて見ますと、どういふのか食堂の席が、男女別々になつて居ります。出がけに胃が痛いといつてゐたので内々心配して居りますと、食卓には南京豆が出て居ります。悪いものが出てる、自分が側に居たらとめるのだが、ひよつとしたら誰も小言をいふものが居ないのをいゝことに食べてゐるかも知れない、と心配しましたのは、夏目が又この南京豆が大の好物で、散歩をしたりしますと、どこで見付けるものやら、砂糖のついた南京豆を一袋買つて參りまして、机のわきにおいて一人でぼり〳〵たべたり、時には子供達にもいゝものをやらうなどゝいつて一緒に食べたりするのですので、なるべくそんなものは胃の爲めに食べてくれない方がいゝにと思つて、見ると沒收したりして居たものなのです。どうも此日に遙かに樣子を見てるとつまんで居るらしいので、後でやられなければいゝがと案じて居たものなのです。

それで氣になつてゐたので、かへりに一緒になつた時、貴女、豆をたべましたかと尋ねますと、食べたと申します。胃が痛いなんかといつてゝ、いやな人ねと言ひますと、なあに、もうすつかりなほつたよと、來た時とは違つて大分氣分もよろしいらしく平氣で言つて居りました。其晩は何事

もなく安眠致しました。

ところが翌日になりますと、通じがなくつてお腹が變だから浣腸してくれと申します。これも始終のことですから浣腸をしてやりまして、しばらくしてから通じがありましたかと尋ねますと、ああといふやうな生返事でした。が、それ切り書齋へ引つ込んでひつそりして居りました。いつも午前中は『明暗』一回分を書くのが日課なので、てつきりそれをやつてることだらうと思つて居りますと、おひる近くなつて食前の藥をもつて行つた女中が、旦那樣がお机に打つ伏せになつてらつしやいまして、大分お苦しい樣子ですと申します。驚いて行つて見ますと、189と小說の回數を書いた原稿紙に打伏せになつて、一枚も書いて居りません。餘程氣分が惡いらしいのです。さつきからかうしてらしたのですか、工合が惡いやうでしたら床をとりませうかと申しますと、あゝと言つて、それから申しますのは、

「人間も何だな、死ぬなんてことは何でもないもんだな。おれは今かうやつて苦しんで居ながら辭世を考へたよ。」

と咄嗟にいふのです。縁起でもない。かう思ひましたので、その話には乘らず、すぐに床をのべて

寢かせてやりました。もう着のみ着のまゝの姿で床へ入りまして、それ切り寢卷を着かへるひまもなかつたのでございます。

夜になつて何か食べたいと申しますから、トーストの薄いのを三切れ持つて參りますと、お前はずるい、こんなに薄くちやいやだと駄々を捏ねます。でもいけません、そんな勝手を仰言ると、惡くなつても知りませんよといふと、なあに、死にやしないから大丈夫だよと申します。しかし大事を取るにしくはないと存じまして用心して居りますと、間もなくそれを嘔いて了ひました。どうも病勢が面白くないやうです。

そこでお醫者さんから來て貰はうと存じましたが、ではどなたにといふ見當がありません。ともかく山田さんの識つた方で近くに或る醫學士がおいでになるといふので、その方に來て頂きました。嘔いたものゝ中に何だか赤いものが交つてゐるので、てつきり吐血だと私は思ひましたが、以前からの病狀を御存知ないので、どつか咽喉のあたりから出たのぢやないでせうかといつたお話ですが、私には安心が行きません。そこでどうしたものだらうかといつて居ますと、夏目が眞鍋さんを呼んでくれ。眞鍋さんとは惡くなつた時來て診て貰ふ約束があるんだからと申します。

それからといふもの眞鍋さんがずうと來て下さいましたが、どうも病氣の方ははか〴〵しくこそ

いません。ところで眞鍋さんは大學の方と傳染病研究所の方と兩方でお忙しいといふので、安部さんといふ牛込で開業してゐられる醫學士をお連れになつて紹介して行かれました。そこへ又山田さんの奥さんがびつくりして見舞にいらつしやいます。山田さんも前に胃腸病院に居られた杉本博士をお連れになつて見舞に來て下さいます。が、とにかくお醫者さんばかりさう澤山あつても仕方がないので、眞鍋さんを主治醫といふことにお願ひ致しました。

この二十二日から二十七日迄といふもの、胃がちく〳〵痛いとか何とか特別にひどいといふのではないさうですが、たゞ何となく工合が惡いといつたわけで、この間といふもの夜といはず晝といはず、殆んど安眠したことがございません。初めはもしものことがあつてはと存じまして、私が看護しまして、萬一の用心に私の弟や甥を頼んで交代に夜番して貰らつて居たのですが、長くなつては私も疲れますし、それに病狀がどことなく不安でもありしたので看護婦を頼みました。すると來たのがまだ若いので、病人の背中をさすりながら、自分の方でうと〳〵して了ふといつた工合です。それに夏目が病氣になると物を言はない質で、一寸顎でしやくつて用を辨じさせようといふのですから、慣れないものはそれ位ではどうともすることが出來ないのです。それを一寸見て、そ

れ今度は氷だ、今度は紙だ、それ毛布をずつとかけるのだと、一々氣轉を利かせるのは私でないと出來ないので、やつぱり看護婦が來ても私の方は休まりません。で背中などをさすつて居りますと、すや／＼眠ります。いゝ按配だと思ひまして、此の間に一寸私も休みませうと手を離すと、はつと目を開けて了ひます。そこで私も氣になるので、

「苦しいんですか。」

と尋ねます。

「いゝや、苦しかない。」

「ぢや、いたむんですか。」

「いゝや、別にいたみもしない」

といつて、又うと／＼して了ひます。實に樣子が變です。眞鍋さんもおいでになつて頭をひねつて居られます。

さうかうして居る間にしきりに物をたべたがります。發病以來殆んど食べ物らしい食べ物を攝らないのですから、食べたいのは無理もないことなのですが、かといつてさう／＼言はれるとほりにやるわけにも行かず、そこで醫者と相談の上私の考で、藥やアイスクリームや果物の汁などを、

一度にやらずに二十分間位づゝおきにちよび〳〵やることにしました。さうするとちよつぴり一匙づゝでも口に入ればそれでいくらかづゝ氣が紛れるのでした。

ところが二十七日にはこの食べ物を求めるのが急で、二十分間が十五分間になり十分になりして、やたらにたべたがります。だから段々時間も繰り上がつて、今日中にやらうと思つて居るのが、豫定よりも早くなりますので、もつと求めるのでしたが、もういけません、十時になつたからお眠みなさいと申しますと、そんなら食べ物ならいけないかも知れないが、藥ならいゝだらうと理窟を言つて中々きゝません。しかし又明日こさへて上げますからといつて、側に居るとねだられて困るので一時病室を出て了ひました。そのうちに諦めたと見えて、いゝ按配にうと〳〵眠る樣子に、この分なら今夜も大丈夫と存じまして、看護婦をねかせ、女中たちも早く休ませて、自分一人側で夜番をしようと思ひまして、書齋の机の上でこつそり雜誌をひろげて讀んで居りました。いゝ工合に夏目はすや〳〵眠むつて居ります。家の中もみんな寢靜まつた樣子でひつそりして居ります。

と、かれこれ十二時頃のことでしたでせう、今迄すや〳〵眠つて居た夏目がむつくり床の上に起き上がりました。びつくりしまして、どうなすつたのと問ひもあへず、頭を搔きむしるやうにして、

「頭がどうにかして居る。水をかけてくれ、水をかけてくれ。」

と呻るやうにせきたてます。只事でないと思ひましたが、頭々といふので、ふと時々この人の癖で頭が變になつたりする時の事を思ひ出しましたので、變に上氣せてゐるのではないかしら、ともかくもこのまゝではと大急ぎで横に寢かせますと、そのまゝ「うむ」と言つた切り見る見る目を白くして了ひました。びつくりしまして、これは大變と看護婦をよぶやら女中を呼ぶやら、すぐ隣りの部屋に寢て居る娘たちを呼ぶやらするのでしたが、丁度寢入りばなだと見えて誰も目を覺しません。氣はせきます。けれども人手がなくてはどうすることも出來ません。ともかく何をおいても醫者をと思ふので、病人をそこへおいたなり、驅け出して行つて看護婦をおこし、とまつて居る植木屋をおこして醫者をよびにやり、女中をおこして湯をわかしてもつておいでといつて、それからすぐに病人のところへかけてかへつて參りました。まだ目を白くして居ます。ともかくも水をと思ひまして、側の藥罐から水をふくんで口移しに移してやりまして、

「貴夫、しつかりなさいよ、しつかりなさいよ。」

と叫びますと、いゝ按配にぽかりと目をあけました。それに力を得て植木鉢に水をやるやうに、じやあ／＼頭へ水を打つかけてやりました。

其うちに方々の醫者へ電話をかけます。お湯をもつて來て熱いタオルで方々をあたゝめてます。脈を見れば平常の半分も打つて居ない始末です。が、何にしても一寸も猶豫して居る時でありませんとは思ふものゝ、少しも醫者が來てくれません。もうとてもじつと待つてるわけに行かなくなつて、私自身すぐ前に中山さんといふ開業醫の方がおありになるので、そこへかけつけますと、先生はお留守だといふ、仕方がない、書生さんにカンフルの注射器はありますかと尋ねると、あるといふので、それぢや看護婦にでもさせてやらうと存じまして、注射器を引つたくつてかけてかへりました。ところへ折よく中山さんが來てくれられました。そこでカンフルの注射をしようとしますと、それを見て居た夏目が、

「私そんなものをする必要はありません。」

とかういふのです。この場に臨んで、困つたことを言つてくれるなと思つて居りますと、いゝ按配に、

「しかし害になるものぢやないのですから、とにかくおやりになつておいた方がいゝと思ひます。」

とお醫者さんか言つて下さいました。

「さうですか、それぢや……」

と腕を出すあたりあく迄も冷靜なものです。そこへ眞鍋さんがいらつしやいます、安部さんがいらつしやいます。しきりに注射をして樣子を見てられるのですが、どうしたのだらう〳〵で不安はのぞかれません。かうして此夜はみんなまんじりともせず、一晩有耶無耶のうちに送つて了ひました。

さて翌朝になつて朝の光で見ますといふと、病人の胃部が瓢箪のやうにぷくつとふくれ上がつてゐるではありませんか。それで漸く大きな內出血があつたとわかりました。容態が愈々險惡なので、眞鍋さんも自分の相談相手にその道の先輩を呼んで頂きたいと仰言り、そこで宮本博士からお出でを願ひ、更に南博士からもお越しを願ふことになりました。いらした先生方も皆內出血といふことに異議はありませんでしたが、その溜つてゐる血を出すのにどうしようかといふので大變でございました。

皆がこんな大騷ぎをしてゐるのに、當の病人は一向平氣で體を持ち上げたりするのですから厄介です。さうして禁じられてるのにしきりに話をするのです。

「お前さつきおれの顏に水をかけてくれたね」

「だつてかけろと仰言つたから……」
「さうだつたかい。いゝ氣持だつたよ。」
なんかとこんな事を申します。それから又
「眞鍋は學校があるのにどうして行かないんだ。」
とか、
「お前昨夜から一向眠らないやうだが、眠ちやどうだ。」
などゝいらぬ世話ばかりやいて居ります。それから新聞に載つてる『明暗』の切り拔きをスクラップ・ブックに貼つてゝくれと申します。といふのはこれにはわけのあることなので、いつも自分で毎日切り取つて、自分の手で貼つて居たものなのです。といふのは一時私が貼つたことがあるのですけれども、べつたり一面に糊をつけて貼るので皺が出來る、それがぞんざいでいやだといふので、ずつと自分で貼つて居たのでした。この病氣になつてからも、私はたゞ毎日の新聞を切りぬいてブックにはさんで丈けおいたのですが、それが氣になつたものと見えて頼んだのです。

それからやはり執筆中の『明暗』のことが氣掛りになると見えて、まだ二十回分位は先へ書い

て送つてあるが、もう一週間も書かずに寢てゐるから、一寸坂崎さんを呼んで　今病氣でねて居るが、まだ二十日も間のあることだから、そのうちには起きて書けようと思ふけれどもといつて、用心に話だけはしておいとくれ、尤も醫者はとめるだらうけれど、今でも書かうと思へば書けるのだがなどと申します。今頃書かれちや堪らないので、まあ、それ丈けためてあれば大丈夫でせうから、よくなつてからゆつくり書いて下さいと言ひますと、おやとにかく坂崎に一應傳へておいてくれといふのです。坂崎さんといふのは美術批評家の坂崎坦氏のことで、其頃から朝日に居られて、しかもすぐ御近所だつたものですから、何かとこんな言傳なんかもちよい／＼御願ひして居たものなのでした。一體この二十七日の內出血のある迄は病氣だなど〻世間へ洩らすと、方々から見舞ひに來て下すつたりして困るので、どちらへも聞かせずにおいたのですが、容態が面白くないので、此上は默つて居るわけにも行かず、發表することにしましたのです。社から見舞が來ます。森田さんとか小宮さんとかゞ見えます。それから方々へお聞かせもして、この二十八日の夜から、門下の方々が交代で夜番をして下さることになりました。お醫者さんの方も三人になつて、其うちのどなたかお一人づ〻交代で附き切りで居られました。

看護婦もかうなつては若い人では仕方がないので、昔から識つてる老練な人から來て貰ひます。

すると看護婦が私に、どうも變でございますよ、前の修善寺の時とは大分違つて居りますと申します。夜なんぞ體溫はいつも六度下で、さうして例の如く安眠しません。そこで催眠藥を浣腸してやると受けつけないといふ風で、實際呼吸も常の呼吸とは違つてよろしくありません。ですのに病人は目をあけてお醫者さんの居られるのを見ると、妙に話がしたいらしく何かと話しかけるので、皆さんでお困りになつて座を外づされたりしたものです。自分ではそれ程の重態だとは少しも知らない樣子でございました。

それから早耳でしてうか〳〵したことを言つて居られません。で電話を隣りに移しますやら、家の中ではみんな小さな聲で話して居るのですが、それでも或る晩などには、丁度鈴木三重吉さんの夜番の時で、お酒が欲しいが櫻正宗がいゝとか何とか言つてるのをちやんと聞き込んで、おい〳〵と私を呼びますので傍へ參りますと、皆が居るのに酒なんぞ出すことはないよと申します。何でもないんですよといゝ加減の挨拶をして其場は濁して居りましたが、萬事此の調子で、其の中でも餘程眞鍋さんの姿がちらつくのが氣になると見えて、學校があるのに眞鍋は何して居るんだと幾度も幾度も世話をやいてゐたものです。

其眞鍋さん、大學で今夏目漱石が重態なのでその方へ行かなければならないから當分休講すると言はれると、學生さんたちが夏目の爲めなら僕達の講義などいくら休んでも構はない、どうかなほしてやつて下さいと言はれたとかで、傍の見る目にも實に一生懸命なもので、御自分の身が細る程盡くして下さいました。それ程ですから、病人が少しいゝといへば喜び、惡いといへば顏の色を惡くしてらつしやるのですから、私としてはその神經質なお顏を見るのが寧ろ怖ろしい位でした。

かうして十二月に入りました。

一日の夜のことでした。私を呼びまして枕元で香を焚いてくれと申しますので、香爐を出しまして梅ヶ香を焚いてをりますと、胸の上に手を合はせまして、目をつぶつたまゝ一心に何か念じて居るかの風で、しばらくの間香を聞いて居りました。私は何となく暗い氣持で見て居りましたが、病人はいたくしい程やつれた顏に、本當に靜かなものを漂はせながら、いつまでもくじつとして居るのでございました。

前の修善寺の大患の時には、あれ程惡くても便器にかゝらないで弱らせたものですが、今度は始めからこれで用を足して居りました。すると二日のことでした。丁度眞鍋さんがいらした時に、便器にかゝりながらうんといきむ氣勢なので、見て居られた眞鍋さんが驚いてとめようとされるうち

に、それ切り又もや目を白くして昏睡狀態に陥つて了ひました。其のいきんだので、又もや第二回の大内出血をしたのでございます。それから周章てゝ注射をするやら大騒動でしたが、これが殆んど致命的なものであつたらしいのです。それからといふものは二日に一度は食鹽注射をします。胃を癒着させるのだといつてゲラチンの注射をします。それ程ですから何も食べ物をやらなければ胃の癒着に早いのでせうが、さうして居れば榮養がつかず、榮養をつけようとすれば胃の爲めによくないといつた工合でした。浣腸をするとすつと血便がございました。

それでも自分では實に確かなもので、食鹽注射をする度に、じつと注射針のところを見て居りまして、看護婦なんぞが見るに邪魔になると、おい、君、そこおどきよなどゝ言つては、ぢいつと自分の肉體を突きとほす針を見つめ、或は靜かにあの章魚見たいな怪物の器械の液の減るのを見てるといつた工合でした。

それから食鹽注射の外にゲラチンの注射をやたらにします。それを見ながら、何故そんなに注射をするのですなどと醫者に聞いて居ります。お醫者さんも仕方がないもんですから、血管を丈夫にするのですと答へられると、そんな糊みたいなものをいく本も注射して、さぞぺた〳〵することで

せうなどゝ申して居ります。何しろ面會謝絶で醫者以外誰がいらしても面會させませんので、自分の容態がそれ程險惡で、今にも死にさうだなどゝは思つて居なかつたでありませう。たゞいつでしたか、かうした面會謝絶のうちに中村是公さんがいらつしやいまして、是非會はせてくれと仰言るのですが、しかし今お會ひ下さると興奮したりしないものでもないから、たゞ頭の方からそれとなく見て丈け頂きたいといふので、さう御願ひしたことがありますが、其時には足などもすつかり細つて怖ろしく氣味が惡くなつて居りました。

それから又時々、今晩は誰がとまつてるなどゝ尋ねることもありまして、野上さんですよと答へると、一寸會つて見たいなどゝ申したこともございました。

こんな工合で一日一日と過ぎますうち、たしか六日頃であつたと思ひますが、ふと病室に入つてつく〴〵病人の顏を見ますと、その衰弱の仕方がひどくて、何と申しますか、つまり死相とでも申すのでございませうか、さういふ感じが現はれて居りまして、これはとても助かりつこない、もう諦らめるより仕方がないとかう思はせられましたので、眞鍋さんにそのことを申しまして、とても助からないとなれば、こんな狀態でひぼしにして死なすのも氣の毒ですから、何かもう少しやつて下さいませんかとお賴み致しました。すると眞鍋さんも一寸變な顏をなさいましたが、それから少

し考をかへられたやうで、アイスクリームとか果物の汁などを前より少しづゝ澤山おやりになるやうになりました。そんなものとか水みたいに薄い葛湯をおやりになるのでも、お醫者さんたちがみんなよつてたかつて毒味をなすつて、それから評議一決した上でおやりになるのですから大變です。すると夏目が私に申します。

「眞鍋が何かくれるが一向美味くないんだよ。」

しかし答へる言葉もないので、

「いまになほれば段々美味くなるでせう。」

位のことしか言へないのです。

かうしてもうとてもだめだらうと諦らめかけました時に、子供たちがどこから聞いて來たのか、死にさうな人の寫眞をとるとなほるといふからどうしてもとつてくれと申します。そんなことでこの病氣がなほらうとも思へませんが、成る程これで亡くなるものとあればとつておくのもいゝ紀念だと存じまして、折ふし來てくれた朝日新聞の寫眞班の方に御願ひすることに致しました。すると今頃そんなものをとらなくても、なほつてからでいゝではありませんかなどゝいふ方もあつたのですが、とにかくとつておきたいからと申しまして、隣りの部屋からレンズを向けましてとつて頂き

ました。勿論フラッシュを焚いたり、頭の方へ器械をもつて行つたりすることが出來ないので、そつと本人にはわからないやうにしてとつたのでした。暗いのでどうかと思ひましたが、後で見ますとよくとれて居りました。これが死ぬ日か其の前の日のことでございました。

六一　臨終

人様の御見舞にいらつしやる度も繁くなります。容態は日に増し面白くない一方です。そこへ其頃鵠沼に居られた和辻哲郞さんが同じく御見舞にお見えになつて、此頃御自分の奥さんの御父さんが癌にやられて、自分も絶望し傍のものも諦めてゐたのが、ふと人のすゝめである氣合術をうけてからといふもの、今迄食べられなかつた食事も攝るやうになり、大變いゝ工合だ。自分なども最初そんなことがあるものかと話を聞いた時施術にむしろ反對した位なのだが、かうやつて目の前で奇蹟的なことが行はれゝばこれを疑ふわけには行かない。勿論難病が治つたとは思はないが、假令一時でも小康を得るやうなことがあればそれに越したことはないと思ふ。現代の醫學だつて萬能といふわけではないのだから、だまされたと思つてそれにかゝつて見てはどうかとしきりにおす

すめになります。御自分で目の當りそれを御覽になつたのですから自信がおありになります。
　しかしその話を伺つても、病人は大概死ぬ前には一寸よくなつて、この分ならと傍のものが氣を休めてゐるとほくりと逝くといつた、所謂仲なほりといふ奴のあるものですから、和辻さんのお父さんの奇蹟といふのもそれだらうといふ肚が私にあります。それにこれ丈手を盡くしていけないのに、精神病的なものなら知らぬこと、なんでこんな病氣に氣合術位がきくとも思えず、旁々隣室で御祈禱でもするといふならきくきかないに係りがありませんが、いづれ病人の體に手をかけて施術をしなければならないのである以上、今の場合御醫者さん方をおいてそんなことのやれる義理合でもなし、又病人の平常から推して見ても、そんなことを嫌ふことは勿論ですので、當人の意志にそむいて迄することもないと思ひまして、和辻さんが此方を思つて下さる一心の程もわかり、又有難い御好意の程もわかるのですが、流石迷信家の私自身どうしても承服し切れず、それではその氣合術の方をお連れ下さいとは申し兼ねたのでありました。それでも生き死にの境のことですから、これを聞いて外の方などでも、かうなつた以上試しにやつて見てはどうかなどゝいふ方もあつて、中々やかましくなつて參りました。
　そこで私は、折角ですけれども今度のことは私の思ひ通りにやりますと申しまして、たうとう

れをお斷りしました。といふのは、前に一度かういふことがあつたのです。或る時ふと何かのきつかけで、(まだ夏目がこんなになつて床につかない前のことですが)一體家には澤山門下の方々などもおありになつて、何のかのと言つて口のやかましい人達ばかりです。勿論貴方が丈夫でいらつしやるうちは何事もないが、萬一のことがあつた場合、書齋のことなんかで私と門下の方々皆さんとが對抗するといふやうなことが出來ては困りますから、又そんなことが無いとも限りませんから、今のうちにちやんと貴方がいらつしやらなくともわかるやうにしておいて下さいと、かう私が申しますと、そんなことは構はないぢやないか。俺の萬一のことがあつた場合、あとは一切お前のいゝやうにしたらいゝぢやないかと申したことがあつたのです。そこで此の時も話が面倒になつて來たので、これを楯にとつて從はなかつたのでした。

そこへ和辻さんのところへ電報が參ゐりました。御病人が危篤だといふお知らせに、和辻さんも色をかへて早々におかへりになりました。後であの時は失禮しましたなどゝいふ御手紙を頂いたことがあります。

こんなことがあるやら、方々から來てゐる看護婦同士が反目しますやらして居りますうち、急に氣候が寒むくなりまして、衰弱してゐるところへ肺炎でもやられちや一ぺんだといふので、急に布

をかけるやら何やら大騷ぎをしましたが、さうした甲斐もなく、餘病は發しませんでしたが、もう八日の晩にはこれはとても駄目だと眞鍋さんも言はれるやうになりまして、私たちも諦めなければならなくなりました。がそれでもよい工合に此夜のうちには變化もなく九日の朝になりました。

朝子供達が學校へ行くといふので、お醫者さんにどうでせう、休ませませうかと尋ねますと、さあ土曜日だからいゝでせうといふことに、みんな出掛けて參るりました。ところが出た後で正午頃迄だらうといふことになつて、それ〴〵迎へにやることになりました。そのうちで二番目の娘は長女と同じく女子大學の附屬女學校に行つてゐるのですが、學校へ出は出たもののどうしても氣が氣でなくて落ちついて教室に居られないと言つて早くかへつて參るりました。そこでその子と近所の小學校へ行つてる四番目の娘とがまづ會ひに行きました。するとあんまり面變りがして居るので悲しくなつたものでせう。愛子といふその四番目の娘が堪らなくなつて泣き出しました。で私がこんなところで泣くんぢやないとなだめますと、それが聞こえたと見えて、目をつぶつたまゝ、

「いゝよく、泣いてもいゝよ。」

と申しました。其うちに長女は迎へに行つた俥が途中で引つくりかへつたとて、中から這ひ出して、いゝ按配に怪我もしてなかつたので、そのまゝ近所で帳場を見つけて別の俥にのつてかけつけ

ます。男の子たちもかへつて來ます。その前にどうせ絶望ときまつた以上、此上注射注射で無理に長いこと苦しい思ひをさせることもないから、安樂に死なしてやりたいと私から醫者に申出まして、眞鍋さんあたりもそれではといふので注射を控へて居られたのでした。みんな揃ひましたので、正午頃打ち揃つて會ひに參ゐりました。すると學校の制服を着た長男の純一が、バタンと枕元に坐はりました。と、ふと目をあけまして、子供の顏を見ながらにやあつと笑ひました、

さうかうして居るうちに中村是公さんがおいでになつて、會はしてくれろと仰言います。今はこれまでと思ひますのでお連れしまして、

「貴方、中村さんですよ。」

と申しますと、もう目を開けたりする氣力もないらしく、目をつぶつたまゝ、

「中村誰れ?」

と尋ねます。で、

「中村是公さんですよ。」

と重ねて申しますと、

「あゝ、よし〳〵。」

と言つた切りでございました。

さうして居るところへ宮本博士がいらつしやいまして、今から絶望してこんなに放つておいてはいけない。先の大患の時にも注射で助かつたのだから、醫者としては命のあるうちはもう一度鬪つて見て、それでもいよ〳〵いけなかつたら諦めようと仰言るので、そこで又もや皆さん氣を取りなほしになつて食鹽注射をなさいました。それで夕方の六時頃迄もつたのでございませう。

この暮れ方、非常に苦しがりまして、私が一寸坐を外づしましたうちに、胸をあけて、こゝへ水をかけてくれと申しますので、看護婦が霧を吹きかけてやりますと、「死ぬと困るから。」とか何とか言つたと思ふと、そのまゝ目を白くして了つて、全く意識を失つて了ひました。急を聞いて私もすぐにかけつけます。茶の間や離れに集まつてられた方々もつゞいてかけつけられます。もう全く死の狀態です。私は水筆を取つて、次々にわかれを惜しむ方々へお渡しました。しかし皆さんの顏や子供達の顏を見ると、今にも泣き出しさうになるので、私がこゝで泣いてはいけない、飽く迄も氣をたしかに持たうと思ひまして、石のやうになつてぢいつと遠くの方を見つめ誰をも見まいとしました。津田青楓さんが水筆で口をぬらしたまゝ、枕元へ泣き伏して了はれました。それをなだめて、今度は白い布れで目をつぶらせるやうにして上から撫でました。かうしてたうとう口が暮れて間も

なく息を引き取りました。大正五年十二月九日の六時一寸前のことでございました。

息を引き取る一時間ばかりも前のことでございましたでせう。高濱虚子さんがいらつしやいまして。

「夏目さん。」

と仰言ると、

「ハイ。」

と返事をしました。それに力を得て、

「僕高濱ですが……」

と仰言ると、

「有難う。」

と申して居た位で、ほんの死ぬ少し前迄は、時々昏睡状態に陷つても居たでせうが、中々はつきりして居たものでございます。

臨終の時いらした方々は隨分澤山でございまして、混雜の際のことゝて一々よくおぼえても居り

ませんが、狩野さん大塚さんや中村さん菅さんなどのお友達の方々や、朝日新聞の方々、それから所謂門下の方々などで、これらの方々に護られながら、丁度五十年の生涯を終つたのでございます。愈々息を引き取りましたので、一旦皆さまから引いて頂いて、さて私から眞鍋さんに申し上げますには、

「いろ〳〵御骨折り下さいましたのに、たうとうこんなことになつて、先生もさぞかし殘念でございませう。何にしてもこれが定命だとすれば仕方がありません。私としましては先生方からこれ丈に盡くして頂けば全く御禮の申上げやうもないのでございます。たゞこゝで一つ御願ひがございます。といふのは外でもございませんが、どうか私どもの御禮心迄に、この死體をおあづけ致しますから、大學で解剖して下さいませんか。」

眞鍋さんも意外な面持でしたが、流石に喜びは包み切れず、折りかへしお尋ねになります。「さうして頂ければ、私たちの方では願つてもない幸で、いろ〳〵學術上の參考にもなり、又私としましてもこれ迄に盡くしてたうとうこん破目になつた以上、その理由がつきとめたいと思ひますのですが、解剖させて頂いてよろしうございますか。」

私は前の雛子の時の話を思ひ出し、かういふことは當人の遺志でもあると思ひますので、大體一

人の肚できめて居たのでした。丁度そこに松根東洋城さんがおいでになつたので、

「ねえ、松根さん。今もおきゝになつたやうに解剖して頂くつもりですが、どうでせう。あなた殘酷だと思ひますか。私は夏目の平常から推して、當人もかうした研究の材料になることを喜ぶだらうと思ひますが。」

とお尋ねしますと、

「誰も殘酷だなんて思はないでせう。奥さんさへ御承知なら無論結構です。僕達にも異存はありません。」

といふ話でしたので、松根さんも門下の代表としてあゝ仰言るのだからといふわけで、そこで卽座に解剖のことはきまりました。

この亡くなつた夜、たしか森田さんかの發議で死面を取ることになり、大塚さんのお識り合ひの新海竹太郎さんを煩はして原型をとつて頂きました。もう眞夜中のことであつたでございませう。

六二　解剖

さて翌日はいよ〳〵解剖といふので、澤山のお弔問客の間を寢臺車にのせられて醫科大學に參るりました。立會人には私の代理として弟の中根倫、矢來の兄さんの代理として長男の小一郎、それから門下の總代として小宮さん、この三人が參るりました。主治醫の眞鍋さんがいらしたことは勿論でございます。杉本博士も御一緒のやうでした。

そのうちに思つたより早く又も寢臺車で送られてかへつて參るりましたが、其時眞鍋さんが大層この解剖のことを喜ばれまして御禮を仰言いました。腦と胃とはおすゝめにより大學の方へ寄附いたしました。

この解剖については其後一週間ばかりしてから、當の執刀者長與博士の御講演がありまして、私なども拜聽に出ないかとすゝめられたものでしたが、たうとう參るりませんでした。今其時の御講演の筆記が日本消化機病學會雜誌の別冊として出て居りますから、それをこゝへ拜借することに致します。病氣の經過なども詳しく專門的にお話しになつて居るので、其點でも大變御參考にならうかと存じます。

夏目漱石氏剖撿（標本供覽）

長與又郎博士述

漱石夏目金之助先生御遺族ノ特志ニ依リマシテ、今月ノ十日ニ大學ノ病理學教室ニ於テ、私ハ夏目先生ヲ解剖致シマシタ。此解剖ノ目的ハ、夏目サンノ腦ヲ研究スルコト、モウ一ツハ先生ノ最モ惱マサレテ、サウシテ同時ニ死ノ原因ニナツタトコロノ先生ノ消化機系統ヲ調ベルノニ在ツタノデアリマシタカラ、從ツテ解剖ハ腦ト腹部ダケニ限ラレマシテ、胸部其他ノ所ヘハ及バナカツタノデアリマス。

腦ヲ今日持ツテ參リマシタガ、夏目先生ノ腦ハ普通ノ人ノ平均ヨリハ少シ重カツタノデアリマス、日本人ノ男子ノ腦ノ平均重量ハ田口博士ノ多數ノ材料ニ依ツテ調ベラレタ所ニ依リマスト、凡ソ大腦小腦ト共ニ千三百五十瓦計リアル、ソレガ夏目サンノハ千四百二十五瓦アリマシタ。平均ヨリハ稍重イ、此腦ノ重量ガ普通ノ人ヨリ重イトフコトハ何ヲ意味シテ居ルカトイフト、是ハ絶對的デハアリマセヌガ大體ニ於テ腦ノ能力ガ普通ノ人ヨリ優ツテ居ル、生キテ居ル中ニ普通ノ人ヨリハ遙カ

ニ優レタトコロノ能力ヲ示シタ人ノ頭腦ヲ解剖シテ見マスルト、日本ニハ未ダ例ガ少ナイノデアリマスガ、外國デハ可ナリ澤山アリマシテ、凡ソ七八十例有名ナ人ノ腦ノ解剖ガアリマスルガ、ソレニ依ルト普通ノ人ヨリ腦ノ重量ガ稍輕カツタノハ七八例アル許リデアリマシテ、大多數ハ總テ普通ノ平均重量ヨリハ重イノデアリマス、内ニハ著シク重イノモアリマス、今日デハ腦ノ目方ガ多イトイフコトハ、腦ノ能力ガ優ツテ居ツタトイフコトノ一ツノ標徴ニ解剖學上シテアルノデアリマス。尤モ腦ノ重量サヘ重ケレバ其人ハ勝レテ居ルカトイフト、必ズシモサウデナクテ、中ニハ非常ニ重イ腦デアツテ生前ニハ却ツテ低能デアツタ人ガアル、今迄ノ腦ノ重量ノ記錄(レコード)ハ伯林ノ二千何百瓦トイフノガアルガ、ソレハラスタント云フ馬鹿者デアツタ、東京デモ私ガ注意シタモノ、内ニ千七百瓦トイフノガアツタ、是ハ東京市ノ養育院ノ行路病者デアツタノデアリマスカラ餘リ偉ライ男デハナカツタデシヤウ。之等ノ場合デハ腦質中ノ役ニ立ツ部分ガ重イノデハナクテ、腦ノ中ノ膠質ガ殖ヘテ居ルノデアル。斯ウイフ例外モアリマスガ、一般ニ於テ腦能力ノ勝レテ居ル偉人天才ハ普通ノ人ヨリハ腦ガ重イノデアリマス。

解剖上重量以外ニ腦ノ能力ヲ判斷スルモウ一ツ重ナ標徴ハ腦ノ廻轉デアリマス、腦ノ表面ニハ御承知ノ通リ複雜ナ廻轉ガアル、此廻轉ガ複雜シテ居レバ居ルホド其腦ガ宜イノデアリマス、例ヘバ

腦ニ於ケル手ノ中心ガ解剖學上發達シテ居ルト、其人ハ生キテ居ル中ニ手ガ器用デアル、運動ノ神經ハ右ト左トハ交叉シテ居ルノデアリマスカラ、右ノ方ノ中樞ガ非常ニ發達シテ居ツタ人ヲ調ベテ見マスト、其人ハ生前ニ左利キノ人デアツタトイフ樣ナ例ガアリマス、音樂家ハ耳ノ中樞ガ發達シテ居ル、或ハ畫家ノ手ノ中樞ガ發達シテ居ルトイフヤウナコトナドガアルノデアリマス、夏目サンノ腦ハ其重量ニ於テハ左程著シク平均數ヲ超過シテハ居リマセヌガ廻轉ハドウモ非常ニ能ク發達シテ居ル、殊ニ左右ノ前頭葉ト顳頂部ガ發達シテ居ル、就中右ノ側ガ複雜シテ居ル、卽チフレクシヒノ所謂聯合中樞『アツソチアチオンススフエーレ』ガ能ク發達シテ居ル、ソレダケハ今日マデニ確カニ云フコトガ出來ルノデアリマス、尙ホ此腦ノ廻轉ノ詳シイ硏究ハナカ／＼困難ナコトデアリマシテ、是カラ多少ノ時日ヲ要シテ調ベテ見タイト思ツテ居リマス。又今日ハ之ヲ御話スルノハ私ノ重ナ目的デハナイノデアリマス、且ツ此學會ノ性質トシテ腦ノコトヲ詳シク御話スル積リデハナイノデアリマス。唯ダ序ニ腦ヲ御目ニカケ大體ノ所見ダケヲ申上ゲテ是カラ消化機系統ノ事ヲ申上ゲタイト思ヒマス。

解剖ノ所見ヲ申上ゲル前ニ病歷ノコトヲ申上ゲテ、ドウイフ風ニ臨床的ノ症狀ヲ解剖的ノ所見カラ說明シ得ルカトイフコトヲ一通リ御話シテ見タイト思フノデアリマス。病歷ハ胃腸病院保存ノモ

ノト眞鍋君ノ好意ニヨリマシテ同君ノ貸與セラレタルモノニ據リマス。

先ヅ病症ノコトヲ御話シテ見マスト、今年丁度五十デナクナラレタノデアリマスガ、三十七八年頃カラ餘程胃ガ惡ク居ラレマシタヤウデアリマス、ソレハ鹽酸過多症デアツタ、四十三年ノ六月ニ杉本君ノ診療ヲ受ケテ居ラレマス、ソレカラ後ハ胃腸病院ニ入ツタ、其時ハ胃酸過多症デ同時ニ胃潰瘍ノ疑ガアツタ。胃部ニ疼痛ガアツタリ膨滿ノ感ガアツタリシテ居ツタノデアリマス、殊ニ空腹時ニ餘計痛クテ、サウシテ痛ハ背中ノ方ニ波及シタトイフコトデアリマス、七月ノ二十八日ニ胃液ヲ一度調ベタノデアリマスガ、ソレニヨリマスト殘渣ガ六十、粘液ハ少量デ、總酸度六十六、鹽酸ガ〇、一六七九「パーセント」デアリマス、ソレカラ後ハ胃腸病院ニ於テ「アルカリ」ノ療法ヲヤツテ後ニナツテ硝酸銀療法熱潰瘍療法ヲヤツテ段々ト輕快サレテ七月三十日ニ退院シタ。ソレカラ伊豆ノ修善寺ニ行ツテ養生ヲシテ居ラレタガ、其間ニ旅館デ出來事ガ起ツタ、ソレハ八月ノ九日ニ僅カニ吐血シ更ニ十四日約百瓦ノ吐血ヲシタノヲ始メトシテ十九日ニ百八十瓦、二十四日ニ約五百瓦ノ大吐血ガアツタ。其最後ノ五百瓦許リ吐カレタ時ニハ人事不省ニ陷ツタ、其後ニ又東京ニ出テ再ビ入院サレタガ、大體前ト同ジヤウナ處置ヲサレテ翌年ノ二月マデ入院シテ居ラレタ、退院セラレタ時ニハ殆ド胃ノ症狀ハ無カツタサウデアリマス、卽チ四十三年ニ再度入院サレマシタガ、始メ

ノ時ニハ吐血ハナイ、胃酸過多症デ潰瘍ノ疑ヒガアツタ、二遍目乃チ修善寺ノ時ノハ立派ナ潰瘍デ、ソレガ直ルマデニ長イ時ヲ要シタ、併ナガラ先ヅ完全ニ直ツテ出ラレタモノト見テ宜イト思フノデアリマス。此際ニ一寸注意スベキコトハ其當時ニ既ニ僅カデアリマスケレドモ糖ガ尿ノ中ニ證明サレタ卽チ輕度ノ糖尿病ガアツタトイフコトデアリマス。

眞鍋君ノ話ニ據ルト三十八九年ノ頃ニ同君ハ夏目サンガ糖尿病デアルコトヲ確メタサウデアリマス、ソレカラ後ハ時々胃ノ症狀ガアツタモノト見エマシテ、多クハ先日亡クナラレタ須賀君ガ之ヲ療治シテ居ラレタ、ケレドモ、出血トカ或ハ潰瘍ノ症狀トイフヤウナコトハナカツタヤウデアリマス、トコロガ其間ニ段々ニ糖尿病ノ方ノ症狀ガ強クナツテ來タモノト見エマシテ、殊ニ本年ノ春カラ神經衰弱ノ症狀ガ強クナリ仕事ヲスル勇氣ガ著シク減ジテ『ドウモ書ケナイデ困ル』ト言ツテ居ラレタソウデアリマス、ソレト同時ニ右ノ上膊神經ニ強イ神經痛ト右上膊ノ不全麻痺ガアツタ、ソレニ對シテ色々ナ藥ヲ與ヘテ見、又『マツサージ』ナドモヤツテ見マシテモ更ニ效果ガナイ、安部君、眞鍋君等ハ必ズ糖尿病ニ基クト云フ考ノ下ニ糖尿病ノ食餌療法ヲ始メ含水炭素ヲ減ジテ肉類ヲ比較的多クシタノデアリマス、ソレハ本年ノ五月カラ始メタ、トコロガ療法ヲ續ケテ居ル間ニ上記ノ症狀ガ非常ニ宜クナツテ來テ、七月ノ終リ頃ニ上膊ノ神經痛ハ殆ンド拭フガ如クニナリ、不全麻

痺モナクナツテ仕舞ツテ、神經衰弱ノ症狀モ減退シ非常ニ喜バレタサウデアリマス、サウシテ前ニハ可ナリ多クノ糖ガ出マシテ今年ノ春頃ハ一カラ一、五『パーセント』位出テ居ツタノガ、四斤ノ『パン』ヲ食ベテモ糖ガ出ナイヤウニナツテ糖尿病ノ方ハ非常ニ宜クナツタ、是ガ大體ノ既往症デアリマス。

次ニ今度ノ現症ノ發端ヲ御話シマス、今度ノ出來事ハ總テ胃ノ症狀デアリマス、發端ハ十一月ノ十六日ニ糟漬ノ鶫ヲ晩ニ食ベラレタノニ始マツタラシイノデアリマス、其晩カラ胃ニ膨滿ノ感ガアリ又疼痛ガアツタ、ドウモ胃ノ狀態ガ面白クナカツタ、二十一日ニ或人ノ結婚披露ニ列席シテ其時ニ洋食ヲ試ミタ、其晩カラ胃ノ具合ガ段々面白クナク、翌二十二日ニ益々惡クナリマシテ、其晩ニ少シ嘔吐ガアツタ、此時ノ嘔吐ハ唯ダ食ベタ物ヲ吐イタノデアリマシテ、血液ハ少シモ出ナカツタ、其夜ニハ可ナリ激烈ナル胃痛ガアツタ、二十三日ニ『アルカリ』劑ト『ベラドンナ』ノ少量ヲ與ヘタ、二十三日ノ午後一時ト四時トニ二遍嘔吐ガアリマシタ、第一回ノ時ニハ少シモ血液ハ混ジツテ居リマセヌデシタガ、第二回ノ時ニハ僅カニ血線ヲ混ジテ居ツタ。其後追々ニ胃痛ガ强クナルシ嘔吐ガアルトイフ譯デ再ビ床ニ着イテ殆ド絶食ノ狀態ニナツタ、唯ダ僅カニ『アルカリ』劑ヲ色々ノ形ニシテ與ヘテ居ツタ、サウシテ二十四日ヨリ二十七日迄ハ輕快シツ、經過シテ行ツタ。二十八日

ノ晝間ハ大變心持ガ宜クテ僅カ液體ノ食物ヲ採ツタ、然ルニ夜ノ十一時半ニ急ニ床ノ上ニ起キ上ルト同時ニア、ト一聲叫ンデ同時ニ人事不省ニ陷ツテ仕舞ツタ、此時ハ脈搏ハ殆ドナクナツテ、冷水ヲ顏ニ注イデ始メテ意識ガ出テ來タトイフコトデアリマス、其時脈搏ハ大變ニ小サク、張力ガ弱ク數ガ多イ、體温ハズツト減ツテ三十五度八分位ニナツテ仕舞ツタ、此場合ニ吐血又ハ下血ハナカツタノデアリマスガ是ハ正シク胃カ十二指腸邊リノ潰瘍性ノ出血卽チ内出血デアルトイフ診斷ノ下ニ、『ゲラチン』ヲ注射シ又數日食鹽水ノ注射ヲヤツタソレガ二十九日デ、其翌日ハ食鹽水ノ注射滋養灌腸ヲ行ツタ、三十日モ同ジヤウナコトヲヤツタ、ソレカラ段々具合ガ宜クナリマシテ脈搏モ整調ニ復シ體温モ上昇シテ大分具合ガ宜クナツタノデアリマス、十二月一日ニハ極ク少量ノ液體性ノ食物ヲ採レル位ニナツタ。一日ト二日ニ各々三回排便ガアリマシタガ、其時ニハ何レモ血便デアリマシテ、前ノ内出血ノ診斷ガ誤ツテ居ラナカツタコトヲ證明シタノデアリマス、トコロガ十二月二日ノ午後二時半頃排便ノ際ニ自ラ腹壓ヲ試ミタ、其瞬間ニ又急ニ倒レテ人事不省ニ陷ツタ、其後ニハ非常ニ惡寒ガアル疼痛ガアル脈ハ小サク弱ク百三十カラ百三十四位デアル、再ビ内出血トイフ診斷ノ下ニ『ゲラチン』ノ注射『オピオム』ノ注腸或ハ『カンフル』ノ注射等ヲ數回試ミタ、翌日ハ食鹽水『ゲラチン』『オピオム』等ノ注入乃至注射ヲヤツテ、サウシテ四五六日トイフ風ニ段々ニ形勢

ガ恢復シテ來テ體溫脈搏ナドモ稍々順調ニ向ツタ、其間ニ何ンノ爲メデアリマスカ、是ハ眞鍋君ノ考ヘニ依ルト恐ラク『オピウム』ヲ用ヰタ爲メデアラウトノ事デアリマスガ、腹部ガ大變膨滿シテ來タ、サウシテ排便ガ全クナイ、夫故ニ便ヲ他働的ニ取ツタ、何時モソレガ血便デアツタノデアリマス。其頃右季肋下部ノ腸ニ沿フテ何ンダカ引ツ張ラレル樣ナ痛ガアル、其痛ガ胃潰瘍ノ痛トハ違フトイフコトヲ訴ヘラレタサウデアリマス。前述ノ第二回大出血ガアリマシテカラ色々ナ療法ヲシテ居ツテ再ビ宜クナツテ六日頃ニハ極ク少量ノ液體ノ食事ヲ與ヘ得ル位ノ狀態ニマデ持直シタ、然ルニ七日ニナリマスト、心臟ノ力ガ弱クナツテ來マシテ、脈ノ狀態ガ惡クナル、細且頻ニナツテ八日ニナリマシテハ益々脈ノ狀態ガ面白クナイ、屢々『カンフル』ノ注射ナドヲ試ミテモ餘リ反應ガナイヤウデアル、九日ノ朝ニナリマシテハ全ク『カンフル』モ無效トナリ形勢ハ益々惡クナツテ來タ、脈搏ハ百二十體溫ハ三十五度位デ、腹部ハ膨滿シテ太鼓狀ニナル、其日ノ午後六時脫血死ノ狀態ノ下ニ終ニ死ナレタノデアリマス。

以上ノ臨床ノ經過カラ考ヘマスルトイフト、夏目サンハ二ツノ重大ナ疾病ヲ持ツテ居ラレタ、一ツハ糖尿病デアリマシテコレハ可ナリ前カラノ病デ、ソレガ近來ニナツテ益々增惡シタ、モウ一ツハ胃ノ症狀デアリマシテ、ソレハ恐ラク胃潰瘍デアラウトイフ二ツノ大キナ病ヲ持ツヲ居ラレタ、

併ナガラ先月ノ二十八日ノ大出血及本月二日ノ大出血共ニ一回モ口カラハ血ヲ吐イテ居ラレナイノデアリマス、前ニ修善寺ノ潰瘍出血時ハ口カラ吐カレタノデアリマスガ、今度ハ皆便ノ方ニ出タノミデアリマス、此關係カラシテ事ニ依ルト胃潰瘍デナクシテ十二指腸ノ潰瘍デハナカラウカトイフ疑ヒガ醫師ノ間ニアツタノデアリマス、而シテ死ノ直接原因ハ二回ノ大出血ニヨルコトハ疑ヒナイノデアリマス。

解剖シテ見マスト次ノヤウナコトニナツテ居リマス。腹部ハ緊張膨滿シテ居ツタ、開イテ見マスト瓦斯ノ爲メデハナクシテ、腸ノ内容ガ非常ニ充滿シテ居ル爲メデアツタノデアリマス、胃腸到ル處其中ニ非常ニ黑イ赤イ物ガ入ツテ居ル、卽チ血液ガ入ツテ居ルトイフコトガ薄イ胃ナリ或ハ腸ノ壁ヲ透シテ見エ大内出血ガアツタトイフコトガ先ヅ明カニ分リマシタ。次ニ蟲樣突起ヲ中心トシテ上行結腸ヨリ肝臟ト横隔膜トノ間ニ至ル迄著シキ癒着ガアリマス、此所見ニ依リマシテ第二回ノ大出血ノアツタ後、非常ニ腸ノ内容ガ膨滿シテ來タ爲メデアリマセウ、此邊ニ引ツ張ラレルヤウナ痛ガアツタトイフノハ此癒着ガ牽引セラレテ、サウシテ腹膜ガ刺戟狀態ニナツタ爲メニ特別ナ痛ヲ感ジタ事ヲ說明シ得ルノデアリマス、此癒着ガ何處カラ來タカト申シマスト、蟲樣突起ガ全ク形ガ變ツテ居リマシテ(圖ヲ示ス)普通ハ下内側ノ方ニ向ツテ居ルノガ、是ハ丁度鉤ノヤウニ外上ニ曲ツテ

全ク腹壁ト癒着シテ居ル、蟲様突起ニ斯ウイフ風ニ著シク曲ツテ居ル形ヲ見タナラバ是ハ以前ニ蟲様突起炎ヲヤツタ確證デアルトイフ事ハ、アショフモ云フテ居ルトコロデアリマス、本例ニ於テモ必ズソレニ相違ナイ、即チ此上行結腸カラ肝臓ノ表面ニアルトコロノ古イ癒着ハ、蟲様突起炎ヲ前ニヤラレテ其周縁カラ段々傳ツテ肝臓ノ所マデ行ツタノデアリマス、其遺跡ガ今日癒着トシテ殘ツテ居ルノデアリマス、夫故ニ夏目サンハ蟲様突起炎ヲ必ズヤラレタコトガアルダラウト段々調ベテ貰イマシタ所ガ夏目サント餘程前カラ親シクシテ居ラレタ中村是公サンノ話ニ依ルト、先生ハ二十歳ノ時ニ甚イ腹膜炎ヲヤラレタトイフコトガ分ツタ、胃腸病院ノ古イ病床日誌ニモ此事ハ一寸記入シテアリマシタ、即チ三十年前ノ歴史ガ其處ニ遺ツテ居ツタ。此所見カラ吾々ノモウ一ツ知ルコトノ出來ルノハ臨床上ニ横膈膜下ノ膿瘍ノ重ナ原因ノ一トシテ蟲様突起炎或ハ蟲様突起周炎ガ擧ゲラレテアリマスガ、此場合ノ古イ癒着ハ此ノ徑路乃チ蟲様突起炎及周炎ニ始ツテ下カラ上ニ及ビ終ニ横膈膜下ニ達シタイトイフコトヲ頗ル明白ニ語ルモノデアリマス。（演說後宮本博士ヨリ書信ニテ「滿韓トコロドコロ」ノ內ニ夏目氏ガ嘗テ蟲様突起炎ヲ病ミタラルコトノ記載アルヲ余ニ報ゼル。）

次ニ腸ヲ下カラ段々開イテ見マスト、其ノ中ニハ到ル處ニ「テール」ノヤウナ色ヲシマシタ黑イ血液ガ一杯入ツテ居ル。ソレカラ大腸ニモ小腸ノ粘膜ニモ何處ニモ出血シタトイフ箇所ハ見エナイ、

唯血液ガ一杯入ツテ居リマシテ、一部腸カラ吸收サレタ像ガ見エル、又ソレニ一致シテ腸間膜淋巴腺ノ中ニ血液ノ吸收サレタノヲ見マス。十二指腸ノ潰瘍デハアルマイカトイフ疑ガアリマシタカラ、十二指腸ハ特ニ注意シテ開イテ見マシタガ、此所ニモ潰瘍又ハ出血ノ原因ハナイ、サウシテ胃ニ於テ始メテ大キナ特有ナ潰瘍ガアツタ、ソレハ此處ニ標本ガアリマスガ(標本ヲ示ス)小彎ノ正中線ニ沿フテ幽門輪ヲ離レルコト五仙米突ノ所ニ、長サ五仙米突デ幅ガ一、二乃至一、五仙米突大ノ橢圓形デ横ニ廣イ潰瘍ガアリマス、此潰瘍ノ中ニハ多數ノ血管ガ露出シテ居ル、右ノ方卽チ胃後壁ニアル血管ハ白色ノ血栓デスツカリ閉マツテ居ル、左ノ方卽チ前壁方ニハ二三ノ極ク新シイ、赤イ血栓ニ依ツテ其腔ヲ埋メテ居ルトコロノ血管ガ見エル、前ノ白色血栓ノ方ハ全ク腔ガ塞ツテ居リマスカラ、此方ガ古ク切レタ血管デアリマシテ、恐ラク是ガ第一回ノ出血部位デ、前壁ノ露出破壞セル血管ガ十二月二日ニ破レタトコロノ血管デアリマセウト思ヒマス、又胃ハ極ク強イ死後消化ヲ示シテ居リマシテ、胃體部モ著シク軟化シテ居ル、其或所ニハ血液ガ浸染シテ粘膜ガ眞赤ニナツテ居ル、卽チ夏目サンハ終リマデ強イ胃酸過多症ヲ持ツテ居ツタ。サウシテ胃潰瘍底ノ血管カラ二回ノ大出血ガアツタノデアリマス。サウスルト極ク前ニ修善寺デ起ツタトコロノ胃潰瘍ノ痕跡ハ何處デアルカトイフト之ハ斷定的ニハ言ハレマセヌケレドモ、丁度幽門ノ所ニ三箇ノ小瘢痕ガアル、其中デ前

壁ニ近イモノハ一番强クテ且ツ壁ガ厚クナツテ居ル、其處ハ結締織ヲ以テ組織シテ居ル、顯微鏡ノ下デハ尙明カニ瘢痕ノ證明ガ出來マス。四十三年ニアツタトコロノ出血ハ此部分ニ出來タ潰瘍ニ因スルコトト想像サレルノデアリマス。

其外ノ臟器ハ胃カラ大出血ガアツタノデ、肝臟、脾臟殊ニ脾臟ノ如キハ普通ノ暗赤色ヲ失ツテ灰白赤色ヲシテ居ル、サウシテ稍々大キクナツテ居ル、是ハ脾臟ニ於テ貧血ヲ補フ爲メニ血球ガ出來ルノデアリマス、一言スレバ脾ハ特有ノ續發貧血ノ像ヲ示シテ居リマス、其他ノ臟器ニモ勿論著シイ貧血ガアル、潰瘍ニ因スル貧血ハ別ニ珍ラシイコトハナイ。

次ニ一ツ注意スベキ所見ハ膵臟デアリマスガ、膵臟ガ普通ヨリ非常ニ固クツテ細クナツテ居リマシテ目方ハ六十瓦、普通ノ日本人ノ膵臟ノ重量ハ七十カラ七十五位デアリマスガ、此膵臟ハ萎縮シテ居ル、檢微鏡デ見ルト糖尿病ノ時ニ屢々見ルトコロノ變化ガアリマス、ソレカラ腎臟ニモ糖尿病ニ特有ノ變化ガアル。併ナガラ此腎臟ノ中ニハ『グリコゲーン』ガ無イ、是ハ長イ間絶食ノ後ニ倒レタノデアリマスカラ、其ノ關係デアラウト思ヒマス、其外ノ所見ニ於テハ特有ナ糖尿病ノ腎臟デアル。

剖檢ノ結果ハ大略斯ウイフヤウナ所見デアリマシテ、臨床上ノ觀察ハ當ツテ居ル、而シテ解剖上

ノ所見ヲ以テ凡テノ症狀ヲ說明スルコトモ充分ニ出來ルト考ヘルノデアリマス。

次ニ一ツ附加ヘテ御話スル必要ガアルト思フノハ、夏目サンハ天才肌ノ人ニ往々見ル所ノ種々ノ性質ヲ持ツテ居ラレタ樣デアルガ、殊ニ近來ニナツテカラ追跡狂ノヤウナ症狀ガアツタ、卽チ誰カ自分ノ事ヲ惡ク言ツテ居リハシナイカトイフ樣ナコトガ大分アツテ、其爲メニ御家族ノ方ガ往々御困リニナツタコトガアルトイフコトヲ伺ツテ居ルノデアリマス、此事ニ就テ多少心當ガアリマスカラ申上ゲタイノデアリマスガ、御承知ノ通リ糖尿病ニハ屢々種々ノ原因カラ神經衰弱ガ起ルトイフコトハ多クノ人ガ實驗シテ居ル、又糖尿病ノ時ニ稀デハアリマスケレドモ種々ノ精神症狀ヲ起スコトガアルトイフコトヲ、ズツト前ニ佛蘭西ノ學者ガ注意シテ書イテ居ルサウデアリマス、彼ノ有名ナルノオールデンノ Die Zuckerkrankheit トイフ本ヲ見マスト、今日マデ千九百十二年ニ出タ本デ、四千ノ糖尿病患者ヲ取扱ツタト書イテアリマスカラ非常ナ經驗ノアル人デアリマス、此ノオールデンノ言フトコロニ依ルト、神經衰弱其他ノ一般ノ精神作用ノ脫落症狀、例ヘバ仕事ヲスル勇氣ガナクナルトカ或ハ執着力ガ弱クナルトカ、物ヲ考ヘル力ガ減ツテ來ルトカイフヤウナ、一般症狀ノ外ニ、特有ナ精神病ノ症狀ヲ起シテ來ルコトガアルトイフコトガ書イテアル、ソレニ色々ナ例ヲ擧ゲテアリマスガ、其中ニ追跡狂モ亦糖尿病ノ時ニ起ルトイフコトガアル、又「メランコリー」ガ

昂ジテ或ハ自殺ヲスルヤウナ場合モアルトイフコトガ書イテアリマス、尙ホ糖尿病ノ時ニ起ツテ來ルトコロノ之等ノ精神病的症狀ハ糖尿病ヲ治療シテ一般ノ症狀ガ宜クナツテ殊ニ全身ノ營養狀態ガ囘復シテ來ルト、綺麗ニ直ルトイフコトモ書イテアリマス、夏目サンモソレニ當ルヤウナコトデハナカラウカト考ヘマス、之ハ單ノ想像デアリマシテ學術上ノ根據ハナイ。只確ナノハ糖尿病ノ治療ヲヤツテカラ上膊神經痛及ビ不全麻痺ハ拭ヒ去ル樣ニ良クナツタトイツテ喜バレタコトデアリマス。

ソレカラモウ一ツ此場合ニ考ヘナケレバナラヌコトハ、多クノ天才的ノ人ハ種々ナ精神症狀、或ハ精神病ノ症狀ヲ現ハス、或ハ全ク精神病者デアル場合モアル、是ハ色々ナ書物ニ書イテアリマス、殊ニ、ロンブロゾーノ Der Geniale Mensch トイフ本ヲ見マスト、天才ハ精神病者ノ一ツノ變型ニ外ナラヌトイハヌ許リニ書イテアリマシテ、種々ノ精神症狀ヲ示シタ天才ノ例ガ澤山擧ゲテアルノデアリマス。夏目先生ノヤウニ腦能力ノ著シク勝レタ人デアルト此方面カラ斯ウイフコトガ起リ得ルトイフコトモ考ヘラレルノデアリマスガ、何レニシテモ『ヒポーデーゼ』ニハナリマスガ、夏目サンノ場合ハ能力ノ勝レテ居ツタ天才肌ノ爲メニサウイフコトガ起ツタノデアルカ或ハソレ許リデナク糖尿病モ之ニ關與シテ居ルカハ判然シマセンガ斯ノ如キ素質ハ夏目サンニ於テハ普通ノ人ヨリモ餘計持ツテ居ラレタ事ハ斷言シテ差支ヘナイト考ヘマス。

臟ニ關スル研究ハ今日マダシテ居リマセヌデ、是ハ何ヅレ詳シク調ベタ上デ適當ナ方面ニ於テ報告スル積リデアリマスガ、夏目サンハ消化機系統殊ニ胃ヲ病ンデ其爲ニ少ナラズ惱マサレ終ニ之ガ死病トナツタノデアル『猫』ニ於ケル其主人公ハ大變胃ノ弱イ人デアツタ、又『思出スコトナド』ノ中ニモ修善寺等ニ於ケル胃潰瘍ノコトガ書イテアル。夏目サンガ天下ニ其名ヲ知ラレタ『猫』ガ出ル前カラ既ニ胃ハ健全デナカツタ、夏目サンノ多ク成サレタ仕事ハ始終此胃ニ惱ンデ居ラレル其間ニ出來上ツタトコロノ產物デアリマス、夏目サンハ消化機病トハ餘程深イ因緣ガアルノデアリマシテ、一代ノ文豪デアルトコロノ夏目サンノ消化機ニ關スル臨床的觀察ト同時ニ、特志ニ因リマシテ行ハレタル解剖ノ所見ヲ、消化機病會雜誌ニ記述シテ置クトイフコトハ、夏目サンノ個人ノ歷史トシテモ不要ナコトデハナイ、又醫學ノ方面カラ考ヘテモ種々吾人ノ參考ニ價スルモノガアリマスカラ意義アルコト、信ジマス。又我々トシテハ科學ニ對シテモ興味ト同情トヲ常ニ持ツテ居ラレタ不朽ノ文豪ニ對シテ、平素抱キツヽアツタ敬意ト共ニ、其遠逝ニ向ツテ深厚ナル弔意ヲモ併セ表シタイノデアリマシテ、旁々其所見ノ大要ヲ報告シ標本ヲ供覽センガ爲メ此席ニ出マシタ譯デアリマス。

（大正五年十二月十六日講演）

六三　葬儀の前後

さていよ〳〵葬式の準備に取りかゝらなければならない段取りになりましたが、其時私が考へたことがございます。といふのは、夏目のお友達の方でも中村是公さんなどは、先に立つていろ〳〵心配して下さるのは誠に有難いが、何だか自分の身内のものが亡くなつたかのやうに、金を出してやるとか何とか仰言いますし、それも中村さんお一人ならいゝが、常々あんまり親しくもない方がいろ〳〵それに加はつていらつしやいます。門下の方々は方々で、皆さんどなたが頭株といふわけではないので統一がとれません。つまり船頭多くして船山にのぼるの譬で、何か一つ問題がおきますと、すぐに議論倒れで中々果てしがつきません。皆さんが此方を思つて下さることはよくわかつて居るのですがこんなことではどうしようもないと見極めをつけましたので、これはお友達の方々と門下の方々との外に、別に葬儀係の頭株をおいて、その人からぴし〳〵進行させて貰はなければならないとかう思つたのです。それには最初朝日新聞の方へ一切おまかせして御願ひしたらとさうも考へて見ましたが、やつぱりかへつてやりにくさうなので、こん度は河岸をかへて親類の者にや

つて貰らはうと思ひました。さうして私の妹婿の鈴木禎次さんを煩はすことにきめました。

かうしておけば私共の意志もとほり、何かにつけて便宜でもあり、又どし〳〵進行もするだらうといふ見込みをつけましたので、それを發表しますと、中村さんあたりは少々不平なやうでございましたが、私は鈴木ならこの面倒な中に立つてきつとやり遂げてくれると信任してますので安心して居りました。

とにかく皆さんが一言居士と申しちや失禮ですけれど、てんでに御自分の意見をもつてられて、事毎にそれが入り亂れて議論の花を咲かすのだから、普段の時ならともかく、かういふ早急を要する葬儀事務には向きません。勿論それもこれもみんな故人に對する敬意と至情とから出るのですが、まだ皆さんお若い時でもあつて、どうも中々むつかしいのでした。

中村さんあたりは無暗と金を出してやらうとこの方ばかりを心配して下さいます。が、平常から何は無くとも、主人が亡くなつて葬式の費用や子供の養育費で人樣に御迷惑をかけるやうなことはしたくないと思つて、その積りでやつて來て居ますので、第一此の場合御好意は萬々有難いが、頂いては故人の意志にもそむき、又私の氣持も許しませんのでお斷りしました。と申しますと大層お金があるやうですが、實は其年のいつ頃でしたかすつかり財産調べを致しまして、いつもかういふ

方面の面倒を見て下さる犬塚さんの御忠告で株券を賣りました金と合せて、三萬圓足らずございました。それを第一銀行かに定期預金にしておきました。これが私共の其時の全財産であつたのでございます。それから死ぬ二十日ばかり前にかうやつていつまで定期にしておいても仕方がないといふので、又候犬塚さんにお頼みして大部分を株券に買ひ代へておいて戴き、其の話を一度夏目の耳に入れて置かうと思つてるうちに、たうとう吐血したりしてどつかと床について了つたので、言ひ出すわけにも參りません。其うちにいゝ按配に少し落ちついた時を見て申しますと、うむ、さうか〳〵と言つた切りでございました。

ともかくかういふ工合にして現金も少し握つて居りましたし、亡くなつた時に朝日新聞社の方から、平常の夏目の義務的な掛け金のたまつてるのと、香典と申しますか功勞金と申しますか、とにかく兩方合はせて八千何百圓稍九千圓近い金を頂きました。どうやら四萬圓近い金がありますので、葬式位自分の手で立派に出したとて、後はいくらかづゝ本が賣れてくれゝば株券の配當なども少しはあつて此分なら先づ〳〵細々ながら子供を育てゝ行けようといふ見當もついたのです。實際、主人が亡くなつて、御葬式を人樣に御迷惑をかけて出したとあつては申譯ない上に、これ位は自分達一番親しいものゝ手によつて、よそ〳〵しくなく出したいといふのが私の肚だつたのでございます。

とにかく外の文士方の遺族によく見るやうに、主人が亡くなつたらすぐ生計にも事缺くとか、或は子供たちの學資金をおねだりするといふやうなことの無かつたのは、かへすがへすも私共にとつて何よりのことでございました。此時私が丁度四十歳、長女が十八歳、長男が十歳で、一番下の男の子が九歳でございました。

いつのことでしたか、雛子の葬式の時などもさうだつたのでしたが、眞宗の寺はいやだ、殊に夏目家累代の菩提所本法寺は眞平だと御葬式の話の出た折に申しますから、それではどうしませうね、貴方がお亡くなりになつたら、何で葬ればいゝでせうと尋ねたことがありました。其時夏目はまあ禪宗のお經なら聞いてもいゝねと答へますから、では宗演さんあたりではと重ねて尋ねますと、いいだらうといふ話があつたのです。そこで此時も早速其の時の會話を思ひ出して話しますと、中村是公さんが、宗演さんなら夏目から御願ひして滿鐵へ講演に來て頂いた關係からよく識つてるから、早速鎌倉へ出かけて行つて御願ひして來ようといふお話。ではといふのでお依賴致しますと、宗演さんも喜んで導師を承諾して下すつて、葬式の前に一度友人として靈前に燒香したいといふことでいらして下さいました。さうして位牌に戒名を書いて下さいました。

文獻院古道漱石居士

といふのでございます。それから手次寺のお話などもあつて、よく宗演さんが御上京の節おとまりになるといふ小石川茗荷谷の至道庵徳雲寺といふ白隱禪師有緣の地とか聞く寺に、宗演さんのお口添へで何かと佛事を營むことに致しました。

夏目が着物に中々好みのあつたことは前に一寸申上げましたが、この病床につく前に大島を一疋買ひまして二枚襲ねにしようと思ひましたところ、羽織と上着にしてくれとのことで、そのやうに仕立てさせましたところ、丁度亡くなつてから出來上つて參りました。その前に縮緬の長襦袢を、これはまだ床につかない前にこしらへてやりましたところ、裏を暖くていゝだらうと思つてモスンリにしたところ、どうも重いと申します。やつぱりもう衰へて居たのでありませう。それですつかり絹の裏になほしましたところ大變喜びまして、いゝ工合だよ、ほんとに着心地がいゝと申して居りました。そこでいよく納棺といふ時に、この一揃ひの着物のことを思ひ出しましたので、このお氣に入りの長襦袢を着せ、其上に仕立ておろしの大島を着せてやりました。其外始終藥をのむ時に用ゐてるたニツケルの懷中時計、それから老眼鏡、これも一緒に入れてやりました。今考へると惜しいことをしたと思ひますが、其當時は何だかさうしてやるのが大變故人に對して思ひやりがあるやうな氣がしたものでしたから、ついさういふ氣にもなつたのでございます。時計は生涯ニ

ツケルのしか持ちませず、それも鎖も何もつけずに机の上にのせのせおきまして出かける時には紙入の中にすほりと入れて行くのでした。

十二日の午前正十時青山齋場で葬儀といふことで、何でも出棺が八時の豫定とやらで、棺の蓋をあけて最後のわかれをするのがまだ暗いうちのことでした。この夜は連日の寢不足や氣疲れで、翌日葬場で卒倒でもするやうな不始末があつてはと思ひ一寸やすんでも置きたいのですが、最後の通夜の事でもありとてもだめさうなので、眞夜中の二時頃にお湯に入りまして、皆さんのいらつしやる書齋の靈前に座はつて居りますと、又其夜の寒さつたらありませんでした。座つてる着物の上からチクチクさゝれる位のきびしさで本當に身に沁みる寒さでございました。

此頃はまだ葬式といふと馬車でしたもので、中村さんが先に立つて頻りにせつつかれますので、出棺なんぞも早くつて、青山についてから一時間も待つたやうでした。しかし棺を送り出して中村さんが、あゝあ、これでやつて安心したと仰言つたさうですが、又齋場へいらつしやると例のせつかちが出て、もう花環なんか受付けて居ちやいけないとか何とか世話をやいてらつしやるので、鈴木が、では本當にこれから持つて來たものはお斷はりしますよと言つてるうちに、ふとお氣がつきになると、御自分のとこの滿鐵の花環がまだ來てない。たつた今斷はつちまへと仰言つた手前引

つ込みがつかなくなつて、滿鐵の花はどうしたくと、片目を光らかして呶鳴つて歩るかれたと鈴木と後で笑つて話したことがございました。

葬儀は宗演さんの導師で始まりました。正面には菅虎雄さんのお書きなさつた『夏目金之助之柩』の旛が見えますが、連日の疲れで、そつとひとり取り殘されると、いゝにも惡いにも目が自然にくつついて來て仕方がないのです。で絶えず目を拭いた居ないことには、すぐにも上下の眼瞼がくつついて了ふので閉口致しました。

宗演さんの喝といふ雷のやうな聲にびつくりしました。此時お讀みになつた自筆の秉炬香語がずつと其後宅の靈前にのせてあつたのですがいつの間にやら盜み出されて見當らないと思つて居るうちに、津田青楓さんが丹波のあるお寺で自慢に所藏してゐるのを見たと仰言つたことがあります。何でも二七日頃から變な雲水見たいな坊さんが來て、生前どうしたとかで供養をさせて頂きたいと、七日七日に來てお經を讀んで居ましたが、多分このにせの坊さんの仕打でせう。といふのは丁度此の頃、やはり有島武郎さんの御嚴父さんがなくなられると、同じやうなことを言つて七日七日に行つては經をよむ得體のしれない坊主が居る。よく似てるが食はせものぢやないかといふ御注意が、森田さんあたりの書いた文章から彼方で御氣付きになつて參るつたのでしらべて見ると、てつきり

それだつたので、早速引導を渡しましたが、人の悲しみに紛れ込んで、何か一仕事しようとして居たものでございませう。恐らく秉炬香語を盜んだのもこの僞坊主の仕事でございませう。油斷のならないことでございます。

私の弟がこれから後でもよく申しますことに、自分もこれ迄隨分いろんな大小樣々の葬儀にも係はつたことがあるが、後にも先にも夏目お兄さんの葬式位やかましかつた葬式といふものは外に類がないねと言つてる程ですから、中々出る迄に手のかゝつた葬式であつたのでありませう。

六四　其後の事ども

火葬場は落合の火葬場で、しかも後から氣がついたのでしたが、竈も前に雛子を燒いた同じ竈でございました。

あくる十三日がお骨拾ひ、中村さん、大塚さん、それから森田、小宮、赤木、林原、久米、松岡などゝいふ方々に、私と矢來の兄さんとこれ丈けで拾ひました。

十四日に『朝日新聞』に出てゐた『明暗』がつきました。みんなで名殘惜しい氣がすると語り合

ひました。とにかく十一月二十一日迄に百八十八囘書いて、翌日書く筈の原稿の右肩に 189 と囘數の番號の心覺えを書いたのみで、それなり後を續けることが出來なかつたのです。でも書きためて先へ先へと送つてゐた原稿がざつと一月近くあつたわけです。

此夜初七日の逮夜のことゝて、葬儀にいろ〳〵骨折つて下すつた門下の方々をお招きして、心ばかりのおもてなしを致しました。

香典がへしには夏目の書いた短冊を染めた帛紗をお配り致しました。

　稻妻の宵々毎や薄き粥　　漱石

といふのでありました。

暮の二十八日に埋骨式を致しました。場所は雜司ヶ谷の舊墓地の方で、前に雛子が亡くなつた時に買つたところです。墓標の字は又菅さんを煩はしました。

二三日おいて、たしか三十日の夜に、死面が出來上りました、小宮さんが遲くなつてから屆けて下さいました。鼻の頭のあばた迄よく出て、ほんとうに取つておいてい〻ことをしたとつく〴〵思ひました。たゞ頭髮が少し額をせばめてゐるのと、亡くなつてから大分時間がたつたとかで、下顎が少しゆるんでゐるのとが難といへば難だと思ひました。

皆さんで死面が欲しいといふことでしたが、そんなに澤山いゝのがとれないといふことで、結局家へ一面、それから朝日新聞へ一面送ることにして、他は作らせないといふことにきめまして、原型もブロンズが出來た以上壞はさせようといふのを、彫塑家の方で紀念に殘こしておきたいからといふので、石膏の原型丈は殘つて居る筈でございます。初めの主唱者の森田さん迄わけて貰へないといふことになつたので、其時は少々不平のやうにお見受けいたしました。

『新小說』の臨時增刊『文豪夏目漱石』が出たのも此頃であつたでありませう。其後松根東洋城さんの『澁柿』でも、芥川さん久米さん松岡の『新思潮』でも各〻追悼號を出しました。夏目自身の著書も此頃からずつと賣れ行きが增えて參りました。

大正六年一月九日に第一回の九日會を書齋で開きました。これは謂はゞ生前の木曜會の變形で、每週木曜日といつても何だから、一月一回づゝ、しかも命日の九日に集まつて一緒に御飯でもたべながら話をしようといふのです。それ以來每月ずつと開きました、(尤も普請や家內の病人でちよいちよい休んだこともありますが)とにかく今日迄に百三十回からの回數を重ねて居ります。

御參考迄に第一回の出席者をあげておきます。

大塚保治、菅虎雄、畔柳都太郎、眞鍋嘉一郞、瀧田哲太郎、林原耕三、松浦嘉一、阿部次郞、小

宮豊隆、岩波茂雄、芥川龍之介、松岡譲、久米正雄、前田利鎌、江口渙、須川彌作、神田十拳、森田草平、赤木桁平、内田百閒、津田青楓、安倍能成、野上豊一郎、和辻哲郎、東新、速水滉、石原健生、それに私。

第一回にいらつしやらないで、第二回にいらした方に、

中村是公、狩野亨吉、戸川秋骨、寺田寅彦、松根東洋城、鈴木三重吉。

などがございます。この中でお亡くなりになつた方が今では四人、それから仙臺とか京都とかへお移りになつた方も多く、今ではこんなにどつさりお集りになることはまづ〳〵ございません。

亡くなるとぢきに全集出版の話があり、門下の重立つた方々が編輯といふことで、着々準備を始めました。小宮さん森田さんあたりが主として働いて下されました。『明暗』もやがて岩波から出版されました。

初め遺骨を葬りましたところは、舊墓地の眞中で、甚だではが悪く、そこにいよ〳〵墓を建てるとなると場所も狹いので、どうしたものかと考へて居りますと、いゝ按配に十月頃新らしく墓地が取りひろげになつたので、いち早く今の墓地を買ふことに致しました。お墓の形式もこれ又皆さんに相談して居たらきつと議論百出で、とても一周忌には間に合ひさうにもないので、妹婿の鈴

木が建築師であるのを幸ひ、すつかり設計をまかせて了ひました。何でも西洋の墓でもなし日本の墓でもない、譬へば安樂椅子にでもかけたといつた形の墓をこさへようといふので、まかせ切りにしておきますと、出來上つたのが今のお墓でございます。

一周忌迄に日限がないので隨分急いだものでした。墓には夏目の戒名と、私の戒名とをならべてほりつけました。字は菅さんから書いて頂きました。さうしてお骨を入れて下に埋める石の唐櫃の爲めにも、同じく菅さんの御手を煩はして字を書いて頂きました。

大正七年に土地家屋の持主にお願ひしまして、家ぐるみ土地を讓つて戴きました。地坪は三百四十坪ばかり、家は古屋でとても長く住むには堪へないやうに見えましたが、ともかくこゝが終焉の地であつてみれば、さういふ點からでも自分たちのものにしておきたいと存じましたのです。ところが書齋居間の二間を紀念の遺室として保存するとすると、あとは殆んど使用に堪へないといつてもいゝ位なぼろ屋で、其上誠に狹いのです。初めは子供たちも小く一部屋に幾人でも居てくれましたが、段々大きくなつてはさうも行かず、そこで意を決しまして、ともかく書齋二間だけを切り離して、書物から飾りつけ迄、生前のまゝの姿で保存することにし、あとは取り壞はして別に私ども

の住むところを作ることに致しました。

今でもこの一棟は母屋と離れて屋敷の一角にありますが、私が生きてますうちはまあ〳〵これでもいゝでせうが、いづれは遺室本來の性質からいつて私ども一家の個人の所有としておくべきものではあるまいと考へて居りますので、何とか適當な保存の途もあればと思つて居りますのですが、まだ時機が到來しないと見えてその運びに到りません。實際かういふ家ごみの中にあつて、萬一火難にでもかゝつてはとそれをおそれて居るのですが、今のところどうしようもございません。とにかく鼠などに荒されていたんだものもあり、又過ぐる震災で少しばかりの損害もうけるにはうけましたが、何から何迄まづ〳〵生前そのまゝの狀態で殘されてるるといつていゝかと存じます。が、今も申し上げるとほり屋敷内の一角にあるので、一般に公開して御覽に入れることが出來ないのは常々遺憾に思つて居るところでございます。

大正八年に全集が別冊と合はせて十四冊完成致しました。

大正九年秋、東京京都大阪で漱石遺墨展覽會を催しました。書畫原稿など約三百點程集まりました。

今更ながら過去を振りかへりますと早いもので、もうこの十二月には十三回忌を營むことになりました。この先き何回忌迄つとめて、自分の墓の朱の字を消すことになりますことやら。とにもかくにも來ました年回を最後のものと思つて營むつもりで居ります。亡くなつた頃九つでしかなかつた季の息子さへ、今は二十一才の壯齡になりました。さうして上の娘たちにも子供が出來て、私もいゝお祖母さんといふことになつて了ひました。乞はれるまゝにくど／＼しくお話ししましたこの長い思ひ出話も、つまりは老の繰り言に過ぎないかも知れません。そして故人もあの世でいらない眞似をするなどと苦笑してゐないものでもございません。けれどもこんな繰り言でも、餘り世に知られて居ない夏目の日常生活を述べたといふ點で、作物を讀まれる方々に何かしらん與へることが出來ますれば、これに越したことは御坐いません。とにもかくにも知つてる限り思ひ出した限りを、出來るだけに正直にありのまゝ申し上げたことを、私は滿足に思つて居るのでございます。

（昭和三年十月九日）

あとがき

私の兼ねての宿願でもあり、又長いことかゝりもしました『漱石の思ひ出』が、愈完結致しまして本になりますので、こゝに本書が出來あがる迄の經路をかいつまんで書きとめて置きたいと思ひます。

顧ますと私が未亡人に御願ひして、かうしたものを是非書きのこしておきたい思ひ立ちましたのは隨分と早いことで、かれこれ十年も、或はもつとになつてるかも知れません。といふのは、丁度其頃私は小泉節子刀自のラフカヂオ・ヘルン小泉八雲先生の「思ひ出」を讀んで、非常に動かされたのが間接の原因でありました。まだ漱石先生の亡くなられて間もない時のこととて、自分たちのうちにもしきりに追慕追憶の念の湧く時なので、よく未亡人から斷片的な思ひ出話を伺つては感慨深く思つたものでした。がそれをそのまゝ聞き放しにしておくのが如何にも惜しいので、未亡人が健在で居られるうちに伺へるだけは伺つておいて、小泉先生の場合の未亡人の『思ひ出』のやうに、まとめて書きとめておいたらと痛切に考へたのが、抑々の初めであつたのであります。で、折を見て其の話を致しますと、大分意も動いた樣子でありましたが、いかんせん時が時なので、まだすべので追憶・記憶が生々しく卽き過ぎて居て、客觀的に眺める餘裕もなく、かへつて未亡人を苦しめる結果ともなるわけで、自然すぐにどうしようといふ程氣は進まれなかつたのでした。それで其時

はいづれ時を見てといふので其儘になつて居ましたのですが、其間に萬々一のことが未亡人の身の上にでもあつたら、永久に先生の家庭生活の方面が見失はれやしまいかなどと、少からず懸念もして居たことでした。が、いゝ按配にすべてはうまい工合に運びまして、もう翌る年には十三回忌を迎へるといふ去年になつて、どうでせう、餘り早くもなく、かといつて遲くもなく、丁度十年を過ぎた今頃が、一番お話を伺ふにいゝ時ではないでせうかと乞うてみますと、未亡人の方でも大分意が動いてられて、かなり氣乘りして話さうといふ氣勢も見えましたので、私もそれに力を得て、いよいよ長年の宿願をはたすべく、本書の筆を起こすことになりました。丁度去年の眞夏のことでありました。

其時未亡人は日光中禪寺湖畔の客舍に暑を避けて居られたので、そこへ出かけまして話を伺つて書いたのが、本書の發端から結婚迄の條であります。さうしてそれを雜誌『改造』にのせました。それから毎月話を伺つてはそれを筆に移して、次々に『改造』にのせまして、十三ヶ月續きました。但し、最後の先生歿後のことは、(第六十二章解剖以後の部分)こんど初めて發表されるのであります。

ところでこれを書きます手順を申しますと、先づ私が大體其の年代に於ける先生の書簡日記俳句

漢詩隨筆などの生活記錄と思はれるものを前以つて頭に入れておきまして、それだけの用意準備が整つて、大體の輪廓が頭に浮んで參ゐりましてから、話を伺ふことに致して居りました。といふのは、伺ふ話をなるべく年代順に順序を追うて軌道にのせて行きたいといふのがその理由の一つ、それからもう一つの理由は、うろ覺えの事實や、まるで忘れて居られた事柄などを思ひ出して戴く爲めとであつたのです。が、さていよ〳〵お話を伺つて見ると、さうした用意から推測もされないやうな話が物語られたりしたのはいふ迄もありません。伺つた話は其場ですぐ骨子をノオトに取つておいて、二三日頭の中で練つておき、それから一氣に書くといふ風にして居りました。最初はどうもこいつが呑み込めず、そんなことのないやうにと苦心しながら、かへつて自分が出たがつて困つたのです。が、後ではまづさう言つたぎごちないところがなくなつて、未亡人の話の調子をかなりの程度で傳へることが出來るやうになつたかと思ひます。

かうして書いたものを原稿のまゝ未亡人から目をとほして頂いて、それでいゝとなつたところで月々の『改造』へまはすのでした。ところがさて活字になつて出て見ると、それを讀んで未亡人が更に思ひ出される節もあり、又自然多くの人の目に觸れるところから、何かと批評や注意なども伺ふことが出來、誤りを正したり新しく書き加へたところなども少くありませんでした。ですからそ

れだけでも雜誌所載當時より、遙かに多くのものを增してゐるのですが、なほ本年五月末亡人と一緒に松山、熊本の舊居の蹟を巡訪しましたので、その方面でもかなり多くのものを加へて居るわけであります。

本書の敍述は性質上いふ迄もなく大體結婚生活を基調とした『家庭に於ける漱石』であり『妻の見たる漱石』でありまして、年代からいふと明治二十八年末、（先生二十九歳、未亡人十九歳）以後のことに屬します。それ以前のことは謂はゞ又聞きであつて、本書の中にしばしば現はれる矢來の兄さん、つまり先生の令兄夏目直矩氏、あたりに負ふところが多いのであります。ですからそれをのぞけば、あとはまづ未亡人自身の直接の材料でありまして、謂はゞ結婚生活二十年間のありのまゝの記錄ともいふべきもので、直接間接事大小となく先生に關する限り、すべての記憶が腹藏に述べられてあるのであります。その爲め雜誌に發表された當時、讀者の豫期しない事實などが餘りに赤裸々に物語られてゐるところから、語る人なら書く者も書く者だ、少しは手加減したらよかりさうなものだのにといふやうな非難を聞いた事もあつた位です。がそこにこそ本書の價値がかゝつて居るのはいふ迄もありますまい。たゞ先生初め夏目一家に關する事以外で、現に生存してられる方に多少とも御迷惑になりさうなことは、儀禮上遠慮したところがないでもありません。

しかしこれは今日ではやむを得ないことであります。

次に寫眞について一言致します。先生の寫つて居られる寫眞で、現在私が集めたものゝうち、同じ日に撮影されたらしいポーズの違つたもの二三點と、奉職先の高等學校、大學などでの卒業生紀念寫眞の三四點を除きますと、他は全部こゝにのせました。それから各地で住まはれた舊居の寫眞などは、まだ外に澤山あるのですが、これは代表的の數葉をのせただけで、他はすべて割愛することに致しました。なほ遺墨もある點迄各時代の代表作品をのせたい希望もあるにはあつたのですが、數の多いのと、小くなり過ぎてかへつて趣を損するおそれがあるのとで、これ又殘念ながら割愛して、すべて他日發行される筈の遺墨集に讓ることに致しました。が、こゝにかへす〴〵も惜しいと思ひますのは、洋行中の寫眞が一枚も見當らないことであります。

思ひ出話の常としまして、今後ともこゝに物語られてない事柄を未亡人が思ひ出されることもありませうし、寫眞などでも新に發見するやうなことがあるかも知れません。さういふ時にはいづれ重版の機を見て補つて行きたいと思ひます。ともあれ故先生の十三回忌を目前に控へて、ともかくもこれ丈け纒つた追憶記を靈前に捧げることの出來るのは、私にとつても非常な喜びでなくてはなりません。未亡人の感慨も一入であることゝ思ひやられます。

なほ本書の體裁を大體漱石全集普及版に則つたことは、多數讀者の御希望と出版者の切望とをいれた結果であつて、他意あるものでないことをこゝにお斷りしておきます。

最後に本書に對して直接間接に力を盡くして下さつた方々に厚く御禮を申上ます。

松岡讓識

昭和三年十月中浣

漱石の思ひ出　終

昭和三年十一月二十日印刷
昭和三年十一月二十三日發行

漱石の思出
定價金貳圓

述者　夏目鏡子
筆錄者　松岡讓
發行者　山本美　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
印刷者　守岡功　東京市本所區番場町四番地

發兌　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地　改造社
振替口座東京八四〇二一
電話芝(43)一一二一番　一一二二番　一一二三番　一一二四番

凸版印刷株式會社本所分工場印刷